

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第469集

平成16年度発掘調査報告書

サイカツ平畠遺跡	岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡
伏屋Ⅱ遺跡	新地野道下遺跡
稻荷遺跡第8次調査	宮沢原下遺跡
稻荷遺跡第9次調査	上大畑平Ⅰ遺跡
台太郎遺跡第53次調査	上大畑平Ⅱ遺跡
矢盛遺跡第5次調査	川前遺跡
宿・蛇庭姐遺跡	内屋敷遺跡
中島遺跡	ほか調査概報

2004

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

平成16年度発掘調査報告書



写真1 胆沢町二の台長根遺跡から出土した円形線刻繩 (後期旧石器時代) (目盛単位1mm)



写真2 盛岡市向中野館遺跡の旧河道から出土した「厨□」の文字のある墨書き土器 (平安時代)



写真3 盛岡市本宮熊堂B遺跡の航空写真（奈良時代・平安時代）



写真4 川崎村河崎の柵擬定地の航空写真（平安時代）

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、平成16年度に当センターが発掘調査した遺跡の調査成果をまとめ、調査報告書及び調査概報として発刊したものです。全県下で45件39遺跡、169,018m²が調査され、旧石器時代から近世までの造構、遺物が検出されております。今回の発掘調査で、沿岸南部においてこれまでほとんど調査例がなかつた古代の堅穴住居跡を発見したことをはじめとして、各地の調査で地域の歴史に新たな一ページを書き加えることができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました委託者をはじめ、地元の教育委員会及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成17年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 合 田 武

目 次

序

平成16年度の調査結果について

I. 発掘調査報告書

(1) サイカツ平羅遺跡（軽米町）	5	(9) 岩谷堂柳沢II遺跡（江刺市）	113
(2) 伏屋II遺跡（岩泉町）	27	(10) 新地野道下遺跡（江刺市）	133
(3) 稲荷遺跡第8次調査（盛岡市）	29	(11) 宮沢原下遺跡（胆沢町）	149
(4) 稲荷遺跡第9次調査（盛岡市）	31	(12) 上人畠平I遺跡（胆沢町）	157
(5) 台太郎遺跡第53次調査（盛岡市）	41	(13) 上人畠平II遺跡（胆沢町）	159
(6) 矢盛遺跡第5次調査（盛岡市）	45	(14) 川前遺跡（前沢町）	161
(7) 宿・蛇瓶組遺跡（石鳥谷町）	55	(15) 内屋敷遺跡（前沢町）	183
(8) 中島遺跡（江刺市）	95		

II. 発掘調査概報

1. 国関係

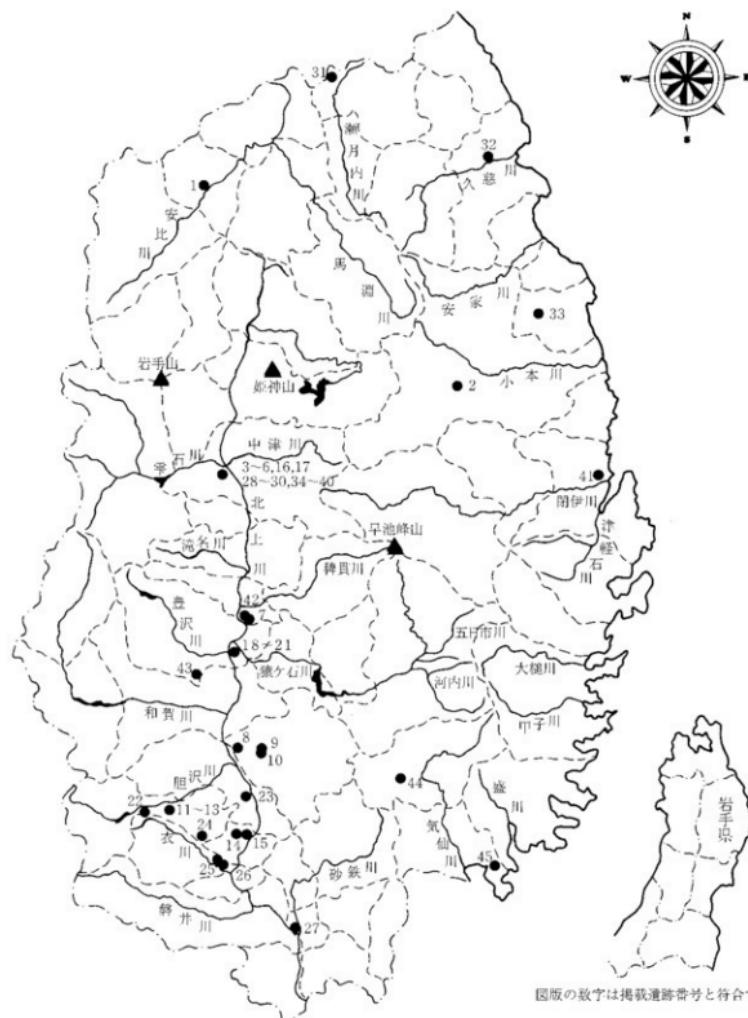
(16) 本宮熊堂A遺跡第24次調査	199	(22) 大清水上遺跡（胆沢町）	205
(17) 本宮熊堂B遺跡第25次調査	200	(23) 杉の堂・跡呂井遺跡（水沢市）	206
(18) 高木古館遺跡（花巻市）	201	(24) 二の台長根遺跡（胆沢町）	207
(19) 高木中館遺跡（花巻市）	202	(25) 接待館遺跡（衣川村）	208
(20) 下通遺跡（花巻市）	203	(26) 押切遺跡（衣川村）	209
(21) 長根I遺跡（花巻市）	204	(27) 河崎の櫛擬定地（川崎村）	210

2. 独立行政法人関係

(28) 野古A遺跡第23次調査（盛岡市）	213	(30) 向中野館遺跡第5次調査（盛岡市）	215
(29) 飯岡沢田遺跡第9次調査（盛岡市）	214		

3. 岩手県・市関係

(31) 上野場3遺跡（軽米町）	219	(39) 向中野館遺跡第6次調査（盛岡市）	227
(32) 中田遺跡（久慈市）	220	(40) 矢盛遺跡第6次調査（盛岡市）	228
(33) 沼袋遺跡（田野畠村）	221	(41) 山口鶴跡（宮古市）	229
(34) 本宮熊堂A遺跡第26次調査（盛岡市）	222	(42) 大西遺跡（石鳥谷町）	230
(35) 本宮熊堂B遺跡第27次調査（盛岡市）	223	(43) 金栗I遺跡（花巻市）	231
(36) 野古A遺跡第24次調査（盛岡市）	224	(44) 里占無遺跡（住田町）	232
(37) 台太郎遺跡第54次調査（盛岡市）	225	(45) 松山前遺跡（陸前高田市）	233
(38) 飯岡沢田遺跡第10次調査（盛岡市）	226		



図版の数字は掲載遺跡番号と符合する

平成16年度調査遺跡位置図

平成16年度の調査結果について

平成16年度は、41件37遺跡147,263m²で調査を開始し、確認調査も含め、最終的には45件39遺跡169,018m²の調査を終了した。遺跡の所在地は7市7町3村に及んでいる。

旧石器時代の遺跡としては胆沢町二の台長根遺跡（24）がある。当初、縄文時代の遺構の存在が想定されていたが、17,764m²という広範囲に及んだ調査の結果、後期旧石器がごく限られた区域からまとまって発見された。以前に調査された胆沢町上萩森遺跡の約28,000年前とされる下層の石器群に類似する点が多い。

縄文時代の遺跡は数多く調査されている。久慈市中田遺跡（32）では早期の白浜式土器が数個体分まとまって出土し、該期の遺構としては円筒形の陥し穴状遺構が考えられる。住田町里古屋遺跡（44）では前期末葉と中期初頭～中葉・後期初頭～前葉の3時期の堅穴住居跡が狭い区域に上下に重複しており、集落の変遷を追うことができる。盛岡市本宮熊堂A遺跡（34）は過去2次の調査と併せ、晚期大洞C₂式～A式期の一集落の大部分を調査した。わずかに残る未調査区の調査も予定されおり、該期の集落の全容を知ることができる希少な例になるであろう。胆沢町大清水上遺跡（22）は、大型堅穴住居跡群が「広場」を囲んで放射状に配置される前期大木5式が主体の大規模な集落遺跡で、5ヵ年に及ぶ調査の最終年度である今年度は中心域の縁辺に分布する陥し穴状遺構を調査した。なお、同遺跡は、関係者の協議により中心域が現状保存されることになった。次の弥生時代では、盛岡市飯岡沢田遺跡（29・38）から初頭と後期、石鳥谷町大西遺跡（42）でも赤穴式ほかの後期の遺物が出土したもの、明確な遺構は伴っていない。

古墳時代の堅穴住居跡は先にあげた中田遺跡の3種のうちの1種が該当する。近接する2棟は奈良時代のものである。次の奈良時代になると、飯岡沢田遺跡で7棟の堅穴住居跡を調査した。同時に、過去に北側隣接地で数多く検出された古代の古墳や円形周溝がさらに南へ延びて分布していることを確認した。盛岡市本宮熊堂B遺跡（17・35）は平安時代との複合遺跡であるが、平安時代とは占地を幾分異にしながら集落が営まれ、28棟を調査している。陸前高田市松山前遺跡（45）からは、これまで岩手県沿岸南部では調査例がほとんどなかった堅穴住居跡9棟が見つかっている。

平安時代では9世紀と10世紀の集落遺跡の調査例が多く、盛岡新都市土地区画整理事業に関連した台太郎遺跡（5・37）や野古A遺跡（36）・向中野館遺跡（30・39）・本宮熊堂B遺跡はこれまで繰り返し調査され、それぞれの集落の様相が大分明らかになってきている。向中野館遺跡では中世の船跡に伴う埴の南側に残された旧河道から、木製品や漆器などと共に「野口」ほかの墨書き器が数多く出土した。石鳥谷町宿遺跡と蛇坂遺跡は沢を挟んで隣接する遺跡（7）で、11世紀の土師器がまとまって出土した。川崎村河崎の橋櫛定地（27）は調査の最終年度を迎えた。11世紀の土師器や12世紀のかわらけが出土したほか、12世紀の方形周溝が見つかっている。前九年の役に関連する「河崎櫛」に該当する遺跡なのかが課題として残ると同時に、12世紀にはどのような機能を果たした遺跡かを考察する必要がある。江刺市増沢地区に所在する新地野道下遺跡（10）では土坑の1基から12世紀の手づくねかわらけ片1点が出土した。平泉藤原氏初代清衡発願の「耕紙金銀字文書一切経」が書写された「奥州江刺郡益沢院」が存在したとされる地区からの出土である点は注目されるが、小規模な調査のためそれ以上のことは不明である。

中世では、宮古市山口館跡（41）の2年目の調査が行われた。調査区は主郭の東側の瘦せ尾根で、館を区画する二重の空堀の内部には堅穴建物跡や33棟の大槻の工房跡・墓塚などが検出され、中世城館の構造や機能を考える上で良好な資料になるであろう。

（調査第一課長 三浦 謙一）

I. 発掘調査報告

(1) サイカツ平^{たら}遺跡

所 在 地	二戸郡淨法寺町大清水 字サイカツ平102ほか	発掘調査期間	平成16年4月9日～6月30日
委 託 者	二戸地方振興局農政部農村整備室	遺跡番号・略号	J E 36-2025・S K T VII-04
事 業 名	一般農道整備事業太田2期地区	発掘調査面積	当初：2,000m ² 実績：2,000m ²
		調査担当者	水上明博 丸山浩治

1. 調査に至る経過

一般農道整備事業太田2期地区は、二戸郡淨法寺町の中心部から南西3kmに位置した畑作農業地帯の農道2,272mを整備するもので、平成4年度から着手している。

当該事業区域にかかる埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、平成9年9月30日付け「二土地第616号」により、二戸地方振興局二戸土地改良事業所長から岩手県教育委員会事務局文化課あて、一般農道整備事業太田2期地区事業計画区域に間わる分布調査依頼を行った。

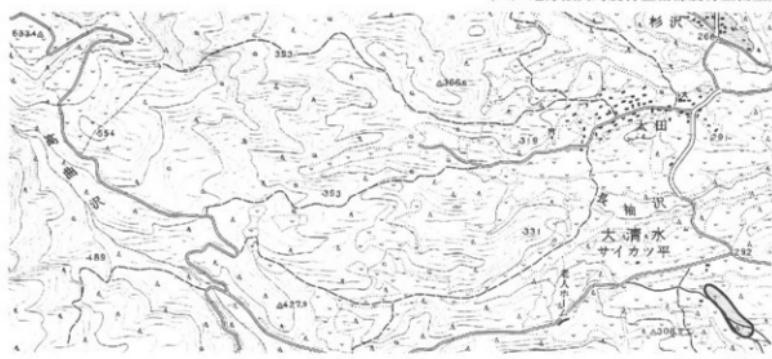
依頼を受けた岩手県教育委員会事務局文化課が、包蔵地所在の有無を照会したところ、サイカツ平^{たら}遺跡が該当することが確認された。

それに伴い、平成9年11月6日付け「教文第640号」により岩手県教育委員会事務局文化課から二戸地方振興局二戸土地改良事業所長あて、分布調査的回答を行った。

その後分布調査の結果をもとに、平成15年5月1日付け「二地農（整）第206-1号」により、二戸地方振興局農政部農村整備室長から岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課長あて、埋蔵文化財包蔵地の試掘調査依頼を行った。

依頼を受け、岩手県教育委員会事務局生涯文化課が平成15年5月27日に試掘調査を行ったところ、サイカツ平^{たら}遺跡については本調査が必要であると判断され、平成15年6月6日付け「教生第374号」により発掘調査が必要である旨回答を行った。

(二戸地方振興局農村整備部農村整備室)



第1図 遺跡の位置

(1) サイカツ平塚遺跡

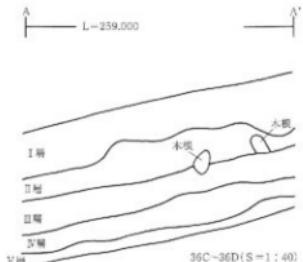
2. 遺跡の位置と立地

遺跡は、浄法寺町役場から南西へ約3kmの大清水地内に所在する。周辺は安比川左岸に発達した丘陵地帯となっており、安比川に向かってのびる複数の沢によって開析された入り組んだ地形をなしている。遺跡が立地するのは尾根に挟まれた埋没谷上の緩斜面である。

3. 基本土層

本調査区の基本土層は次のように堆積している。

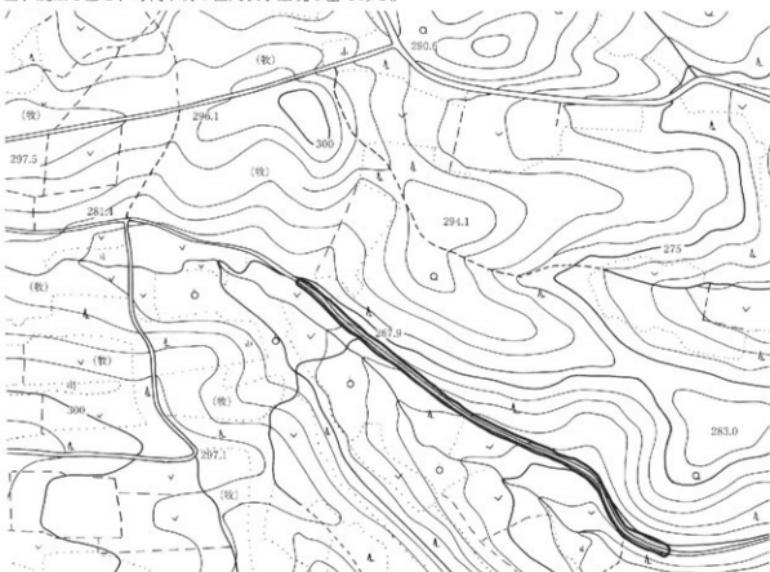
I層	10Y R 2/1	黒褐色シルト	粘性中	しまり弱
II層	10Y R 3/1	黒褐色シルト	粘性弱	しまり弱
	十和田中振テフラ混入			
III層	10Y R 1.7/1	黒色シルト	粘性中	しまり強
	十和田中振テフラ多量、二の倉テフラ混入			
IV層	10Y R 2/2	黒褐色シルトと10Y R 3/4暗褐色 粘土質シルトの互層	十和田二の倉テフラ多量混入	
V層	10Y R 4/4	褐色粘土質シルト	粘性強 しまり強	十和田二の倉テフラ混入



基本土層断面図

4. 調査の概要と検出状況

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代前期前半の堅穴住居状遺構1棟、縄文時代と推定される土坑5基、焼土4基と、時代不明の柱穴状小土坑6基である。



第2図 周辺の地形・調査区の位置図(1:5,000)

(1) 遺構

＜堅穴住居状遺構＞東半谷側の細進入路付近で検出された。検出面は十和田二の倉テフラ混入の褐色土層であるが、断面観察の結果、上層の桜山テフラ混入黒褐色土層から構築されている。形状は径約2.3mの楕円形であるが、隅丸方形に近い。底面から石匙と剥片が1点ずつ出土しているが、土器は出土していない。遺構構築時期は、検出された炭化物の分析結果から約5600年前の縄文時代前期と推定されるが、詳細は不明である。

＜土坑＞中央部現道下で1基、東半で4基検出された。検出面は桜山テフラ混入黒褐色土層。現道下のものは十和田二の倉テフラ混入褐色土層以下である。形状はおむね1mの円形で、残存状態の良いものは断面ビーカー形を呈する。遺物の出土は全くない。遺構構築時期は堆上中に十和田中揮テフラが混入することからこの降下前構築の可能性が高い。

＜柱穴状小土坑＞西半の谷側で6基検出された。すべて単独であるため性格は不明である。

＜焼土＞焼土遺構は4基検出された。いずれも遺物を伴わない。検出面はⅢ層下位からⅣ層上位面である。うち4号焼土は確実に中揮テフラより下位での検出であることから、同テフラ下降以前の構築である。

(2) 遺物

大コンテナ約2.5箱分出土した。種別毎の出土量は、縄文土器8565.03g、石器30点（剥片石器および石核7点・礫石器23点・54.090.32g）、剥片33.2g、上師器16.23gである。遺構内出土は1号堅穴住居状遺構（20.99g）のみで、全遺物量の99%以上は遺構外出土である。遺物時期は、土器型式により縄文時代早期中葉から後期、平安時代と推定され、量的主体は縄文時代早期中葉である。出土状況としては、6～7グリット付近Ⅲ～Ⅳ層で縄文時代早期中葉の土器がまとまって出土したことが特筆される。

1・2は1号堅穴住居状遺構出土である。1は無文・薄手で径が小さいことから小形と推定される。2は結節1種の羽状文で胎土に纖維を含まず、時期不明である。3～17は早期中葉の土器で、口縁～胴部片は文様から沈線文をもつもの（3・4）、貝殻腹縁文をもつもの（5～10）、刺突文・貼付をもつもの（11）、無文のもの（12～17）、に分類できる。無文のばい内面に条痕をもつものが多い。5～10は鳥本沢式と推定される。17は底部片で、表面に条痕がみられる。18～21は斜縫文で、赤御堂式に比定される。18は0段多条である。22・23は撫捺文で、22は複数の单輪絞糸体を使用し、器形は純角な尖底と推定される。25は底部に施文された結節回転文から、円筒下唇a式に比定される。25～27は中期後葉～末葉の土器と推定され、26は平行沈線から大木8～10式に比定される。28は小型の壺？形土器で、下部に穿孔が入る。時期不明だが後期の可能性が考えられようか。

石器内訳は石錐1点、石匙1点、石箋1点、スクレイバー（削器）3点、石核1点、磨石（辺使用）14点、磨石（面使用）4点、凹石3点、台石2点で、16点を写真撮影し、うち14点を図示した。石材は、剥片・石核類はすべて頁岩で、礫石器は（片磨）1点がアイサイト、磨石（面磨）1点がハンレイ岩である以外はすべて安山岩である。石器組成の特徴としては、磨石の割合が極めて高いことが上げられる。なお、遺構内出土は30の剥片と32の石匙（1号堅穴住居状遺構床面）のみであり、他はすべて遺構外出土である。

3.まとめ

今回の発掘調査の結果、本調査区付近には縄文時代前期前半の居住域が存在する可能性が高いことが判明した。ただし南西向き斜面と平坦地の境であるため、居住域本体ではなく北東縁にあたる部分と推定される。また、早期中葉土器の出土状況から、該期の居住域が斜面上方にあたる北西～北側に存在していた可能性がある。

(1) サイカツ平畠遺跡

なお、サイカツ平畠遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

報 告 書 抄 錄

ふりがな 書名	へいせいじゅうろくねんどはくつちょうさほうこくしょ 平成16年度発掘調査報告書							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第469集							
編著者名	水上明博 丸山浩治							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001・9002							
発行年月日	西暦2005年3月25日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
サイカツ平畠 遺跡	岩手県二戸郡 浮法寺町大清 水地内	03521	J E 36 -2025	40度 10分 14秒	141度 07分 09秒	2004.04.09 ~ 2004.06.30	2,000m ²	一般農道整備 事業太田2期 地区
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
サイカツ平畠 遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居状遺構1棟 土坑5基 焼土4基 柱穴状小土坑6基	縄文土器 (早期中葉～前期 初頭主体) 石器 土師器	縄文時代前期前半の竪穴住居状 遺構と焼土 縄文早期中葉の土器がまとまっ て出土			

季節度・経度は世界測地系

6. 自然科学的分析

(1) 放射性炭素年代測定結果 (AMS測定)

I A A 株式会社 加速器分析研究所

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) B P 年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表す。
- 3) 付記した誤差は、標準偏差 (1σ) に相当する年代で、次のように算出している。
複数回（通常は4回）の測定値について χ^2 検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、ばらつきが大きい場合には不偏分散の平方根（標準偏差）と統計誤差から求めた値を比較して大きい方を誤差としている。
- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。
- $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載した。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰ ; パーミル) で表したものである。

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_s - {}^{13}\text{A}_R) / {}^{13}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_s - {}^{13}\text{A}_{PDB}) / {}^{13}\text{A}_{PDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ${}^{13}\text{A}_s$: 試料炭素の ${}^{13}\text{C}$ 濃度 : $({}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C})_s$ — または $({}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C})_{\text{S}}$

${}^{13}\text{A}_R$: 標準現代炭素の ${}^{13}\text{C}$ 濃度 : $({}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C})_R$ — または $({}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C})_{\text{R}}$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ${}^{13}\text{C}$ 濃度 (${}^{13}\text{A}_s = {}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C}$) を測定し、P D B (白亜紀のペレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算する。

ただし、I A A では加速器により測定中に同時に ${}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C}$ も測定しているので、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に【加速器】と記載している。

また、 $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの ${}^{13}\text{C}$ 濃度 (${}^{13}\text{A}_s$) の換算した上で計算した値である。(1) 式の ${}^{13}\text{C}$ 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の推定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{13}\text{A}_s = {}^{13}\text{A}_s \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad ({}^{13}\text{A}_s \text{として } {}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

または

$$= {}^{13}\text{A}_s \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{13}\text{A}_s \text{として } {}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

$$\Delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_s - {}^{13}\text{A}_R) / {}^{13}\text{A}_R] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当する B P 年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

(1) サイカツ平埴遺跡

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、 pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC}/100 - 1) \times 1000 (\%)$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C}/10 + 100 (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいは pMC により、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age; y_{rBP}) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C}/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC}/100)$$

IAA Code No.	試 料	B P 年代および炭素の同位比
IAAA-40854	試料採取場所: 岩手県二戸郡淨法寺町大字大清水 字サイカツ平 1号櫛穴住居遺構底面 試料形態: 木炭 試料名: C-1	Libby Age (yrBP) $\delta^{13}\text{C}$ (‰) (加速器) $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) pMC (%)
#637	(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) pMC (%) Age (yrBP)

(2) サイカツ平埴遺跡出土火山灰分析鑑定

株式会社京都フィッショングラック

1. 試料

分析試料は、(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター担当者により、岩手県二戸郡淨法寺町サイカツ平埴遺跡16Eグリッド調査区際断面(Ⅲ層)から採取された1点である。本テフラは同調査区のほぼ全域で確認され、水平的な連続性に欠け断続的な層として観察された。試料は焼土遺構(4号焼土)の検出面より上位に堆積しており、調査区境の断面を利用してサンプリングされたものである。

2. 試料の分析方法

以下に処理工程について説明を加える。

(1) 前処理

まず半湿状態の生試料を適宜採取秤量し、50°Cで15時間乾燥させる。乾燥重量測定後、2Lビーカー中に数回水替えしながら水洗し、その後超音波洗浄を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を濃度1~2%程度となるよう適宜加え、懸濁がなくなるまで洗浄水の交換を繰り返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い、3段階の篩別(60, 120, 250mesh)を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた120~250mesh(1/8~1/16mm)粒径試料を比重分別処理を加えることなく、封入剤(Nd=1.54)を用いて岩石薄片を作成した。

(2) 全鉱物組成分析

前述の封入薄片を用い、火山ガラス・軽鉱物・重鉱物・岩片・その他の5項目について、1薄片中の各粒子を無作為に200個まで計数し含有粒子数の量比百分率を測定した。

(3) 重鉱物分析

主要重鉱物であるカンラン石 (O I)・斜方輝石 (O p x)・单斜輝石 (C p x)・褐色普通角閃石 (B H b)・緑色普通角閃石 (G H b)・不透明 (鉄) 鉱物 (O p q)・カミングトン閃石 (C u m)・ジルコン (Z r)・黒雲母 (B t)・アバタイト (A p) を鏡下で識別し、ポイント・カウンターを用いて無作為に200個体を計数してその量比を百分率で示した。なお、試料により重鉱物含有の少ないものは結果的に総数200個に満たないことをお断りしておきたい。この際、一般に重鉱物含有の少ない試料は重液処理による重鉱物の濃集を行うことが多いが、特に火山ガラスに包埋された重鉱物はみかけ比重が減少するため重液処理過程で除外される危険性がある。さらに風化による比重変化や粒径の違いが分析結果に影響を与える懸念があるため、今回の分析では重液処理は行っていない。

(4) 火山ガラス形態分類

前処理で作成した検証用薄片中に含まれる火山ガラス形態を、吉川 (1976) に準拠してH：偏平型 (H a, H b)、C：中間型 (C a, C b)、T：多孔質型 (T a, T b) に分類した。またこれらの形態に属さないものを、I t : 不規則型として一括し示した。なお含有率を測定するため200個の粒子を測定した。その過程で着色したものやスコリア質のものおよび亀ノ甲型と呼ばれる得意な形態をもつ火山ガラスの有無もチェックした。さらに火山ガラスの水和現象を観察し、山下・塙原 (1995)に基づき水和 (hydration) やスーパーハイドレーション (super hydration) の程度についても可能な限り半定量的に記載した。

(5) 火山ガラスの屈折率測定

前処理により調整された120–250mesh (1/8 – 1/16mm) 粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置 (RIMS) (横山ほか1986, Danhara T. ほか1992) を用い火山ガラスの屈折率を測定した。測定に際しては、精度を高めるため原則として1試料あたり30個の火山ガラス片を測定するが、火山ガラスの含有の低い試料ではそれ以下の個数となる場合もある。

温度変化型屈折率測定法 (塙原1993) は火山ガラスと浸液の屈折率が一致した温度を測定することにより、各浸液ごとに決められた浸液温度と屈折率の換算温度から火山ガラスの屈折率を計算して求める方法である。

(6) 鉱物の屈折率測定

基本的には火山ガラスの屈折率と同様な操作を経て測定作業を行うが、鉱物の屈折率測定は光学的方位をチェックする必要がある点で大きく異なっている。今回の測定は、屈折率値の精度を高めるため30結晶の測定を目指しているが、含有結晶量が少ない場合にはそれ以下になる場合もある。対象鉱物は斜方輝石 (O p x) で、鎌田・塙原 (1994) に準じ対象鉱物片の屈折率を測定した。

3. 測定結果

本資料の測定結果の詳細は、テフラ分析結果表に一括される。そのうち屈折率測定結果については別表に示した。なお測定作業を進める中で本試料には複数のテフラが混在する可能性が懸念されたため、屈折率測定においては、弊社の判断により通常の分析粒子サイズよりも粗粒の#60–#120メッシュ粒径試料も比較のため測定した。

さて今回行ったすべての測定結果から試料テフラの岩石記載的特徴をまとめると、以下のようになる。

本試料は、軽鉱物・ガラス質岩片・火山ガラス・重鉱物などからなる比較的純度の高い結晶質軽石火山灰である。火山ガラスは微細な結晶 (microlite) や気泡を含む軽石型や不規則なブロック状 (I t型) の黒曜石片からなる。屈折率の頻度分布は#60–#120 (粗粒) と#120–#250 (細粒) で多少異なり、粗粒部が

(1) サイカツ半殻遺跡

1.507–1.512に集中するのに対し、細粒部は1.502–1.512と分布域が広がる。重鉱物組成は主に斜方輝石(Opx)・单斜輝石(Cpx)・不透明(鉄)鉱物(Opq)からなり、微量のカンラン石(Ol)を含む特徴をもつ。このうち斜方輝石の屈折率は $\gamma = 1.702\text{--}1.704$ と $1.706\text{--}1.713$ の2つのレンジに分布しており、後者の高い方が優勢である。

4. 考察 (テフラの同定)

本テフラの岩石記載的特性は前述の通りであり、それらをもとに新編火山灰アトラス(町田・新井2003)と対照して既存分析値との比較を行い、対比の可能性を検討した。その結果、十和田中源(To-Cu, 6ka: 6000年前)テフラが最もよく似た特性をもつことが判明した。以下にその検討結果を略記する。

まず、火山ガラスの形態は輕石型を主とし、屈折率が $n = 1.510\text{--}1.512$ 付近に集中する点でTo-Cuテフラと矛盾しない。逆に本地域内でATテフラ以降のテフラ特徴と対照しても、火山ガラスの屈折率レンジの合致するものが他に見あたらないことは、上記のTo-Cuテフラへの対比の最も大きな根拠となる。さらに十和田系テフラに広く共通する要素として、重鉱物組成が斜方および单斜輝石を主とすること、斜方輝石の屈折率モードが $\gamma = 1.707\text{--}1.708$ 付近にあり、火山灰アトラスの $\gamma = 1.704\text{--}1.708$ (モード1.707)とも矛盾しないことがあげられる。以上のことから、本テフラがTo-Cuテフラに對比される可能性は高いものと結論する。

なお、各測定値には必ずしもTo-Cuテフラのみに出来ると考えられないものも含まれる。たとえば細粒(#120–#250メッシュサイズ)の火山ガラスには、黒曜石片が含まれ、その影響でTo-Cuテフラにはない低い屈折率値が測定値に示されている。この火山ガラスはその特徴から十和田a(To-a)テフラ起源の可能性が指摘できる。

以上

参考文献

- 町田浩毅・塙原徹・林田明・星住英夫・山下透 1994 「中部九州の今市火碎流堆積物と類似火碎流堆積物の対比および噴出起源の推定」『地質学雑誌』100(4) pp.279–291
塙原徹 1993 「温度変化型屈折率測定法」『第四紀試料分析法2. 研究対象別分析法』東京大学出版会pp.149–157
町田洋・新井房夫 2003 『新編火山灰アトラス』東京大学出版会
山下透・塙原徹 1995 「火山ガラスのhydrationとsuper hydration—日本の広域テフラについて—」『フィッショントラックニュースレター』第8号pp.41–46
横山卓雄・塙原徹・山下透 1986 「温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定」『第四紀研究』25(1) pp.21–30
吉川周作 1976 「大阪層群中の火山灰層について」『地質学雑誌』82(8) pp.479–515
Danhara T., Yamashita T., Iwano H. and Kasuya M. 1992 「An improved system for measuring refractive index using the thermal immersion method」『Quaternary International』13/14pp. 89–91

なお温度変化型屈折率測定装置RIMS™と測定方法は、P A T. 1803336, 1888831で特許登録および商標登録されています。

テフラ分析結果表

分析試料名：1. T-1 (サイカツ平野遺跡)

全鉱物組成

火山ガラス	軽鉱物	重鉱物	岩片	その他	合計	備考
41	76	14	63	6	200	火山gl: 珪長質pm, It型。十和田山中深(To-Cu)の可能性高い。 軽鉱物: pl主。Qz含む。
20.5	38.0	7.0	31.5	3.0	100.0	重鉱物: OpQx, Opx, Cpx. 岩片: gl質で火碎物起源。その他: 風化粒子。

重鉱物分析

OI	Pyroxene		Amphibole		Opx	Cum	Zr	Bt	Ap	total	備考
	Opx	Cpx	Bhb	Ghb							
O+	84	54	—	—	62	—	—	—	—	200	
tr	42.0	27.0	0.0	0.0	31.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	

火山ガラス形態分類

Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It	合計	色付gl	備考
—	—	16	—	127	18	39	200	+	珪長質pm型およびIt型(黒曜石片)
0.0	0.0	8.0	0.0	63.5	9.0	19.5	100.0		

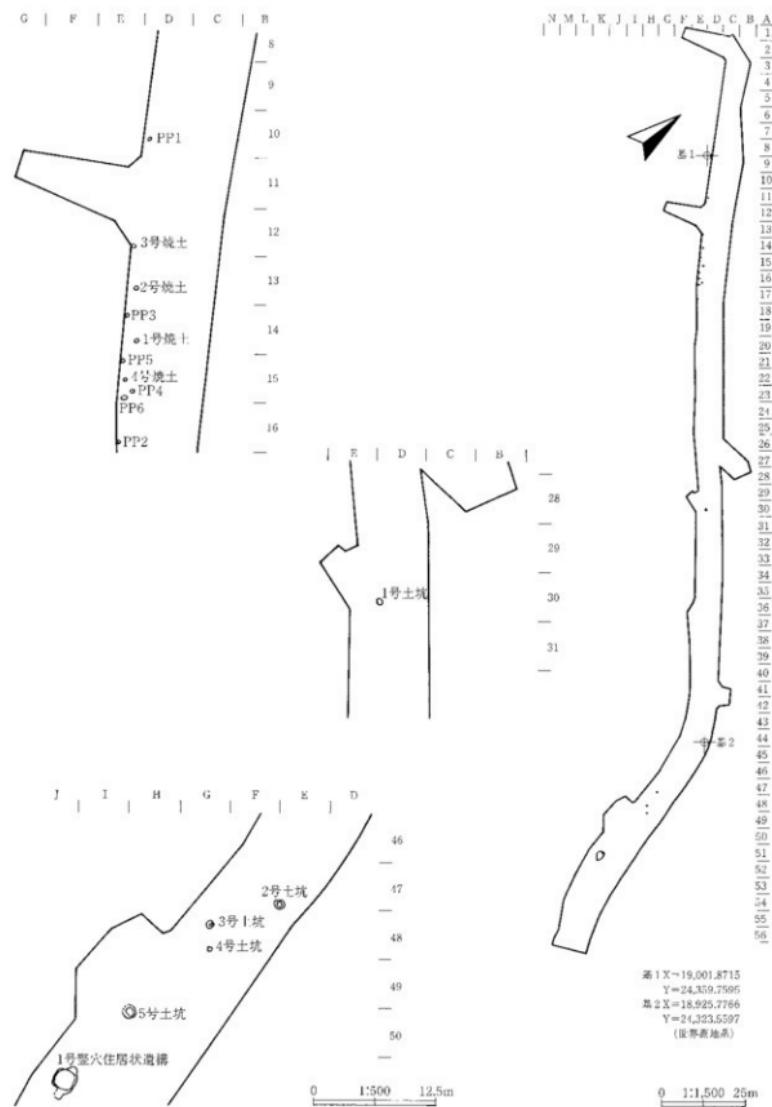
火山ガラス屈折率測定

粒子サイズ	屈折率範囲(range)		屈折率平均値(mean)	測定固体数(個)	屈折率最頻値(mode)	火山ガラス形態(glass type)	備考
	最小	最大					
#60-#120	1.5070	1.5092	1.5082	13	—	It(黒曜石片) T型	含有:C 水和層厚2-3?が主 水和層厚5-7?含む 重鉱物:Opx, Cpx, Opx, OI?
	1.5097	1.5121	1.5109	48	1.511	T, 鉱物に付着	含有:C 水和層厚2-3?が主 水和層厚5-7?含む 重鉱物:Opx, Cpx, Opx, OI?
#120-#250	1.5015	1.5122	1.508	69	1.511	T, C, ItH	含有:C 水和層厚2-3?が主 水和層厚5-7?含む 重鉱物:Opx, Cpx, Opx, OI?

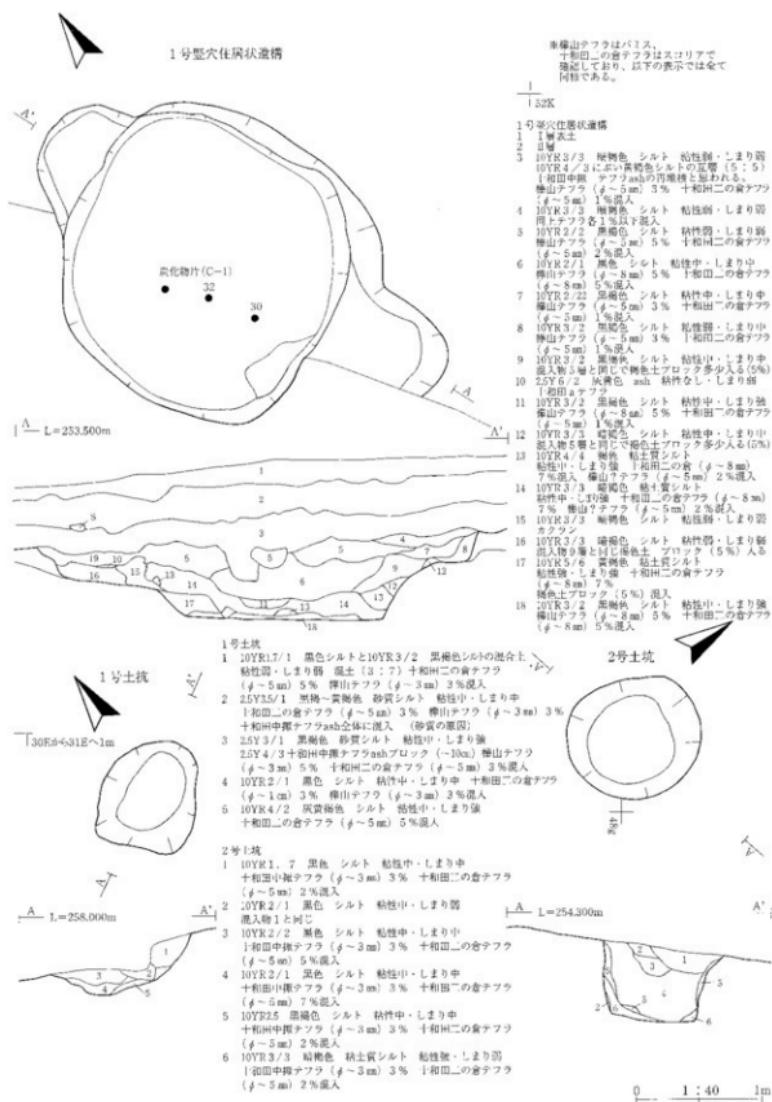
鉱物の屈折率測定(斜方輝石)

粒子サイズ	屈折率範囲(range)		屈折率平均値(mean)	測定固体数(個)	屈折率最頻値(mode)	鉱物の種類 Opx	備考
	最小	最大					
#60-#120	1.702	1.704	1.703	6	—	ハイバーラン	$\gamma (=n2)$
	1.706	1.713	1.708	63	1.708	ハイバーラン	
#120-#250	1.701	1.711	1.707	60	1.707	ハイバーラン	$\gamma (=n2)$

(1) サイカツ半墳通路

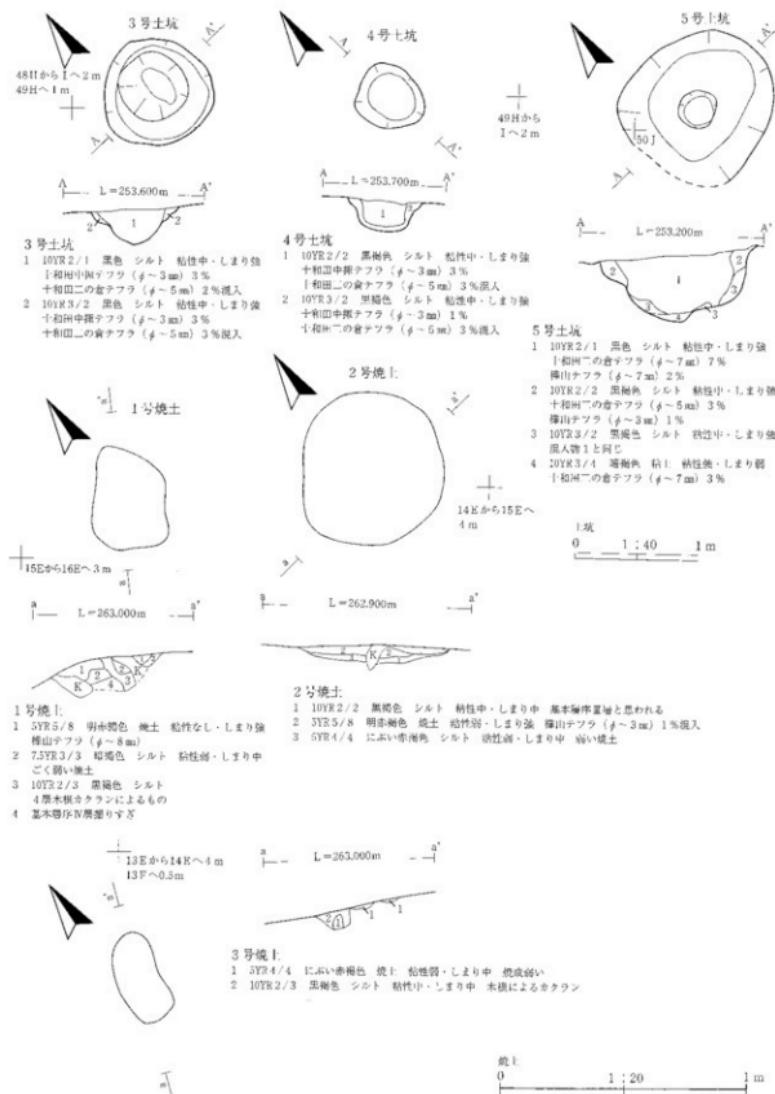


第3図 遺構配置図

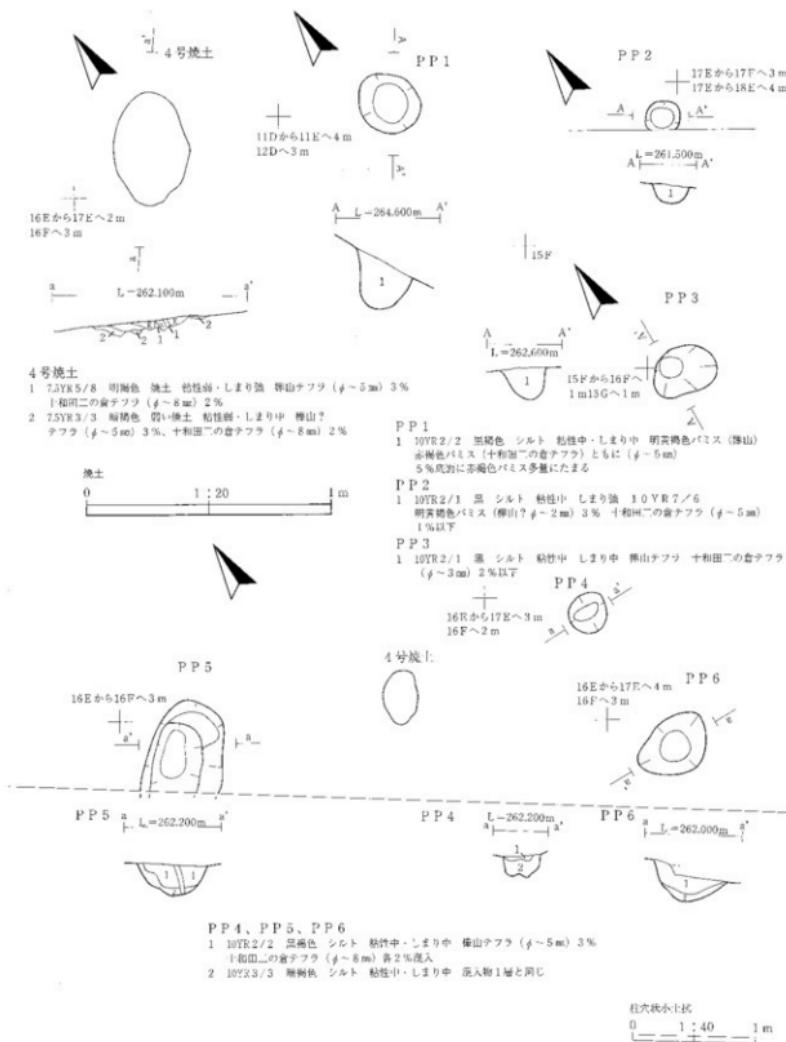


第4図 検出遺構(1)

(1) サイカフ平図述説

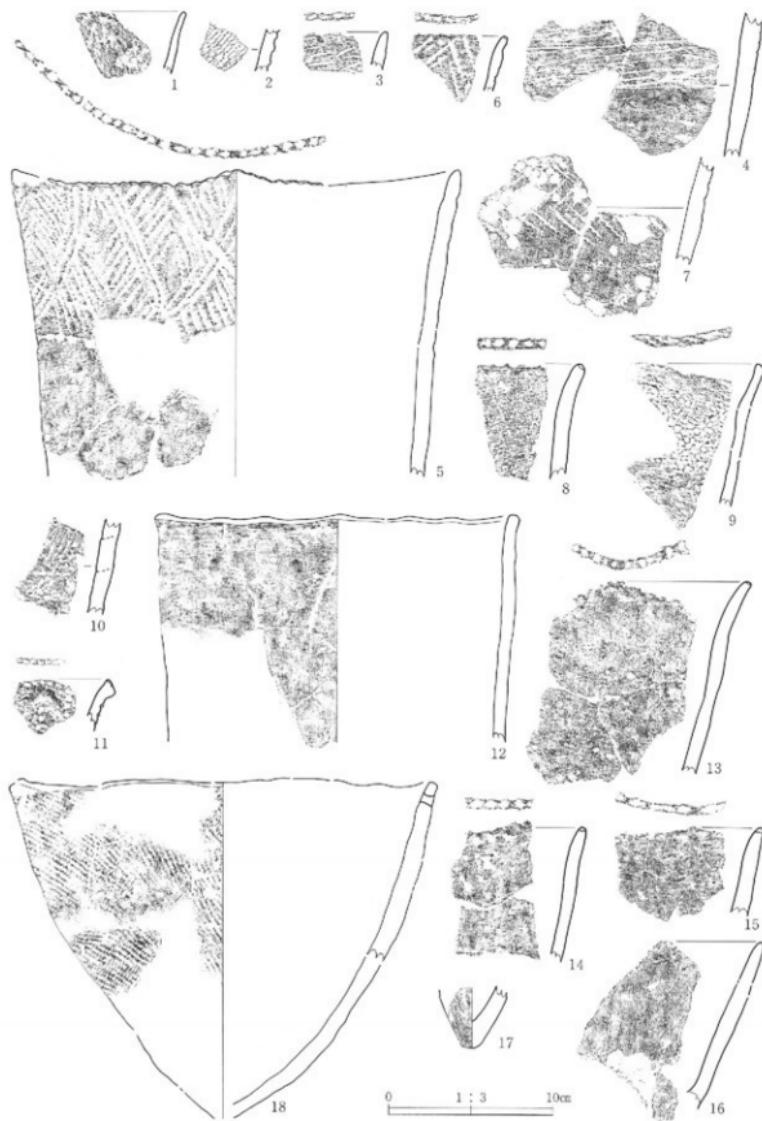


第5図 検出遺構(2)



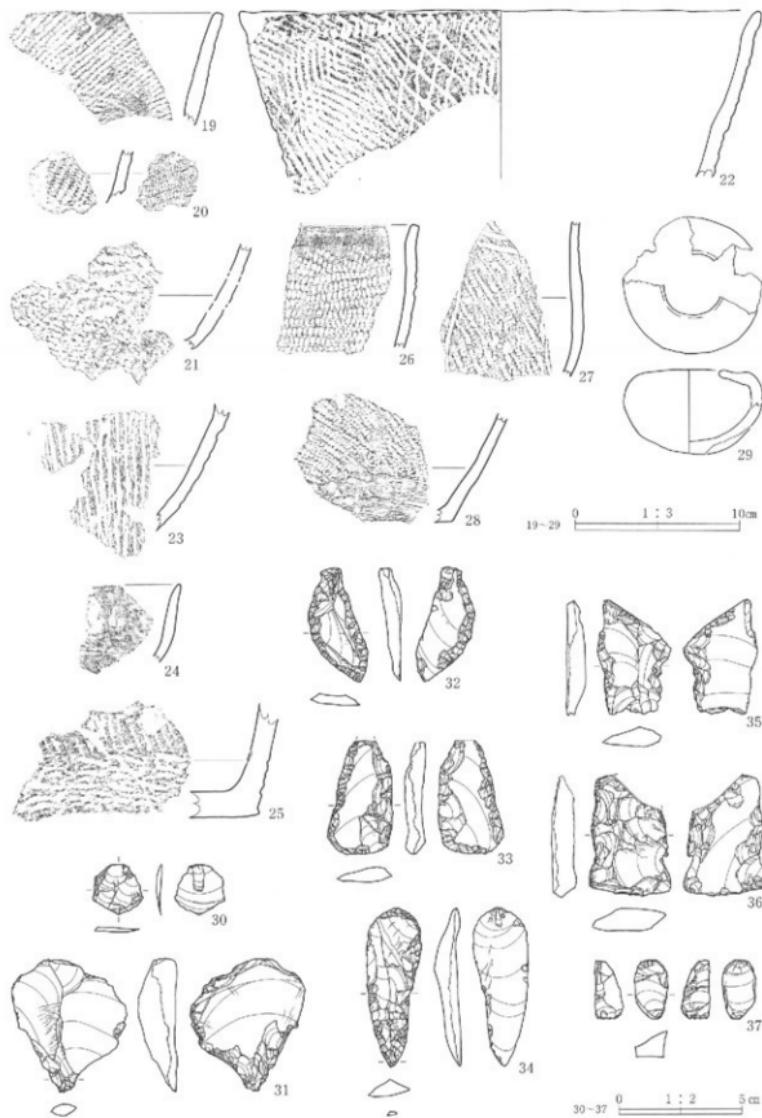
第6図 検出構造(3)

(1) サイカツ平頭遺跡



第7図 出土遺物(1)

(1) サイカツ平皿遺跡



第8図 出土遺物(2)

(1) サイカツ半殻遺跡



第9図 出土遺物(3)

(1) サイカツ平遺跡



調査区西から



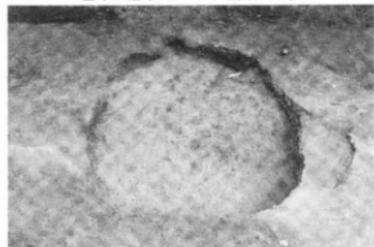
調査区東から



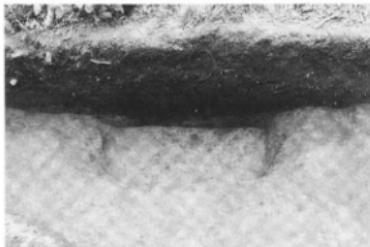
基本土層(36C~36D南東から)



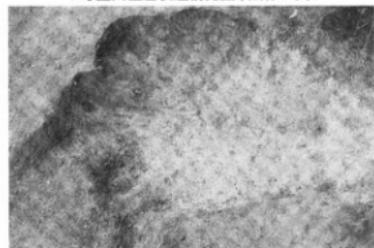
遺物出土状況(5D~6D)



1号竪穴住居状遺構完掘(北東から)



1号竪穴住居状遺構断面(北から)



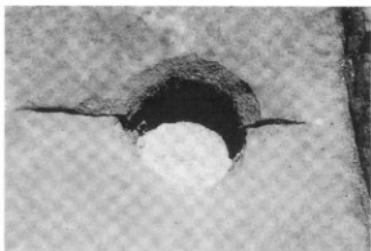
1号土坑完掘(南東から)



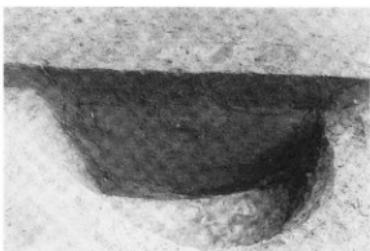
1号土坑断面(南東から)

写真図版 1 検出遺構(1)

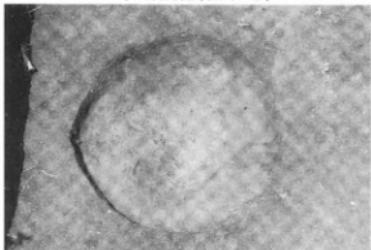
(1) サイカツ平罐遺跡



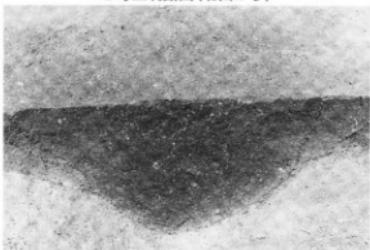
2号土坑完掘(北西から)



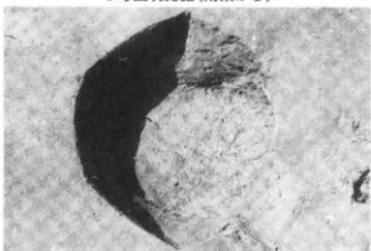
2号土坑断面(北西から)



3号土坑完掘(南東から)



3号土坑断面(南東から)



4号土坑完掘(南東から)



4号土坑断面(東西から)

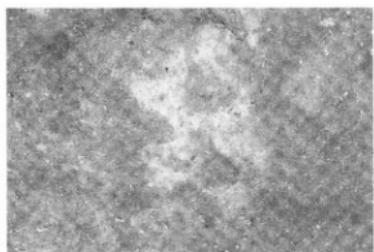


5号土坑完掘(南東から)



5号土坑断面(南東から)

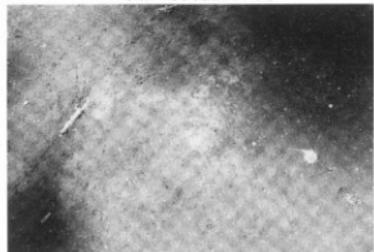
写真図版2 検出遺構(2)



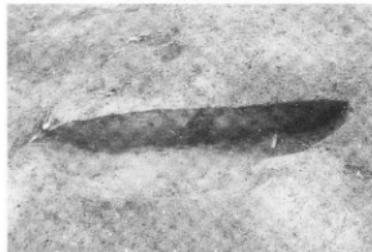
1号焼土平面(南西から)



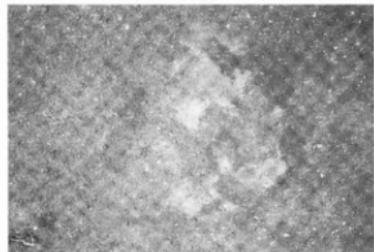
1号焼土断面(南東から)



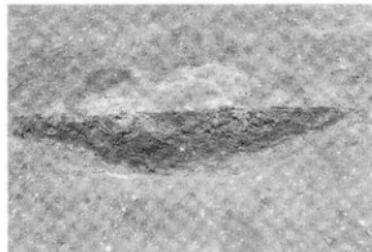
2号焼土平面(東から)



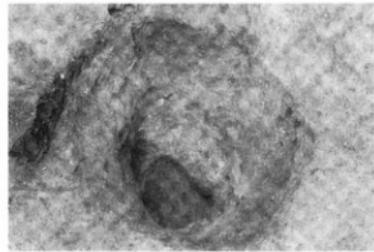
2号焼土断面(南から)



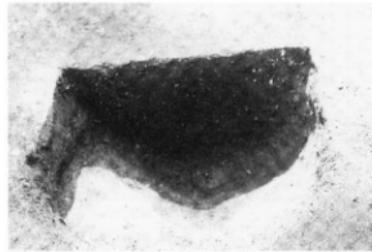
3号焼土平面(北から)



3号焼土断面(南東から)



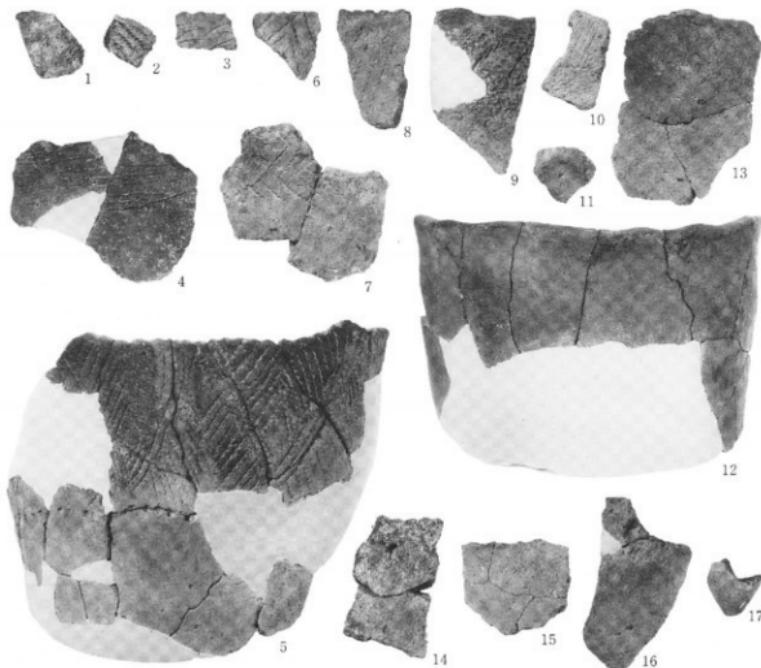
PP 3 穴掘(南東から)



PP 3 断面(東から)

写真図版3 検出遺構(3)

(1) サイカツ平埴造跡

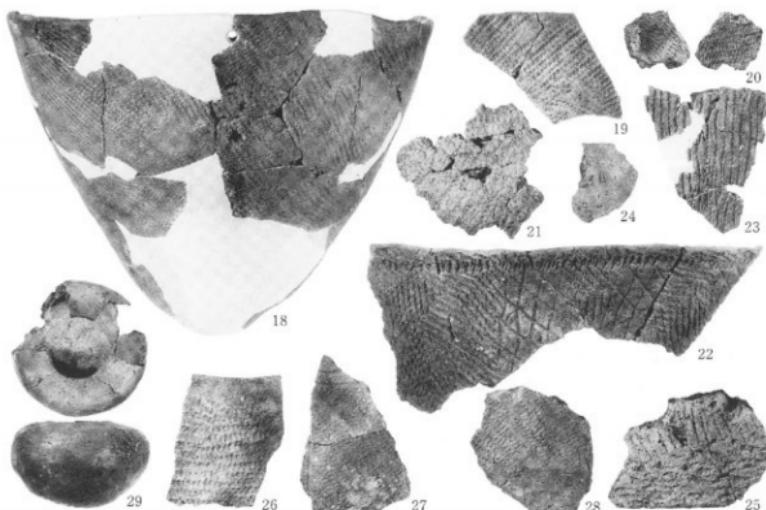


遺物観察表 繩文土器

No.	出土場所・層位	類別	文様等の特徴等	備考
1	1号窓穴住居底造跡 壁上部下層中央	口	無文	黒雲母少量
2	1号窓穴住居底造跡 壁上部	脚?	L.R.・波し縞末(横)	黒雲母、石灰少量
3	7.D. Ⅲ型 (植物搅乱)	口	口沿: 目口(斜) 口: 平行沈線(横)	砂粒少量
4	6.C. Ⅲ型	脚	上部: 平行沈線 下部: 無文	砂粒少量
5	7.C. Ⅲ型 (植物搅乱)、 5. Ⅲ型 (植物搅乱)、 6. Ⅲ型	口~脚	波状口縁 口唇: 大く断面V形の肩口 口: 其設模圧(窓) 脚: 刺突列(右から) 脚: 無文 ナデ(横)	砂粒多量 内面削部黒色
6	7.D. Ⅲ型	口	口沿: 斜面直列の斜列(右から) 口: 其設模圧(横)	砂粒少量
7	6.C. E型 (植物搅乱)	脚	上部: 目設模圧(斜) 下部: 無文 ナデ(横)	砂粒少量
8	6.D. Ⅲ型	口	口沿: 太い斜口列 口: 其設模圧(窓) 内面: ナデ(窓)	砂粒少量
9	7.D. Ⅲ型、+Ⅳ層	口	腹波状口縁 口沿: 目口(其設模圧、窓) 口: 乳突部(上から)、下部無文 内面: ナデ(横)	砂粒少量
10	6.D. Ⅲ型	脚?	其設模圧(窓、横)	砂粒少量
11	6.C. Ⅲ型	口	口沿: 口唇下: 斜面直列の斜列 口: 山形附付、断面直列の斜列(横)	砂粒少量
12	6.D. Ⅲ型、+Ⅳ層 7.D. Ⅲ型、+Ⅳ層	口~脚	波状口縁 無文、ミガキ(口・横、窓、脚) 内面: ナデ(横)	砂粒少量
13	6.C. Ⅲ型、+Ⅳ層	口	波状口縁 口唇: 大く断面V形の肩口 口: 無文 内面: 砂混入ケズリ	砂粒少量
14	7.D. Ⅲ型	口	口沿: 太い斜口(斜) 口: 無文 内面: ケズリ(上部・横、下部・窓)	砂粒少量
15	7~8.D. I型、 8.D. Ⅲ型	口	波状口縁 口唇: 太い斜口(斜) 口: 無文 内面: 波筋部に向かって上がるケズリ	砂粒少量 内面黑色
16	12E. E型	口~底	無文 ナデ(口および底、横、脚、窓)	小形内面は底部以外黑色
17	7.D. Ⅲ型	底	無文(表面調整、窓)	内面黑色

写真図版4 出土遺物(1)

(1) サイカツ平畠遺跡



縄文土器

No.	出土地点・層位	種類	文様の特徴等	備考
18	15E I層、 16E II層、 + III層	口～底約1/2	RL (0段多条・横)	織維多量
19	17E II層	口	LR (輪)	織維少、黒岩母、石英多量
20	23D II層	刃?	表面棘突 L R (0段多条・斜) 内面: LR (0段多条・斜)	内面黒色
21	14D III層	底	RL (輪)	織維・砂粒少量 内面黒色
22	25E II層、 26E II層 (植物擾乱)	口	LI筋下: 縱筋輪 1 (L) 構体撫拭痕、口: 半輪筋 5 (x・輪)、半輪筋 1 (L・多方向) 内面: ナデ (輪)	織維多量
23	27E II層 (植物擾乱)	刃	半輪筋 1 (L・輪)	織維多量 内面黒色
24	16E II層	口	無文	ミニチュア 織維少量
25	5D II層 (植物擾乱)	底	厚; 半輪筋 1 (R・輪) 底; 半輪筋 3 (R・右筋・輪)	織維多量
26	47F II層	口	波状口縁 (口: 外曲面波状、口唇下: 浪文) 口: LR (上部・輪、 下部・斜) 内面: ナデ (輪)	
27	36D II層 (植物擾乱)	刃	LR (輪) 大きな平行波状 内面: ナデ (輪)	
28	33E II層	底	刃?; LR (輪) 底; 背削 (横)	
29	6D II層	口～底約2/3	ミガキ	底部に穿孔 1箇所

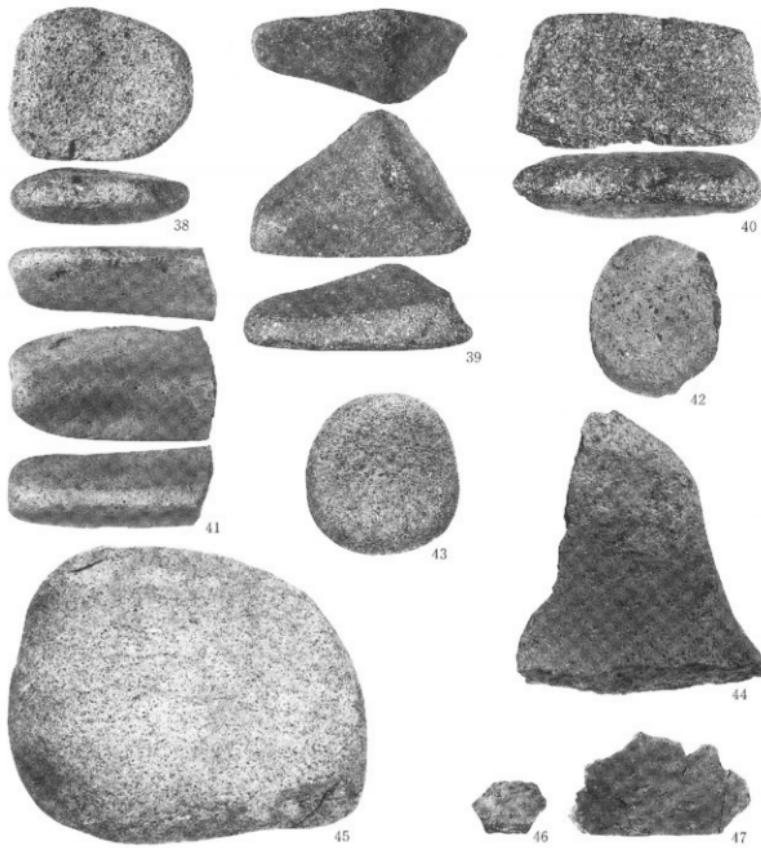


石器

No.	出土地点・層位	器種	計測値(ー)は欠損	石種(産地)	備考
30	1号窓穴柱状連続壁 原面	調片	長さ(cm): (2.07) 幅(cm): 2.11 厚さ(cm): 0.24 重量(g): (0.77)	頁岩(奥羽山脈)	
31	7D III層	石鋸	5.47 4.74 1.53 28.01	頁岩(奥羽山脈)	
32	1号窓穴柱状連続壁 原面	石鋸	4.83 1.05 0.67 5.09	頁岩(奥羽山脈)	織維
33	5C IV層	石鋸	4.68 2.57 0.65 9.37	頁岩(奥羽山脈)	透徹度い 石基の未透過の可能性あり
34	30-31D III層	スクレイパー	6.59 2.24 0.87 8.51	頁岩(奥羽山脈)	尖刃形前縁
35	6C IV層	スクレイパー	4.70 3.01 0.80 10.20	頁岩(奥羽山脈)	前縁
36	7C IV層	スクレイパー	4.89 3.37 0.95 18.22	頁岩(奥羽山脈)	前縁両面削除で形態は石鋸状
37	6D IV層	石核	2.51 1.41 1.01 2.79	頁岩(奥羽山脈)	両側石核の先核

写真図版5 出土遺物(2)

(1) サイカツ平埴造跡



石器

No.	出土地点・層位	器種	計測値()は欠損				石材(产地)	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
38	6C 三層	磨+凹石	9.32	11.12	3.80	567.74	安山岩(奥羽山脈)	弦切1面、圓形周面、凹痕片面
39	6D 五層	磨+敲石	9.30	13.97	5.58	758.90	安山岩(奥羽山脈)	弦切1面、邊行2面所以上
40	6D 五層	磨石	8.40	15.22	4.43	845.42	安山岩(奥羽山脈)	邊行1面、使用面中央部剝離多
41	7E 五層	磨石	7.43	(12.06)	4.83	(650.22)	アサリ(奥羽山脈)	邊行2面
42	6C 五層	磨石	9.85	8.23	3.69	449.70	安山岩(奥羽山脈)	圓形周面、片側欠損後?も使用
43	14E 五層	磨+凹石	10.02	9.48	5.40	742.23	安山岩(奥羽山脈)	圓形、凹痕片面、唐が門を切る
44	7D 五層	凸石	(18.25)	(16.10)	(16.30)	(3528.00)	安山岩(奥羽山脈)	
45	3号焼土窯剖面 壁~背壁	合石	43.00	35.00	17.00	36500.00	安山岩(奥羽山脈)	

土師器

No.	出土地点・層位	種別	器種	測定			備考
				外型	内面	底部	
46	36D II層	土師器	甕?	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ?	
47	不明	土師器	甕	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	

写真図版6 出土遺物(3)

(2) 伏屋Ⅱ遺跡

所 在 地	下閉伊郡岩泉町大川 字舞の子19-6ほか	発掘調査期間	平成16年8月19日～9月29日
委 託 者	宮古地方振興局岩泉土木事務所	遺跡番号・路号	KF77-1318・FYII-04
事 業 名	緊急地方道路整備事業	発掘調査面積	当初：965m ² 実績：965m ²
		調査担当者	瀬 浩二郎 石崎高臣

1. 調査に至る経過

伏屋Ⅱ遺跡は、一般県道大川松草線緊急地方道路整備事業大川地区の事業区域内に位置しているため、当該事業の施行に伴い発掘調査を実施することとなったものである。

これに係る埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、平成16年5月7日付「岩土第84号」により宮古地方振興局岩泉土木事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長に試掘調査についての依頼があり、岩手県教育委員会は平成16年5月14日試掘調査を実施した。その結果、平成16年5月28日付「教生第232号」により伏屋Ⅱ遺跡の発掘調査が必要になったことから岩手県教育委員会と岩泉土木事務所が協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに委託することとなったものである。

(宮古地方振興局岩泉土木事務所)

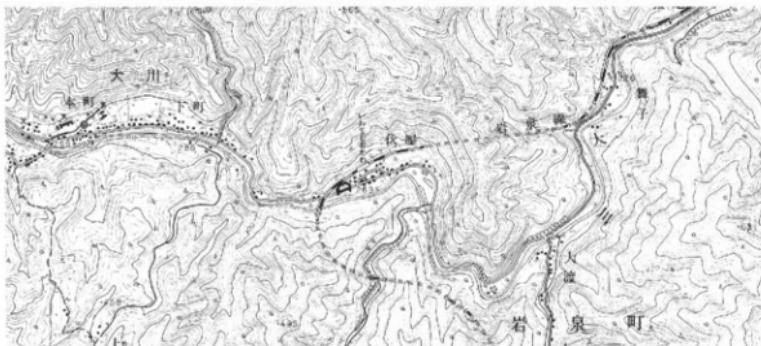
2. 遺跡の位置と立地

本遺跡はJR岩泉線岩手大川駅の南西約250mに位置する。岩泉町の94%は山地であり、集落などはこれら山地の間を流れる中小河川によって開析された段丘面上にのっている。本遺跡も同様に、中～大起伏の山地の間を流れる大川によって開析された段丘面上に立地している。標高は270m前後である。

3. 基本層序

第Ⅰ層；黒褐色土 径10mmの小礫から人頭大の礫まで多量に混入する。表土である。

第Ⅱ層；褐色土と暗褐色土の混合土地層である。径10mm前後から人頭大までの礫が多量に混入する。また、旧河道堆積部分と推測される黒色土の広がりが見られ、多量の岩が混入していた。



第1図 遺跡の位置

(2) 伏屋 II 遺跡

4. 調査の概要

(1) 遺構

旧河道と推測される落ち込み以外は人為的な掘削の痕跡は認められなかった。

(2) 遺物

旧河道の覆土から出土した縄文土器の小片 8 点を写真掲載した。他に剥片石器 1 点が出土している。

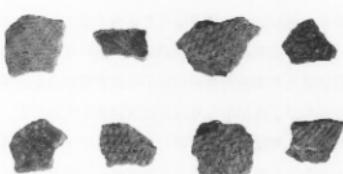
5. まとめ

今回の調査では遺物の散布地であることは確認されたが、遺構の検出には至らなかった。

なお、伏屋 II 遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。



遺跡近景



出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな 書名	へいせいじゅうろくねんどうはっくつちょうさはうこくしょ 平成16年度発掘調査報告書							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第469集							
編著者名	瀬浩二郎 石崎高臣							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001・9002							
発行年月日	西暦2005年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
ふしや ふしき いのき 伏屋 II 遺跡	岩手県下閉伊郡岩泉町大川字舞の子19-61ほか	市町村 03483	遺跡番号 K F77 -1318	39度 47分 56秒	141度 40分 13秒	2004.08.19 ～ 2004.09.29	965m ²	緊急地方道路整備事業に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
伏屋 II 遺跡	散布地	縄文時代	なし	縄文土器・石器				

※緯度・経度は世界測地系

(3) 稲荷遺跡第8次調査

所 在 地 盛岡市本宮字稻荷20-3ほか
委 託 者 独立行政法人都市再生機構
岩手県都市開発事務所
事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業

発掘調査期間 平成16年10月18日～11月1日
遺跡番号・略号 L E 16-2131・O I N -04-08
発掘調査面積 当初：296m² 実績：296m²
調査担当者 小松則也

1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた輪状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。稲荷遺跡は、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成16年度の事業とすることで確定し発掘調査に至った。

2. 遺跡の立地

稲荷遺跡はJR東北本線盛岡駅の南西約2kmに位置し、宇石川南側河岸段丘面の微高地上に立地している。標高は125m前後で、概ね全体は平坦な地形である。北側は段丘面の縁にあたり、1～2mの高低差をもって熊堂B遺跡（奈良～平安時代の集落跡）と隣接する。



3. 基本土層

- I層 10YR 3/2 黒褐色シルト 砂利含む 粘性なし 繰り強（現表土）
- II層 10YR 3/2 黒褐色シルト 極小砂粒含む 粘性なし 繰り強（旧耕作土）
- III層 10YR 2/3 黒褐色シルト 極小砂粒含む 粘性なし 繰り強（漸移層）
- IV層 10YR 2/3 黄褐色シルト 黄褐色砂質シルト混合 粘性なし 繰り中（ローム層）
- V層 10YR 5/8 黄褐色砂質シルト 砂礫含む 粘性なし 繰り弱（砂礫層）

4. 調査の概要

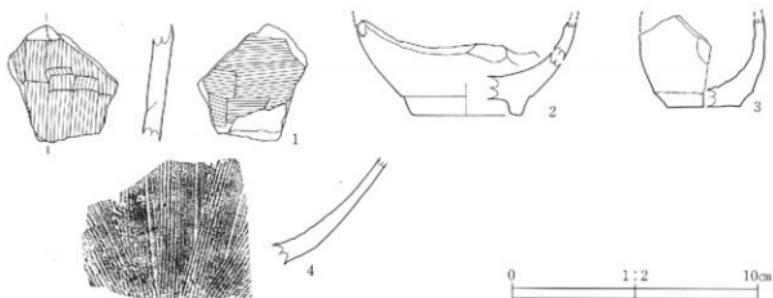
楓倒木や現代のカクランだけで造構と確認できるものはなかった。土師器片1点、陶磁器類4点が出土した。

5. まとめ

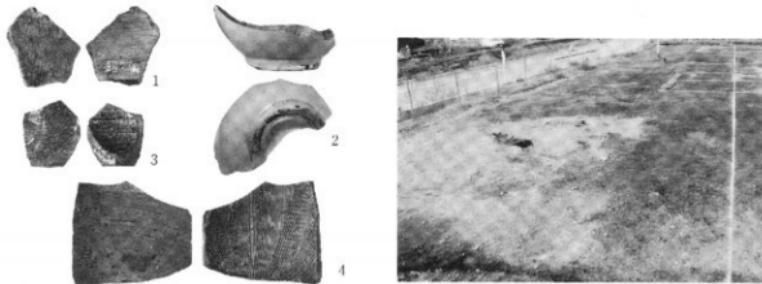
道路に当たる南北に細長く伸びるエリアの調査であったが、遺物の出土状況及び周辺の地形から判断し古代の遺構は無いものと思われる。

なお、稲荷遺跡第8次調査に関する報告は、これをもって全てとする。

(3) 稲荷道路第8次調査



第2図 出土遺物



写真図版1 出土遺物・調査終了写真

遺物観察表
土器類

番号	出土位置	器種	部位	外観・内面調整
1	表様	壺?	鉢部	外:ハケメ 内:ハケメ

陶磁器

番号	出土位置	種別	器種	口径cm	直径cm	深さcm	胎上	胎面色	裏地	年代
2	表様	器器	壺	—	(4.4)	—	灰色	墨灰釉	在地	不明
3	表様	器器	壺	—	(3.0)	—	灰色	墨釉	在地	不明
4	表様	器器	スリ体	—	—	—	墨褐色	自然釉	在地	不明

報告書抄録

ふりがな	ふりがな	へいせいじゅうろくわんどはくつちょうさほうこくしょ					
書名	名	平成16年度発掘調査報告書					
シリーズ名	名	岩手県文化振興事業団雄物川文化財調査報告書					
シリーズ番号	号	第46号					
編著者	者名	小松樹也					
収集機関	機関	財社法人文科系文化振興事業団財産文化財センター					
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下船岡11-185 TEL (019) 658-9001 - 9002						
実行年月日	西暦	2005年3月25日					
ふりがな	ふりがな						
所取送跡名	所取送跡名	コード					
所取送跡名	所取送跡名	北緯 東経					
縄文 残 縛 金	古手町金百本	L.E16 03201 —2131	39度 41分 02秒	141度 07分 36秒	2004.10.18~ 2004.11.01	296m	盛岡新都市土連 区画整理事業に伴 う緊急保証調査
縄文 残 縛 金	字船舟21-1ほか						
所取送跡名	律別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
縄文 残 縛 金	数布地		なし	土器器・陶器器			

※標度、経度は世界測地系

(4) 稲荷遺跡第9次調査

所 在 地	盛岡市本宮字稻荷21-1	遺跡番号・路号	L E 16-2131・O I N-04-09
委 託 者	盛岡市都市整備部盛岡南整備課	発掘調査面積	当初: 7,987 m ² 実績: 7,996 m ²
事 業 名	盛岡南新都市土地区画整理事業	調査担当者	小松剛也 早坂淳 北村忠昭 中村絵美 烏原弘征 菅野梢
発掘調査期間	平成16年9月1日~11月1日		

1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。稲荷遺跡は、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成16年度の事業とすることで確定し発掘調査に至った。

2. 遺跡の立地

稲荷遺跡はJR東北本線盛岡駅の南西約2kmに位置し、零石川南側河岸段丘面の微高地上に立地している。標高は125m前後で、概ね全体は平坦な地形である。北側は段丘面の縁にあたり、1~2mの高低差をもって熊堂B遺跡（奈良~平安時代の集落跡）と隣接する。

3. 基本土層

I層	10Y R 3/2	黒褐色シルト	砂利含む 粘性なし 繰り強 (現表上)
II層	10Y R 3/2	黒褐色シルト	極小砂粒含む 粘性なし 繰り強 (旧耕作土)
III層	10Y R 2/2	黒褐色シルト	極小砂粒含む 粘性なし 繰り強 (遺物包含層)
IV層	10Y R 2/1	黒色シルト	粘性なし 繰り中 (黒ボク土層)
IV層	10Y R 2/3	黒褐色シルト	黄褐色砂質シルト混合 粘性なし 繰り中 (漸移層)
V層	10Y R 5/8	黄褐色砂質シルト	砂礫含む 粘性なし 繰り弱 (ローム層)
VI層	10Y R 5/8	黄褐色を主体に4/6褐色5/8黄褐色の各砂疊	粘性なし 繰り極弱 (自然砂疊層)



第1図 遺跡の位置

(4) 稲荷遺跡第9次調査

4. 調査の概要

<掘立柱建物跡>

遺構名	R B 002	R B 003
位置	- A 2 v 8 ~ A 2 c 10 グリッド	- A 2 w 16 ~ A 2 c 18 グリッド
重複	なし	なし
平面形式	桁行北側1060cm(35尺) 南側1036cm(34.2尺) 梁間東側515cm(17尺) 西側484cm(16尺) 面積56.1m ² (17坪) 柱穴14個(柱根7個)	桁行北側1060cm(35尺) 南側1030cm(34尺) 梁間東側424cm(14尺) 西側378cm(12.5尺) 面積39.5m ² (12坪) 柱穴14個(柱根なし)
方位	梁間N = 2° - W	梁間N = 5° - W
柱間	基準寸法212cm(7尺)	基準寸法212cm(7尺)
出土遺物	なし	弥生土器片17点
年代	近世	近世

<溝跡> R G006溝跡を1条検出した。- A 1 b 23・A 1 n 25・A 2 d 3 グリッドに位置する。攪乱と削平を受けていて残存する長さは34mである。幅は20~80cm、深さは1~6cmでやや西に下降する。土圧によりかなり硬く締まっている。時期は不明である。

<土坑> R D018はB 3 x 21グリッドに位置する。壁は直角気味に立ちあがる。中端を持ち投石が密集する箇所がある。遺物はないが埋土から時期は近世である。R D019はB 4 t 6に位置する。規模は開口部径55×150cm、底部径30×115cm、深さ40cm、形状から墓壙と思われる。遺物がなく時期は不明である。

<遺物>弥生時代後期赤穴式土器片がR B 003の柱穴から絶数で19点出土した。そのうち1~5を実測掲載した。流れ込みによる遺物混入と思われる。6は弥生時代中期の深鉢で黒ボク土IV層上位面からの出土である。また、その周辺からは土師器片が24点出土した。7は大塚相馬産の碗である。

5.まとめ

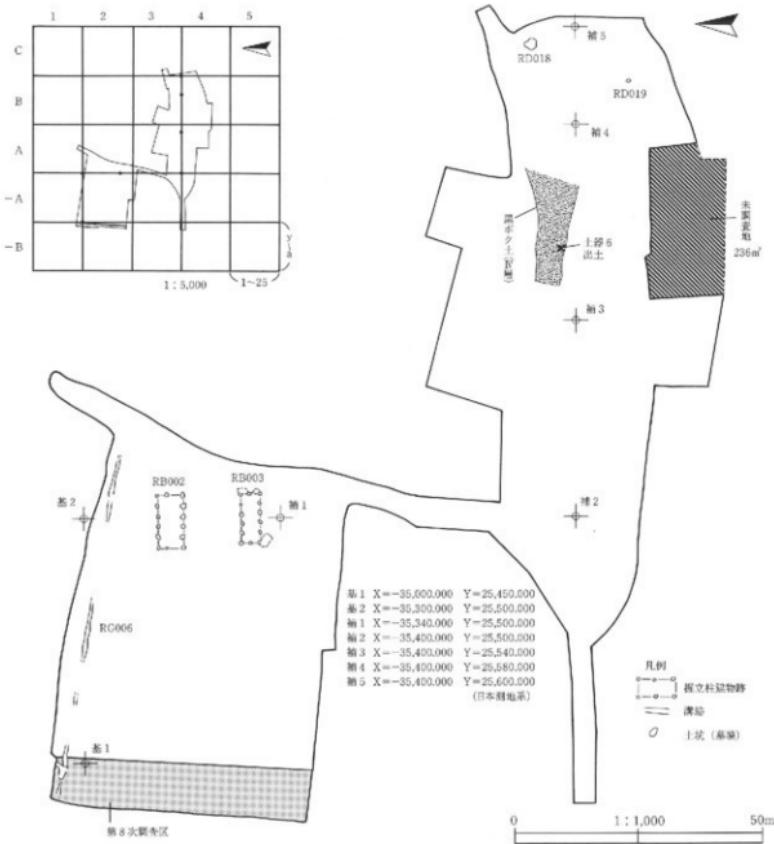
本調査区は低位段丘の中でもやや高い所に位置し、遺構密度が極めて薄いエリアである。本調査では古代の遺構は認められなかった。R B 003の柱穴から弥生時代後期の赤穴式土器片が19点出土しているが、周辺より混入したものと思われる。掘立柱建物跡は基本寸法7尺によって建てられている。

なお、稲荷遺跡第9次調査に關わる報告は、これをもって立てとする。

報 告 書 抄 錄

ふりがな	へいせいじゅうろくねんどはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成16年度発掘調査報告書						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第469集						
著者名	小松樹也						
編集機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯田11-185 TEL (019) 638-9001・9002						
発行年月日	西暦2005年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ...	調査期間	調査面積	調査原因
稲荷遺跡 第9次調査	岩手県盛岡市本宮 宇摩荷 21-113か	03201	L E 16 -2131	39度 41分 02秒	141度 07分 35秒	2004.09.01 ~ 2004.11.01	盛岡新都市土地 区画整理事業に伴 う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	備考事項		
稲荷遺跡 第9次調査	散布地	弥生時代 近世	掘立柱建物跡	弥生土器片 (赤穴式)			

北緯度・経度は世界測地系



第2図 遺構配置図

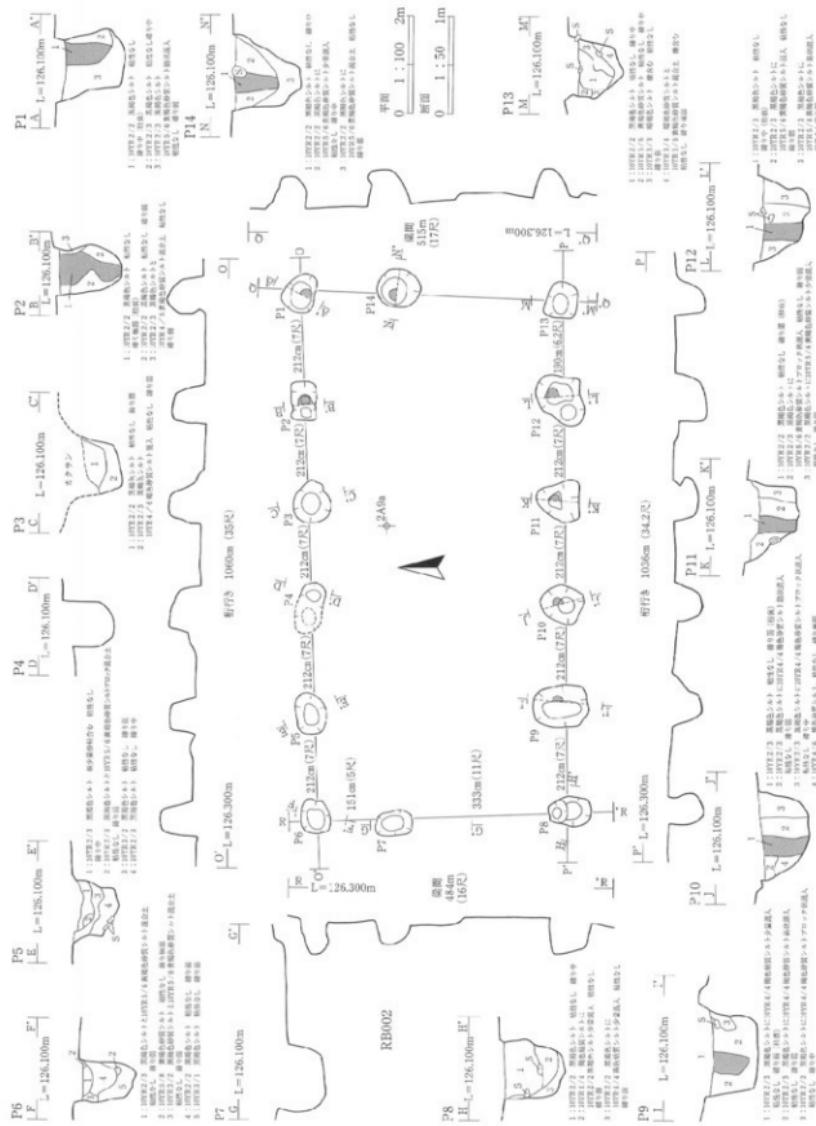
遺物觀察表 土器

番号	四半風点	部位	亞種	部位	部位	寄生	宿主	時期
1	R B035 p 14	1層	侏?	部胚	胚系	他1点	強生代-赤穴式	
2	R B035 p 2	1層	侏?	周-漸膨	無文-垂垂	他1点	強生代-赤穴式	
3	R B035 p 3	1層	侏?	部胚	胚系	他2点	強生代-赤穴式	
4	R B035 p 4	1層	侏?	部胚	胚系	他1点	強生代-赤穴式	
5	R B035 p 5	1層	侏?	部胚	胚系	他8点	強生代-赤穴式	
6	4 B25 e	單葉	淡侏	口器-部胚	L R 雜生	頭部に比較	強生代-中期	

遺物觀察表 陶器

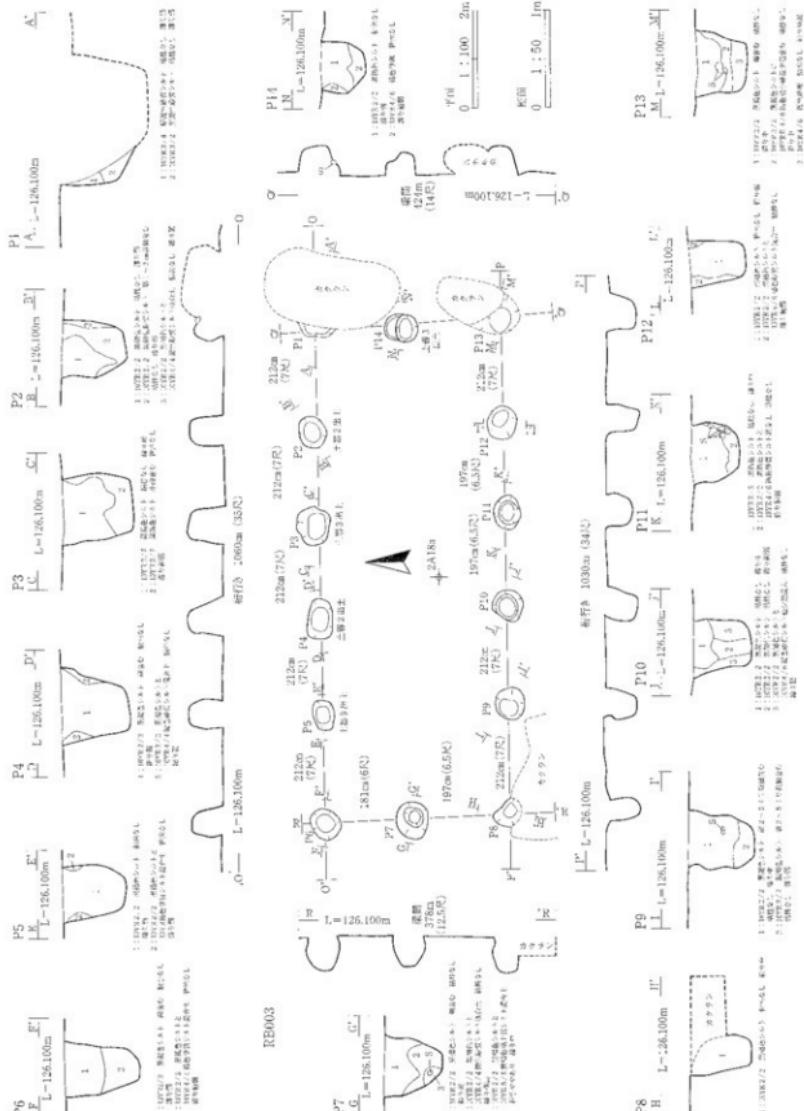
番号	出土位置	種別	器種	口径cm	底径cm	器高cm	粘土	釉色	産地	年代
7	麦塚	陶器	罐	—	(5.0)	—	黄灰土	透明釉	大坂相場	18c

(4) 稲荷遺跡第9次調査



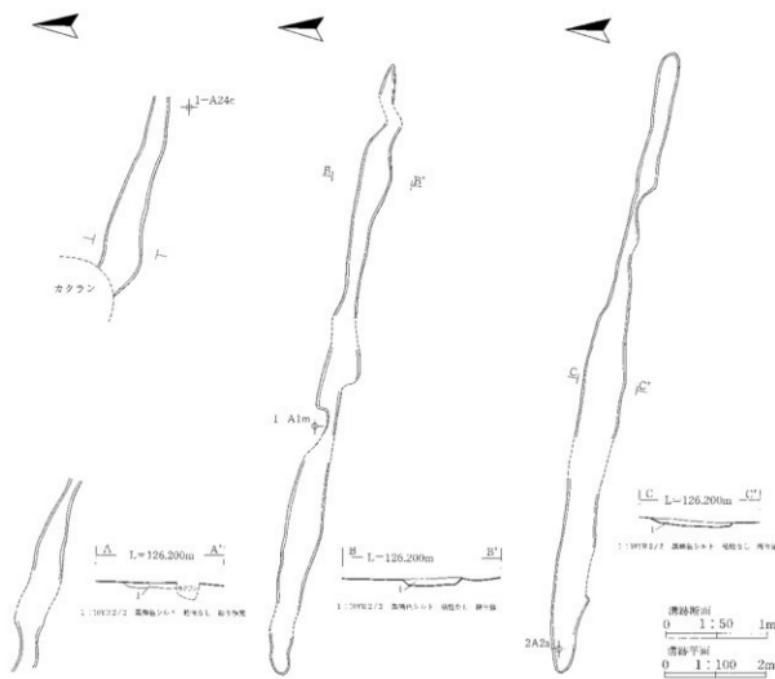
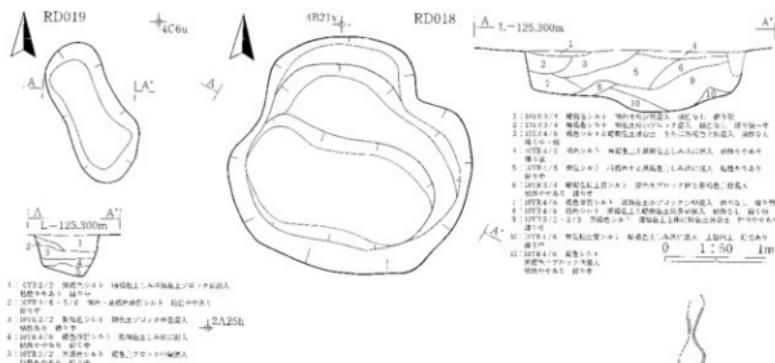
第3図 検出遺構(1)

(4) 植物遺跡第9次調査



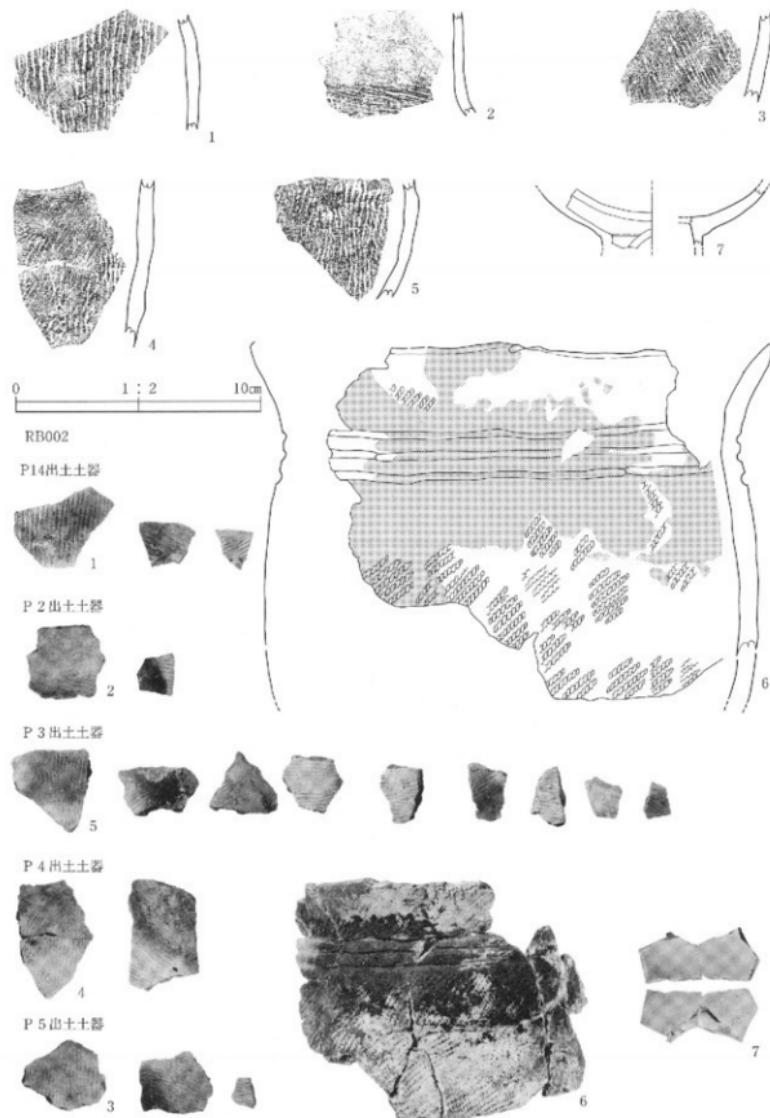
第4図 検出遺構(2)

(4) 植物遺跡第9次調査



第5図 植物遺跡(3)

(4) 稲荷遺跡第9次調査

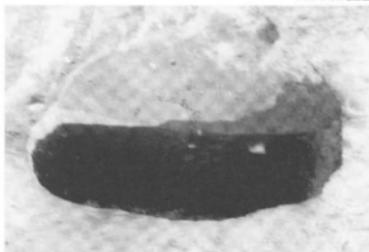


第6図 出土遺物

(4) 稲荷遺跡第9次調査



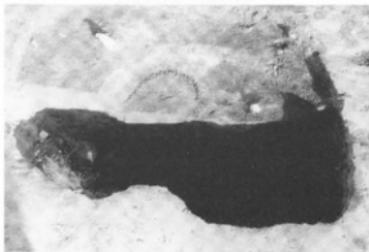
RB002掘立柱建物跡平面



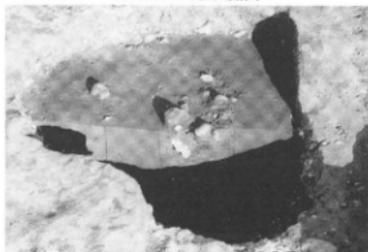
RB002P9柱穴断面



RB002P10柱穴断面



RB002P11柱穴断面

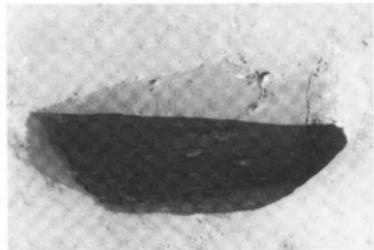


RB002P12柱穴断面

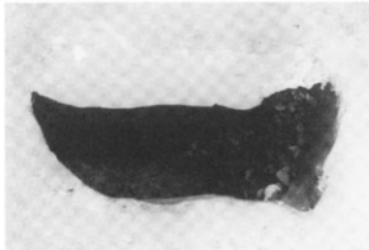
写真図版1 検出遺構(1)



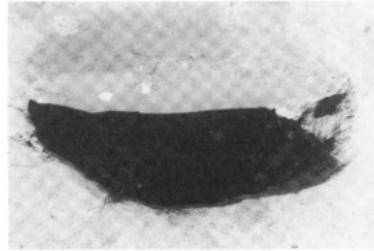
RB003掘立柱建物跡平面



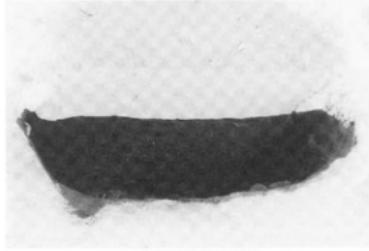
RB003P 2柱穴断面



RB003P 3柱穴断面



RB003P 4柱穴断面



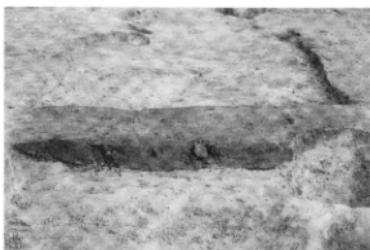
RB002P 5柱穴断面

写真図版2 検出遺構(2)

(4) 福荷遺跡第9次調査



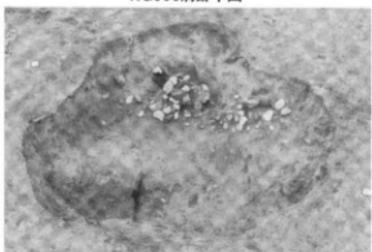
RG006溝跡平面



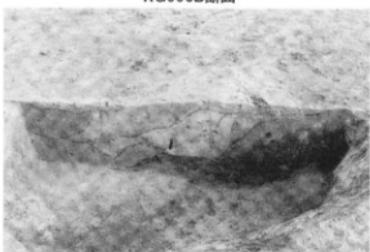
RG006A断面



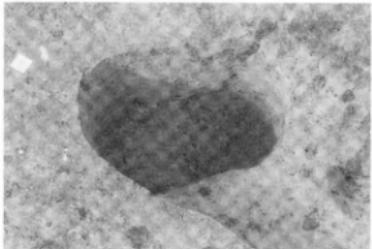
RG006B断面



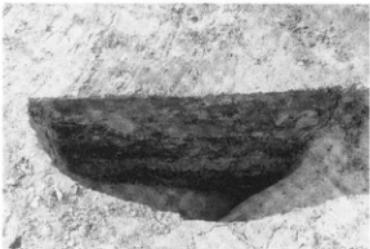
RD018土坑平面



RD018土坑断面



RD019墓壙平面



RD019墓壙断面

写真図版3 検出遺構(3)

(5) 台太郎遺跡第53次調査

所 在 地 盛岡市向中野37-3ほか
委 託 者 独立行政法人都市再生機構
岩手都市開発事務所
事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業

発掘調査期間 平成16年5月6日～6月2日
遺跡番号・略号 L E 16-2269・O D T -04-53
発掘調査面積 当初：240m² 実績：240m²
調査担当者 小松剛也

1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。台太郎遺跡は、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成16年度の事業とすることで確定し、発掘調査に至った。

2. 遺跡の立地

台太郎遺跡はJR東北本線仙北町駅の南西約900mに位置し、半石川南側河岸段丘面の微高地上に立地している。標高は122m前後で概ね全体は平坦な地形である。今次調査区は平行して調査が行われた54次調査区と接する。調査前の状況は道路及び工場である。

3. 基本土層

I層	10Y R 2 / 2	黒褐色土 粘性弱 繊り中（現表土）
II層	10Y R 2 / 2	黒褐色シルト 粘性弱 繊り強（漸移層）
III層	10Y R 4 / 4	褐色シルト 粘性弱 繊り密（ローム層）
IV層	10Y R 4 / 6	褐色砂礫 粘性なし 繊り弱（段丘基盤層）

4. 調査の概要

工場の跡地であり広範囲に削平と攪乱が及んでいたためII層上面で検出を行った。溝跡5条と土坑1基を検出した。遺物は須恵器片1点と陶器片3点である。

＜溝跡＞RG489は今年度の54次調査区、過年度の調査51次調査区に続く溝である。規模は開口部最大幅80cm、深さは最大で22cm、長さ19.5m、北西～南東に向き緩やかに下降する。RG503は54次調査の大溝に切られる。規模は長さが4mと短く深さも10cmと浅い。RG504は長さ1.2mを残すだけ他は削平されて無い。RG505は長さ21mを測るがRG489と54次調査の大溝に切られる。深さは10cmと浅く所々で削平を受け寸断している。RG506は円形を呈する。深さは5～7cmと浅い。いずれも古代の溝と推測されるが遺物がなく時期は不明である。

＜土坑＞RG1185の北壁は直角気味に立ち上がる。開口部径110×150cm、底部径70×130cm、深さ32cmを測る。底面は凹凸しているが壁や埋土の様相から土坑とした。時期は不明である。

＜遺物＞すべて現表土からの出土である。2は肥前の碗、3は大堀相馬のいわゆる腰び茶碗、4は瀬戸美濃の碗である。二次的な働きにより混入したものと思われる。



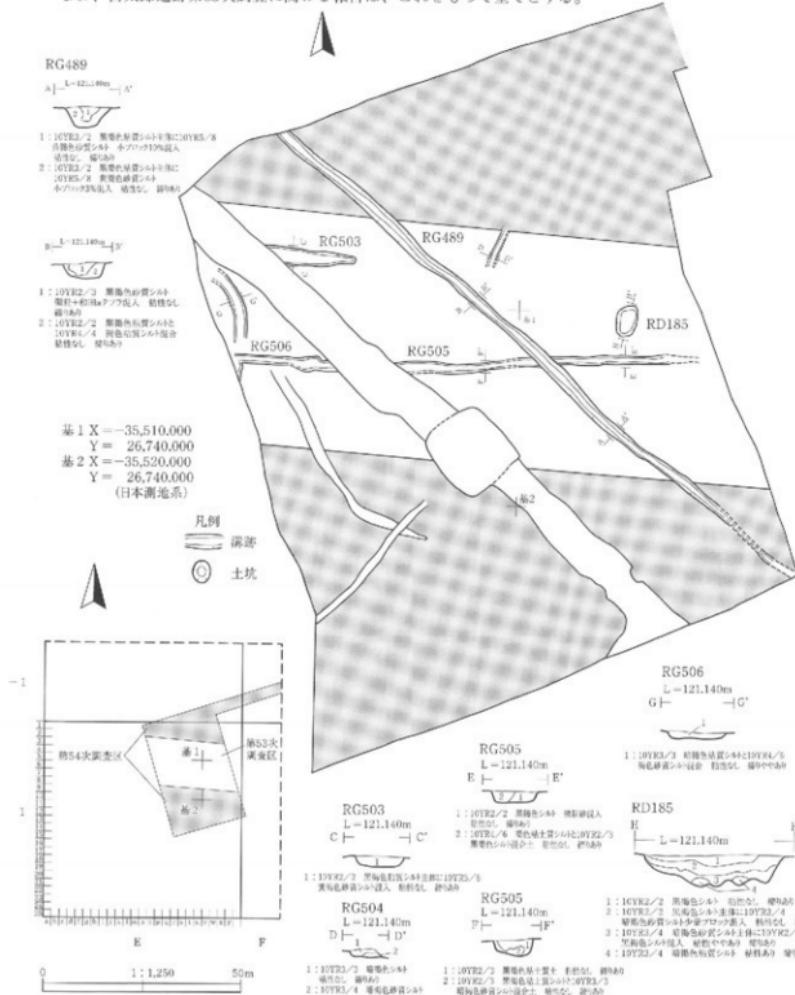
第1図 遺跡の位置

1:25,000 盛岡

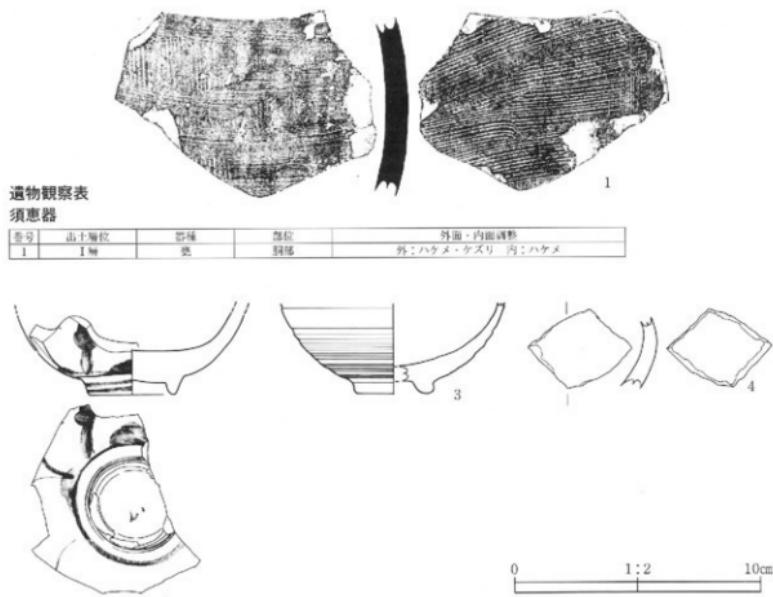
5. まとめ

本次調査では堅穴住居跡を検出することはできなかったが、隣接する54次、51次・15次調査においては数基の奈良時代の堅穴住居跡を確認している。各調査区の標高は120m前後であり、面的な広がりから隣接するエリアは同じ集落ではあると考えられる。

なお、白太郎遺跡第53次調査に關わる報告は、これをもって全てとする。



第1圖 遺構配置及び検出遺構



陶磁器

番号	出土位置	種別	部位	口径cm	底径cm	器高cm	胎土	釉薬物	産地	年代
2	表探	壺	腹	—	(3.7)	—	灰白色	透明釉	肥前	18c
3	表探	壺	腹	—	3.2	(3.8)	灰色	淡褐色	大船相場	18c
4	表探	壺	腹	—	—	—	青褐色	灰釉	鹿児島県	18c

第2図 出土遺物

報告書抄録

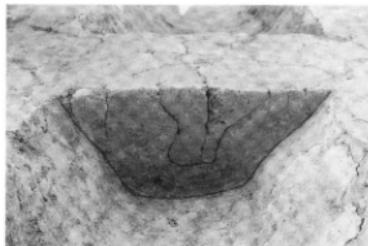
ふりがな	へいせいじゅうろくねんどはくつちょうきはうこくしょ						
書名	平成16年度発掘調査報告書						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第469集						
著者名	小松耕也						
調査機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下板岡11-185 TEL (019) 638-9001-9002						
発行年月日	西暦2005年3月25日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
台太郎遺跡 第53次調査	岩手県盛岡市向 中野37-3ほか	L E 16 -2269	39度 40分 56秒	141度 08分 28秒	2004.05.06 ~ 2004.06.02	240m ²	盛岡南新都市土地 区画整理事業に伴 う緊急発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
台太郎遺跡 第53次調査	集落跡	古代	溝跡5条 土坑1基	陶磁器			

※緯度・経度は世界測地系

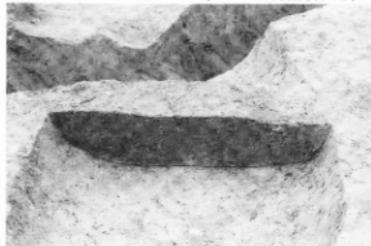
〔5〕台太郎遺跡第53次調査



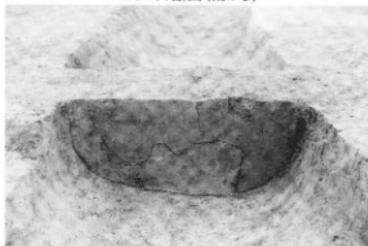
RG489-499-500-501-502, RD1185完掘(北から)



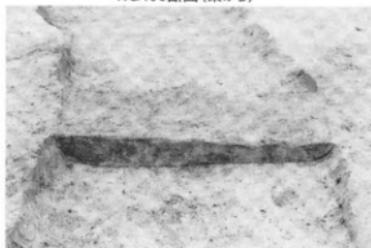
RG489断面(南から)



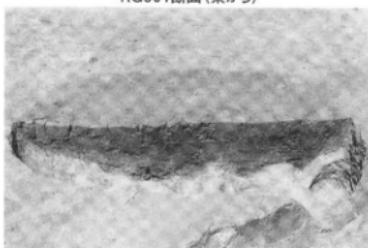
RG499断面(東から)



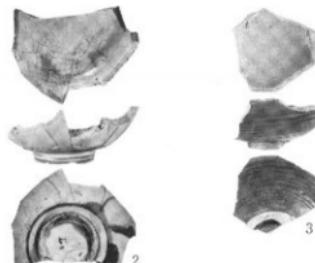
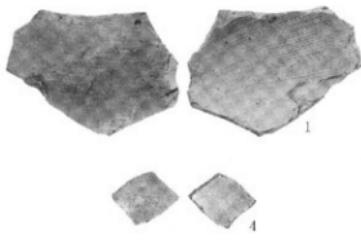
RG501断面(東から)



RG502断面(東から)



RD1185断面(東から)



写真図版1 検出構造及び検出遺物

(6) やもり 矢盛遺跡第5次調査

所 在 地	岩手県盛岡市飯岡新田2地割15ほか	発掘調査期間	平成16年5月6日～5月18日
委 託 者	独立行政法人都市再生機構 岩手都市開発事務所	遺跡番号・略号	L E 26-0139・I YM-04-05
事 業 名	盛岡南新都市土地区画整理事業	発掘調査面積	当初：180m ² 実績：180m ²
		調査担当者	早坂 淳

1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市を目指して、現在の既成市街地のはかに南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた輪状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。

この事業は、平成2年9月に岩手県・盛岡市・旧都南村の三者が、地域振興整備公団（当時・現都市再生機構）に対して事業申請を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成3年度から平成17年度までの15年間を事業予定期間とし、面積313haを対象とした土地区画整理事業が実施されることになった。

矢盛遺跡第5次調査については、岩手県教育委員会と独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所とが協議した結果、平成16年度の事業として確定した。これを受けて、平成16年4月1日に財團法人岩手県文化振興事業団理事長と独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所長との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することになった。矢盛遺跡第5次調査は、平成16年5月6日に開始され、同月18日をもって終了した。

(独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所)



第1図 遺跡の位置

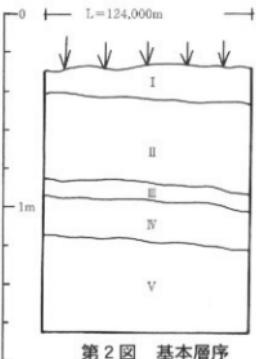
1:25,000 盛岡

2. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR東北本線盛岡駅の南約3kmに位置し、零石川南岸の河岸段丘面上に立地している。標高は122m前後で、調査前の土地利用状況は休耕田・住宅地を埋め立てたゲートボール場および公共用地となっていた。本調査区の東側は1~1.5m程度の盛土が施されているが、これは20数年前まで存在した旧都南村(現盛岡市)村営住宅の基礎および廃材等を含む埋め立てによるものである。大小の雜物が大量に含まれ、さらには検出面より深く埋められているものもあり、調査には困難を極めた。なお、本遺跡の北東側には、同様に継続して調査が行われている飯岡才川・細谷地両遺跡が近接している。

3. 基本土層

- I. 10YR 2/3 黒褐色土 表土層
- II. 10YR 2/2 黒褐色土 粘性中 しまり中~強
- III. 10YR 3/4 暗褐色土 粘性中~強 しまり中~強
- IV. 10YR 6/6 明黄褐色粘土質土 粘性有 しまり中~強
- V. 10YR 4/4 褐色砂質シルト 粘性中 しまり中~強



第2図 基本層序



第3図 遺構周辺の地形と調査区の位置

4. 調査の概要

本次調査区は、第6次調査区（盛岡市分:3,386m²）に北東及び南西から挟まれるように位置しており、両次の調査を並行して実施した。本調査では、陥し穴状遺構3基、土坑3基、溝跡2条、柱穴状小土坑1基が検出された。また、遺物は、土器底部破片1点が出土した。なお、遺構名は、盛岡市教育委員会の要請により、第1次調査からの通し番号で設定している。

(1) 遺構

＜陥し穴状遺構＞調査区北側に長軸方向が北西及び北北西の3基の陥し穴状遺構がほぼ横並びの状態で検出された。横断面は切り立ったV字またはU字状を呈し、遺構の内部は開口部から底部に向かって長軸方向に底または中端下が開口部より広がるフラスコの形態を呈しており、短軸方向は極端に狭いものが多い。埋土の観察から、いずれも周囲の土が降雨その他によって自然に流入して堆積し埋まつたものと考えられる。遺物は出土していないが、平面形や断面の形態から、縄文時代の陥し穴の跡であると考えられる。

第1表 遺構観察表【陥し穴状遺構】

遺構	位置	開口部の形態	主軸または長径の方向	開口部の規模(cm) 長径	深さ(cm)	重複及び新旧関係	遺物・時期・その他の
R D038	3A25 t	溝状	N-49°-W	390	30	66 なし	なし
R D040	3A24 u	溝状	N-24°-W	346	30	104 なし	なし
R D059	3A21 v	溝状	N-28°-W	363	34	89 R G005に切られおり、R G005より古い。	なし

＜土坑＞数基の土坑が西側の6次調査区との境界線にまたがって検出されたため、境界線で分けられた土坑平面の面積比を勘案して両調査区に振り分け登録した。（遺構配置図参照）いずれも、どのような性格のものであったかは不明である。R D036は埋土の状況から人為的に埋め戻されたものと考えられ、埋土上位から出土した土器底部破片もその際に埋土とともに流入したものと考えられる。

第2表 遺構観察表【土坑】

遺構	位置	開口部の形態	主軸または長径の方向	開口部の規模(cm) 長径	深さ(cm)	重複及び新旧関係	遺物・時期・その他の
R D036	4A5 t	楕円形	N-11°-W	410	280	28.6 第6次調査区の陥し穴状遺構R D074の南東側を切っており、R D074より新しい。	埋土上部より土器底部破片1点
R D43	4△3 t	楕円	N-26°-W	101	46	37.1 なし	遺物なし
R D44	4A4 t	楕円	N-26°-W	100	40	35.9 なし	遺物なし

＜溝跡＞2条の溝跡が3基の陥し穴状遺構を南北から挟み込む様に検出された。現況が休耕田であったことから、耕作時に形成された可能性も考えられる。

第3表 遺構観察表【溝跡】

遺構	位置	開口部の形態	主軸または長径の方向	開口部の規模(cm) 長径	深さ(cm)	重複及び新旧関係	遺物・時期・その他の
R G005	3A25 u	直線状	N-62°-W	700	30	18 陥し穴状遺構R D039の南先端部を切っており、R D039より新しい。	縄文時代以前
R G006	3A23 u	弧状	-	584	28	8 なし	縄文時代以前

＜柱穴状小土坑＞1土坑基が検出された。周囲の状況から、独立した杭の跡とも考えられる。

第4表 遺構観察表【柱穴状小土坑】

遺構	位置	開口部の形態	主軸または長径の方向	開口部の規模(cm) 長径	深さ(cm)	重複及び新旧関係	遺物・時期・その他の
PP014	3A25 b	円形	-	20	20	14 なし	時期不明

(2) 遺物

＜土器＞R D036埋土上位で底部破片が1点だけ出土した。形状から壺の体部下端の破片と考えられる。底径は12cm程度と推定される。灰黄色の胎土は緻密であるが、粒径1mm前後の丸い砂粒をやや多く含み軟質で

(6) 矢盛遺跡第5次調査

ある。外面には、ナデの痕が一部に見られる。内面には、ハケの押圧痕が二筋明瞭に認められる。奈良又は平安時代の遺物と考えられる。

5.まとめ

本調査区で検出された陥し穴状遺構の位置は、第6次調査区の陥し穴状遺構群と関連性が見られる。第3次・4次調査の結果から、縄文時代の矢盛遺跡一帯が旧河道に沿って設けられた狩猟場であったと推定されており、本次調査の結果はそれをさらに裏付けるものである。

本調査区内では住居遺構は検出されなかつたが、第3次調査区では近世のものと考えられる掘立柱建物跡が検出されている。また、南西に近接する第1次調査区では、平安時代のものと推定される竪穴住居跡が検出されている。これらのことから、縄文時代以降、本遺跡一帯が人間の生活と深い関わりをもち続けてきたことは明らかである。

なお、矢盛遺跡第5次調査に関する報告は、これをもって全てとする。

<引用・参考文献>

瀬川司男 1981 「陥し穴状遺構について」（財）岩手県埋蔵文化財センター『紀要』Ⅰ

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

1994 「矢盛遺跡第1次発掘調査報告書」

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第205集（以下、第集と略す）

2003 「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成14年度）」第423集

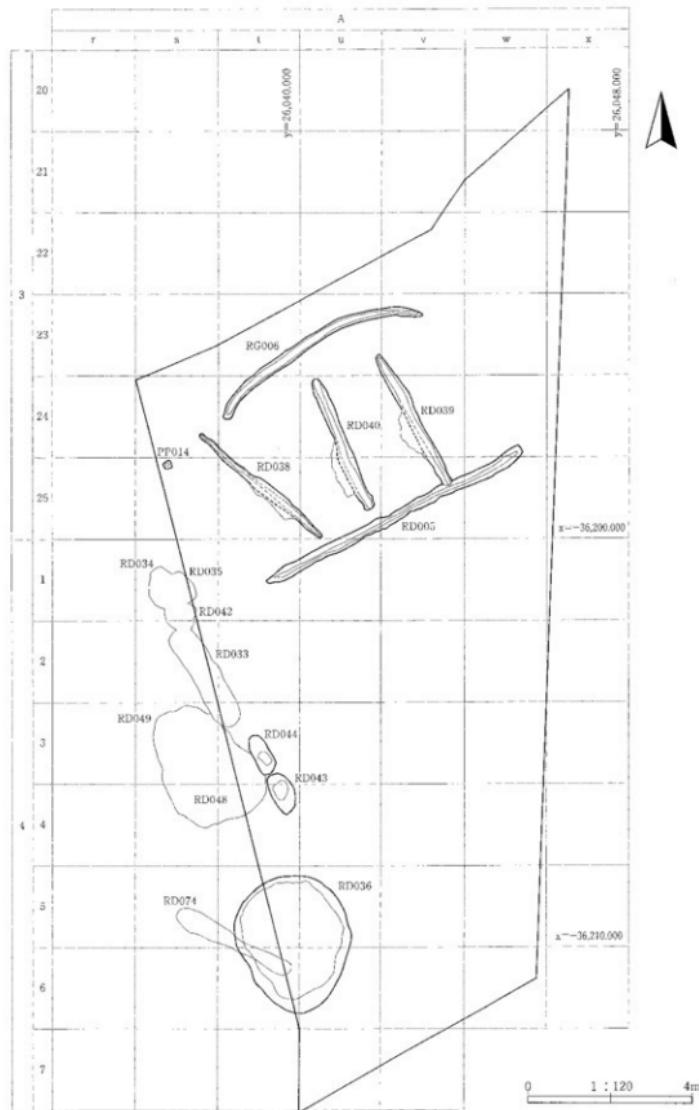
2003 「矢盛遺跡第3次・熊堂B遺跡第14次発掘調査報告書」第451集

報 告 書 抄 錄

ふりがな	へいせいじゅうろくねんどはくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成16年度発掘調査報告書							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第469集							
編著者名	早坂淳							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001・9002							
発行年月日	西暦2005年3月25日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °.′.″	東経 °.′.″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
矢盛遺跡 第5次調査	岩手県盛岡市 飯岡新田第2 地割15番地ほか	03201 LE26 -0139 35秒	39度 40分 08秒	141度 08分 00秒	2004.05.06 ~ 2005.05.18	180m ²	盛岡南新都市土地 区画整理事業に伴 う緊急発掘調査	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
矢盛遺跡 第5次調査	散布地 狩猟場	縄文 古代 時期不明	陥し穴状遺構 3基 土坑 3基 溝跡 2条 柱穴状小土坑 1個	土器片 1点	旧河道に添って陥し穴状遺構が 点在する縄文時代の狩猟場であ る。隣接地を6次調査として同 時調査。			

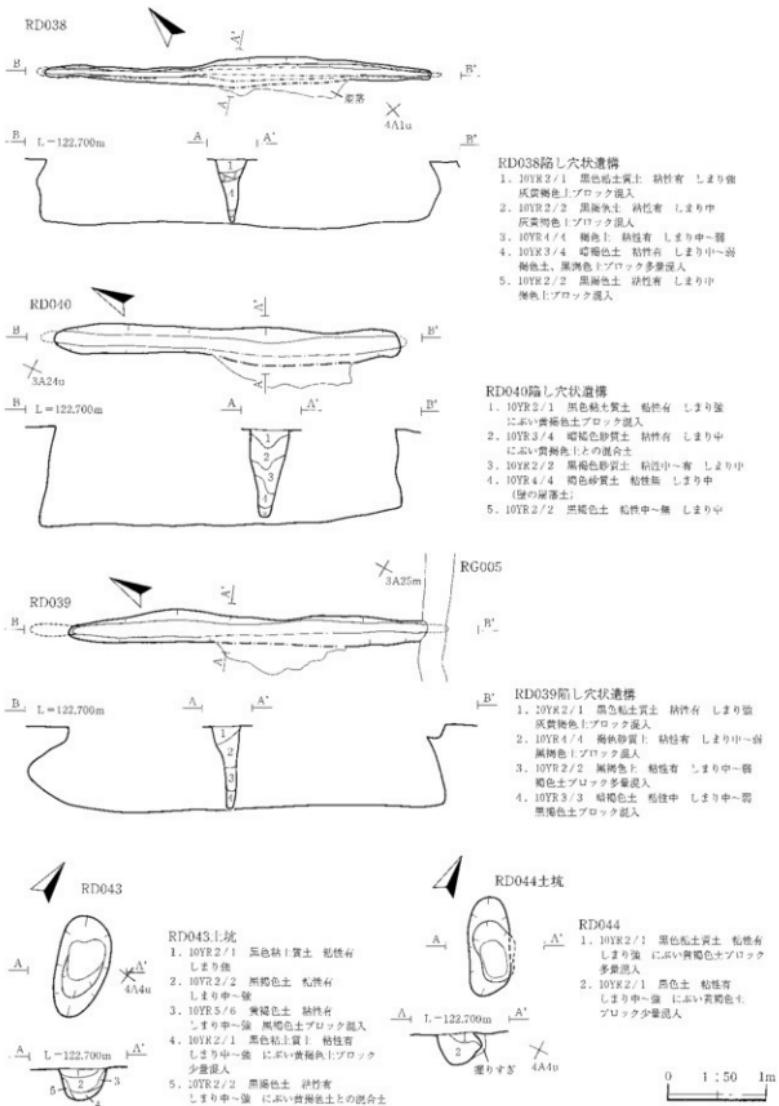
※緯度・経度は世界測地系

(6) 矢森遺跡第5次調査



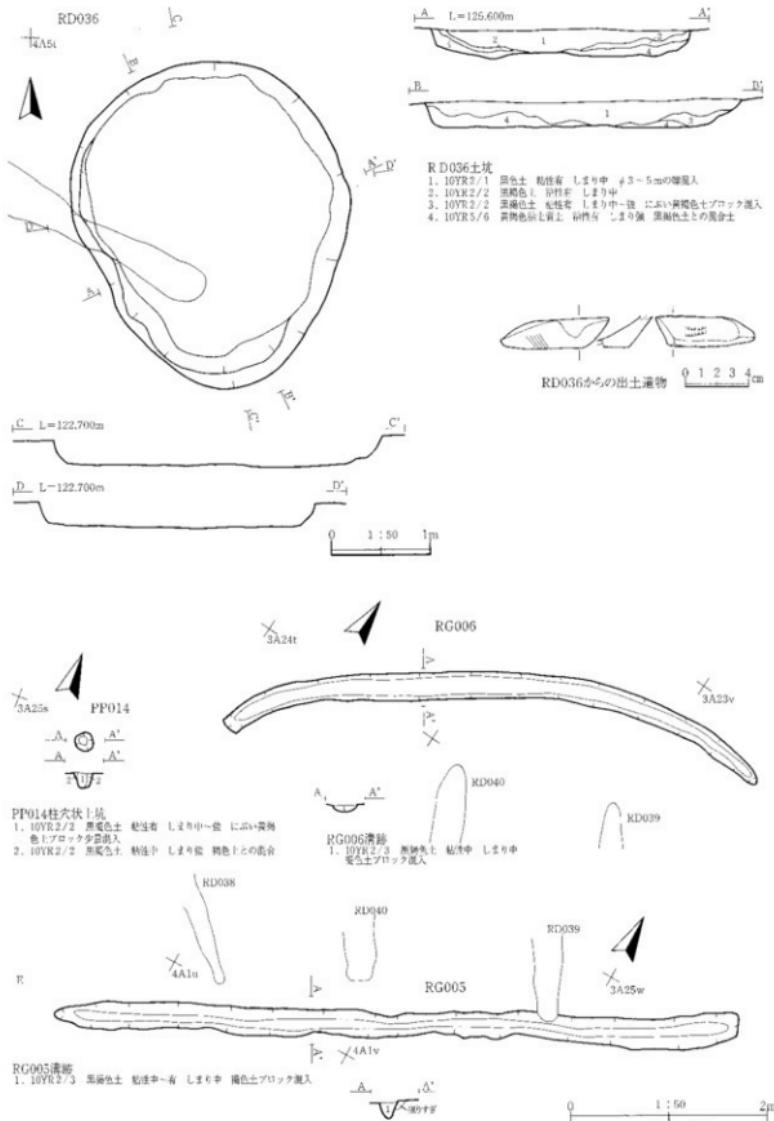
第4図 遺構配置図

(6) 久盛造跡第5次調査



第5図 陥し穴状遺構、土坑(1)

(6) 矢森遺跡第5次調査



第6図 土坑(2)、溝跡、柱穴状小土坑、遺物

(6) 欠盛遺跡第5次調査



現況 (N→)



陷し穴状遺構 平面 (S→) 左から RD038・040・039

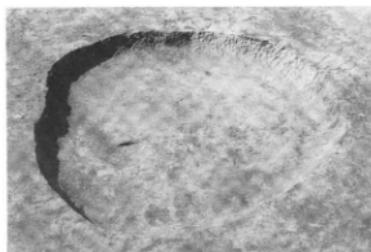


RD038 断面 (S→)

RD040 断面 (S→)

RD39 断面 (S→)

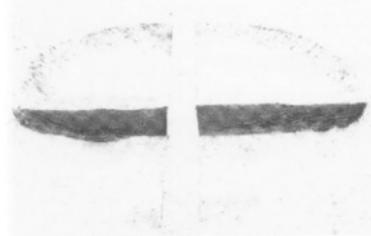
写真図版 1 現況、陷し穴状遺構



RD036 土坑 平面(S→)



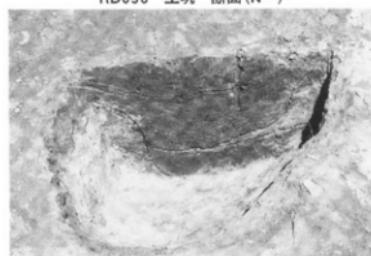
RD036 土坑 出土遺物



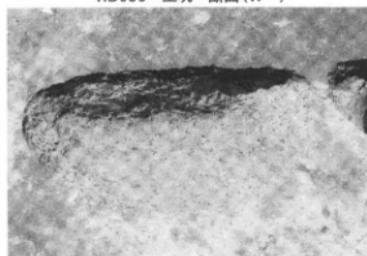
RD036 土坑 断面(N→)



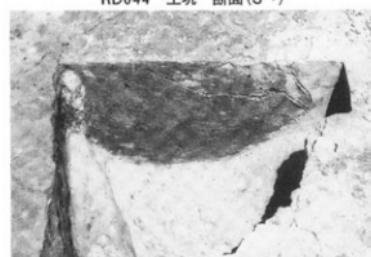
RD036 土坑 断面(W→)



RD044 土坑 断面(S→)



RD044 土坑 平面(W→)



RD043 土坑 断面(S→)



RD043 土坑 平面(W→)

写真図版2 土坑、出土遺物



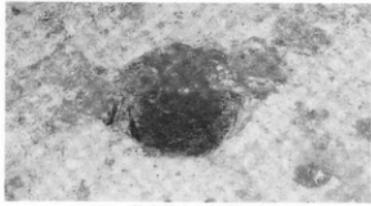
溝跡 平面(E→) RG005(左)・RG006(右)



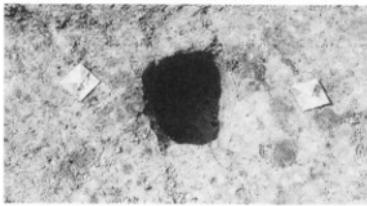
RG005 溝跡断面(W→)



RG006 溝跡断面(W→)



PP014 柱穴状小土坑断面(SE→)



PP014 柱穴状小土坑平面(SE→)

写真図版3 溝跡、柱穴状小土坑

(7) 宿・蛇艇組遺跡

所 在 地 稚貫郡石鳥谷町八重畑26地割
42ほか、字五大堂地内
委 託 者 花巻地方振興局農林部農村整備室
事 業 名 経営体育成基盤整備事業八重畑地区
発掘調査期間 平成16年4月8日～5月20日

遺跡番号・略号 宿 ME17-0111・SK-04
蛇艇組 ME17-1046・J NM-04
発掘調査面積 宿 当初：600m² 実績：600m²
蛇艇組 当初：300m² 実績：300m²
調査担当者 村田淳 北田熟

1. 調査に至る経緯

宿・蛇艇組遺跡は、ほ場整備事業（担い手育成区画整理型）八重畑地区の実施に伴い、その事業区域に存することから発掘調査を実施することになったものである。

本事業は、石鳥谷町南東部に位置し平成9年度より進められている、区画整理面積369haを行う事業であり、大事業1haを造成し大型機械による低コスト農業を目指すことはもとより、農地流動化を図り担い手農家を育成し、地域全体として高生産性農業と安定経営を目的としている。（花巻地方振興局農林部農村整備室）



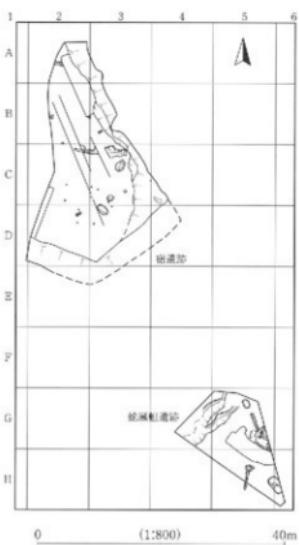
第1図 遺跡の位置 1:50,000 土沢
(Aが宿遺跡、Bが蛇艇組遺跡)



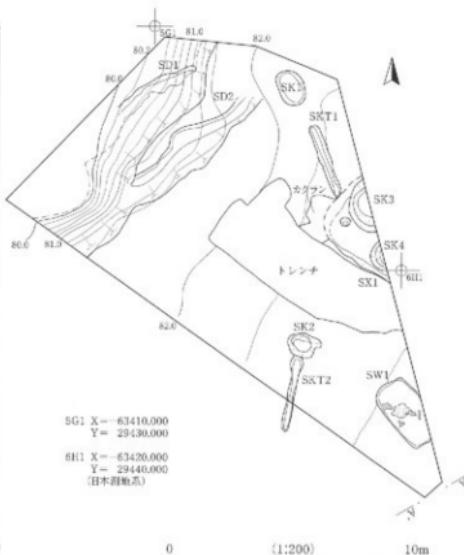
第2図 宿・蛇艇組遺跡調査区位置図 (S = 1/2000)

(7) 宿・蛇鰐組遺跡

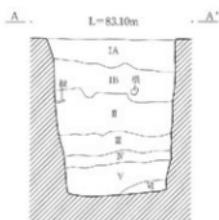
全体図



蛇鰐組遺跡遺構配置図



蛇鰐組遺跡基本層序

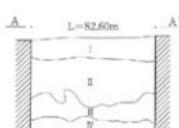


蛇鰐組遺跡基本層序

- IA. 10YR 2/2 黒褐色 粘性やや弱 しまりやや強 植根多し
- IB. 10YR 2/1 黒色 粘性やや弱～中 しまりやや強 植根多し
　　凹凸土層
- IC. 10YR 2/4 にぶい黄褐色 粘土質土 粘性中 しまりやや弱
- ID. 10YR 6/6 明黄褐色 砂質土 粘性やや弱 しまりやや弱
- IE. 10YR 6/8 黄褐色 粘土質土 粘性やや弱 しまりやや弱
- IF. 10YR 6/6 明黄褐色 砂質土 粘性やや弱 しまりやや弱～中
- IG. 10YR 6/8 明黄褐色 砂質土 粘性やや弱 しまりやや弱

0 (1:40) 2m

宿遺跡基本層序



宿遺跡基本層序

- I. 10YR 2/2 黒褐色 粘性やや強 しまり中 黄色土粒 5~10%含む (赤土)
- II. 10YR 2/2 黑褐色 粘性強 しまり密 塵和物はほとんどなし (同上層では土堆砂包帯)
- III. 10YR 3/2 黑褐色 粘性強 しまり密 黄色土粒10~15%含む (地山下部堆積帶)
- IV. 25Y 7/8 黄色 粘性 しまりともに中 形質 硫化物10%含む (30山)

0 (1:40) 2m

第3図 全体図・蛇鰐組遺跡遺構配置図・基本層序

2. 遺跡の位置と立地（第2・3・8図、写真図版1）

宿・蛇鰐船遺跡は群馬郡石鳥谷町の南東部、花巻空港から東方約5kmの位置にある。北上川東岸の河岸段丘縁辺部に立地し、低位段丘（埋没沢）を挟んで西側が宿遺跡、東側が蛇鰐船遺跡となっている。調査区はいずれも急峻な段丘崖に位置しており、標高は両遺跡ともに82m前後、調査前の現況は果樹園・畠地などであった。なお、宿遺跡は平成14年度に当センターによる発掘調査が行われており、陥し穴状遺構・孤立柱建物跡・堀跡などが検出されている（（財）岩手県文化振興事業団2003）。

3. 蛇鰐船遺跡の調査

（1）基本層序（第3図）

上層（表土層）は黒色土、下層は黄色砂質土と粘土の互層となっている。調査区全域で木の根による擾乱が多数認められるが、後世の改変などの影響は少なく、遺存状況はおむね良好である。遺構種認面は第Ⅱ層上面である。なお、遺構外遺物のほとんど（破片数622点・2,024g）は第Ⅰ層から出土している。

（2）検出遺構（第4～7図、写真図版2～4）

蛇鰐船調査では、竪穴遺構1棟・土坑4基・陥し穴状遺構2基・炭窯1基・溝跡2条が検出された。

＜SK 1 竪穴遺構＞調査区中央東側の調査区境、5 G24グリッド付近に位置する。第Ⅱ層上面で黄褐色粘土質土ブロックを含む黒褐色の方形プランとして確認された。遺構の西側が近現代と考えられる擾乱で破壊されていたが、遺存状態は良好である。

土層を確認しながら掘削を行ったところ、約0.1～0.5mの深さで床面に達した。埋土は黒褐色土を中心とする計4層で構成され、各層とも黄褐色土ブロックが散在する。廃絶後の埋土は遺構南側から第5層、続いて南西から第4層、北西から第3層、遺構中央部の窪みに第2層が流入したことが観察される。それぞれの層位には大きな変化はなく一定しているため自然堆積と考えられ、短期間の内に埋没した可能性が高い。

調査区境にあるため全体を把握することは出来ないが、平面形は隅丸方形と考えられる。規模は推定で一辺3.5～4.0mである。床面は南東に向かってやや傾斜しているが、ほぼ平坦である。

床面施設としては西角に柱穴と思われるピット1基を確認した。規模は上端0.39×0.33m・下端0.16×0.12m・深さ0.6mである。また調査区境で後述するSK 3・SK 4土坑2基を検出した。これらの土坑は土層確認から本遺構が埋没する以前に構築されており、本遺構使用時もしくは廃絶後ほぼ連續的な時期に形成されたとみられる。ただし、堆積状況からこの2基の土坑は廃棄時に人為による埋め戻しが行われたと考えられるため、その後に本遺構が構築された可能性もある。

出土遺物には土器部が破片数522点（3,232g、推定最小個体数22個体）、繩文土器が9点（87.5g）、剥片が1点（5.47g）あり、土器部35点と繩文土器5点を掲載した（第12・13図1～40）。非黒色処理土器部がほとんどで、床面中央からは壺（塊）3個体、小皿5個体分の破片が漬れた状態で出土している。

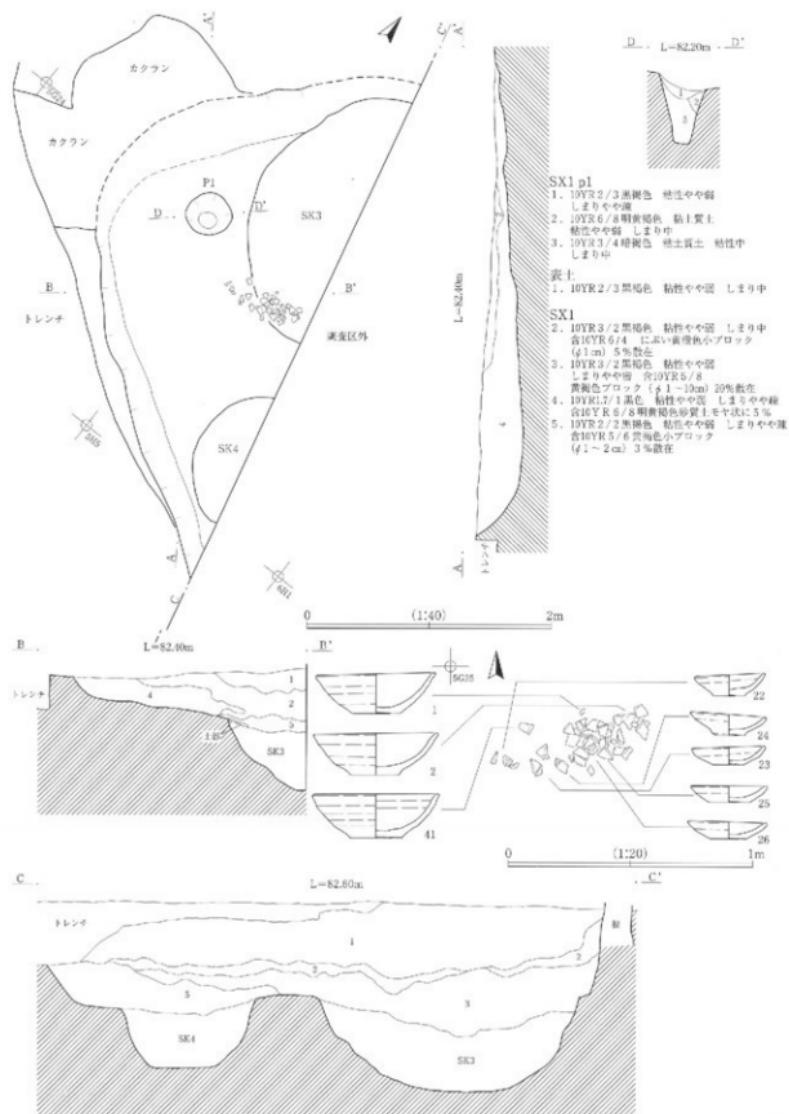
遺構の存続時期は不明であるが、床面直土器の相対年代から平安時代後半と想定される。

＜SK 1・2 土坑＞SK 1は、調査区北側5 H 18グリッド付近に位置する。第Ⅱ層上面で黒色の楕円形プランとして確認された。平面形は楕円形で、上端1.48×1.0m・下端1.27×0.68m・深さ0.5mの規模で底面はほぼ平坦である。埋土は黒色土や黒褐色土を主体とする計5層で構成され、下部は崩落土であろうか褐色～暗褐色である。埋土はレンズ状に堆積している状況が観察されることから、自然堆積と考えられる。

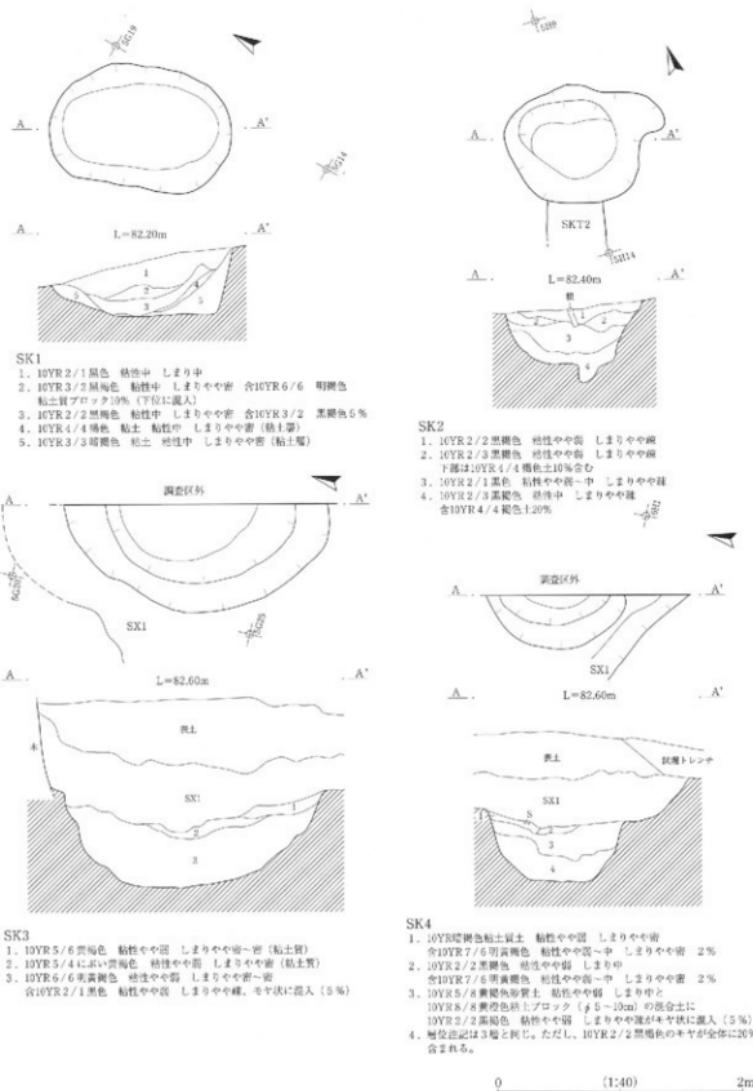
なお、出土遺物が皆無であるため、遺構の性格・存続年代については不明である。

SK 2は、調査区中央南側5 H 9グリッド付近に位置する。第Ⅱ層上面で黒褐色の不整円形プランとして確認された。平面形は不整円形であり、上端1.1×0.98m・下端0.7×0.46m・深さ0.6mの規模で底面は袋形

(7) 宿・蛇蛭蛆遺跡



第4図 蛇蛭蛆遺跡 SX1 竪穴遺構



第5図 蛇鰐虫遺跡 SK 1~4 土坑

(7) 宿・蛇庭類遺跡

である。埋土は黒色土や黒褐色土を主体とする計4層で構成されるが、根痕で荒れており部分的に褐色土が混入する。各層位は平坦に堆積しており、自然堆積と考えられる。

出土遺物は非黒色処理土師器17点(50g)のみで、このうち1点を掲載した(第13図56)。

遺構の存続時期は不明であるが、埋土出土土器の相対年代から平安時代後半と想定される。

＜SK 3・4土坑＞SK 3は、調査区東側の調査区境、5 G20グリッド付近に位置する。SX 1堅穴遺構精査中、床面に黒色土をモヤ状に混入するに似た黄褐色の半円形プランを確認した。

平面形はおそらく円形で、上端2.16×(0.88)m・下端1.12×(0.46)m・深さ0.52mの規模で底面はほぼ平坦である。埋土は黄褐色土主体の計3層で構成され、埋土のほとんどを構成する第3層には黒色土がモヤ状に混入する。埋土の状況から本遺構は廃棄時に人為的な埋め戻しが行われたと考えられるが、重複するSX 1堅穴遺構との直接的な関連は不明である。ただし、本遺構土出土の破片とSX 1床面付近出土の破片が接合関係にあることから(第13図41・42・43)、SX 1堅穴遺構とほぼ同時期もしくは本遺構廃棄後の近い時期にSX 1が構築された可能性も考えられる。なお、第3層に含まれる黄褐色粘土塊については土器製作に使用した可能性を考慮して胎土分析を実施したが、出土土器との関係性を見出すには至らなかった(附編参照)。

出土遺物には非黒色処理土師器47点(505g、推定最小個体数2個体)と縄文土器1点(2.8g)があり、このうち上師器10点を掲載した(第13図41~50)。

SK 4は、調査区東側の調査区境、5 G25グリッド付近に位置する。SX 1堅穴遺構精査中、床面に黒褐色土をモヤ状に混入する黄褐色の半円形プランを確認した。

平面形はおそらく円形で、上端1.12×(0.44)m・下端0.52×(0.1)m・深さ0.48mの規模で底面はほぼ平坦である。埋土は計4層で構成され、第3・4層には黒褐色土をモヤ状に混入する(下部に多い)。埋土の状況から本遺構はSK 3土坑と同じく廃棄時に人為的な埋め戻しが行われたと考えられるが、SX 1堅穴遺構との直接的な関連は不明である。また、本遺構埋土出土の破片とSX 1床面付近出土の破片が接合関係にあることから(第13図51・52)、形成時期や性格についてはSK 3と同様のものであったと考えられる。

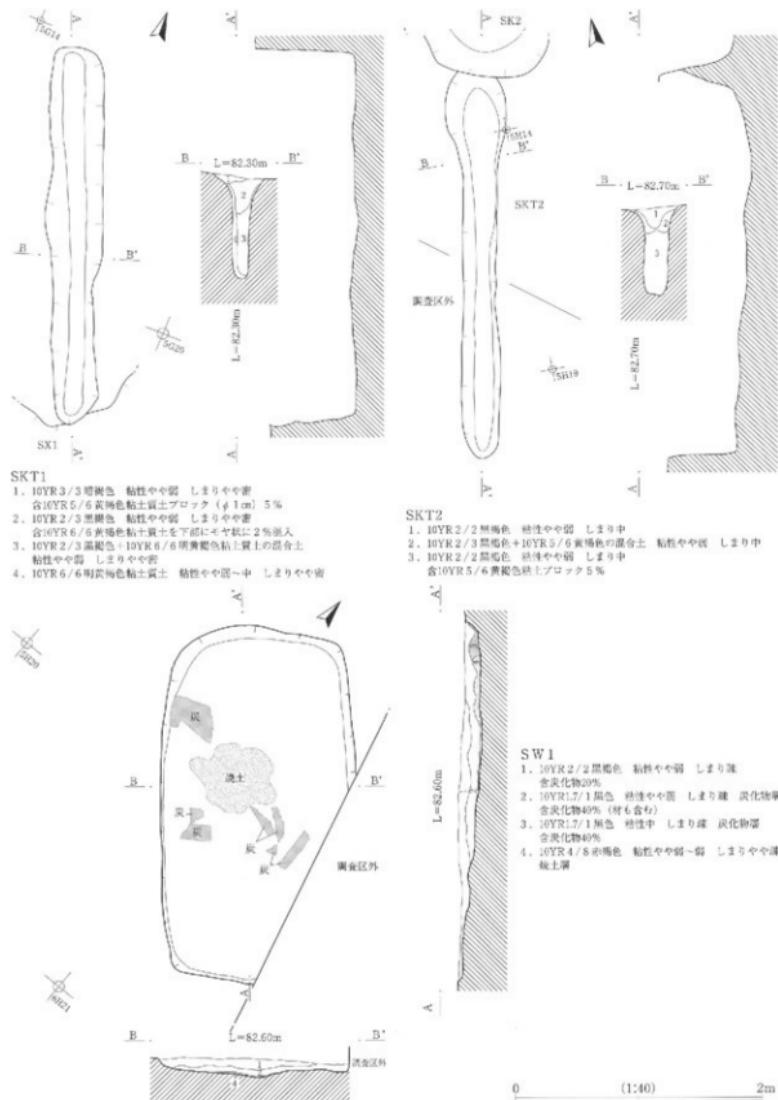
出土遺物は非黒色処理土師器17点(150g、推定最小個体数2個体)のみで、このうち5点を掲載した(第13図51~55)。

＜SK T 1・2陥し穴状遺構＞SK T 1は調査区中央東側、5 G14グリッド付近に位置する。第II層上面で溝形の黒褐色プランとして確認された。平面形は溝形、断面形はU字形であり、上端3.09×0.48m・下端2.98×0.15m・深さ0.84mの規模で底面はほぼ平坦である。遺構埋土は黒褐色土主体の計4層で構成され、流入状況から自然堆積と考えられる。このうち第4層明黄褐色粘土質土は崩落層と考えられる。

SK T 2は調査区南西側の調査区境、5 H13グリッド付近に位置する。第II層上面で溝形の黒褐色プランとして確認された。調査区が北上川沿いの断崖上に位置しているため危険防止のため調査区を内側に設定していたが、この部分に限って調査区外側の精査を行った。平面形は溝形、断面形はU字形であり、北端をSK 2に切られているが、上端(3.25)×0.32m・下端2.98×0.16m・深さ0.73mの規模で底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色土主体の計3層で構成され、流入状況から自然堆積と考えられる。

なお、両遺構とも出土遺物がないため明確な存続時期については不明である。ただし、遺構形態を考慮すると縄文時代に属するものと想定される。

＜SW 1炭窯＞調査区南東側の調査区境、6 H16グリッド付近に位置する。第II層上面で隅丸長方形の炭化物を多量に含む黒褐色プランとして確認された。



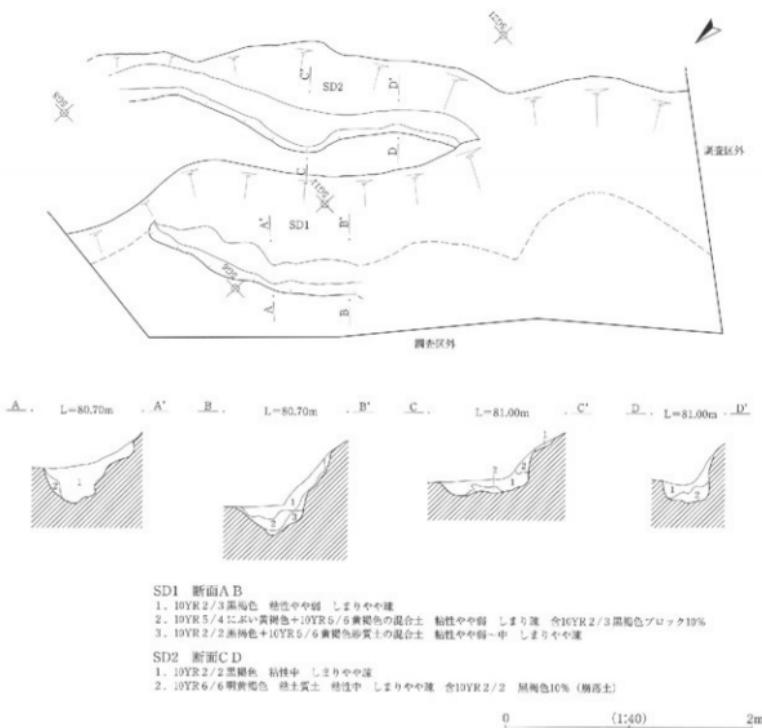
第6図 蛇蟻の遺跡SKT1、2陥し穴状遺構・SW1炭窯

(7) 宿・蛇鰐組遺跡

平面形は隅丸長方形、断面形は皿形であり、上端 $2.93 \times 1.58\text{m}$ ・下端 $2.79 \times 1.49\text{m}$ ・深さ 0.14m の規模で底面はほぼ平坦、底面の一部は火熱の影響から赤褐色を成している。埋土は計4層で構成され、第1～3層は使用時から廃棄以後における流入土である。第4層は使用時における影響層であり、赤褐色焼土化している。出土遺物は皆無であり、遺構の存続時期は不明である。

<SD 1・2溝跡>調査区北西側の傾斜部分、5G6・5G11グリッド付近に位置する。第II層上面で北東から南西に向かって走る2条の溝形の黒褐色プランとして確認された。

遺構の平面形は溝形、断面形は皿形他の不整形であり、SD1は長さ約 1.8m ・幅 0.7m ・深さ 0.2m 、SD2は長さ約 2.9m ・幅 0.7m ・深さ 0.1m の規模で、底面は凹凸が著しい。埋土はSD1が計3層、SD2が計2層で構成され、いずれも黒褐色土に黄褐色土が混入するという状況である。SD2の第2層は構築後の影響で形成されたとみられる。出土遺物はSD1埋土中からの土器片1点のみであり、遺構の存続時期については不明である。

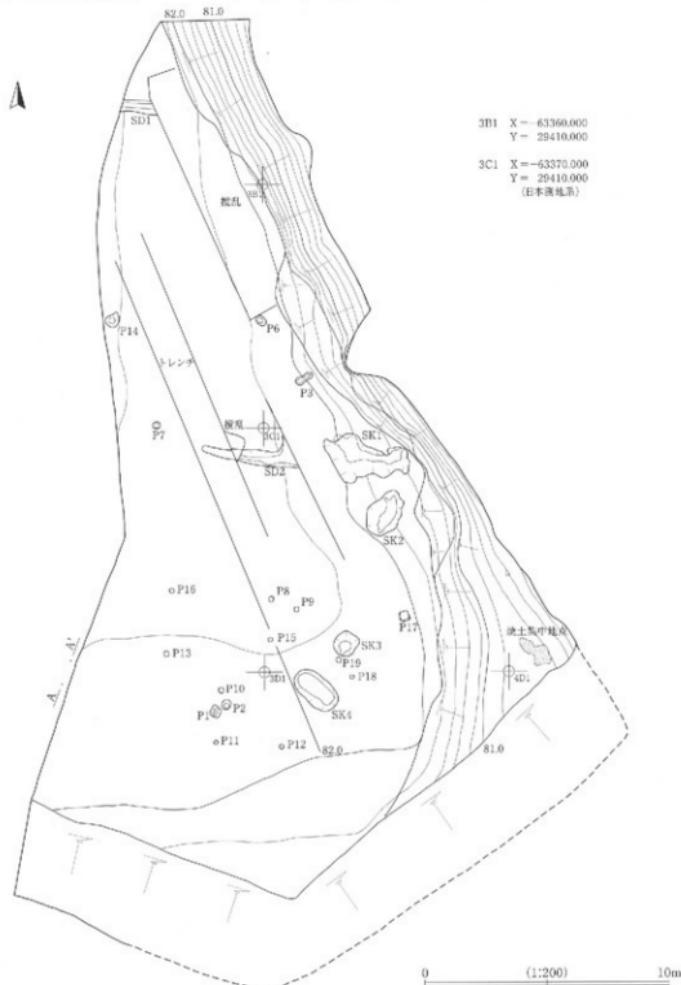


第7図 蛇鰐組遺跡 SD 1・2溝跡

4. 宿遺跡の調査

(1) 基本層序(第3図)

遺構確認面は第III層および第IV層上面である。調査区北半部は削平を受けており第I層の直下で第IV層が検出される。なお、遺構外遺物のほとんど(803点・4,779g)が東側斜面部の第II層中から出土している。



第8図 宿遺跡遺構配置図

(7) 痕・範囲鉢遺跡

(2) 検出遺構（第8～11図、写真図版5・6）

宿遺跡では土坑4基、溝2条、ピット17基、焼土集中地点1箇所が検出された。

＜SK1土坑＞調査区中央東斜面際、3C3グリッド付近に位置する。第Ⅲ層下位で土器を包含する黒褐色の楕円形プランとして確認された。平面形は不整形で長軸3.5m、短軸2.0mである。断面形も不整形で、上面からの深さは約0.5mである。埋土は黒褐色土主体の計6層で構成される。第1～4層はレンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられるが、第5・6層のような模痕によって壁面や層位が乱されており層厚は一定していない。

出土遺物には土師器115点（600g、推定最小個体数3個体）と縄文土器1点（30.2g）がある。すべて第1・2層中からの出土で、土師器13点と縄文土器1点を掲載した（第16図68～81）。

なお、本遺構は人為的に掘り込んだものと考えられるが、その性格については不明である。また、存続時期についても不明であるが、堆積状況から平安時代後半までは廃絶していたものと考えられる。

＜SK2～4土坑＞SK2は調査区中央斜面際、3C13グリッド付近に位置する。第Ⅳ層下位で楕円形の黒褐色プランとして確認された。平面形は不整形で長軸2.0m、短軸1.4mである。断面形も不整形で、最深部の深さは0.6mである。埋土は黒褐色土主体の計8層で構成され、流入状況から自然堆積と考えられる。しかし、第5・6層のような模痕により壁面や層位が乱されている部分が多くあり、層厚は一定していない。人為的な掘り込みと考えられるが、出土遺物が皆無なため性格・存続時期については不明である。

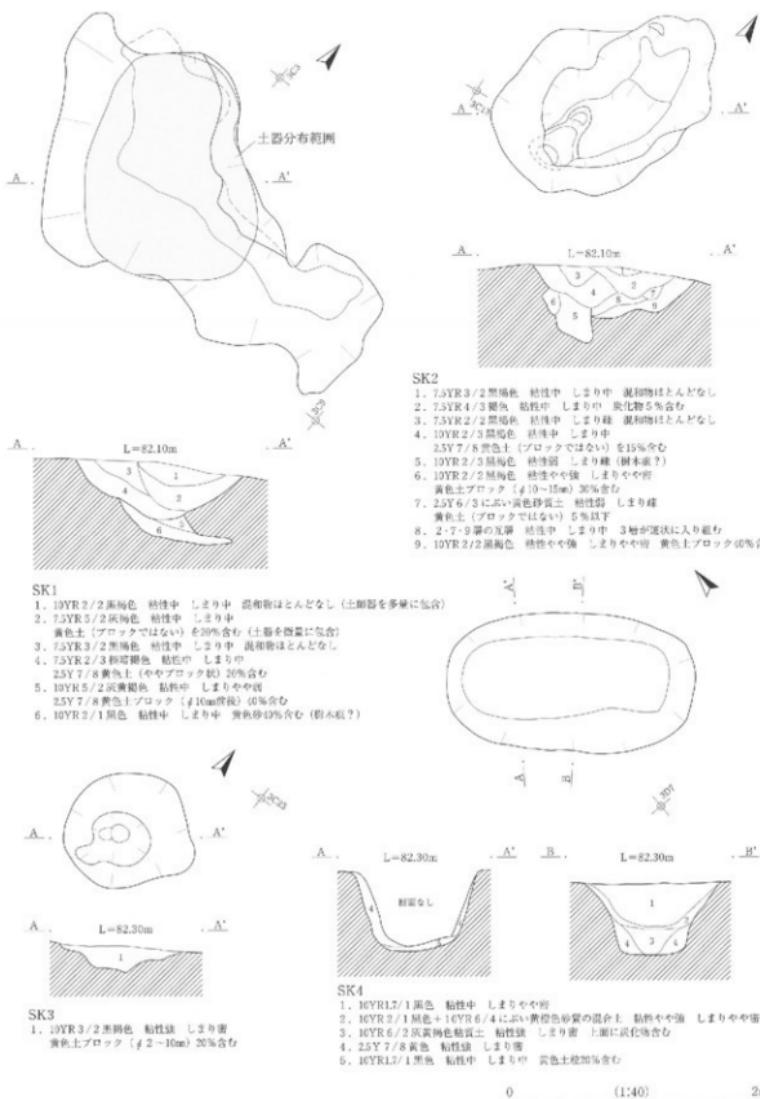
SK3は3C23グリッド付近に位置し、第Ⅲ層下位で円形の黒褐色プランとして確認された。平面形は円形、断面形は擂り鉢状であり、規模は上端1.0×0.95m・下端0.45×0.45m・深さ0.2mである。埋土は黒褐色土の單一層である。底部中央には柱穴状の小ピットが認められるが、性格については不明である。出土遺物は皆無であり、遺構の性格・存続時期については不明である。

SK4は3D7グリッド付近に位置し、第Ⅳ層上面で楕円形の黒褐色プランとして確認された。平面形は楕円形、断面形は箱形で、上端2.0×1.1m・下端1.7×0.6m・深さ0.6mの規模である。埋土は黒色土と黄色土主体の計5層で構成される。堆積状況から第1層は人為堆積（埋め戻し）と考えられたが、それより下層の状況を確認したところ、廃絶後自然に埋没したものと判断された。陥入穴状遺構とも考えられるが、逆茂木痕などは確認されていない。出土遺物は皆無であり、存続時期については不明である。

＜SD1・2溝跡＞SD1は調査区北端、2A16グリッド付近に位置する。第Ⅳ層まで削平が及んでおり底面付近がわずかに残存するのみであった。ほぼ東西方向に走っており、現存規模は長さ1.3m・幅0.55mである。断面形は皿形で、深さは0.1mである。出土遺物はなく遺構の性格・存続時期については不明である。

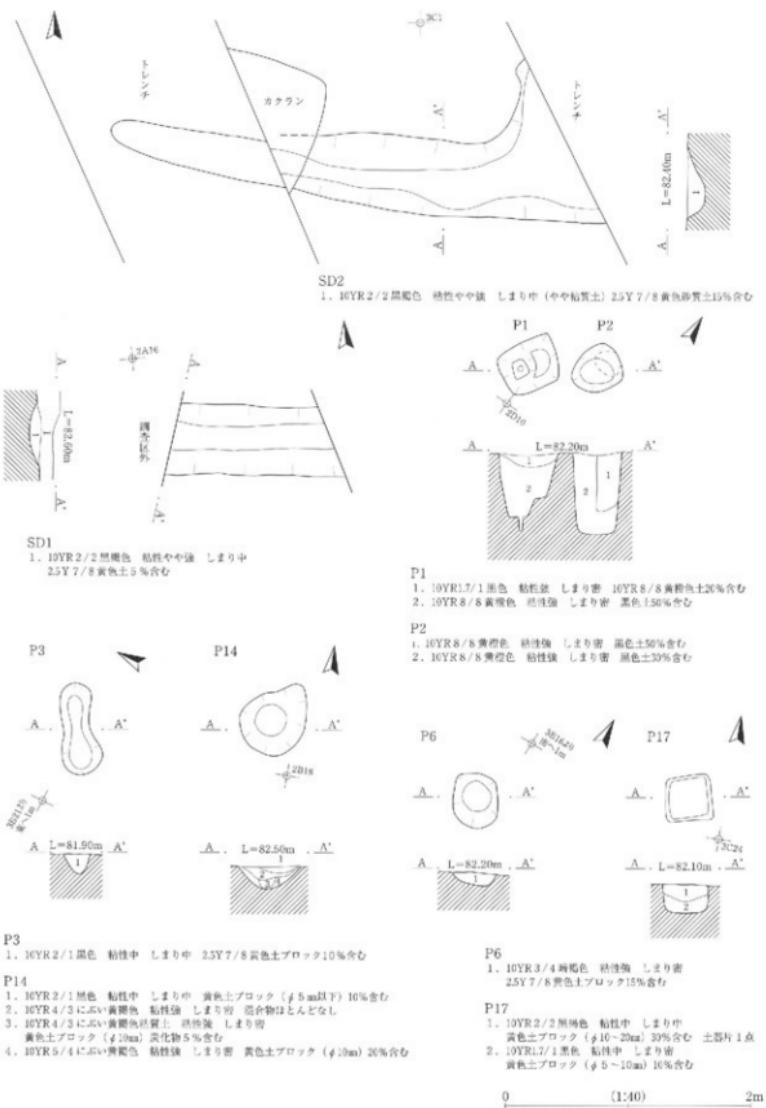
SD2は調査区中央、3C1グリッド付近に位置する。第Ⅲ層上面で東西方向に走る溝状の黒褐色プランとして確認された。上面及び両端は大幅に削平されており、遺存状況は良好とはいえない。現存規模は長さ2.4m・幅0.6mで、東端では北壁がハの字形状に拡がっている。断面形は皿形で深さは0.15mである。SD1と同様、出土遺物がないため遺構の性格・存続時期については不明である。

＜ピット＞検出された17基のうち、13基が3D1グリッドの周囲5mの範囲に分布する。いずれも第Ⅲ層下位～第Ⅳ層上面で検出されている。形状は円形と方形があり、現存規模は径0.15～0.75m・深さ0.1～0.7mと様々である。柱の痕跡があるもの（P1・2など）もあり、柱穴も含まれていると思われる。ただし、配置を見る限りでは規則性は認められないため、これらだけで建物や柵列などを構成するものとは考え難い。P3・11・17の埋土中から土師器片が1点ずつ出土しているが（第16図82～84）、存続時期については不明なものが多い。



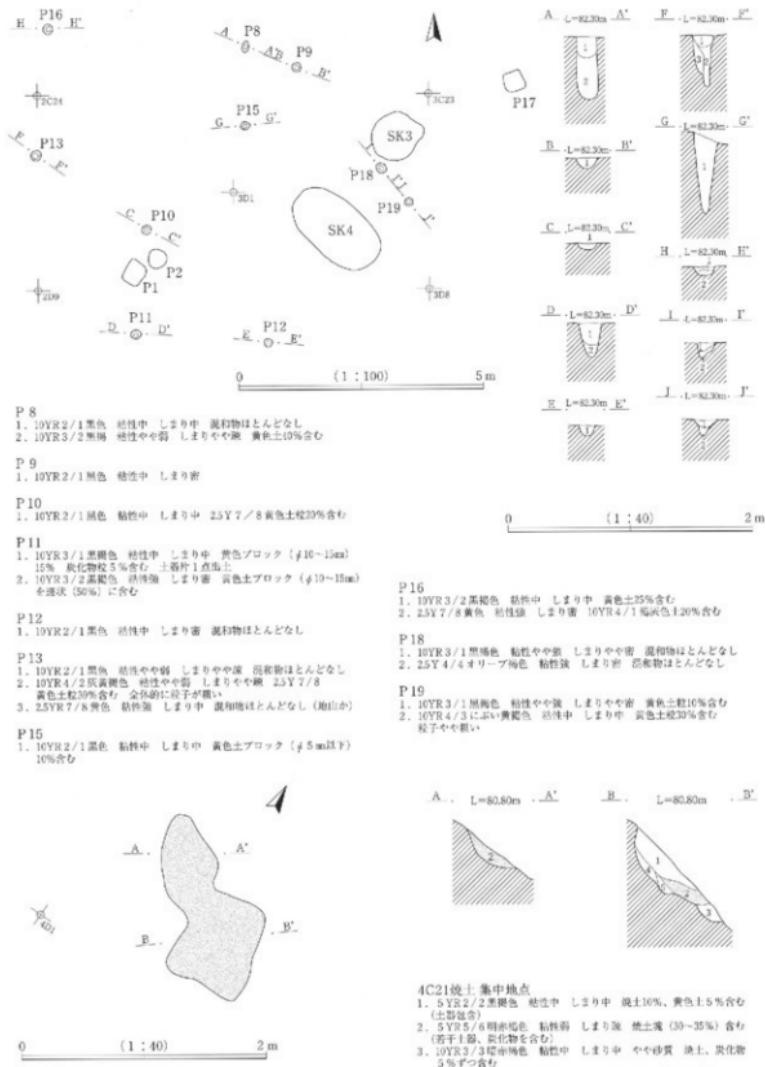
第9図 宿遺跡SK1~4土坑

(7) 宿・蛇蟠組遺跡



第10図 宿遺跡 SD 1, 2・ピットP 1~3, 6, 14, 17

(7) 宿・焼却場遺跡



第11図 宿遺跡ピット群・焼土集中地点

(7) 油・蛇縄瓶遺跡

＜焼土集中地點＞東南側斜面部、4D1グリッド付近で検出された。斜面部に堆積していた第Ⅱ層を掘削中、下位付近で焼土および遺物が半径1.5m程度の範囲でまとまって検出された。

当初は被燃した石材なども出土していたことから現地性焼土とみなして精査を行い、最後に土層確認用ペルトを設定してたち割りを行った。しかし、断面観察を行ったところ、焼土層が薄く、上下に炭層や灰層が形成されていない状況が確認され、これによって二次堆積により形成された焼土の集中地點であることが判明した。この焼土の起源については明らかにできなかったが、出土遺物に甕類が多いことから、近傍に竪穴住居跡が存在し、それが崩壊した際に流出して形成された可能性がある。

出土遺物には土器12点(495g)があり、このうち4点を掲載した(第16図85~88)。

5. 出土遺物(第12~17図、第1~6表、写真図版7~10)

今回の調査では、土器類(土師器・須恵器・繩文土器)、剥片石器・焼粘土塊・鉄滓が出土している。両遺跡とも出土遺物の種別・器種の類似点が多いため、両者を一括して概説する。以下では出土量を勘案して非黒色処理土師器・黒色処理土師器・須恵器・繩文土器・石器の順で概説するが、非黒色処理土師器の壺(甕)・小皿以外は出土点数が少ないため、今回は特に分類を行わない。

土器類は、蛇縄瓶遺跡では破片数1,274点(6,100g)、宿遺跡では974点(5,874g)出土している。

＜非黒色処理土師器＞外面ともに黒色処理を行わない土師器で、壺(甕)・皿・小皿・甕などがある。破片数は壺(甕)・小皿が蛇縄瓶遺跡1,253点(5,924g)、宿遺跡893点(4,037g)、甕が宿遺跡31点(1,192g)である。なお、底部1/12計測法(底部の残存率を12等分し、0から1/12までを0、1から2/12までを1とし、順次2・3…とする切り捨て法)を行って両遺跡における推定最小個体数を算出したところ、蛇縄瓶遺跡が壺(甕)18点・小皿16点、宿遺跡が壺(甕)17点・小皿2点であった(第4表)。

壺(甕)は形態的にはほぼ同一であり、明確に峻別することが困難であることから今回も一括して記述する。いずれもロクロを用いて製作されており、全体的に器壁が厚く色調は橙色系である。図示した個体36点の計測値は、器高4.0~5.4cm(平均4.7cm)、口径12.4~16.2cm(平均14.6cm)、底径4.8~8.0cm(平均6.0cm)、器壁の厚さ0.4~0.8cm(平均0.6cm)である。若干のばらつきはあるが、平均値に近い大きさの個体が多い。体部外面にはロクロナデ調整、内面にはロクロ目の凹凸を無くすように平滑にナデ調整が施される。口縁部は、A類(外反する、外反の程度によりさらに細分が可能、1・14・45など)、B類(直線的に外方へ開く、2・3・95など)、C類(内轉する、41・42・94など)に分類が可能である。底部はいずれも平底で、底部脇の形状から1類(内脇しながら立ち上がる、1・42・43など)、2類(直線的に立ち上がる、95)、3類(底部脇がくびれるまたは台状になる、2・41・112など)に分類が可能である。底部の切り離しには回転糸切り技法が用いられ、ロクロ回転は右回転のものが多い。なお、切り離しの際に用いられた糸には細いもの(2・11など)と太いもの(61・112など)がある。

小皿も壺(甕)と同じくロクロ使用の器種で、色調は橙色系である。図示した個体21点の計測値は、器高1.6~2.6cm(平均2.1cm)、口径8.4~10.6cm(平均9.2cm)、底径3.8~6.0(平均4.5cm)、器壁の厚さ0.4~0.6cm(平均0.5cm)である。器高は2.2cm、底径は3.8cm前後にまとまる傾向がある。体部外面にはロクロナデ調整、内面にはナデ調整が施されるが、内面は剥落が粗雑なため中央にロクロ目が残るものが多い。口縁部は、a類(直線的に開く、25~27など)、b類(口縁部が厚くなる、21・23・31など)、c類(外縁は直線的に開くが内面が外反して断面形が三角形になる、29・30など)に分類が可能である。底部はいずれも平底で、底部脇の形状は壺(甕)と同様である。なお、底部切り離し技法は回転糸切りで、太い糸を用いるものが多い(21・23・24など)。

甕は5点を掲載した。87・122は口縁部が「く」の字状に外方へ屈曲する厚手のロクロ甕である。体部外面にロクロナナ調整が施される。86・88・90は非ロクロ成形の甕で、ロクロ甕に比べて薄手である。間隔や方向は異なるがいずれも外面にヘラケズリ調整、内面にヘラナナ調整が施される。

他にも皿(35)や高台状の製品(119)があるが、小破片のため詳細は不明である。

＜黒色処理土師器＞両黒土師器と内黒土師器がある。両黒土師器は宿遺跡3点(1個体分、166g)、内黒土師器は蛇鰐遺跡1点(2.7g)、宿遺跡13点(183g)である。このうち両黒土師器1点、内黒土師器4点を掲載した(12・85・100・116)。

89は両黒土師器の甕である。体部下半は内側しながら立ち上がるが、口縁部は外反する。高台は貼り付け高台で、端部が外方に開く。内外面とも黒色処理のちぢみ方向に細かくヘラミガキ調整が施される。なお、底部内面には放射状に擦痕が認められる。

内黒土師器はすべて坏類で、内面は黒色処理とともに横方向ないし放射状のヘラミガキ調整が施される。口縁部は外反するものが多く(12・100)、底部は平底(116)と高台がつくもの(85)とがあるが、いずれも底部切り離しには回転糸切り技法が用いられている。

＜須恵器＞宿遺跡で3点(23.2g)出土しており、坏2点を掲載した(120・121)。121は底部破片で、底部切り離しには回転ヘラ切り技法が用いられている。なお、121は底部脇が摩耗している。

＜繩文土器＞蛇鰐遺跡で20点(173g)、宿遺跡で22点(273g)出土している。浅鉢と深鉢があり、13点を掲載した(36~40・63~65・81・123~126)。123は深鉢の口縁部で、4条の平行沈線が施される。125の浅鉢は、口縁部にキザミ、肩部に3条の平行沈線が施される。この他の深鉢の破片については単軸絡条件压痕文・羽状繩文・単節繩文などが施される。

＜石器＞蛇鰐遺跡で剥片石器4点(34.6g)、宿遺跡で剥片1点(9.8g)が出土しており、蛇鰐遺跡出土の2点を掲載した(66・67)。石質には頁岩とホルンフェルスがある。このうち67は横長剥片を素材とし、片面に二次加工が施された剥片である。

＜焼粘土塊＞宿遺跡で4点(27.9g)出土している。土器製作時に付随してきたものと思われたが、胎土分析の結果によると成分が炭なるということである(附録参照)。

＜鉄滓＞蛇鰐遺跡で1点(25g)出土している。

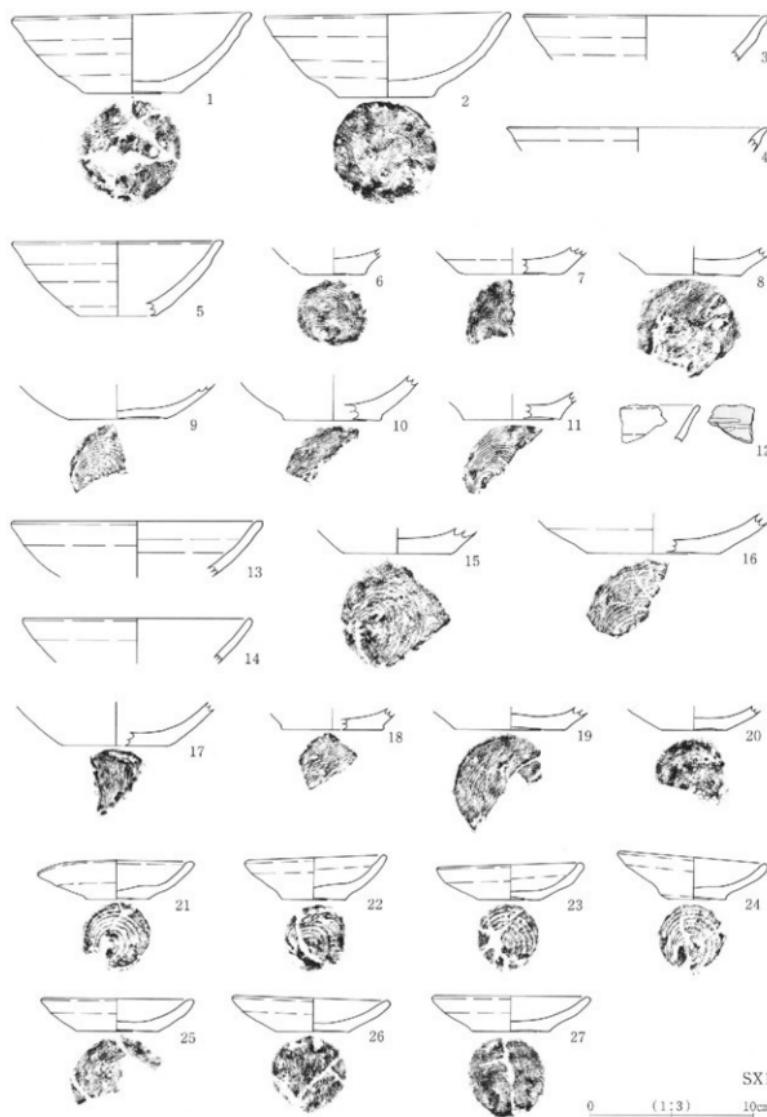
最後に出土遺物の年代観について触れておきたい。まず、非黒色処理土師器の坏(甕)・小皿は、岩手県内では金ヶ崎町鳥海A遺跡、流沢村大釜館遺跡、岩手町沼崎遺跡などで出土が確認されており、いずれも若干の形態差はあるが製作技法・色調、坏(甕)と小皿のセットで出土する点などの共通性が高い。これらは鳥海A遺跡の年代観(前九年合戦の「鳥海撃」と推定されている)を中心に相前後した時期のものと考えられており、上記のような特徴を有する宿・蛇鰐遺跡出土資料もほぼ同時期に製作されたものと考えられる。しかし、今回の調査では絶対年代の推定できる遺物を伴っていないため、明言は避け平安時代後半(11世紀代か)というおおよその年代軸で考えておきたい。

両黒土師器は、県内で同形態の類例が少なく根拠に乏しい。形態的には施釉陶器を模倣したものであることから、10世紀以降に製作されたものと考えておきたい。

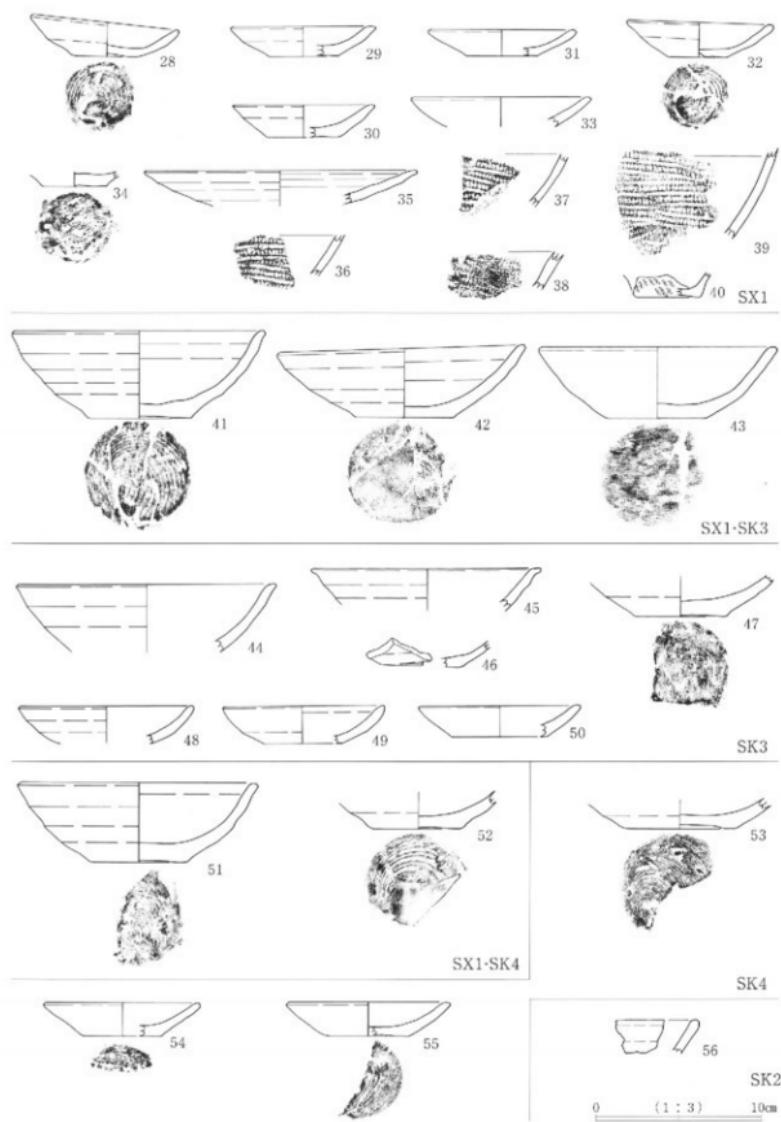
非黒色処理土師器の甕類と内黒土師器はいずれも破片であり、判断根拠に欠ける。しかし、成形にロクロが用いられる例が多いことから、平安時代前半(9世紀後葉~10世紀代)のものと考えられる。

繩文土器は、125が晚期(大洞C1式)に比定できるが、それ以外の地文のみの破片については年代決定の根拠に欠けるため断定はできない。

(7) 宿・蛇瓶鉢遺跡

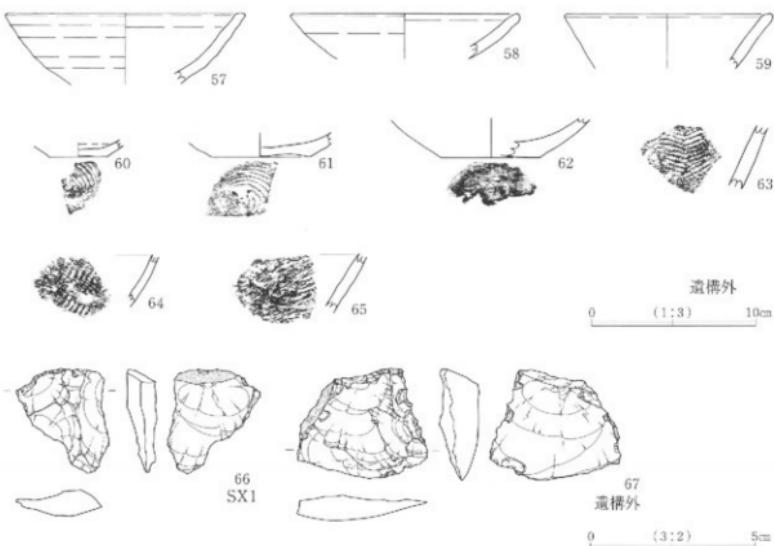


第12図 蛇瓶鉢遺跡出土物(1)



第13図 蛇瓶組遺跡出土遺物(2)

(7) 宿・蛇蠍組遺跡



第14図 蛇蠍組遺跡出土遺物 (3)

第1表 蛇蠍組遺跡縄文土器観察表

団版 No.	遺物 No.	出土地点・層位	種別	器種	内面骨部	計測値 (cm)			外面観察	内面溝溝 残文	色調	備考
						器高	口径	底径				
13	36	SX1 QNE地土下段	縄文上巻	深鉢	脚部	—	—	0.5	RE2本體	ナデ	に高い橙色	
	37	SX1 QNE地土下段	縄文上巻	深鉢	脚部	—	—	0.4	RE2本體	ナデ	灰褐色	
	38	SX1 QNE地出雲	縄文上巻	深鉢	脚部	—	—	0.6	RE2本體	ナデ	褐色	
	39	SX1 QNE地土上段	縄文上巻	深鉢	脚部	—	—	0.6	RE2本體	ナデ	灰褐色	
14	40	SX1 QNE地土上段	縄文上巻	深鉢	底盤	(1.5)	—	3.6	LJ複数	ナデ	に高い橙色	
	63	SXT2付石刀標本標記	縄文上巻	深鉢	脚部	—	—	0.8	石刀標本標記 (LJ+RE2本體)	ナデ	に高い橙色	
	64	SH3 1層	縄文上巻	深鉢	脚部	—	—	0.5	LJ複数	ナデ	褐色	
	65	SH3 1層下段	縄文上巻	深鉢	脚部	—	—	0.65	LJ複数	ナデ	に高い橙色	

第2表 蛇蠍組遺跡石器観察表

団版 No.	遺物 No.	出土地点・層位	種別	石材	計測値			刃部	欠損	自然面	破壊	備考
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)					
14	66	SX1 QNE地土下段	刮片	ホルンフェルス	3.25	2.6	0.8	5.47	無	有	無	
	67	SH3 1層	二次加工ある刮片	頁岩	3.4	3.9	0.8	14.01	片	59.0°	無	有

第3表 蛇鰐類遺跡土師器観察表

測定番号	出土地点・施設	種類	型式	各部寸 (cm)			分類	操作率 (%)	長方形測量器	内部測定	底面	色調	備考				
				高さ	口径	底径											
1	SX1: 施設	土器	手打型	手打型	4.9	14.4	5.9	3.6	A	1	100	100	ワタリナガ	チヅ	赤褐色		
2	SX1: 黒土下段・施設	土器	手打型	手打型	5.2	14.9	5.8	3.6	B	3	92	100	ニクラナゲ	ナゾ	赤褐色		
3	SX1: 道路	土器	手打型	手打型	12.0	14.8	-	6.5	3	-	15	0	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
4	SX1: QSEW東土下段	土器	手打型	手打型	12.5	15.0	-	6.0	A	-	10	0	赤褐色(よじや明)	ナゾ	褐色		
5	SX1: 地下室・施設土器	土器	手打型	手打型	4.6	12.8	4.8	3.7	A	1	20	5	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
6	SX1: QSEW東土下段	土器	手打型	手打型	12.6	-	-	4.1	0.6	-	1	0	黒成(こくせい)	ナゾ	赤褐色(黒紅)		
7	SX1: QSEW東土下段	土器	手打型	手打型	12.6	-	-	6.2	0.5	-	1	0	赤褐色(こくせい)	チヅ	赤褐色		
8	SX1: 黒土下段	土器	手打型	手打型	-	-	-	5.9	0.3	-	3	0	壁成(よじや明)	ナゾ	褐色		
9	SX1: QSEM手打型	土器	手打型	手打型	12.1	-	-	6.0	0.45	-	0	20	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
10	SX1: QSEW東土下段	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	6.0	0.4	-	3	0	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
11	SX1: QSEW東土下段	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	6.3	0.8	-	3	0	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
12	SX1: QSEW東土下段	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	6.3	0.8	-	-	0	黒成(こくせい)	チヅ	赤褐色		
13	SX1: QSEW東土下段	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	6.3	0.8	-	-	0	黒成(こくせい)	チヅ	赤褐色		
14	SX1: QSEW東土下段	土器	手打型	手打型	12.7	4.0	-	6.5	C	-	10	0	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
15	SX1: 北東セクション角柱	土器	手打型	手打型	-	-	-	6.5	0.3	-	2	0	黒成(こくせい)	ナゾ	赤褐色		
16	SX1: QSEW東土下段	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	6.0	0.8	-	-	0	20	赤成(よじや明)	ナゾ	褐色	
17	SX1: QSEW東土下段	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	6.4	0.8	-	1	0	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
18	SX1: 地下セクション第5層	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	6.2	0.6	-	3	0	20	ロクナナゲ	ナゾ	褐色	
19	SX1: 地下セクション第5層	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	6.6	0.8	-	2	0	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
20	SX1: QSEW東土下段	土器	手打型	手打型	12.0	1.5	-	4.0	16.0	-	3	0	20	赤成(よじや明)	ナゾ	褐色	
21	SX1: 地下セクション第5層	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	6.4	0.5	b	3	100	60	ロクナナゲ	ナゾ	赤褐色(黒紅)	
22	SX1: 黒土下段	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	5.6	0.5	a	3	100	100	ロクナナゲ	ナゾ	褐色	
23	SX1: 黒土下段・施設	土器	手打型	手打型	12.0	8.0	3.9	0.5	a	1	100	60	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
24	SX1: 黒土下段・施設	土器	手打型	手打型	12.0	8.0	3.8	0.4	b	3	100	200	コトコトナ	ナゾ	褐色		
25	SX1: 黒土下段・施設	土器	手打型	手打型	12.0	8.0	3.8	0.4	b	1	40	45	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
26	SX1: 黒土上段・施設・井戸	土器	手打型	手打型	12.0	2.4	4.3	0.6	a	2	30	100	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
27	SX1: 黒土上段・施設・井戸	土器	手打型	手打型	12.0	2.5	4.7	0.5	a	3	35	90	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
28	SX1: 黒土・雪	土器	手打型	手打型	12.0	3.1	3.8	0.5	a	1	100	60	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
29	SX1: QSEW東土下段	土器	手打型	手打型	12.0	3.6	4.1	0.5	c	2	10	20	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
30	SX1: QSEW東土下段	土器	手打型	手打型	12.0	3.6	4.2	0.4	c	2	5	5	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
31	SX1: 黒土上段・雪	土器	手打型	手打型	12.0	3.6	4.3	0.4	b	2	15	10	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
32	SX1: 黒土上段	土器	手打型	手打型	12.0	2.2	3.8	0.5	b	2	10	100	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
33	SX1: ベット番号下段	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	0.5	a	2	20	0	赤成(よじや明)	ナゾ	褐色		
34	SX1: QSEW東土下段	土器	手打型	手打型	12.0	3.0	-	2.8	0.5	c	3	0	100	20	赤成(よじや明)	ナゾ	褐色
35	SX1: 黒土下段	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	0.5	a	-	10	0	20	ロクナナゲ	ナゾ	褐色	
36	SX1: 黒土下段・雪	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	0.5	a	-	10	0	20	ロクナナゲ	ナゾ	褐色	
37	SX1: 黒土下段・雪	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	0.5	a	-	10	0	20	ロクナナゲ	ナゾ	褐色	
38	SX1: 黒土下段・雪	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	0.5	a	-	10	0	20	ロクナナゲ	ナゾ	褐色	
39	SX1: 黒土下段・雪	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	0.5	a	-	10	0	20	ロクナナゲ	ナゾ	褐色	
40	SX1: 黒土下段・雪	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	0.5	a	-	10	0	20	ロクナナゲ	ナゾ	褐色	
41	SX1: 黒土下段・雪	土器	手打型	手打型	12.0	5.4	15.2	6.1	0.6	A	3	45	200	コトコトナ	ナゾ	赤褐色(黒紅)	
42	SX1: 黒土下段・雪	土器	手打型	手打型	12.0	4.2	4.8	0.6	0.7	C	1	95	50	ロクナナゲ	ナゾ	赤褐色	
43	SX1: 黒土下段・雪	土器	手打型	手打型	12.0	4.2	4.8	0.6	0.6	C	1	15	10	20	赤成(よじや明)	ナゾ	褐色
44	SX1: 雪	土器	手打型	手打型	12.0	4.2	15.6	-	0.8	A	1	10	0	ロクナナゲ	ナゾ	褐色	
45	SX1: 雪	土器	手打型	手打型	12.0	3.6	13.8	-	0.6	A	1	10	0	ロクナナゲ	ナゾ	褐色	
46	SX1: 雪	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	0.4	-	0	5	5	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
47	SX1: 雪	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	0.6	-	0	5	5	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
48	SX1: 雪	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	0.6	-	0	5	5	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
49	SX1: 雪	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	0.6	-	0	5	5	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
50	SX1: 雪	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	0.6	-	0	5	5	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
51	SX1: 雪	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	0.6	-	0	5	5	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
52	SX1: 雪	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	0.6	-	0	5	5	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
53	SX1: 雪	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	0.6	-	0	5	5	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
54	SX1: 第1層	土器	手打型	手打型	12.0	2.1	4.6	0.5	c	2	20	20	赤成(よじや明)	ナゾ	褐色		
55	SX1: 第1層	土器	手打型	手打型	12.0	2.1	4.6	0.5	c	2	25	50	ロクナナゲ	ナゾ	赤褐色		
56	SX1: 黒土下段・雪	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	0.5	-	0	5	5	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
57	SX1: 1層	土器	手打型	手打型	12.0	4.4	14.2	-	0.7	B	2	25	0	ロクナナゲ	ナゾ	褐色	
58	SX1: 1層	土器	手打型	手打型	12.0	2.0	13.6	-	0.65	B	0	10	0	ロクナナゲ	ロクナナゲ	褐色	
59	SX1: 1層	土器	手打型	手打型	12.0	3.0	12.4	-	0.65	B	0	10	0	赤成(よじや明)	ナゾ	褐色	
60	SX1: 1層	土器	手打型	手打型	12.0	1.8	-	6.6	-	1	0	30	ロクナナゲ	ナゾ	褐色		
61	SX1: 1層	土器	手打型	手打型	12.0	1.8	-	6.6	0.6	A	1	0	25	50	ロクナナゲ	ナゾ	褐色
62	SX1: 1層	土器	手打型	手打型	12.0	-	-	6.0	0.6	-	0	20	20	ロクナナゲ	ナゾ	褐色	

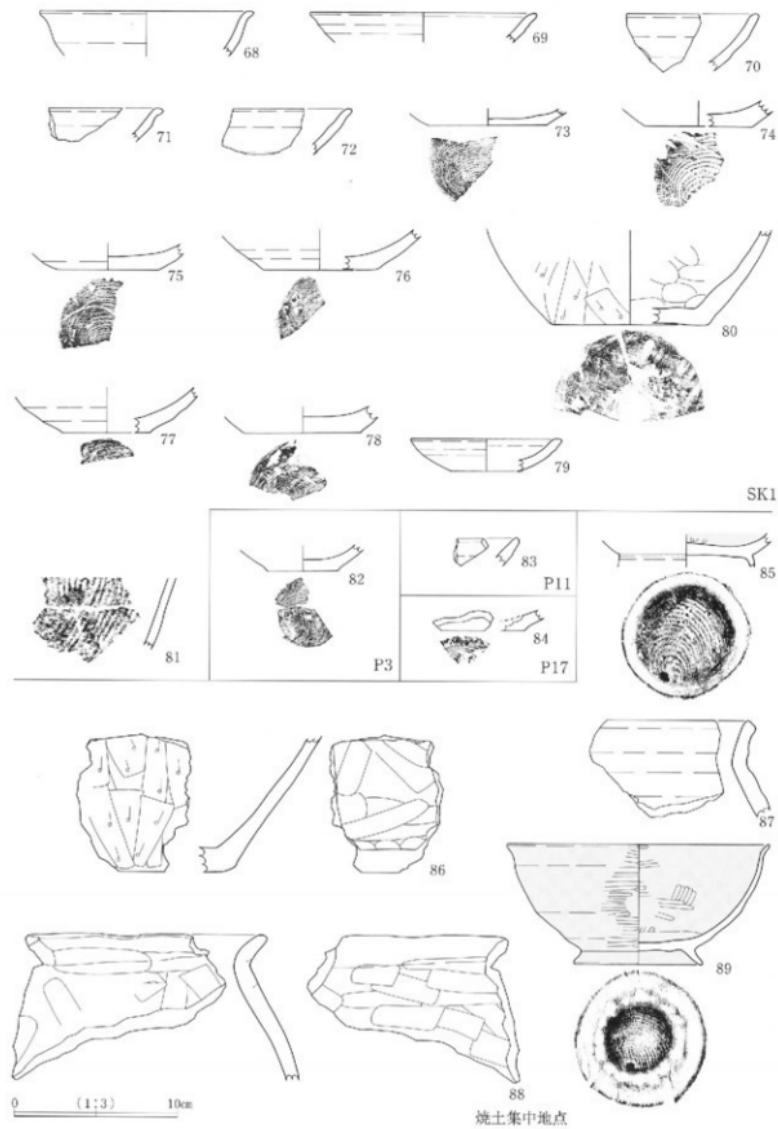
※1: () 内は現存値

※2: A類(外): A類(外反する), B類(直線的外方へ開く), C類(内側へ開く)

小類: a類(直線的に開く), b類(厚く肥大する), c類(断面形が三角形)

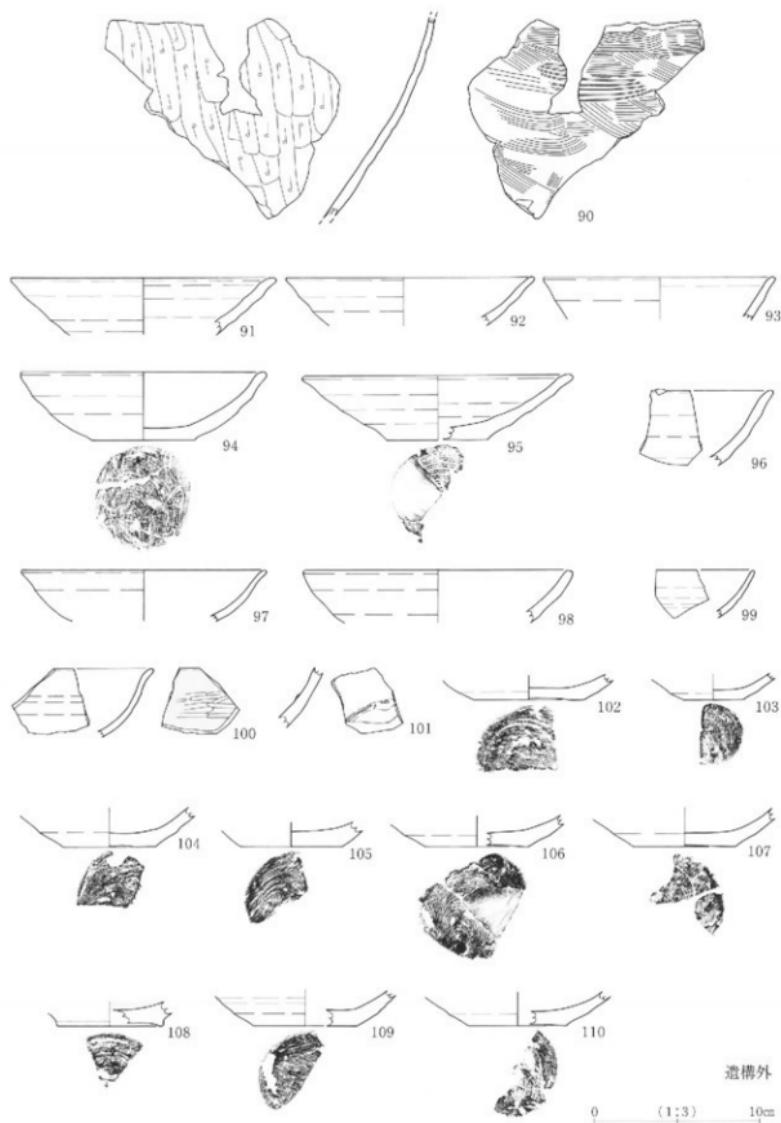
底部脇の形状: 1類(内側へ開く), 2類(直線的), 3類(くびれる)

(7) 宿・蛇窓鉢遺跡



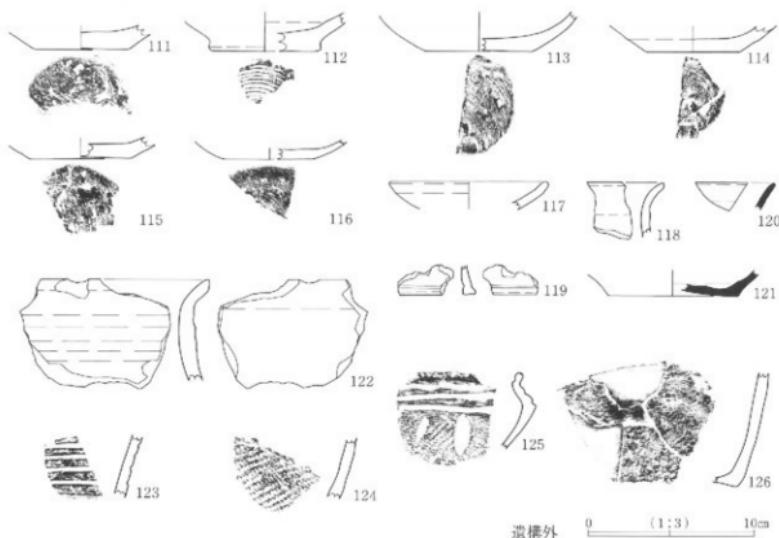
第15図 宿遺跡出土遺物(1)

(7) 宿・竈廻遺跡



第16図 宿遺跡出土遺物(2)

(7) 宿・蛇腹鉢道跡



第17図 宿遺跡出土遺物(3)

第4表 非黒色処理土師器 推定最少個体数

蛇腹鉢道跡					
遺構名	縫結片数	口縁部 破片数	底盤 破片数	底部1／12計測個体数	
S X 1	517	80	73	10 (126)	12 (127)
S K 2	17	4	0	1 (1)	1 (1)
S K 3	47	15	7	1 (16)	1 (3)
S K 4	17	4	6	1 (6)	1 (9)
遺構外	693	61	40	1 (56)	1 (9)
計計	1274	164	125	18 (204)	16 (148)

非縫結片数は接合後破片数

* 1／12計測個体数の()内は1／12計測の合計

宿遺跡					
遺構名	縫結片数	口縁部 破片数	底盤 破片数	底部1／12計測個体数	
S K 1	115	60	12	1 (17)	1 (16)
ピット	4	1	2	2 (1)	0
遺構外	768	154	92	14 (169)	1 (17)
計計	895	215	106	17 (197)	2

註：口縁部破片があるため1個体として計算

第5表 宿遺跡縄文土器観察表

回収 No.	遺構 No.	出土地点・部位	縫結	器種	底部形状	計測値(cm)			外面彫刻	内面彫刻 施文	色調	備考
						高さ	口径	底径				
4	81	S K 1 第1層	縫文土器	深井	底部 (7.3)	—	—	0.5	R L 単脚	ナゲ	褐色	
	123	2 D13	縫文土器	深井?	底部 (3.8)	—	—	0.6	平行沈綴文	ナゲ	明赤褐色	
	124	2 D14 II層	縫文土器	深井	口縫部 (3.8)	—	—	0.6	R L 単脚	ナゲ	浅黄褐色	
	125	3 B 6 II層	縫文土器	鉢	口縫部 (4.7)	—	—	0.35	平行沈綴文+R L 単脚	ナゲ	褐色	大判C 1次
	126	3 B 18 砂層	縫文土器	深井	底部 (7.0)	—	—	0.7	摩滅により不明	ナゲ	浅黄褐色	

第6表 宿道路土師器・須恵器・須恵器観察表

登場 順 番	古跡名・属地	段階	指標	古物(個数)			分類	残存率(%)	備考外古墳調査	内周測量	基準	色調	参考		
				更生	門柱	瓦柱									
68	SK1 第1号	二層台	井(施)	2.8	13.6	-	0.5	A	-	15	0	ロクロナデ	壇域により不明	同色	
69	SK1 第1号	一層台	井(施)	1.8	13.6	-	0.5	A	-	20	0	ロクロナデ	ナゲ	赤茶色	
70	SK1 第1号	一層台	井(施)	2.8	-	-	0.5	B	-	3	0	ロクロナデ	ナゲ	青茶色	
71	SK1 第1号	上野原	井(施)	2.0	-	-	0.5	A	-	3	0	ロクロナデ	ナゲ	青茶色	
72	SK1 第1号	土塁部	井(施)	0.5	-	-	0.6	C	-	3	0	ロクロナデ	ナゲ	青色	
73	SK1 第1号	土塁部	井(施)	0.5	-	-	7.2	(A)	-	0	30	壇域により不明	ナゲ	赤褐色	
74	SK1 第1号	土塁部	井(施)	0.5	6.6	1.0	-	1	0	23	壇域により不明	ナゲ	赤褐色		
75	SK1 第1号	上屋根	井(施)	2.8	6.2	0.5	-	1	0	40	壇域により不明	ナゲ	赤褐色		
76	SK1 第1号	土塁部	井(施)	2.5	-	-	6.8	0.5	-	1	0	29	クロロナデ	ナゲ	青色
77	SK1 第1号	土塁部	井(施)	2.5	-	-	5.3	0.6	-	1	0	20	壇域により不明	ナゲ	青色
78	SK1 第1号	二層台	井(施)	1.6	-	-	7.2	0.5	-	2	0	29	クロロナデ	ナゲ	青色
79	SK1 第1号	土塁部	小舟	2.0	9.0	-	0.5	(C)	-	1	0	5	ロクロナデ	ナゲ	青色
80	SK1 第1号	土塁部	井(施)	5.5	-	-	9.5	0.7	-	0	40	ヘラケズリ	黒	青色	
81	3 土	上野原	井(施)	1.0	-	-	4.2	0.6	-	3	0	20	ナゲ	ナゲ	赤褐色
82	P11 第2号	土塁部	井(施)	1.0	-	-	3.5	0.6	-	1	0	5	壇域により不明	ナゲ	青色
83	P12 第2号	土塁部	井(施)	0.5	-	-	3.5	0.6	-	1	0	5	壇域により不明	ナゲ	青色
84	P12 第2号	土塁部	井(施)	0.5	-	-	3.5	0.6	-	1	0	5	壇域により不明	ナゲ	青色
85	後土塁跡付近	上野原	井(施)	2.0	-	-	8.4	0.55	-	0	100	ロクロナデ	ナゲ	青色	
86	後土塁跡付近	土塁部	井(施)	0.5	-	-	0.75	-	-	0	5	ヘラケズリ	ナゲ	青色	
87	後土塁跡付近	土塁部	井(施)	0.5	-	-	1.0	-	-	3	0	20	ヘラケズリ	ナゲ	青色
88	外二重集落点	二層台	井(施)	0.5	-	-	0.9	-	-	5	0	ヘラケズリ	ナゲ	青色	
89	4 C22 第1号	一層台	井(施)	7.4	16.5	7.8	0.3	-	-	3	100	壇域ミミタ	ナゲ	赤褐色	
90	4 C22-4 D1 第1号	土塁部	井(施)	12.0	-	-	0.5	-	-	0	0	ヘラケズリ	ナゲ	青色	
91	2 C24-3 D20 第1号	下野原	井(施)	3.5	16.0	-	0.5	B	-	20	0	ロクロナデ	ナゲ	青色	
92	2 D20 第1号	上野原	井(施)	3.0	16.0	-	0.5	B	-	10	0	壇域により不明	ナゲ	赤褐色	
93	3 C14-4 C22 第1号	土塁部	井(施)	0.7	13.9	-	0.7	-	-	10	0	ロクロナデ	ナゲ	青色	
94	3 C23 第1号	土塁部	井(施)	4.2	14.7	6.3	0.5	C	-	1	25	ロクロナデ	ナゲ	青色	
95	3 C19-20 第1号	土塁部	井(施)	6.0	16.2	6.1	0.6	B	-	2	20	ロクロナデ	ナゲ	青色	
96	3 C20 第1号	土塁部	井(施)	4.0	-	-	0.6	A	-	5	0	ロクロナデ	ナゲ	青色	
97	3 C20 残土塁	土塁部	井(施)	0.5	13.1	-	0.4	-	-	15	0	ロクロナデ	ナゲ	青色	
98	3 D17 第1号	土塁部	井(施)	3.0	16.0	-	0.65	C	-	10	0	ロクロナデ	ナゲ	青色	
99	4 C16 第1号	二層台	井(施)	2.0	-	-	0.35	-	-	5	0	ロクロナデ	ナゲ	青色	
100	4 C22 第1号	一層台	井(施)	5.0	14.1	-	0.3	-	-	5	0	クロロナデ	黒	青色	
101	10 C2 第1号	上野原	井(施)	3.2	-	-	0.6	-	-	0	0	クロロナデ	ナゲ	青色	
102	2 A 2.9 第1号	上野原	井(施)	1.5	-	-	0.3	0.75	-	0	0	壇域により不明	ナゲ	青色	
103	2 A 2.9 第1号	下野原	井(施)	1.5	-	-	0.3	0.75	-	0	0	壇域により不明	ナゲ	青色	
104	2 D20 第1号	土塁部	井(施)	4.2	-	-	3.6	0.45	-	0	25	ロクロナデ	ナゲ	青色	
105	3 B28 第1号	土塁部	井(施)	2.0	-	-	3.6	0.45	-	0	20	ロクロナデ	ナゲ	青色	
106	3 B28 第1号	土塁部	井(施)	1.5	-	-	6.1	0.35	-	1	0	20	壇域により不明	ナゲ	青色
107	3 B28-23 第2号	土塁部	井(施)	1.0	-	-	6.2	0.60	-	2	0	20	ロクロナデ	ナゲ	青色
108	3 C23 第2号	土塁部	井(施)	2.0	-	-	6.3	0.6	-	1	0	20	壇域により不明	ナゲ	青色
109	3 C23 第2号	土塁部	井(施)	1.5	-	-	5.4	0.35	-	0	25	ロクロナデ	ナゲ	青色	
110	3 C23 第2号	土塁部	井(施)	2.0	-	-	6.2	0.65	-	1	0	20	ロクロナデ	ナゲ	青色
111	3 C23-15 第1号	土塁部	井(施)	2.0	-	-	6.1	0.35	-	2	0	20	ロクロナデ	ナゲ	青色
112	3 C19 第1号	土塁部	井(施)	1.0	-	-	5.6	0.35	-	2	0	20	壇域により不明	ナゲ	青色
113	3 C20 第1号	一層台	井(施)	2.4	-	-	6.4	0.35	-	3	0	20	ロクロナデ	ナゲ	青色
114	4 C16-31 第1号	二層台	井(施)	2.0	-	-	6.4	0.35	-	1	0	20	壇域により不明	ナゲ	青色
115	4 C16-31 第1号	二層台	井(施)	1.0	-	-	5.6	0.21	-	2	0	30	ロクロナデ	ナゲ	青色
116	3 D12 財貯	土塁部	井(施)	1.0	-	-	6.0	0.75	-	2	0	25	壇域により不明	ナゲ	青色
117	4 C22 第1号	土塁部	井(施)	1.0	-	-	5.4	0.35	-	0	20	壇域により不明	ナゲ	青色	
118	3 B18-23第1号	土塁部	小舟	1.0	-	-	0.5	a	-	15	0	ロクロナデ	ナゲ	青色	
119	3 C4-4.1 第1号	土塁部	井(施)	1.0	-	-	0.4	-	-	5	0	20	壇域により不明	ナゲ	青色
120	2 A 14 上野原	土塁部	小舟	1.0	-	-	0.5	-	-	0	5	0	壇域により不明	ナゲ	青色
121	3 B 6 第1号	土塁部	井(施)	1.0	-	-	0.3	0.30	-	0	20	ロクロナデ	ナゲ	青色	
122	3 C20 第1号	土塁部	井(施)	0.5	-	-	0.9	-	-	5	0	ロクロナデ	ロクロナデ	青色	

(7) 宿・蛇艇船遺跡

6.まとめ

両遺跡とも縁辺部の調査ではあったが、県内でも事例の少ない非黒色処理土師器がまとまって出土したことなど、狭い調査面積ながら多くの成果が得られ、遺跡の性格の一端を知ることができた。最後に今回の調査成果について、時代ごとに列記してまとめとしたい。

(1) 縄文時代

遺構としては蛇艇船遺跡の溝形陥し穴状遺構2基がある。また、遺構外出土ではあるが両遺跡とも縄文土器と石器が出土している。宿遺跡については過年度調査でも陥し穴状遺構が44基、蛇艇船遺跡では試掘調査で溝形陥し穴状遺構が確認されている。両遺跡の間に沢があることから、陥し穴状遺構は水場に集まる動物を捕まえるために設置されたと考えられ、本調査区を含めた周辺が広範囲に狩猟場として利用されていたことを想定させる。

(2) 平安時代

明確に住居跡・建物跡といえる遺構は未確認であるが、両遺跡ともこの時代に該当する遺構・遺物が最も多く出土しており、集落が形成されていたものと考えられる。また、その出土量から非黒色処理土師器が使用されていた時期が最盛期にあたると考えられる。先述の通り宿・蛇艇船遺跡例のような非黒色処理土師器を出土する遺跡は、岩手県内でも調査事例が少なくその内容は判然としていない。そのようななかで、出土状況がわかる事例である蛇艇船遺跡S X 1 壁穴遺構、S K 3・S K 4 土坑は当該期の遺跡の様相を知るうえで有用な資料となるものと思われる。

宿遺跡では非黒色処理土師器とともに陶器・内黒土師器やロクロ甕などが一定量出土しているのに対し、蛇艇船遺跡では内黒土師器1点以外は全て非黒色処理土師器である。また、壺（塊）と小皿の数量比を見ると宿遺跡では8.5:1、蛇艇船遺跡では1.1:1と極端に異なる。出土遺物の器種組成や年代観を見ている限りでは、宿遺跡出土資料のほうが蛇艇船遺跡出土資料よりも古く位置づけられるものが多い。これは調査面積や遺跡の性格に起因するものとも考えられるが、両遺跡の形成時期に時間差があったことを示している可能性がある。

両遺跡の非黒色処理土師器壺（塊）の形態を比較すると、蛇艇船遺跡出土資料には体部が内彎気味に立ち上がるA・C類が多いのに対し、宿遺跡出土資料には口縁部の外反度が強いA類と体部が直線的なB類が多い。今回は厳密に層位的に分類できたわけではないため、この相違が直ちに形式差もしくは時間差を示すと判断することはできないが、これについては他遺跡出土資料を含めて今後検討していく必要があろう。

なお、宿・蛇艇船遺跡に関する報告はこれをもって全てとする。

＜参考文献＞

- 井上雅孝 1997 「陸奥における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第7号
- 及川司・杉沢昭太郎 2003 「陸奥のかわらけ（3）東北北部1—岩手県—」『中世奥羽の土器・陶磁器』
- 川井啓介 1994 「遺物計測法に関する一考察」『室遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第49集
- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003 『宿遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第440集
- 岩手県滝沢村埋蔵文化財センター 2003 『大釜館遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2003 『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成14年度）』

附編 宿・蛇瓶鉢遺跡出土土器の化学成分

筑波技術短期大学非常勤講師 松本建連

本稿では、岩手県伊賀郡石巻町宿・蛇瓶鉢遺跡から出土した平安時代の土器の化学成分の測定結果を報告し、それに基づいた検討を行う。分析に際しては、両遺跡出土土器の胎土の比較を行うための基礎資料を得ることを第一の目的とした。また、両遺跡出土の焼粘土塊と生の粘土、そして時期的に近接していると考えられる県内出土試料と宿・蛇瓶鉢遺跡出土試料の胎土と比較することを第二の目的とした。

1. 試料と方法

試料は、宿・蛇瓶鉢遺跡出土土器13点、宿遺跡出土の焼粘土塊1点、蛇瓶鉢遺跡出土の粘土1点、岩手郡滝沢村大益館遺跡出土土器2点、同村八幡館山遺跡出土土器2点、東磐井郡川崎村河崎の柵擬定地出土土器2点の合計21点である。宿・蛇瓶鉢遺跡および河崎の柵擬定地出土試料は(財)岩手県文化振興事業団理蔵文化財センターの調査によるもの、滝沢村の2遺跡の試料は同村教育委員会所蔵の試料である。

分析は誘導結合プラズマ発光分光分析法(inductively coupled plasma atomic emissions spectrometry(以下ではICP-AESと略す))によった。装置は筑波大学分析センター設置の日本ジャーレル・アッシュ社製ICAP-757Vである。

2. 分析

作成する試料は、まず土器の破損部から1cm四方ほどの破片を採取して表面を電動やすりで研磨し、表面の付着物を取り除く。次に1×0.5cmほどの土器破片を瑪瑙乳鉢で粉砕・すり潰す。すり潰された粉末を0.05g秤量し、蓋付きのテフロン容器に入れる。それに、硝酸0.5ml、過塩素酸0.5ml、フッ化水素酸1.0mlを順に加える。蓋を閉め、容器ごとホットプレート上に置き、100°Cで6時間以上熱する。次に、蓋を開け160°Cに加熱し、蒸発乾固させる。乾固された試料に6規定蒸留塩酸1.0mlを加え、160°Cで再び蒸発させる。しばらく放冷後、1規定硝酸を加え、100°Cに加热する。試料が完全に溶けていることを確かめた後、1規定硝酸を加え、1000倍に希釈し、50.00gの溶液試料を得る。また、土器の破損断面が黒色であり、炭素を多量に含むと予想できるので、粉砕後、マッフル炉内を用いて500度で2時間加熱し、炭素を除去したものを分析した。

生の粘土試料については、マッフル炉を用いて100°Cで十分乾燥させた後、1立方cmほどの粘土塊をすり潰し、それを再びマッフル炉に入れ、500°Cで2時間加熱した。秤量以下の作業は土器試料と同じである。

上記の方法で得られた溶液試料をICP-AESで定量分析した。標準試料には、旧地質調査所発行のJA1、JB1a、JG1a、JGb1、JR1、JSd1を用いた。Ti・Al・Fe・Mn・Mg・Ca・Na・K・P・Ba・Cr・Cu・Li・Sc・Sr・V・Y・Zn・Zrの19元素を測定した。これらの元素は、メイスン、B. (松井・一国訳1970)の地殻平均で存在度が高いとされる元素のうち、20ppm以上含まれる元素のほとんどを含むので、地質的背景を考えながら土器胎土成分の地域差を考察するのに利用できる。

3. 結果

分析結果を表に掲載し、試料ごとの全元素濃度をグラフにした(第18図)。全試料に含まれる濃度について、含有量が多い元素から順に解説する。

Alは9.1~12.1%含まれる。遺跡や試料の種類ごとのばらつきは大きくない。

Feは3.8~8.5%含まれる。ばらつきが若干あるが、遺跡や試料による違いとして読み取ることはできない。

Mgは0.31~1.73%含まれる。多くは1%以下だが、2点の粘土試料が1.6%を越す。

(7) 宿・蛇鰐鉗遺跡

Kは0.47~1.25%含まれる。遺跡や試料ごとのばらつきが大きい。宿・蛇鰐鉗出土試料は全体に低濃度であるが、試料6だけは特に高い値である。

Caは0.31~1.12%含まれる。遺跡や試料ごとのばらつきが若干ある。2点の粘土試料が高濃度である。

Naは0.71~0.97%含まれる。遺跡や試料の種類によるばらつきはほとんどない。

Pは0.02~0.44%含まれる。0.18%を越す2点以外を除き、他は0.07%以下である。

Mnは0.03~0.1%含まれる。粘土試料2点と大釜館・八幡館山出土試料が0.05%を越えており比較的高い。

Baは0.03~0.05%含まれる。大釜館・八幡館山出土試料に若干高いものが多い。

Crは29~261ppm含まれる。大釜館・八幡館山・河崎の柵擬定地出土試料は42ppm以下、他は皆60ppm以上であり、遺跡ごとのばらつきが比較的大きい。

Vは90~202ppm含まれる。

Zrは44~120ppm含まれ、多くは100ppm以上である。宿・蛇鰐鉗出土試料6と河崎の柵擬定地出土試料および宿・蛇鰐鉗出土の粘土試料が65ppm以下であり、低濃度である。

Srは68~117ppmである。遺跡や試料の種類によるばらつきがほとんどない。

Znは54~109ppm含まれる。試料にばらつきがいくらかある。

Liは13~41ppmである。多くは25ppm以下である。多少濃度に違いはあるが、遺跡ごとの共通性はない。

Scは15~25ppmである。遺跡や試料の種類によるばらつきはほとんどない。

Cuは12~25ppmである。全体に多少ばらつき、遺跡や試料の種類ごとのまとまりは見えない。

Yは7~17ppmである。宿・蛇鰐鉗出土試料内に多少ばらつきがあるが、遺跡や試料ごとの違いとしてまとめることはできない。

4. 資料の検討結果

(1) 土器堆積中に沈着した可能性のある元素

Pの地殻平均は0.1%であり、筆者が分析してきた限りでは、各地の粘土に含まれるP濃度は高くても0.2%以下である。普通、Pが沈着したと考えられる場合にはBaやSrも増加する場合が多い。P濃度が0.44%の試料19の場合、試料18と比較するとBaが80ppm、Srが20ppmほど多い。一般に、KとBa、そしてCaとSrとが正の相関を示す。両者を比較するとK濃度は試料18のほうが高いが、逆にBa濃度は試料19のほうが高い。Caの場合、両試料の濃度にはほとんど違いはないが、Sr濃度は19の方が高い。したがって試料19の場合、P、BaとSrは上器が土中に堆積している間に沈着した可能性が高いと見るべきであろう。他の試料については、P濃度が0.2%以下であることから、土中で添加された元素は見られない。

(2) 宿・蛇鰐鉗遺跡出土土師器と他試料との比較

一般には、Ca・Na・Kの3元素を用いれば、產地ごとの粘土の差を見ることができ、東北地方の第四紀層の粘土を用いた場合には、K/Na+CaとCa/Na+Kの2つの指標が、產地ごとの成分の違いを良く反映する（松本 2003）。第19図1に今回の全試料のその2つの指標の値を示した。この指標では、横軸の値が右に寄るほどKの比率が高く、縦軸の値が上に向かうほどCaの比率が高いことになる。第19図から、大釜館・八幡館山遺跡出土試料は、宿・蛇鰐鉗遺跡出土試料よりもKの比率の高い地域の原料が利用されており、前2遺跡と後者の遺跡とで胎土の產地が異なると推測できる。宿・蛇鰐鉗遺跡試料でも試料6だけは大きく離れており、胎土の產地が違うことを示している。

第19図2は、横軸にフェルシック鉱物の主要元素を用いた指標であるK/Na+Ca、縦軸にマフィック鉱物の主要元素を用いたMg/Feを取ったグラフである。これでは、河崎の柵擬定地出土試料と宿・蛇鰐鉗遺

跡の粘土試料の値が、宿・蛇鰐鉢遺跡の土師器の値と離れる。

第19図1によると、宿・蛇鰐鉢遺跡から出土した焼粘土塊と生粘土とはどちらも近い値である。また、この2試料は19元素とも比較的類似した濃度である。したがって、両者は同一地域の同一基準の粘土である可能性がある。しかし、宿・蛇鰐鉢遺跡の土師器とそれらの2試料とは、第19図でも第18図のアルカリおよびアルカリ土類元素の値でも非常に違っている。したがって、宿・蛇鰐鉢遺跡の土師器にはそれらの試料とは異なる層の粘土が利用されたと考えられる。

(3) Mn・Mg濃度から見た胎土の原料

土器に含まれるMnは、一般に0.05% (500ppm) 以下である。Mn濃度が0.05%の粘土は一般に灰白色系の粘土である。それに対し、褐色系の粘土や地表に近い土には、Mnが0.05%以上含まれる。さらに、褐色系の粘土の中には緑泥石を含むものがあり、その場合にはMg濃度も高い。群馬県の藤岡粘土の場合、Mgは0.9~2.7%である(五十嵐・藤貫 1981、五十嵐・藤貫・阿久沢 1983)。今回の2点の粘土試料のMn濃度は0.05%を越えており、Mgが1.6~1.7%である。それらには緑泥石が含まれている可能性がある。また、試料21(蛇鰐鉢遺跡SK3出土)は黄褐色であり、灰白色系の粘土ではない。一方、宿・蛇鰐鉢遺跡出土試料のMnは13点中9点まで0.05%以下であり、それらの胎土は灰白色系の粘土であると推測できる。Mnが0.05%を越える試料が4点あるが、それらのMg濃度は0.5~0.8%である。Mg濃度が0.8%の例は、宿・蛇鰐鉢遺跡出土試料の中では高めの濃度ではあるが、2つの粘土試料に比べると半分の値である。このようにMnとMgの濃度を比較すると、宿・蛇鰐鉢遺跡出土の土師器の胎土と粘土試料とは、産地が異なる可能性が考えられる。

最後に宿・蛇鰐鉢遺跡の土師器の原料となった粘土層を推測しておく。13点中9点は灰白色系の粘土であると考えられたので、遺跡の周辺であれば、花巻市二枚橋周辺の二枚橋段丘を構成する灰白色系粘土を第一の候補にあげることができるだろう。同段丘は、中川久夫によって中位段丘と把握された(中川他 1963)。中位段丘は下末吉ローム層に相当する(井上・小沼 1981)。下末吉ロームは関東地方でも縄文土器や土師器の製作に利用されている粘土層であり、北上川中流域でも同様の性質の粘土が利用されたと考えることは可能である。二枚橋段丘の場合は、礫層の上に灰白色粘土層が堆積するとされる。また、中位段丘は河遺跡がある北上川東岸側にも存在する。今後、各地の土師器のみならず、北上川中流域の二枚橋段丘(石鳥谷・花巻付近)や村崎野段丘(北上市付近)の粘土層を探取し、データを蓄積しておく必要があろう。

5.まとめ

- (1) 宿・蛇鰐鉢遺跡出土試料と大釜館遺跡・八幡館山遺跡・河崎の櫛振定地出土の試料とでは化学成分が異なる。また、宿・蛇鰐鉢遺跡出土試料のうち試料6は胎土の産地が異なると考えられる。
- (2) 宿・蛇鰐鉢遺跡出土試料のうち、土師器と粘土とでは化学成分が異なることから、胎土の産地が異なると考えられる。ただし、粘土試料2点の化学成分は類似していることから、これらについては同じ層準から採取された可能性がある。
- (3) 宿・蛇鰐鉢遺跡出土の土師器はその化学成分に基づけば北上川流域の中位段丘である二枚橋段丘を構成する灰白色系粘土が用いられていると考えられる。

<引用・参考文献>

- 五十嵐俊雄・藤貫正 1981「群馬県藤岡地区の瓦原料粘土鉱床」『未開発陶磁器原料資源調査報告書』37-59頁 工業技術院地質調査所
 五十嵐俊雄・藤貫正・阿久沢秀明 1983「埼玉県北部地区の瓦原料粘土資源」『未開発陶磁器原料資源調査報告書』

(7) 宿・蛇瓶組鉱脈

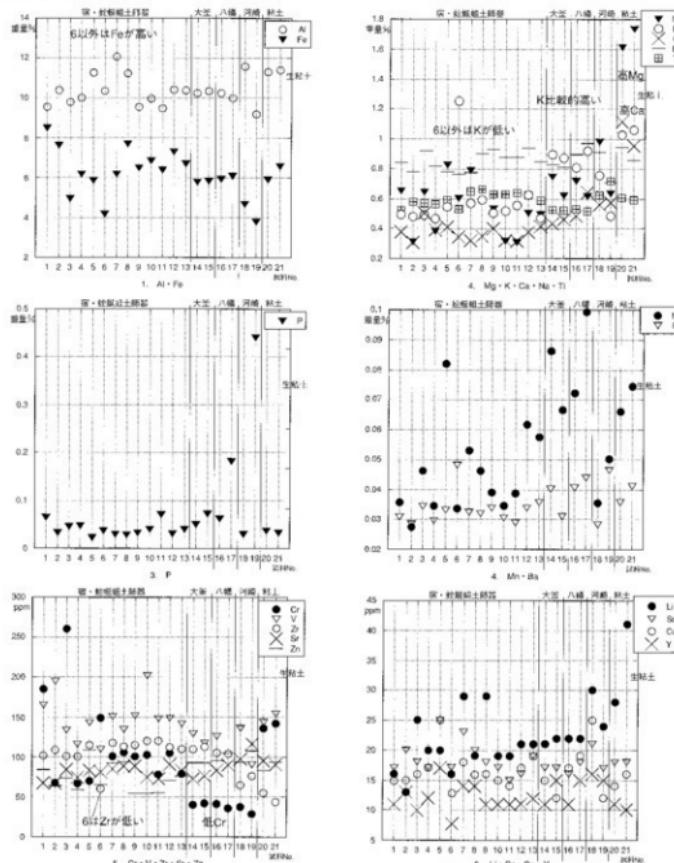
告書』97-117頁 工業技術院地質調査所

井上克弘・小沼敦 1981「北上川中流域における黒沢尻火山灰の層序・分布と強磁性鉱物の化学組成」『第四紀研究』20巻1号 1-14頁

中川久夫・岩井淳一・大池昭二・小野寺信吾・森山紀子・木下尚・竹内貞子・石田琢二 1963「北上川中流沿岸の第四系および地形」『地質学雑誌』69巻 219-227頁

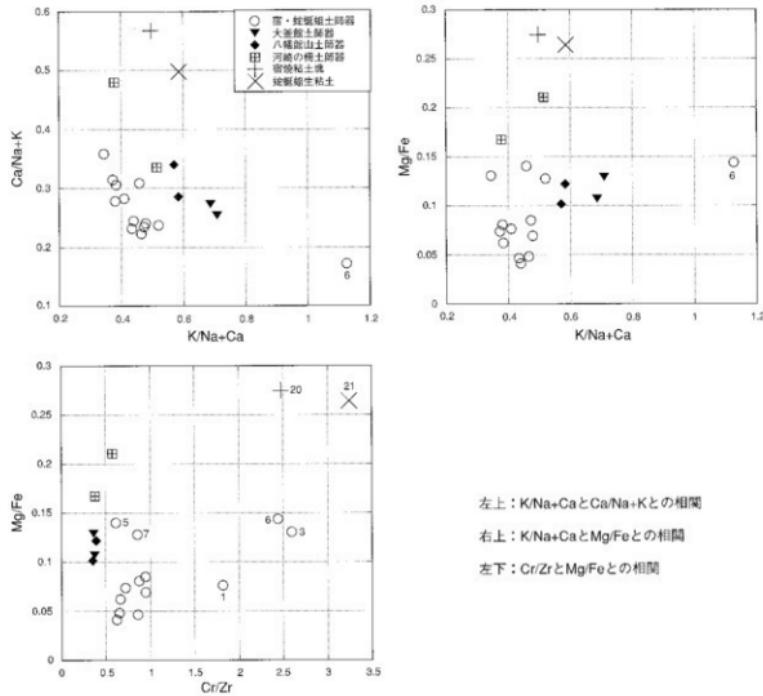
松木達也 2003「誘導結合プラズマ発光分光分析（ICP-AES）による東北北部古代土器の胎土分析」『第四紀研究』42巻1号 1-12頁 日本第四紀学会

メイソン、B. (松井義人・一同雅巳訳) 1970『一般地球化学』岩波書店 [Mason, B. 1966 Principles of Geochemistry.]



第18図 試料別元素濃度

(7) 宿・蛇鰐船遺跡



第19図 宿・蛇鰐船遺跡出土土器および比較試料の化学成分の特徴

SiO ₂	Ti	Al	Fe	Vn	Mg	Ca	Ba	K	P	Ra	Cr	Cu	Li	Sc	Si	V	Y	Zr	Eu/Na/Ca	Cu/Vn	Mg/Fe	Cr/Zr	備考	
No-01	0.5740	9.5534	8.4996	0.0556	0.6461	0.2779	0.8407	0.4961	0.0944	0.0096	171	15	16	17	64	183	11	34	102	0.4977	0.2827	0.0761	1.8149	露電少
No-02	0.5809	10.3921	7.6304	0.0275	0.3117	0.2059	0.7039	0.4798	0.0323	0.0284	61	15	13	20	64	105	12	61	109	0.4490	0.2455	0.0690	0.8263	露電多
No-03	0.5711	9.7887	4.8104	0.0681	0.6479	0.2057	0.5951	0.4915	0.0641	0.0243	261	16	25	11	84	137	10	74	101	0.3447	0.3533	0.1307	2.3984	露電少
No-04	0.5677	9.9874	6.2136	0.0343	0.3201	0.2227	0.8184	0.4629	0.0682	0.0295	67	17	20	17	73	116	12	29	101	0.3847	0.3887	0.0619	0.8282	露電少
No-05	0.5972	11.2537	7.9369	0.0119	0.8250	0.4966	0.7792	0.5493	0.0213	0.0311	70	25	29	25	83	113	17	109	115	0.4792	0.3981	0.1401	0.8126	露電少
No-06	0.5742	10.3521	4.3889	0.0325	0.6073	0.3471	0.7851	0.5264	0.0481	0.0281	149	13	16	17	83	130	7	65	61	1.3258	0.1721	0.3480	2.4162	露電少
No-07	0.6482	12.0818	6.1727	0.0259	0.7884	0.3301	0.7361	0.5607	0.0295	0.0325	151	18	29	23	85	151	14	73	118	0.5197	0.2379	0.1277	0.8156	露電少
No-08	0.6631	11.2170	7.6868	0.0961	0.6512	0.3512	0.8017	0.5915	0.0284	0.0220	196	16	19	20	89	124	14	94	113	0.4722	0.2357	0.0649	0.9144	露電少
No-09	0.6304	9.5969	6.3971	0.0980	0.3220	0.3995	0.6206	0.5063	0.0119	0.0259	101	16	19	18	89	122	11	54	113	0.5006	0.2798	0.0605	0.8768	露電少
No-10	0.6291	9.9812	6.8398	0.0145	0.3199	0.3234	0.8089	0.5291	0.0192	0.0296	102	15	19	17	73	107	11	54	126	0.4322	0.2319	0.0649	0.8449	露電少
No-11	0.6085	9.6881	6.2955	0.0388	0.3062	0.3187	0.7073	0.5534	0.0204	0.0288	76	14	19	13	73	148	11	55	120	0.4627	0.2228	0.0679	0.6513	露電少
No-12	0.6221	10.5754	7.2871	0.0604	0.3045	0.3718	0.6786	0.4273	0.0312	0.0317	105	17	21	16	90	149	11	71	112	0.4772	0.2400	0.0692	0.7428	露電少
No-13	0.5886	10.3952	6.7116	0.0275	0.4932	0.4182	0.8728	0.4710	0.0395	0.0357	79	19	21	19	83	142	12	76	130	0.3711	0.3141	0.0735	0.7280	露電少
No-14	0.5296	10.2341	5.8001	0.0607	0.7400	0.4954	0.8722	0.8995	0.0300	0.0402	49	15	31	17	73	129	11	93	130	0.3996	0.2353	0.1284	0.5630	人骨少
No-15	0.5250	10.3381	5.8154	0.0665	0.8724	0.4602	0.8551	0.8750	0.0310	0.0311	42	12	27	17	76	118	15	93	113	0.6860	0.2722	0.1672	0.7111	人骨少
No-16	0.5321	10.2396	5.8159	0.0722	0.7194	0.4874	0.8979	0.8050	0.0344	0.0307	41	17	22	16	83	126	11	96	105	0.3842	0.2857	0.1216	0.8981	人骨少
No-17	0.5182	10.8106	6.0546	0.0992	0.6176	0.6453	0.9119	0.5694	0.0349	0.0318	36	19	22	15	90	102	15	83	104	0.5095	0.3482	0.3220	0.3500	人骨少
No-18	0.6482	11.5743	6.4725	0.0355	0.9833	0.5948	0.9119	0.7561	0.0294	0.0281	38	23	20	11	73	136	16	94	65	0.5141	0.3394	0.3104	0.7367	人骨少
No-19	0.7204	9.1394	3.3032	0.0902	0.6767	0.5740	0.9702	0.6820	0.0404	0.0364	29	12	24	17	117	90	15	108	76	0.3776	0.4803	0.1674	0.3786	露電少
No-20	0.6075	11.3061	5.8386	0.0659	1.6147	1.1191	0.9416	1.0278	0.0367	0.0356	128	14	28	18	96	144	11	83	52	0.4980	0.5674	0.2744	2.4779	露電少

第7表 胎土分析 分析表一覧

単位: %～ppm (露電%)

(7) 宿・蛇艇組道路



宿・蛇艇組遺跡 調査区近景(直上から)



宿・蛇艇組遺跡 近景(対岸から)



宿・蛇艇組遺跡 遠景(南から)

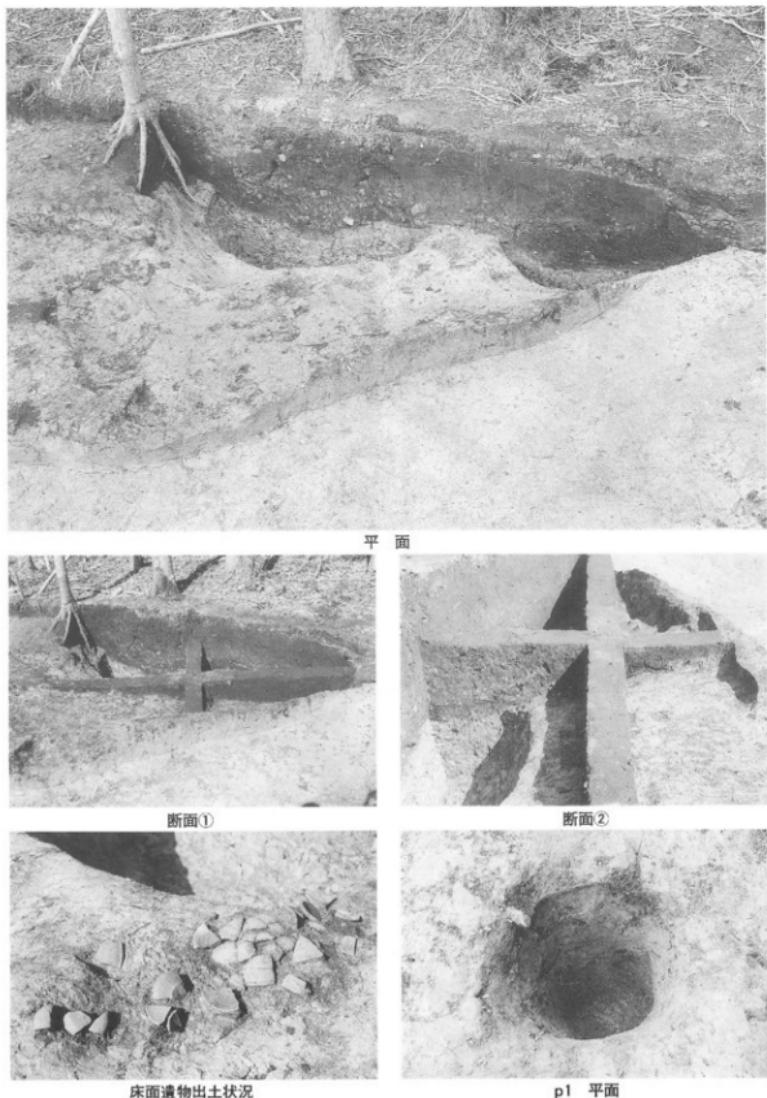


蛇艇組遺跡基本層序



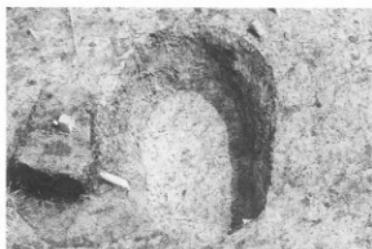
宿遺跡基本層序

写真図版 1 宿・蛇艇組遺跡調査状況

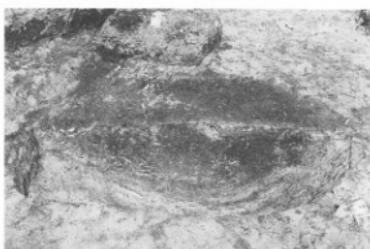


写真図版2 蛇蠍蛆遺跡 S X 1 竪穴遺構

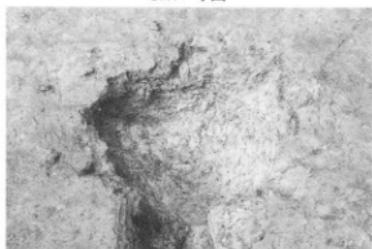
(7) 宿・蛇蟻組遺跡



SK1 平面



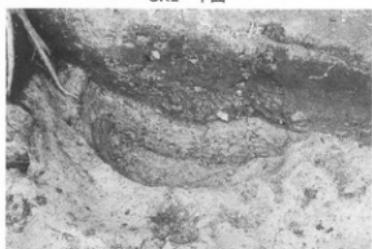
SK1 断面



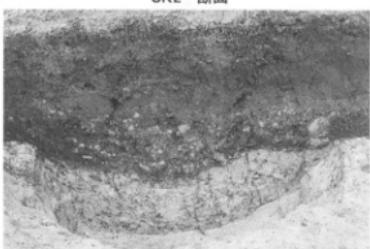
SK2 平面



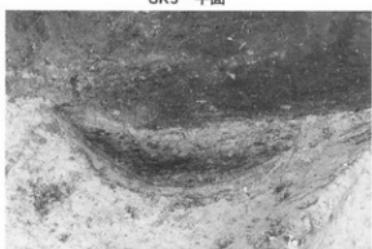
SK2 断面



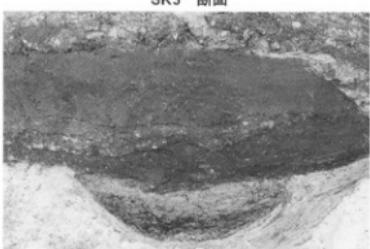
SK3 平面



SK3 断面



SK4 平面



SK4 断面

写真図版3 蛇蟻組遺跡 SK 1～4 土坑

(7) 窟・蛇蜒姐遺跡



SKT1 平面



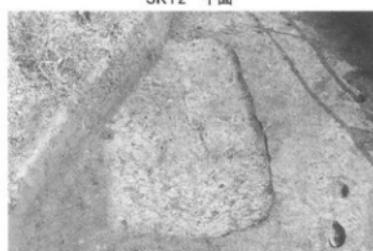
SKT1 断面



SKT2 平面



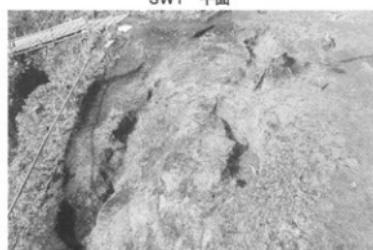
SKT2 断面



SW1 平面



SW1 断面



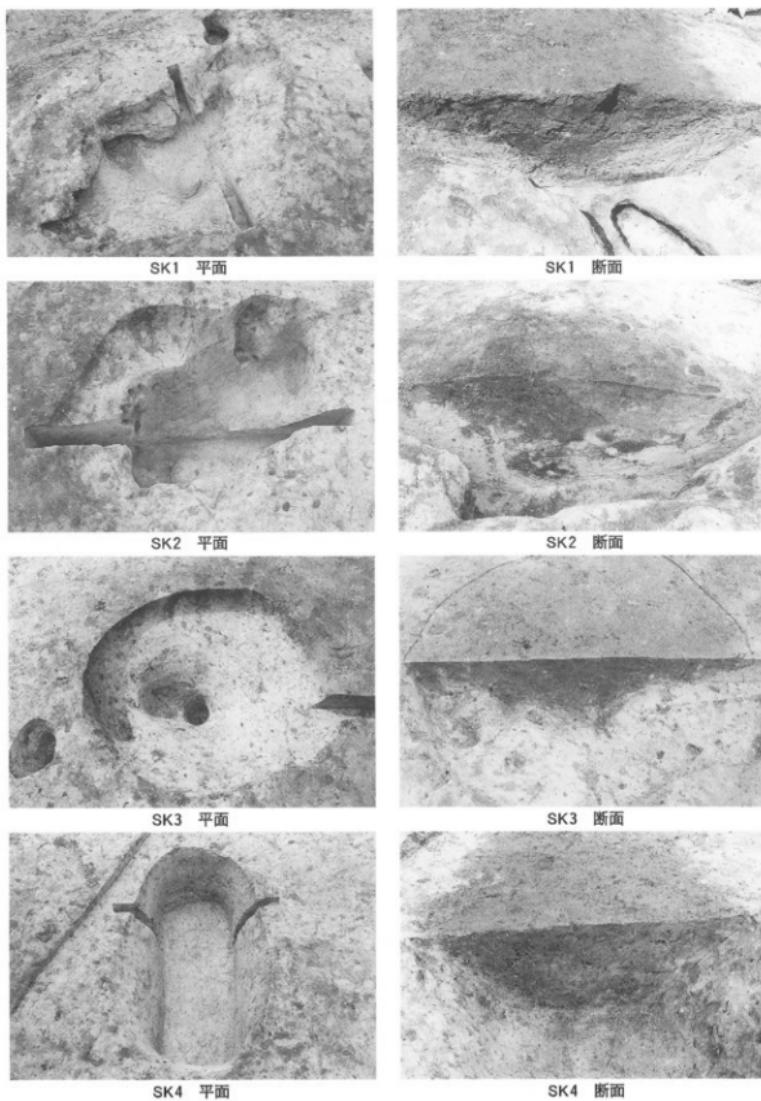
SD1-2 平面



SD1 断面 A

写真図版4 蛇蜒姐遺跡 S K T 1、2 陥し穴状遺構・S W 1炭窯・S D 1、2 溝跡

(7) 宿・蛇窓掘遺跡



写真図版5 宿遺跡SK1~4土坑

(7) 宿・施設掘遺跡



SD1 平面



SD1 断面



SD2 平面



SD2 断面



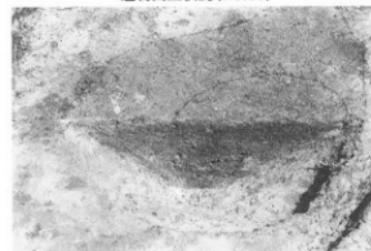
焼土集中地点



遺物出土状況 (No.89)



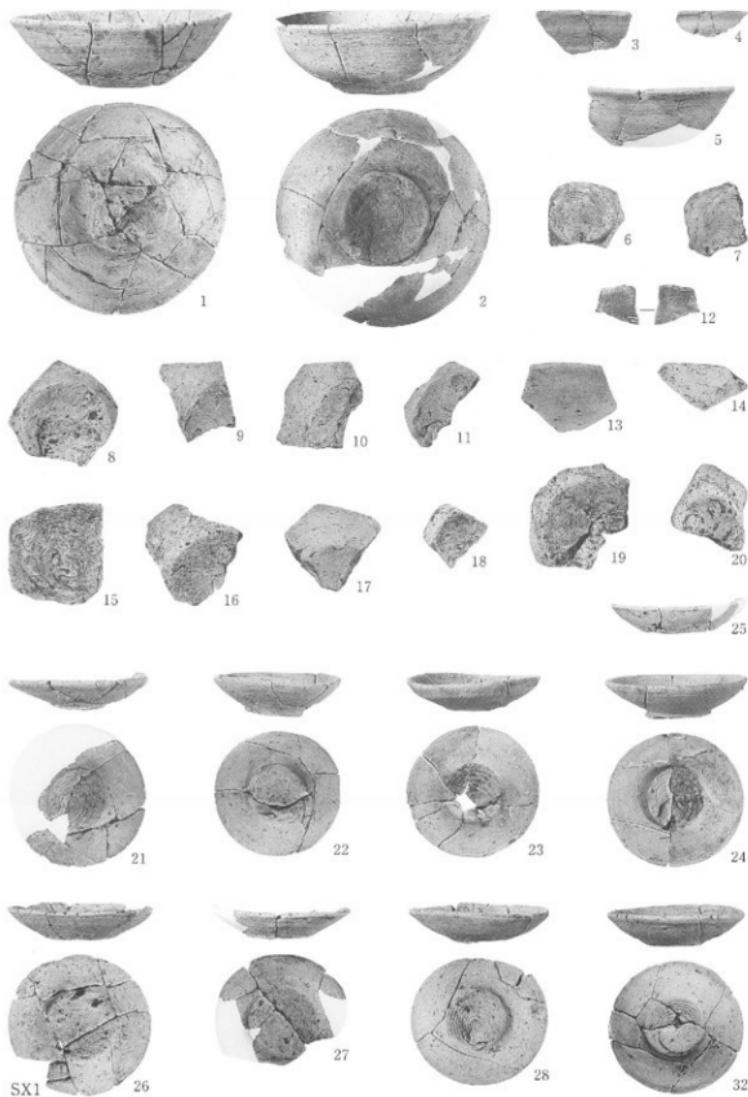
P2 断面



P14 断面

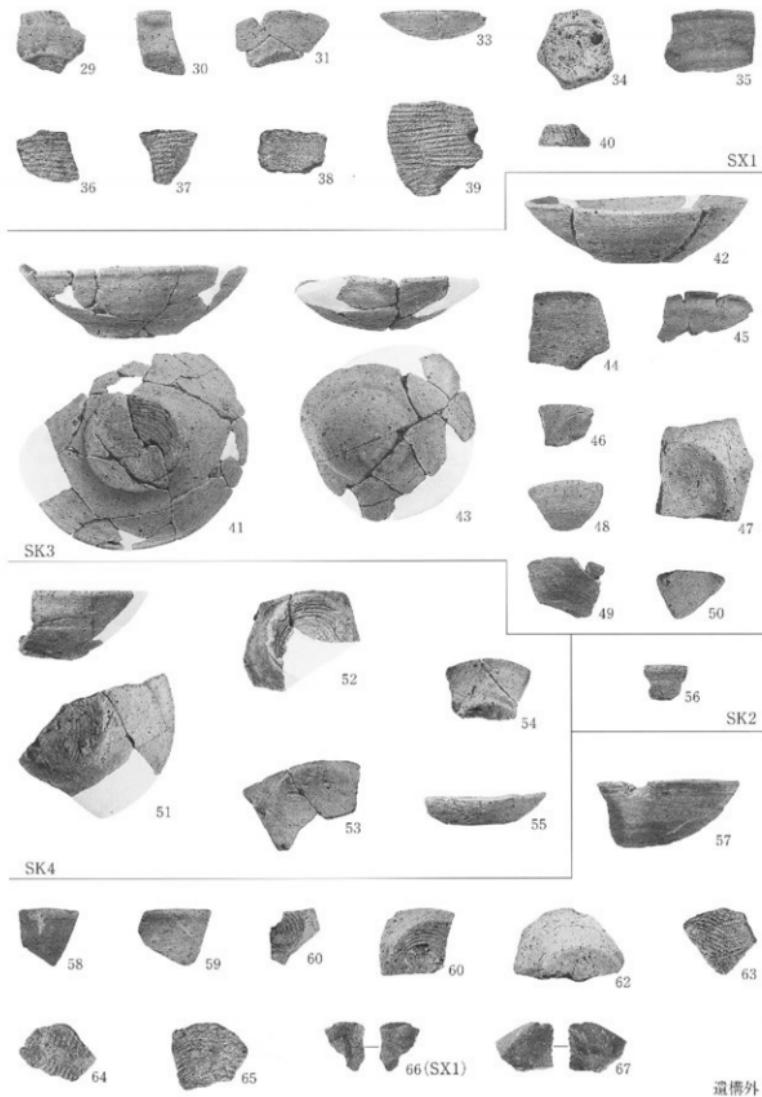
写真図版 6 宿遺跡 S D 1、2溝跡・ピット・焼土集中地点

(7) 宿・蛇蠍姐遺跡



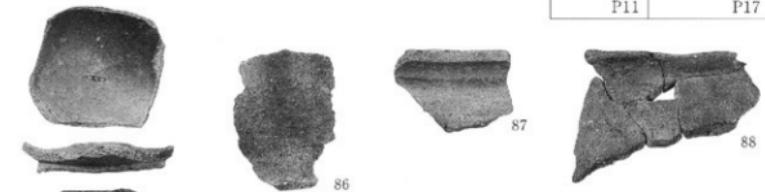
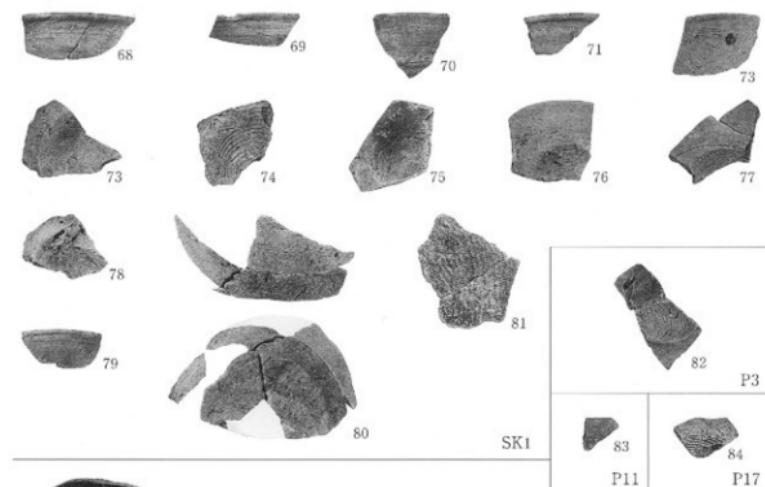
写真図版 7 蛇蠍姐遺跡出土遺物(1)

(7) 箱・並列鉗遺跡

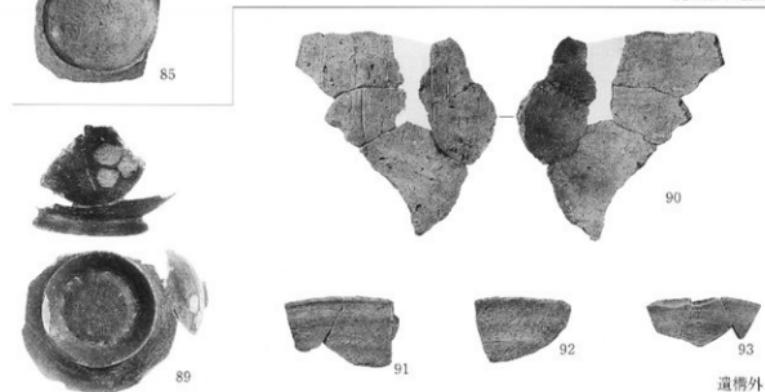


写真図版 8 蛇蟻鉗遺跡出土遺物(2)

(7) 宿・蛇窓鉢遺跡



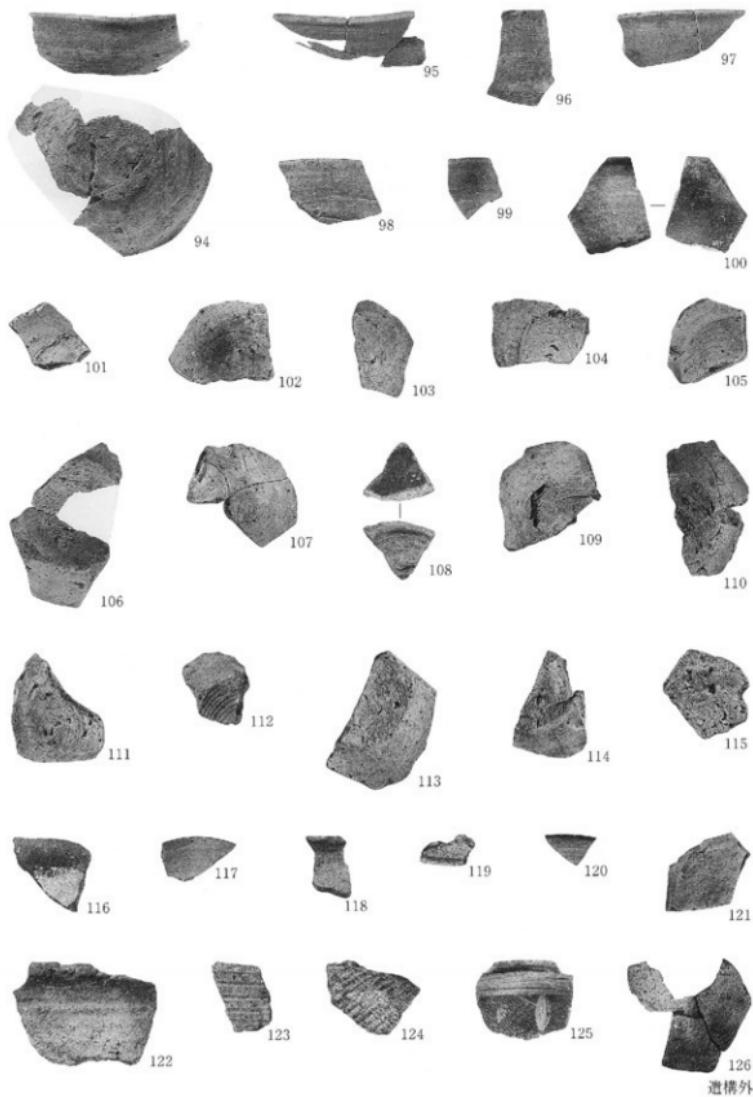
燒土集中地点



遺構外

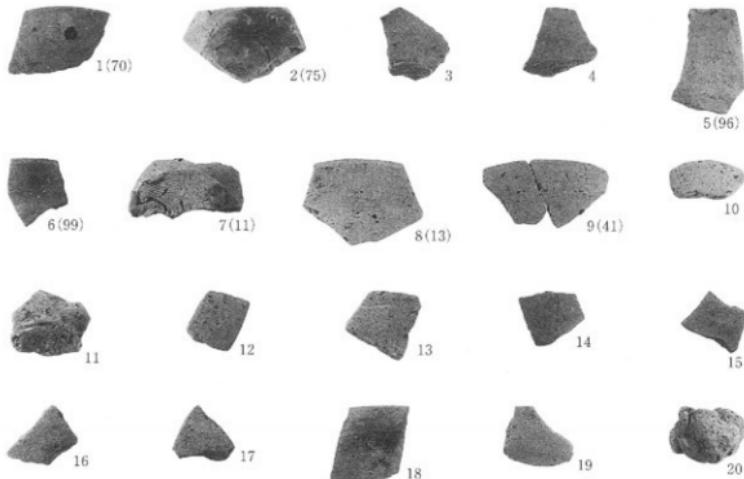
写真図版 9 宿遺跡出土遺物(1)

(7) 宿・施縫痕跡



写真図版10 宿遺跡出土遺物(2)

(7) 宿・蛇魔招遺跡



()内の数字は実測図No.に対応

写真図版11 胎土分析用試料

報告書抄録

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
宿 遺 跡	いわてけんとくまちくほくじゆ	岩手県奥州市石巻谷町八重地25 地割42ほか	ME17 -0111	39度 25分 43秒	141度 10分 29秒	2004.04.08 ~	600m ²	経営体育施設整備事業「八重地遺跡」に伴う緊急発掘調査
蛇 魔 招 遺 跡	いわてけんとうまあわせじゆ	岩手県奥州市石巻谷町八重地25 鳥取字五大堂地内	03342 ME17 -1046	39度 25分 41秒	141度 10分 30秒	2004.05.20	300m ²	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	記記事項			
宿 遺 跡	集落跡	平安時代 時期不明	土塙1基 土塙3基・溝路2条 ピット17個・焼土集中地 点1ヶ所	縄文土器 剥片石器 土師器・須恵器	両遺跡ともに出土例の少ない平安時代後半(11世紀代か)の土師器が出土			
蛇 魔 招 遺 跡	集落跡	縄文時代 平安時代 時期不明	陥入状況1基 堅穴通築1基・土塙2基 土塙2基・溝路2条・炭 窯1基	縄文土器 剥片石器 土師器・須恵器				

*緯度・経度は世界地図

(8) 中島遺跡

所 在 地 江刺市稻瀬中島56番地ほか
委 託 者 水沢地方振興局土木部道路都市課
事 業 名 稲瀬地区緊急地方道路整備事業
発掘調査期間 平成16年9月15日～10月29日

遺跡番号・略号 ME86-8847・NS-04
発掘調査面積 当初：777m² 実績：777m²
調査担当者 氷上明博 丸山浩治

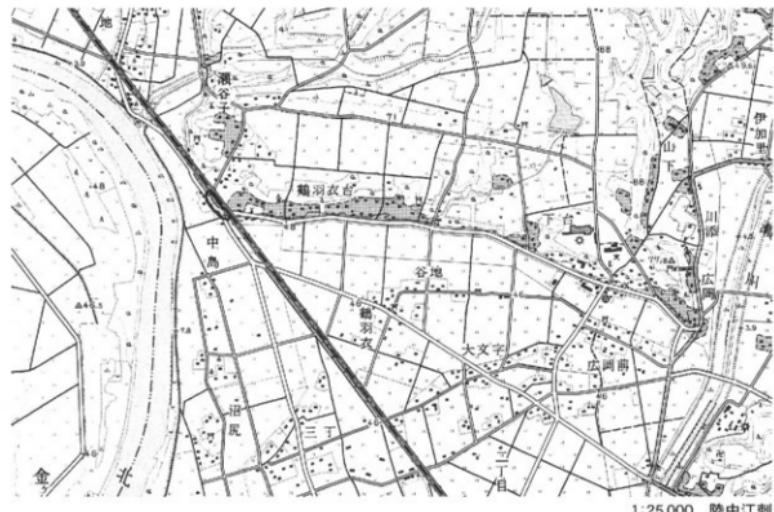
1. 調査にいたる経過

稲瀬地区緊急地方道路整備事業は、広瀬川右岸宝緑水路交差部から市道広岡から篠ノ木線交差部までの延長2.4kmの道路改築事業である。

本事業は、交通量の増大に伴い、交通の安全と円滑な流れを確保するため、現況の1車線を2車線とし合わせて歩道を整備するものであり、平成13年度から工事着手し平成16年度の完了を予定している。

当該事業区域における埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、事業主体である岩手県水沢地方振興局と岩手県教育委員会との間で協議がされた。協議の過程は、平成15年5月21日付け「水地土第166号」により水沢地方振興局土木部長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あて県道改築事業にかかる遺跡の協議があり、平成15年6月2日付け「教生第324号」により試掘調査が必要である旨回答があった。その後岩手県教育委員会は平成15年10月14日に試掘調査を実施し、平成15年10月27日付「教生第1250号」により水沢地方振興局に対して発掘調査が必要である旨回答し協議を重ねた。その結果、発掘調査を財團法人岩手県文化振興事業団の委託事業とすることとした。

(水沢地方振興局土木部)



第1図 遺跡の位置

(8) 中島遺跡

2. 遺跡の立地

遺跡は、江刺市役所の北西約4.5km、胆沢城政府跡の北4kmに位置し、北上川左岸の沖積地の微高地に立地している。標高は48m前後で、現況は宅地・畠地である。

3. 遺跡の基本層序

調査区の基本層序は下記の通りである。

I層 10YR 2/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中

II層 10YR 5/6 黄褐色 シルト 粘性中 しまり強 遺構検出面

III層 2.5GY 6/1 オリーブ灰色 粘土 粘性強 しまり強 繊 ($\sim 40\text{cm}$) 混入

*河川による堆積で同様の層が繰り返し堆積している。

4. 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の構築と思われる土坑が13基と焼土遺構が1基である。



第2図 周辺の地形・調査区の位置図 (1:5,000)

(1) 遺物

＜土坑＞ 開口部径が102cm×100cmのものから208cm×128cmのものまで13基、内窓穴の見られるもの11基である。平面形は円形又は楕円形で底部方形のものが1基ある。

土坑観察表

	遺構名	出土地点	平面形	開口部径	底部径	深さ	窓穴(開口部・深さ)
1	1号土坑	10 I	円形	136×100	78×60	120	16×18・38
2	2号土坑	10 H	円形	124×92	80×54	76	26×22・38
3	3号土坑	12 I	円形 底部方形	134×134	86×84	116	30×26・36
4	4号土坑	12 I	円形	104×100	80×62	62	18×18・40
5	5号土坑	13 I	円形	170×160	86×80	114	22×28・44
6	6号土坑	14 H	円形	112×90	100×80	30	
7	7号土坑	15 H	円形	114×96	92×92	42	20×16・16
8	8号土坑	16 H	円形	150×146	84×86	92	24×26・20
9	9号土坑	16 H	円形	156×106	106×70	62	
10	10号土坑	16 H～17H	楕円形	208×134	150×104	80	20×28・46 42×30・20
11	11号土坑	17 H	円形	160×128	128×100	79	20×26・40
12	12号土坑	18 H	円形	172×120	124×121	44	22×18・10
13	13号土坑	8 H	円形	102×100	82×78	56	18×34・20

(単位cm)

＜焼土＞ 1号土坑の傍から焼土塊を検出した。検出状況から1号土坑より新しいものと思われる。

(2) 遺物

遺物は土器が中コンテナ約1箱分、須恵器片2点、土師器片2点、石器が小コンテナ約1箱分出土している。1～20は繩文土器である。1は胴部破片で文様はR Lの横回転。2は口縁部で刻目列があり文様はL R横回転。3は胴部破片であるが磨耗が激しく不明。4は胴部で文様はR Lの横回転。5は胴部で文様は半袖絹条体圧痕文、6は底部で無文。7は胴部。8は底部で木葉痕あり。9は底部であるが不明。10は底部から胴部であるが不明。11は口縁部で平行沈線がある。12は底部から胴部であるが不明。13は底部で不明。14は口縁部。15は口縁の突起部で沈線があり突起部は肥厚。16は胴部で文様はL R横回転。17、19は胴部で沈線が見られる。18は胴部で文様はL R縦回転。20は胴部で文様はL R横回転である。21、22は須恵器の坏破片で内外ロクロナデ調整。23、24は土師器の坏破片で内外ロクロナデ調整。25～45は石器である。25、26、27、29、31は剥片。28、30はスクレイバー。32は石錐。33、34は石砲。35～37、41、42は石核。38は磨り石。39は輕石。40は磨製石斧。43、44は台石類。45は敲石である。

5.まとめ

今回の調査で調査区南側半分に旧河道があり、北東方向から南に向かって流れていたことが確認された。河道の上の遺物は付近からの流れ込みと考えられる。河道にかからなかった北側から検出された土坑は13基あったが、そのうち11基が窓穴をもつ円形または楕円形のもので、底形が方形のものが1基あった。土坑の配列が一直線に並ぶものがあったことなどから陥入穴状構造とも考えられる。

遺構の時期については、10号土坑副穴埋土から採取した炭化物の分析結果から繩文時代前期末から中期初頭の可能性がある。なお、中島遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

6. 自然科学的分析

(1) 放射性炭素年代測定結果 (AMS測定)

I A A 株式会社 加速器分析研究所

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) B P 年代値は、1950年からさかのほること何年前かを表す。
- 3) 付記した誤差は、標準偏差 (1σ) に相当する年代で、次のように算出している。
複数回（通常は4回）の測定値について χ^2 検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、ばらつきが大きい場合には不偏分散の平方根（標準偏差）と統計誤差から求めた値を比較して大きい方を誤差としている。
- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。
 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載した。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表したものである。

$$\delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_s - {}^{14}\text{A}_n) / {}^{14}\text{A}_n] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_s - {}^{13}\text{A}_{PDB}) / {}^{13}\text{A}_{PDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ${}^{14}\text{A}_s$ ：試料炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度： $({}^{14}\text{C} / {}^{12}\text{C})_s$ —または $({}^{14}\text{C} / {}^{12}\text{C})_{\pm}$

${}^{14}\text{A}_n$ ：標準現代炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度： $({}^{14}\text{C} / {}^{12}\text{C})_n$ —または $({}^{14}\text{C} / {}^{12}\text{C})_{\pm}$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ${}^{13}\text{C}$ 濃度 $({}^{13}\text{A}_s = {}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C})$ を測定し、P D B（白亜紀のペレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算する。

ただし、I A A では加速器により測定中に同時に ${}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C}$ も測定しているので、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と註記している。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの ${}^{14}\text{C}$ 濃度 $({}^{14}\text{A}_s)$ の換算した上で計算した値である。(1) 式の ${}^{14}\text{C}$ 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の推定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{14}\text{A}_s = {}^{14}\text{A}_s \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad ({}^{14}\text{A}_s \text{として } {}^{14}\text{C} / {}^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}\text{A}_s \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{14}\text{A}_s \text{として } {}^{14}\text{C} / {}^{13}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_n - {}^{14}\text{A}_s) / {}^{14}\text{A}_s] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当する B P 年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \quad (\%)$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age; yr BP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

I&A Code No.	試 料	B P 年代および炭素の同位体比
I A A A - 41330 #692-1	試料採取場所: 岩手県江刺市福浦字中島 1号焼土 試料形態: 炭化物 試料名: NS-04①	Libby Age (yr BP) $\delta^{13}\text{C}$ (%), (加速器) $\Delta^{14}\text{C}$ (%) pMC (%) $\delta^{13}\text{C}$ (%) pMC (%) Age (yr BP)
	(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正無し $\delta^{13}\text{C}$ (%) pMC (%) Age (yr BP)
I A A A - 41331 #692-2	試料採取場所: 岩手県江刺市福浦字中島 10号上坑副穴埋土 試料形態: 炭化物 試料名: NS-04②	Libby Age (yr BP) $\delta^{13}\text{C}$ (%), (加速器) $\Delta^{14}\text{C}$ (%) pMC (%) $\delta^{13}\text{C}$ (%) pMC (%) Age (yr BP)
	(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正無し $\delta^{13}\text{C}$ (%) pMC (%) Age (yr BP)

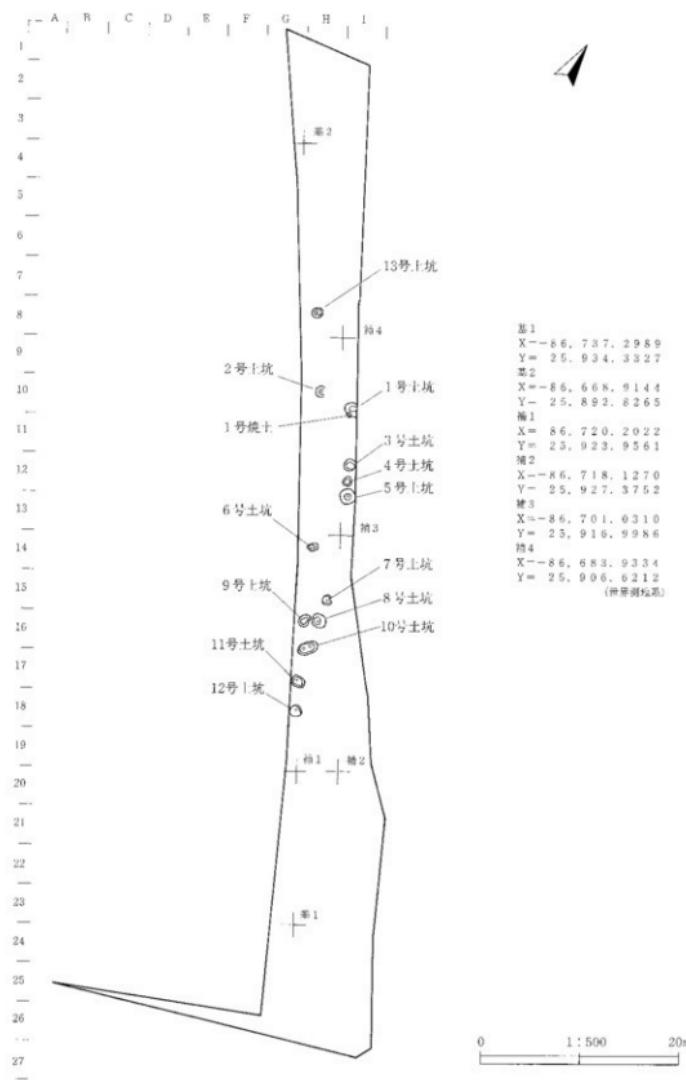
報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうろくねんほどくくつちょうさはうこくしょ
書名	平成16年度発掘調査報告書
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第469集
編著者名	水上明博 丸山浩治
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001・9002
発行年月日	西暦2005年3月25日

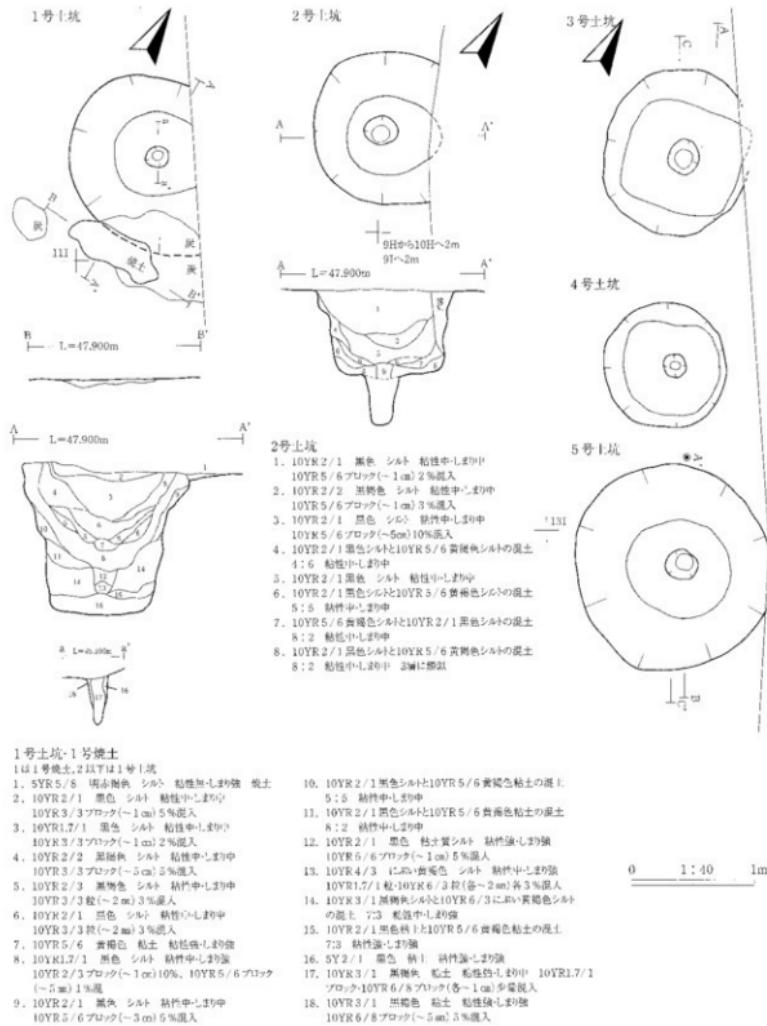
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中島遺跡	岩手県江刺市 福浦字中島	03212	ME86 -8847	39度 13分 05秒	141度 08分 01秒	2004.09.15 ~ 2004.10.29	777m ²	福浦地区緊急地方 道路整備事業に伴 う緊急発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
中島遺跡	集落跡	縄文	上坑 13基 燒土 1基	縄文土器	縄文時代中・晚期の土器主体			

*緯度・経度は世界測地系

(8) 中島道路



第3図 道構配置図



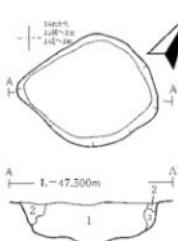
第4図 検出遺構(1)

(8) 中島遺跡



第5図 検出遺構(2)

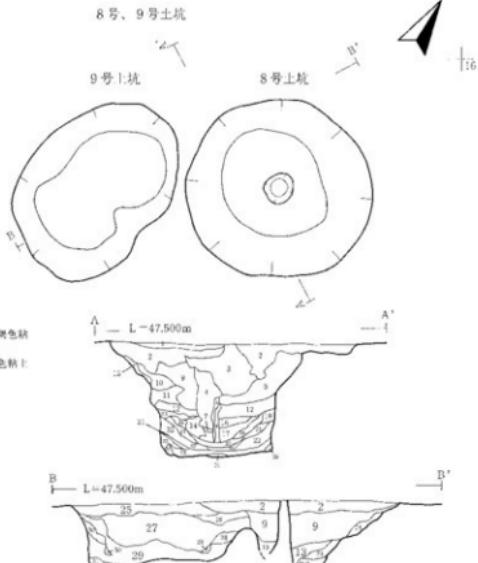
6号土坑



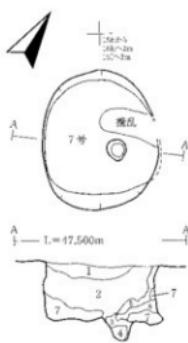
6号土坑

1. 10YR 2/1 黒色 シルト 粘性中・しり強
2. 10YR 4/2 黄褐色粘土と10YR 5/6 黄褐色～明黄褐色粘土の混上 3.5 粘性強・しり強
3. 10YR 3/1 黑褐色粘土と10YR 5/6 黄褐色～明黄褐色粘土の混上 6.4 粘性強・しり強

8号、9号土坑



7号土坑



7号土坑

1. 10YR 2/1 黒色 シルト 粘性中・しり強
2. 10YR 3/1 黄褐色粘土と10YR 4/2 黄褐色粘土の混上 6.4 粘性中・しり強
3. 10YR 4/4 黑褐色粘土と10YR 5/4 に多い黄褐色粘土の混上 5.5 粘性強・しり強
4. 10YR 3/2 黄褐色 粘土 粘性強・しり強
5. 10YR 4/2 黄褐色粘土と10YR 5/6 黄褐色～明黄褐色粘土の混上 1.6 黏性強・しり強
6. 10YR 4/2 黄褐色粘土と10YR 2/2 黄褐色シルトの混土 6.4 粘性強・しり強
7. 10YR 2/2 黄褐色 粘土 粘性強・しり強

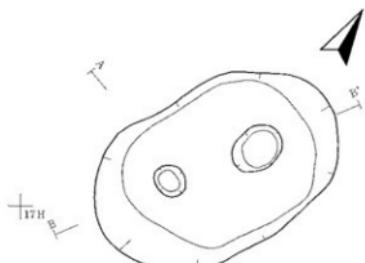
0 1:40 1m

第6図 検出遺構(3)

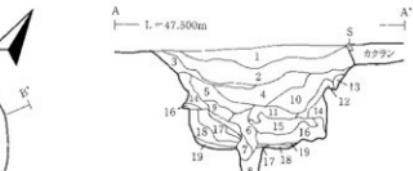
1. 10YR 3/2 黑褐色～灰黒褐色 シルト 粘性中・しり強
2. 10YR 3/2 黑褐色～灰黒褐色 シルトと10YR 2/2 黄褐色シルトの混土(後者ブロック状) 6.4 粘性中・しり強
3. 10YR 2/2 黄褐色 シルト 粘性中・しり強 10YR 3/2 2ブロック10%混入
4. 10YR 2/3 黄褐色 粘土 粘性強・しり強 10YR 5/6 6cm(～5cm) 1%泥下混入
5. 10YR 2/3 黄褐色 粘土 粘性強・しり強 10YR 5/6 6cm(～5cm) 1%泥下混入
6. 10YR 2/3 黄褐色 粘土 粘性強・しり強 10YR 5/6 6cm(～5cm) 1%泥下混入
7. 10YR 2/2 黄褐色 粘土 粘性強・しり強
8. 10YR 3/2 黄褐色 粘土質シルト 黃褐色中・しり強 10YR 4/2 グラウイナヤツヒ20%
9. 10YR 4/2 黄褐色 粘土シルト 粘性中・しり強
10. 10YR 1 黑褐色 粘土質シルト 黃褐色中・しり強 10YR 5/6 6ブロック(～1cm) 10%
11. 10YR 5/6 黑褐色～灰黒褐色 シルト 黃褐色中・しり強 10YR 5/6 6ブロック(～1cm) 10%
12. 10YR 2/1 黄褐色粘土シルトと10YR 4/2 黄褐色粘土シルトの混土 5.5 黏性中・しり強
13. 10YR 5/2 黄褐色 灰黒褐色 シルト 1.2%泥下混入
14. 10YR 1 黑褐色粘土質シルトと10YR 5/3 黄褐色粘土シルトの混土 5.5 黏性強・しり強 10YR 5/6 6ブロック(～1cm) 7%泥下混入
15. 10YR 5/6 黑褐色～灰黒褐色 シルト 10YR 1/ 黑褐色粘土質シルト 10YR 5/2 黄褐色粘土質シルトの混土(後者ブロック状) 2.5 黏性強・しり強
16. 10YR 4/2 黄褐色 粘土質シルト 黃褐色中・しり強 10YR 5/6 6ブロック(～1cm) 10%泥下混入
17. 10YR 2/1 黑褐色 粘土質シルト 黃褐色中・しり強 10YR 5/6 6ブロック(～1cm) 4%泥下混入
18. 10YR 5/6 黑褐色～灰黒褐色 シルト 黃褐色中・しり強 10YR 4/2 グラウイナヤツヒ20%
19. 10YR 3/1 黄褐色 粘土質シルト 黃褐色中・しり強 10YR 5/6 6ブロック(～2cm) 10%泥下混入
20. 10YR 2/1 黑褐色 粘土質シルト 黃褐色中・しり強 10YR 5/6 6ブロック(～7cm) 3%泥下混入
21. 10YR 3/2 黄褐色 シルト 粘性中・しり強 10YR 5/6 6ブロック(～7cm) 4%泥下混入
22. 10YR 3/1 黄褐色粘土質シルト 黃褐色中・しり強 10YR 5/6 6ブロック(～7cm) 4%泥下混入
23. 10YR 5/2 黄褐色粘土質シルト 10YR 3/2 黄褐色シルト 10YR 5/6 黄褐色 黄褐色粘土質土の混土 8.2 黏性中・しり強
24. 10YR 5/2 黄褐色粘土質シルト 10YR 5/6 黄褐色 黄褐色粘土質土の混土 5.5 黏性中・しり強
25. 10YR 5/2 黄褐色粘土質シルトと10YR 5/6 黄褐色 黄褐色粘土質土の混土 5.5 黏性中・しり強
26. 10YR 3/2 黄褐色 シルト 粘性中・しり強
27. 10YR 5/2 黄褐色 粘土質シルト 黃褐色中・しり強 10YR 5/6 6ブロック(～7cm) 4%泥下混入
28. 10YR 5/2 黄褐色 粘土質シルト 黃褐色中・しり強 10YR 5/6 6ブロック(～7cm) 4%泥下混入
29. 10YR 5/2 黄褐色粘土質シルト 10YR 3/2 黄褐色シルト 10YR 5/6 黄褐色 黄褐色粘土質土の混土 8.2 黏性中・しり強
30. 10YR 5/2 黄褐色粘土質シルトと10YR 5/6 黄褐色 黄褐色粘土質土の混土 5.5 黏性中・しり強
31. 10YR 5/2 黄褐色粘土質シルトと10YR 2/1 黑褐色粘土質シルトの混土 5.5 黏性中・しり強

(8) 中島遺跡

10号土坑



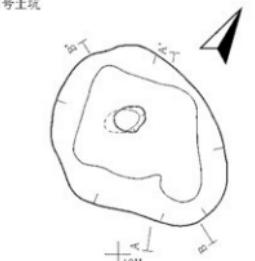
B
— L = 47.500m



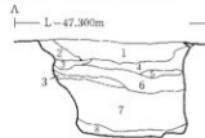
10号土坑

1. 10YR 2/2 黒褐色 シルト 粘性中・しまり強
2. 黒褐色 シルト 粘性中・しまり強
3. 10YR 3/1 黒褐色シルト 10YR 4/2 明黄褐色粘土質シルト 10YR 5/6 黄褐色~明黄褐色粘土の混土(後者プロック状) 5:4:1 粘性中・しまり強
4. 10YR 3/2 黃褐色 シルト 粘性中・しまり強 10YR 5/5/6 黑(5-5mm) 1%混入
5. 10YR 2/2 黑褐色シルトと10YR 4/1 黑褐色粘土の混土 5:5 黏性中・しまり強 10YR 5/6 黑(5-5mm) 1%混入
6. 10YR 2/1 黑褐色シルト 10YR 5/3 に黒褐色粘土、10YR 5/6 黄褐色~明黄褐色粘土の混土(中土者クリア化) 5:4:1 粘性中・しまり強
7. 10YR 3/1 黑褐色シルト 10YR 5/3 に黒褐色粘土、10YR 5/6 黄褐色~明黄褐色粘土、10YR 5/6 黄褐色~明黄褐色粘土の混土 4:4:1:1 粘性中・しまり中
8. 10YR 5/3 に黒褐色粘土、10YR 5/6 黄褐色~明黄褐色粘土、10YR 3/1 黑褐色シルトの混土 5:4:1 粘性中・しまり中
9. 10YR 2/2 黑褐色シルトと10YR 4/1 黑褐色粘土の混土 7:3 粘性中・しまり強 10YR 5/6 黑(5-5mm) 1%混入
10. 10YR 5/2 黑褐色 シルト質シルト 粘性中・しまり強
11. 10YR 5/3 に黒褐色粘土、10YR 2/1 黑褐色シルト 10YR 5/6 黄褐色~明黄褐色粘土の混土(後者2者プロック状) 7:2:1 粘性中・しまり強
12. 10YR 5/1 黑褐色粘土と10YR 5/6 黄褐色~明黄褐色粘土の混土(後者プロック状) 8:2 粘性中・しまり強
13. 10YR 5/2 黑褐色 シルト質シルト 粘性中・しまり強 水成堆積(テミナ)
14. 10YR 5/1 黑褐色粘土、10YR 2/1 黑褐色シルト、10YR 5/6 黄褐色~明黄褐色粘土の混土(後者2者プロック状) 7:2:1 粘性強・しまり強
15. 10YR 5/1 黑褐色粘土と10YR 5/6 黄褐色~明黄褐色粘土の混土(後者グリダイ化) 5:5 粘性強・しまり強
16. 10YR 3/1 黑褐色粘土、10YR 5/2 黑黄褐色粘土、10YR 5/5 黄褐色~明黄褐色粘土の混土(中土者クリア化) 5:4:1 粘性強・しまり強
17. 10YR 4/1 黑褐色粘土、10YR 5/6 黄褐色~明黄褐色粘土、10YR 2/1 黑褐色粘土の混土(中土者クリア化) 5:4:1 粘性強・しまり強
18. 10YR 5/6 黄褐色~明黄褐色粘土と10YR 4/1 黑褐色粘土の混土(後者グリダイ化) 8:2 粘性強・しまり強
19. 10YR 2/1 黑褐色 シルト 粘性中・しまり中 10YR 5/6 黑(5-2cm) 5%混入

11号土坑



B
— L = 47.300m



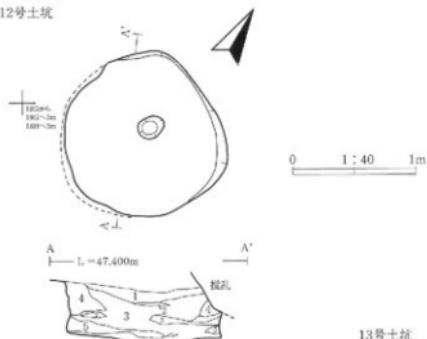
11号土坑

1. 10YR 2/2 黑褐色 シルト 粘性中・しまり強
2. 10YR 5/3 に黒褐色 シルト質シルト 粘性中・しまり強
3. 10YR 5/3 に黒褐色 シルト質シルト 粘性中・しまり強 10YR 2/2 黑褐色シルト、10YR 6/8 明黄褐色粘土の混土 5:4:1 粘性強・しまり強
4. 10YR 5/3 に黒褐色 シルト質シルト 10YR 2/2 黑褐色シルト、10YR 6/8 明黄褐色粘土の混土 5:3:2 粘性強・しまり強
5. 10YR 6/8 黄褐色 粘土 粘性強・しまり強
6. 10YR 5/3 黄褐色 シルト質シルト 10YR 6/8 明黄褐色粘土、10YR 2/2 黑褐色シルトの混土 4:4:2 粘性強・しまり強
7. 10YR 5/6 黄褐色 粘土 粘性強・しまり強 10YR 5/3 粘土の混入 10%混入
8. 10YR 3/1 黑褐色 シルト 粘性強・しまり強

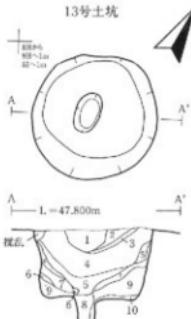
0 1:40 1m

第7図 検出遺構(4)

12号土坑

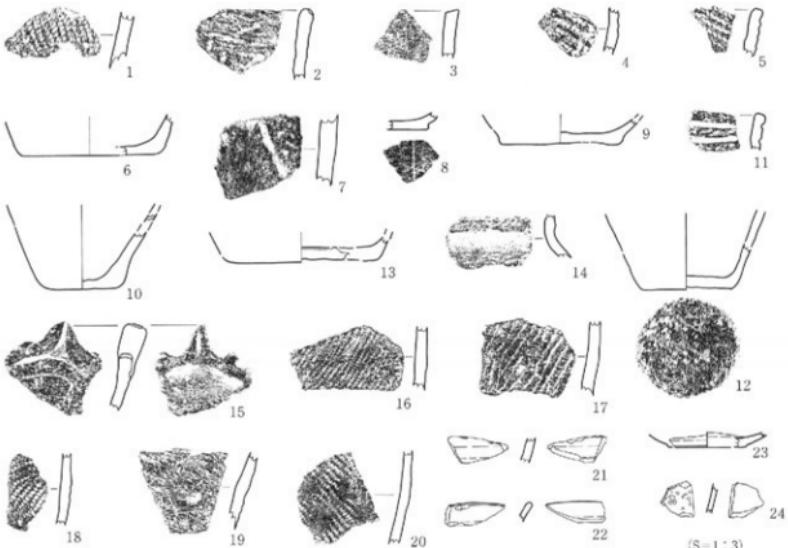


13号土坑

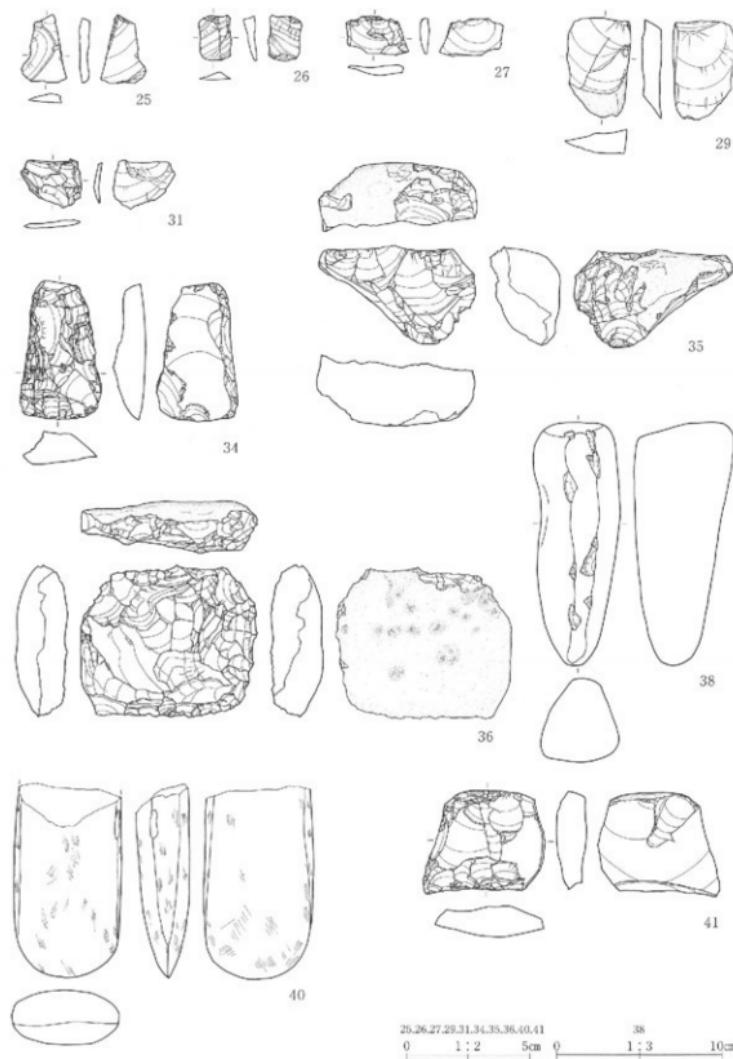


13号土坑

1. 10YR 2/1 黑色 シルト 粘性中・しづ中
2. 10YR 2/1 黑色 シルト 粘性中・しづ中
3. 10YR 2/2.5 黄褐色 シルト 粘性中・L.鉄強
4. 10YR 2/1 黑色 シルト 粘性中・L.鉄強 10YR 5.5/6 ブロック(~1cm) 1%
混入
5. 10YR 2/1 黑色シルト10YR 4/2 黄褐色シルトの混土 7:3 粘性中・L.鉄中
10YR 5/6 ブロック(~1cm) 3% 鉄入
6. 10YR 5/6 黄褐色色粘土 10YR 4/2 黄褐色シルト、10YR 2/1 黑色
シルトの混土 5:3:2 粘性中・L.鉄強
7. 10YR 2/1 黑色シルト 10YR 4/2 黄褐色シルト、10YR 5.5/6 黄褐色色
粘土の混土 5:3:2 粘性中・L.鉄強
8. 10YR 2/1 黑色 热土質シルト 粘性強・しづ中
9. 10YR 2/1 黑色 シルト 粘性中・L.鉄強 10YR 5.5/6 ブロック
(~1cm) 10% 鉄入



第8図 検出構造・出土遺物(1)



第9図 出土遺物(2)



土層断面(北側)南から



土層断面(南側)北から



調査前風景(調査区南側から)



1号焼土断面(南側から)



1号土坑完掘(西側から)



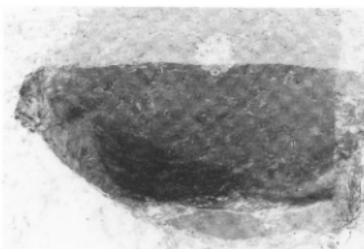
1号土坑断面(西側から)

写真図版 1 検出遺構

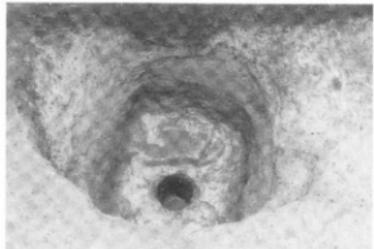
(8) 中鳥遺跡



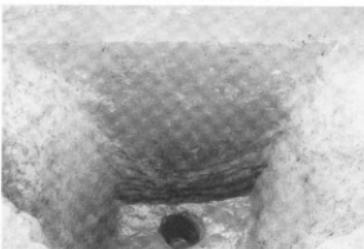
2号土坑完掘(南側から)



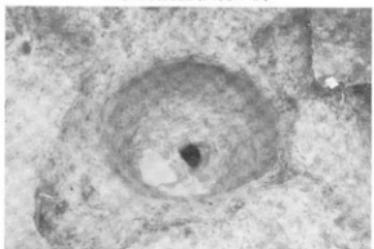
2号土坑断面(南側から)



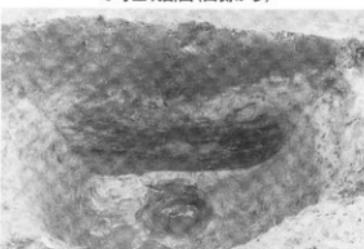
3号土坑完掘(西側から)



3号土坑断面(西側から)



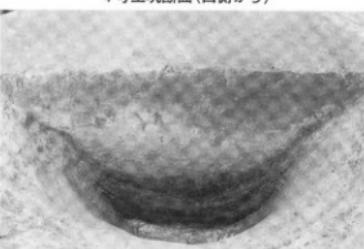
4号土坑完掘(西側から)



4号土坑断面(西側から)



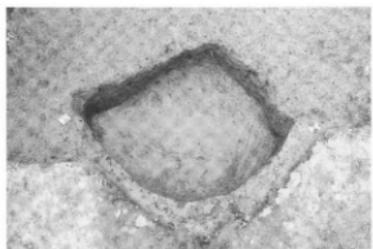
5号土坑完掘(西側から)



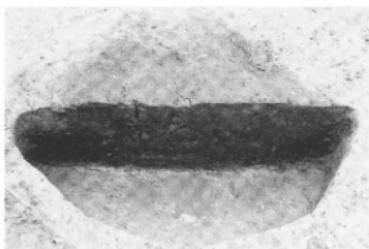
5号土坑断面(西側から)

写真図版2 検出遺構(1)

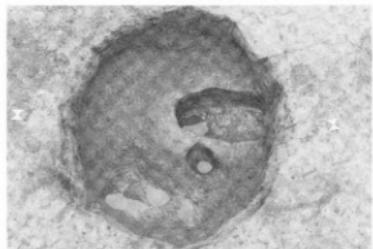
(8) 中島遺跡



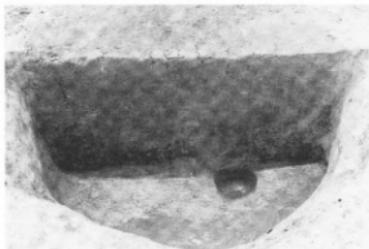
6号土坑完掘(南側から)



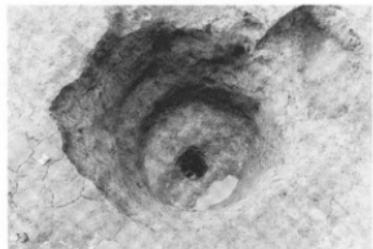
6号土坑断面(南側から)



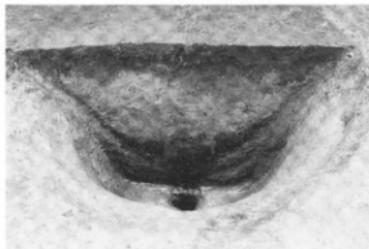
7号土坑完掘(南側から)



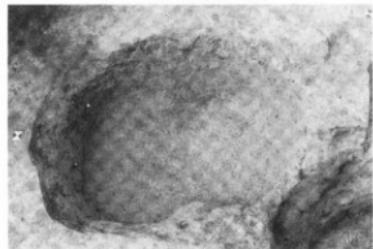
7号土坑断面(南側から)



8号土坑完掘(東側から)



8号土坑断面(東側から)



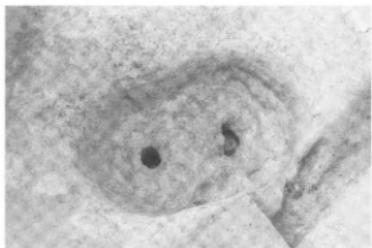
9号土坑完掘(南側から)



9号土坑断面(南側から)

写真図版3 検出遺構(2)

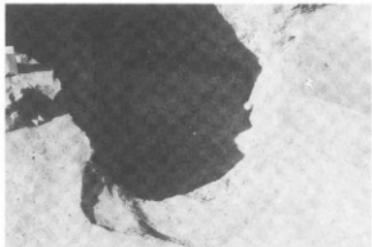
(8) 中島遺跡



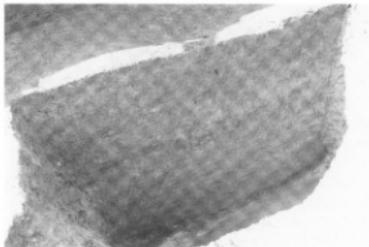
10号土坑完掘(南側から)



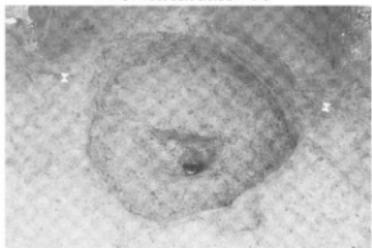
10号土坑断面(西側から)



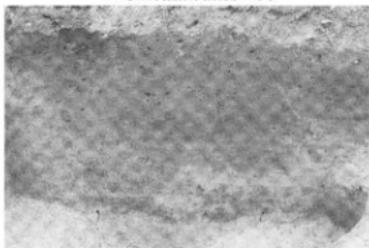
11号土坑完掘(東側から)



11号土坑断面(東側から)



12号土坑完掘(東側から)



12号土坑断面(東側から)

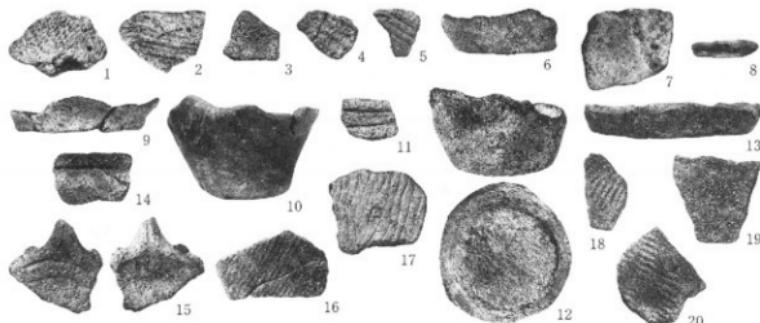


13号土坑完掘(南側から)



13号土坑断面(南側から)

写真図版 4 検出遺構(3)



縄文土器

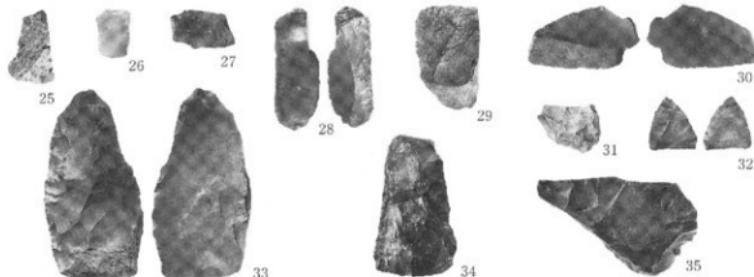
No.	出土地点・層位	残存部位	文様の特徴等
1	6号土坑・I層	側部	R.L.横回転
2	10号土坑・埋土層下位	口縁部	割目列、L.R.横回転
3	12号土坑・埋土層下位	側部	不明
4	12号土坑・埋土層下位	側部	R.L.横回転
5	12号土坑・埋土層下位	側部	單輪滑車形
6	18H・I層	底部	無文
7	18H・I層	側部	
8	20H	底部	
9	21H	底部	不明
10	21I	側から底部	無文、不明

No.	出土地点・層位	残存部位	文様の特徴等
11	22H	口縁部	平行波線
12	24I	側から底部	不明
13	24I	底部	不明
14	24I	口縁部	平行波線
15	24I	側部	平行波線、奥縦溝
16	24I	側部	L.R.横回転
17	24I	側部	單輪滑車形
18	24I	側部	L.R.横回転
19	24I	側部	平行波線
20	24I	側部	L.R.横回転

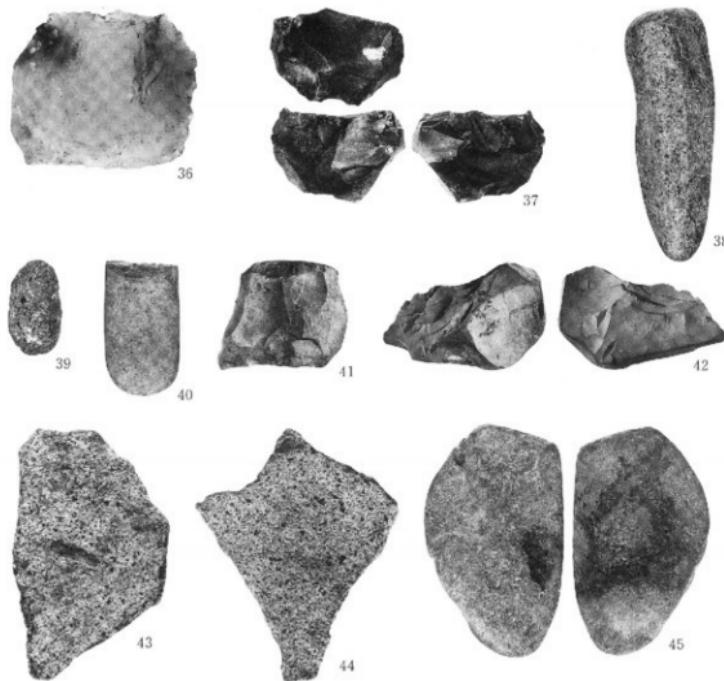
(1~24.38.40.43.44.45S = 1:3)
(25~S = 1:2)

須恵器・土師器

No.	出土地点	種類	部位	残存率	特徴	備考
21	17H・複混	須恵器	环	10%以下	内外ロクロナラ	
22	7H・I層	須恵器	环	10%以下	内外ロクロナラ	
23	18H・I層	土師器	环	10%以下	内外ロクロナラ	
24	24H・I層	土師器	环	10%以下	内外ロクロナラ	底部、回転条あり



写真図版5 検出遺物



石器

No.	出土地点・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	産地
25	8号土坑・埋土層出面下50cm	剥片	3.1	1.9	0.4	2.55	凝灰岩	奥羽山脈
26	10号土坑・埋土層出面下10cm	剥片	2.1	1.4	0.3	1.36	めのう	北上高地
27	12号土坑・埋土層下位	剥片	2.7	2.1	0.3	1.28	頁岩	北上高地
28	23号	スクレイパー	5.0	1.9	0.5	6.66	頁岩	北上高地
29	2号土坑・埋土中位	剥片	4.4	2.7	0.9	14.26	カルンフェルス	北上高地
30	18号・Ⅰ層	スクレイバー	4.1	2.6	0.9	12.21	頁岩	北上高地
31	12号土坑・埋土層下位	剥片	3.0	1.6	0.5	2.27	頁岩	北上高地
32	19号・旧河道埋土	石錐	2.3	2.0	0.3	1.32	頁岩	北上高地
33	18号・Ⅰ層	石錐	7.8	4.0	1.4	42.13	頁岩	北上高地
34	7号土坑・埋土層出面下30cm	石錐	6.0	3.3	1.3	29.77	頁岩	北上高地
35	10号土坑・埋土層出面下50cm	石錐	7.0	4.3	2.5	78.62	頁岩	北上高地
36	21号土坑・埋土上位	石錐	7.8	6.6	1.8	119.53	めのう	北上高地
37	30号遺跡土	石錐	5.4	4.3	3.2	53.63	頁岩	北上高地
38	7号土坑・Ⅰ層	磨石	16.0	7.0	5.3	721.87	凝灰岩	奥羽山脈
39	11号土坑・埋土上位	磨石	4.0	2.0	1.8	13.68	安山岩	奥羽山脈
40	8号土坑・埋土上位	磨製石斧	8.3	4.8	2.3	144.57	凝灰岩	奥羽山脈
41	21号土坑・埋土上位	石錐	5.2	5.3	1.4	35.83	頁岩	北上高地
42	30号遺跡土	石錐	6.8	4.5	2.6	70.53	頁岩	北上高地
43	10号土坑・埋土上位	台石墻	15.6	12.8	3.8	866.44	安山岩	奥羽山脈
44	10号土坑・雨穴	台石墻	15.5	9.3	3.9	856.47	安山岩	奥羽山脈
45	18号・旧河道埋土	敲石	14.3	8.5	5.1	760.50	安山岩	奥羽山脈

写真図版 6 検出遺物

(9) 岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡

所 在 地 江刺市岩谷堂字金打117-2ほか
委 託 者 水沢地方振興局農政部農村整備室
事 業 名 経営体育成基盤整備事業増沢東部地区
発掘調査期間 平成16年4月8日～6月3日

遺跡番号・略号 ME97-0365・I D Y II -04
発掘調査面積 当初：489m² 実績：489m²
調査担当者 阿部勝則 新井田えり子

1. 調査に至る経過

岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡、新地野道下遺跡は、「経営体育成基盤整備事業 増沢東部地区」の実施に伴い、発掘調査を実施することになった。当事業は、は場を大区画水田に基づき整備し営農と維持管理の省力化を図ることにより、三作業の受委託及び農地の流動化を促進し、経営規模の拡大による扱い手農家の育成を図ると共に農業の安定を目的として平成12年度から施行されている。

当事業地の一部は既に岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡、新地野道下遺跡として周知されていたため、事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについて、水沢地方振興局水沢農村整備室から岩手県教育委員会に試掘調査を依頼した。岩手県教育委員会は平成16年10月～12月にかけて試掘調査を実施し、遺跡範囲内の事業施行に伴って本調査が必要である旨の回答があった。その後、水沢地方振興局水沢農村整備室と岩手県教育委員会との間で協議が行われた結果、平成16年4月1日から平成17年3月31までの期間で、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受諾事業として発掘調査を行うこととなり、水沢地方振興局長と(財)岩手県文化振興事業団理事長の間で契約が結ばれた。発掘調査は平成16年4月8日に開始された。

(水沢地方振興局水沢農村整備事務所)



第1図 遺跡の位置

1:25,000 陸中江刺

〔9〕岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡

2. 遺跡の位置と立地

岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡は、江刺市の市街地岩谷堂の東側にある増沢地区にあり、岩谷堂城跡の北東側約2kmに位置する。同地点は国土地理院発行1:25,000地形図「陸中江刺」(N J 54-14-13-2)の図幅に入る。北緯39度12分50秒、東経141度11分28秒である。増沢地区は、北上川の支流で西流する人首川流域にあり、北東側に万松寺山(標高225m)、南西方向には館山(標高115m)があり、周囲を山々に囲まれた盆地である。遠く東側には物見山(種山、標高871m)を見ることができる。遺跡のある増沢地区は、人首川右岸に形成された低地で、北西から南東に緩く傾斜している。岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡は、標高56.0~60.5mである。推定される遺跡の範囲は、東西300m、南北300mで、面積約60,825m²である。今回の調査区は遺跡のはば中央付近に当たる。

3. 基本土層

遺跡は、南側を東流する人首川の氾濫源に立地する。調査区は、北側の山側から流れる旧御社川が形成した埋没沢上にある。現況は水田である。調査区は2カ所に分かれたため北側をA区、南側をB区と仮称した。

A区は、I層は現水田耕作土、II層は水田床土、III層はグライ化土層で、遺構検出面である。

B区は、すべての層が調査区全域で確認できた訳ではないが、概ね以下の層序になった。I層は現水田耕作土、II層は褐色土層で酸化鉄が集積する鉄床層、III層・IV層は砂の互層で洪水堆積層、V層は灰白色を呈する火山灰層、VI層は黒褐色~青灰色を呈するグライ化土層で古代の田面跡、VII層は砂を含む褐色土層である。



第2図 周辺の地形・調査区位置図

4. 調査の概要

土坑7基、溝跡2条、礎石跡？1基、水田跡2箇所が検出された。A区では土坑6基、B区では土坑1基、溝跡2条、礎石跡？1基、水田跡2箇所、他に旧河遺2条が検出された。以下、区域毎に詳述する。

(1) 遺構

A区では耕作土直下のⅢ層で土坑が確認された。著しく擾乱を受けており、本来の形状も判然としない。2号土坑からは出土遺物があるが、磨滅が著しく、時期の詳細は不明である。4～6号土坑については、近現代以降の新しいものである可能性が高い。

B区では耕作土直下に十和田aテフラの分布を検出した。十和田aテフラは調査区の北側では検出されず、南側で明瞭に検出できた。調査区の地形は、北側が高く、南側に向かって低くなっていることから、北側がより削平を受けており、標高の低い南側に火山灰が堆積したこと等が原因として考えられる。

＜土坑＞1基検出された。北側の水田跡と重複する。覆土は底部から開口部まで火山灰が堆積していたが、精査の不手際で上層部は掘り上げてしまっている。水田跡との新旧関係は同時もしくは新しい可能性がある。覆土に堆積していた火山灰を分析した結果、十和田aテフラであるとの鑑定結果を得ている。出土遺物はないが、検出状況から古代と考えられる。

＜礎石跡？＞調査区の北端で、VI層を掘り下げる途中に、ほぼ南北に2mの間隔で並ぶ礎2個を検出した。礎は径40×25cmほどの大きさで、平坦な面を上にしている。調査区においては、西側や南側に礎の列の広がりは確認できていない。西側や北側に礎の列が延びる可能性はあるが、詳細は不明である。

＜溝跡＞2条確認している。調査区を蛇行しながらほぼ南北に走る溝跡で、御社川の旧河道上に載る。周囲にある水田跡と重複し、水田跡を切っている。2号溝跡（旧）→1号溝跡（新）の関係があり、流路もほぼ一致する。2号溝跡の覆土から近世陶器が出土しており、1・2号溝跡の時期は、近世以降と考えられる。なお、断面観察では2号溝跡に切られる洪水分積層も確認しているが、調査区域外に広がるよう平面形を把握するには至っていない。しかしながら北から南へ何度も流路を変えながら流れていた様子が窺える。

＜水田跡＞十和田aテフラの分布範囲から下位に遺構の存在を想定して調査を進めた。V層の火山灰を分析した結果、十和田aテフラであるとの分析結果を得ている。水田跡は、北側と南側で確認されたが、両者は2号溝跡に切られているため、双方の連続性を把握することができず、また、北側と南側で標高差が25cmほどあったことから、別々の水田跡として調査した。北側水田跡は、南北18.5m×東西4.0mの範囲を検出した。十和田aテフラの堆積が1～2cmと極めて薄く、標高の高い北側は火山灰の分布も見られず、田面すら削平されていたものと判断した。十和田aテフラ除去後の田面では、径10～30cm、深さ3～5cmほどの凹みを多数確認しており、足跡らしき痕跡も数カ所ある。調査範囲が狭かったことから、畦畔は確認できず、本来の田面の形状や面積は不明である。

南側水田跡は、南北10.5m×東西4.0mの範囲を検出した。北側を1号溝跡・2号溝跡に切られている。北側部分が落ち込んでいるのは、検出時に十和田aテフラの分布から、竪穴状の遺構の存在を想定して先に掘り下げてしまったためである。十和田aテフラの堆積が5～10cmほどあり、標高が低くなる南側ほど厚く堆積していた。十和田aテフラ除去後の田面では、径20～25cm、深さ3～5cmほどの凹みを多数確認しており、足跡らしき痕跡も数カ所ある。調査範囲が狭かったことから、畦畔は確認できず、本来の田面の形状や面積は不明である。

また、両田跡と同時期になる水路跡等の水系に関連する遺構は、調査区域内では確認できていない。

北側・南側それぞれの水田跡の土壤（VI層）について、プラントオバール分析を行った。北側は、水田上

(9) 岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡

壤としての痕跡を抽出し得なかったが、南側では水田土壤としての痕跡が抽出されている。火山灰がより厚く堆積して良好に保存されていた田面の方に稻作の痕跡が残っていた。調査所見として、作付けされた量や時間幅などの問題も考慮する必要があるが、プラントオパール分析で水田土壤の痕跡を抽出できなかつた北側水田跡においても、南側水田跡と同様に稻作が行われ、水田として使われていた可能性があるものと考えたい。

(2) 遺物

出土遺物の総量は中コンテナ(40×30×20cm)1箱である。掲載遺物は、土器5点そのうち弥生土器2点・円盤状土器品1点・須恵器2点・陶磁器3点・石器2点である。土器類は、すべて破片資料で、縄文か土師かの判別がつかないほど磨滅が著しい。須恵器の器種は、杯・長頸瓶などが見られる。時期は10世紀前後と判断される。石器は、石鏃1点・不定形石器3点・原石・石核類7点・剥片類11点・敲打石1点など計23点が出土している。剥片石器の石材は、頁岩・凝灰岩・珪質頁岩・黒曜石などがあり、敲打石にはベグマタイトが用いられている。黒曜石以外は、北上山地産のものである。

5.まとめ

岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡は、人首川右岸に形成された低地に立地する遺跡である。調査の結果、古代の水田跡や近世以降の溝跡が検出された。現況の土地利用も水田である。当遺跡の東側の高台に立地する新地野道下遺跡では、古代から中世にかけて居住域として使われた痕跡を示す遺構が確認されている。岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡は、遺跡の立地からも、古代以降、生産活動の場として使用され続けた場所であると考えられる。

なお、岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

報 告 書 抄 錄

ふりがな 書名	へいせいじゅうろくねんとくつくちょうさほうこくしょ 平成16年度発掘調査報告書						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第469集						
編著者名	阿部勝則・新井田えり子						
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001・9002						
発行年月日	西暦2005年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度	東經 度	調査期間	調査面積	調査原因
岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡 岩谷堂字金打 117-2ほか	岩手県江刺市 03212	ME97 -0365 50秒	39度 12分 50秒	141度 11分 28秒	2004.04.08 ~ 2004.06.03	489m ²	経営体育会基 整備事業「増沢東 部地区」に伴う緊 急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡	生産遺跡	古代	水田跡 上坑 縄石跡? 溝跡	2ヶ所 7基 1基 2条	土器 石器 須恵器 陶器	5点 2点 2点 3点	十和田aテフラに被覆された水 田跡を検出する。
要約	遺跡は、江刺市増沢に所在し、北上山系にあって人賀川右に延びる低地上に立地する。遺跡のほぼ中央部を渓流した結果、古代の水田跡を検出した。十和田aテフラに被覆された水田跡は、北から南へ下がる旧地形を示して造られており、プラントオパール分析でも稻作の痕跡が検証された。ただし、溝跡が狭かつたため水田1ヶ所の平面形や規模、磧等や水系等は不明である。近世以降の溝跡等も確認されており、当地區が、古くから水系を利活用して生産活動を行つた場所であることが明らかになった。						

率縦度・經度は世界測地系

岩手県、岩谷堂柳沢II遺跡の火山灰分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

岩手県江刺市とその周辺には、焼石岳や十和田など東北地方に分布する火山のほか、船良、阿蘇、三瓶、洞爺など九州地方や中国地方さらには北海道の火山に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで、岩谷堂柳沢II遺跡において発掘調査担当者により採取された火山灰試料を対象に、テフラ検出分析と屈折率測定を行って、指標テフラとの同定を行った。分析対象となった試料は、B区基本層序IV層G地点およびB区7号土坑北半覆土3層の2点である。

2. 火山ガラス比分析

(1) 分析の方法

2試料を対象に火山ガラスの形態別比率を求める火山ガラス比分析を行った。分析処理の手順は次の通りである。

- 1) 試料8gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析鏡により、1/4-1/8mmの粒子を識別。
- 5) 偏光顕微鏡で250粒子を観察し、火山ガラスの形態別比率を求める。

(2) 分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして図1に、その内訳を表1に示す。B区基本層序IV層G地点の試料には、52.4%もの火山ガラスが含まれている。火山ガラスは無色透明または白色で、量が多い順にスポンジ状に発泡した軽石型ガラス(30.0%)、繊維束状に発泡した軽石型ガラス(20.4%)、分厚い中間型ガラス(1.2%)、平板状のバブル型ガラス(0.8%)が認められる。

一方、B区7号土坑北半覆土3層の試料は、57.2%の無色透明または白色の火山ガラスが含まれている。含まれる火山ガラスは、量が多い順に繊維束状に発泡した軽石型ガラス(30.8%)、スポンジ状に発泡した軽石型ガラス(10.8%)、バブル型ガラス(8.8%)、中間型ガラス(6.8%)である。

両者を比較すると、前者にスポンジ状に発泡した軽石型、後者に繊維束状に発泡した軽石型ガラスやバブル型ガラスさらに中間型ガラスが比較的多く含まれる傾向にある。

3. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

2試料に含まれる火山ガラスについて、古澤地質調査事務所製作の温度変化型屈折率測定装置(MATO T)により、屈折率測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。B区基本層序IV層G地点の試料に含まれる火山ガラスについては、とくにスポンジ状に発泡した軽石型ガラスで消光にくく、測定が難しい状況にあった。繊維束状に発泡した軽石型ガラスの屈折率(n)は、1.505-1.509である。B区7号土坑北半覆土3層に含まれる火山ガラスの屈折

(9) 岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡

率 (n) は、1.502-1.509である。

4. 考察

B 区基本層序Ⅳ層 G 地点の試料に含まれる火山ガラスについては、一部屈折率測定が困難な火山ガラスも認められるものの、スポンジ状に発泡した軽石型ガラスが多く含まれることから、915年に十和田火山から噴出したと推定されている十和田 a 火山灰 (T o-a, 大池, 1972, 司田ほか, 1981, 司田・新井, 1992, 2003) に由来すると考えられる。また、B 区 7 号土坑北半覆土 3 層に含まれる火山ガラスは、形態組成において、B 区基本層序Ⅳ層 G 地点の試料に含まれる火山ガラスと若干違いが認められるものの、屈折率からはやはり T o-a に由来する可能性が高いように思われる。火山ガラスの形態組成が異なる理由については、分析者が現地において土層を観察する機会がなかったことから言及しがたい。

なお火山灰編年学においては、テフラの一次堆積を利用することができ基本であり、その認定には野外におけるテフラの観察が不可欠なことから、地質調査を合わせて行われることが望まれる。なお、現段階において、さらに指標テフラとの同定精度を向上させるとすれば、信頼度が高いエレクトロンプローブ X 線マイクロアナライザ (EPMA) を利用した火山ガラスの主成分化学組成分析が考えられよう。

5. まとめ

岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡において採取された火山灰試料を対象に、火山ガラス比分析と屈折率測定が行われた。その結果、十和田 a 火山灰 (T o-a, 915年) に由来すると考えられる火山ガラスを検出することができた。

文献

- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス、東京大学出版会, 276 p.
 町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス、東京大学出版会, 336 p.
 町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) 日本海を渡ってきたテフラ、科学, 51, p. 562-569.
 大池昭二 (1972) 十和田火山東麓における完新世テフラの編年、第四紀研究, 11, p. 232-233.

表 1 火山ガラス比分析結果

試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
B 区基本層序Ⅳ層 G 地点	2	0	0	3	75	51	119	250
B 区 7 号土坑北半覆土 3 層	22	0	0	17	27	77	107	250

数字は粒子数、bw: バブル型、md: 中間型、pm: 軽石型、cl: 透明、pb: 淡褐色、br: 褐色。
 sp: スポンジ状、fb: 粗面束状。

表 2 屈折率測定結果

試料	火山ガラスの屈折率(n)
B 区基本層序Ⅳ層 G 地点	1.505-1.509
B 区 7 号土坑北半覆土 3 層	1.502-1.509

温度変化型屈折率測定装置 (MATOT) による。

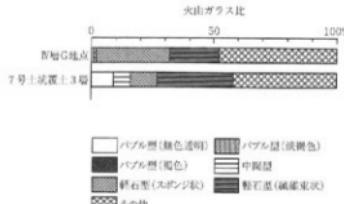


図 1 岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡の火山ガラス比ダイヤグラム

岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡古代水田土層試料の植物珪酸体分析結果報告

北方ファイトリス研究室

佐瀬 隆

1. はじめに

本報告は、岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡において十和田aテフラ(915AD)に被覆された状態で検出された古代(平安)水田土の土壤について実施した植物珪酸体(プラントオパール)分析の結果である。

2. 分析試料と分析方法

分析試料は当遺跡のBおよびG地点で検出された水田土土壤層(基本土層VI)から採取した試料各1点である。以下、これらをそれぞれ試料B、試料Gと呼ぶ。

分析方法は、プラントオパール定量分析法(藤原, 1976)と佐瀬の方法(2003)を組み合わせ、次の手順で実施した。

- (1) 各試料を乾土当たり1~2gを秤量、(2) グラスピーズの添加、(3) 過酸化水素法で有機物の分解、(4) 超音波処理による土塊の破碎、(5) デチオナイト法による鈷鉄処理、(6) 繊維と沈底法により粒径10~100μm範囲の分離乾燥、(7) 分離乾燥した試料でプレパラートを作製、検鏡。

なお、通常のプラントオパール定量分析法(藤原, 1976)では機動細胞起源の植物珪酸体を対象とするが、本分析では短細胞起源の植物珪酸体も分析対象としている。また、添加したグラスピーズは山阪のグラスピーズ(ポッターズ・パロティーニ社EGB210)を粒径範囲15~20μm、粒数密度1.3E+8(粒数/g)に調整したものである。

3. 結果

分析の結果を表1に、また、検出された代表的な植物珪酸体を図1に示した。なお、表1の珪酸体密度値は3枚のプレパラートについて計測した密度値の平均であり(全珪酸体密度値を除く)、標準偏差を合わせて表示している。以下、水田土壤認定の基準となるイネタイプ珪酸体に焦点をあて、機動細胞起源、短細胞起源を中心にして各試料から検出された植物珪酸体群について記述する。

(試料B):イネタイプ珪酸体は、機動細胞起源、短細胞起源ともに検出されない。また、イネ類起源の珪酸体も検出されない。機動細胞起源で最も密度が高いのはササタイプ(7.5×10^4 粒数/g)であり、次いでメダケタイプ(2.4×10^4 粒数/g)、ヨシタイプ(1.2×10^3 粒数/g)、スキタイプ・トダシバタイプ(ともに 8.0×10^2 粒数/g)の順である。短細胞起源で最も密度が高いのはタケ型ササ属タイプ(8.1×10^4 粒数/g)で、次いで同メダケ属タイプ(4.6×10^4 粒数/g)、キビ型(2.3×10^4 粒数/g)、ヒゲシバ型(1.1×10^4 粒数/g)、ウシノケグサ型(6.7×10^3 粒数/g)など多数の珪酸体が検出される。なお、全珪酸体密度は 1.4×10^6 粒数/gである。

(試料G):イネタイプ珪酸体は機動細胞起源で 3.4×10^3 粒数/gの密度値で検出されるが、短細胞起源では検出されず、また、イネ類起源の珪酸体も検出されない。イネタイプも含めて機動細胞起源で最も密度が高いのはササタイプ(1.1×10^5 粒数/g)であり、次いでメダケタイプ(6.7×10^4 粒数/g)、スキタイプ(6.6×10^3 粒数/g)、イネタイプ(3.4×10^3 粒数/g)、ヨシタイプ(2.8×10^3 粒数/g)、トダシバタイプ(5.9×10^2 粒数/g)の順である。短細胞起源で最も密度が高いのはタケ型ササ属タイプ(1.2×10^5 粒数

(9) 岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡

/g) で、次いで同メダケ属タイプ ($5.2E+04$ 粒数/g), キビ型 ($2.7E+04$ 粒数/g), ヒゲシバ型 ($1.3E+04$ 粒数/g), ウシノケガサ型 ($1.7E+03$ 粒数/g) の順である。ほかにイネ科刺細胞起源のポイント型珪酸体 ($1.1E+05$ 粒数/g) など多数の珪酸体が検出される。なお、全珪酸体密度は $4.1E+06$ 粒数/g である。

4. 考察

イネタイプ珪酸体は試料Gでは検出されるが、試料Bでは検出されない。よって、植物珪酸体分析からは、調査区G地点の基本土層VIについては水田址土壤であることが裏付けられるが、調査区B地点の当該土層については裏付けが得られない。

ところで、試料Gの機動細胞起源イネタイプ珪酸体の密度は $3.4E+03$ 粒数/g であり、水田土壤の通常の認定基準値 $5.0E+03$ 粒数/g (杉山, 2000) に達せず、また、短細胞起源のイネ型 (Orizoid) やイネ類起源の珪酸体も検出されない。このことから、長期にわたり継続的に水田耕作がされなかつた可能性も考えられるが、水田址が平安時代のものであれば株刈りが想定されるのでイネ叢が土壤に還元されなかつたことを考慮する必要があろう。珪酸体密度 $3.0E+03$ 程度で古代水田址が検出される場合があり (杉山, 2000)、試料Gの珪酸体密度はこの値を満たしている。

さて、試料Gの機動細胞起源イネタイプ珪酸体の密度 ($3.4E+03$ 粒数/g) から換算係数 ($1.03E-05$; 杉山, 2000) に基づきイネ叢生産量を算出すれば、 $0.41 \text{ t} / 10 \text{ a} \cdot \text{cm}$ の値が得られる。また、かりに年間初収量を 10 a 当たり 100 kg とすればG区の水田址は5年ほど利用された計算となる。なお、これらの値はイネ叢が全て土壤に還元される条件でのものであり、本分析対象の水田址が平安時代のもので株刈りが想定されることから、実際にはこれらの値を上まわると考えるべきであろう。また、上記イネ叢生産量はイネタイプ珪酸体を含む土壤の層厚を 1 cm とした場合の値なので、その層厚が増せばこの値も大きくなり、運動して推定利用年数も増加することになる。

*イネ叢収量の算出には土層の容積量が必要であるが、測定されていないということなので、採取試料を金網小円筒 (容積2.9 cm³) に詰めて測定した値を近似値 (1.3 g/cm^3) として用いた。

5.まとめ

岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡B地点、G地点で検出された水田址土壤 (基本土層VI) について植物珪酸体分析を実施した。その結果、G地点土壤には機動細胞起源イネタイプ珪酸体が $3.4E+03$ 粒数/g の密度で含まれていた。この密度値から、イネ叢生産量は面積 10 a 、層厚 1 cm 当たり 0.41 t 以上と推定された。

文献

- 藤原 浩志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) —数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法。考古学と自然科学, 9, 15-29。
佐瀬 隆 (2003) 植物ケイ酸体。竹内均 (監)「地球環境調査計画事典 陸域編 (第1巻)」, 974-981, フジテクノシステム。
杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラントオパール)。辻 誠一郎 (編)「考古学と植物学」, 189-213, 同成社。

表1 岩谷堂柳沢Ⅱ道跡の水田址土壠から検出された植物珪酸体の密度(乾土 1g当たりの粒数)

試料	植物珪酸体・ファンデン(イネ科)				タケモ科起源・ファンデン(イネ科)			
	イネタイダク ススキタイダク	ヨシタイダク	トゲシバタイダク	同定不可	ササタイダク	メダカタイダク	同定不可	合計
B 標準偏差	平均 標準偏差	0.0E+00 1.1E+03	8.0E+02 8.6E+02	1.2E+03 1.1E+03	8.0E+02 4.5E+04	1.1E+06 1.2E+04	2.4E+04 8.1E+03	2.2E+03 2.0E+03
G 標準偏差	平均 標準偏差	3.4E+03 2.4E+03	6.6E+03 2.8E+03	2.8E+03 5.9E+02	3.5E+05 7.9E+04	1.1E+05 6.7E+04	2.9E+03 2.9E+03	1.7E+05 6.2E+04

試料	单細胞胞子科				網膜胞起源(イネ科)				種族形	
	タケモ科型(Bambusoide)	ヒゲシバ型 (Chloridoid)	キビ型 (Panicoid)	ウシノケタケ型 (Pennisetoid)	その他の タケモ科型 (Pennisetoid)	ボイント型	長形	短毛	合計	側縁の形状
B 標準偏差	平均 標準偏差	8.1E+01 4.0E+03	4.6E+04 7.5E+03	5.0E+04 1.2E+04	1.8E+05 2.3E+04	1.1E+04 2.7E+03	2.3E+04 2.3E+03	2.6E+04 1.3E+04	1.1E+04 1.5E+03	7.7E+04 6.4E+04
G 標準偏差	平均 標準偏差	1.2E+06 3.5E+01	5.2E+04 9.0E+03	5.9E+04 1.1E+04	2.3E+05 2.3E+03	1.3E+04 1.4E+03	1.7E+04 3.6E+03	1.8E+04 3.9E+03	4.4E+04 6.4E+04	1.1E+05 6.4E+04

試料	シダ植物 起毛 (沈着物起源)				樹木起源 (沈着物起源)				被覆植物 アラベラ	
	シダ植物 起毛	その他の 起毛	樹木起源 (沈着物起源)	その他の (沈着物起源)	アラベラ	金縛御桂酸 体表面	薄輪管針 孔表面	葉表面	アラベラ	被覆植物 アラベラ
B 標準偏差	平均 標準偏差	1.4E+03 1.0E+03	2.0E+03 2.0E+03	1.9E+04 3.7E+05	2.6E+05 3.6E+04	1.4E+06 7.7E+05	2.5E+03 4.1E+06	2.5E+03 1.2E+06	1.1E+03 1.7E+03	1.1E+03 9.9E+02
G 標準偏差	平均 標準偏差	1.6E+03 2.6E+03	2.6E+03 4.2E+03	3.1E+06 1.1E+06	4.2E+03 1.1E+06	4.1E+06 8.6E+03	2.9E+04 2.1E+04	2.9E+04 8.6E+03	1.2E+04 2.1E+04	1.2E+04 2.1E+04

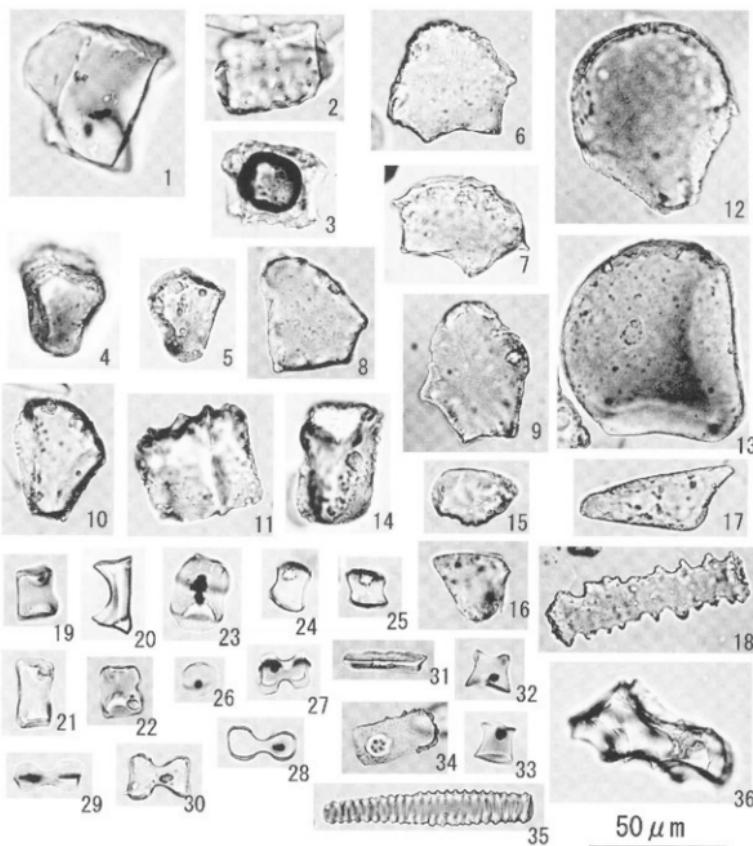
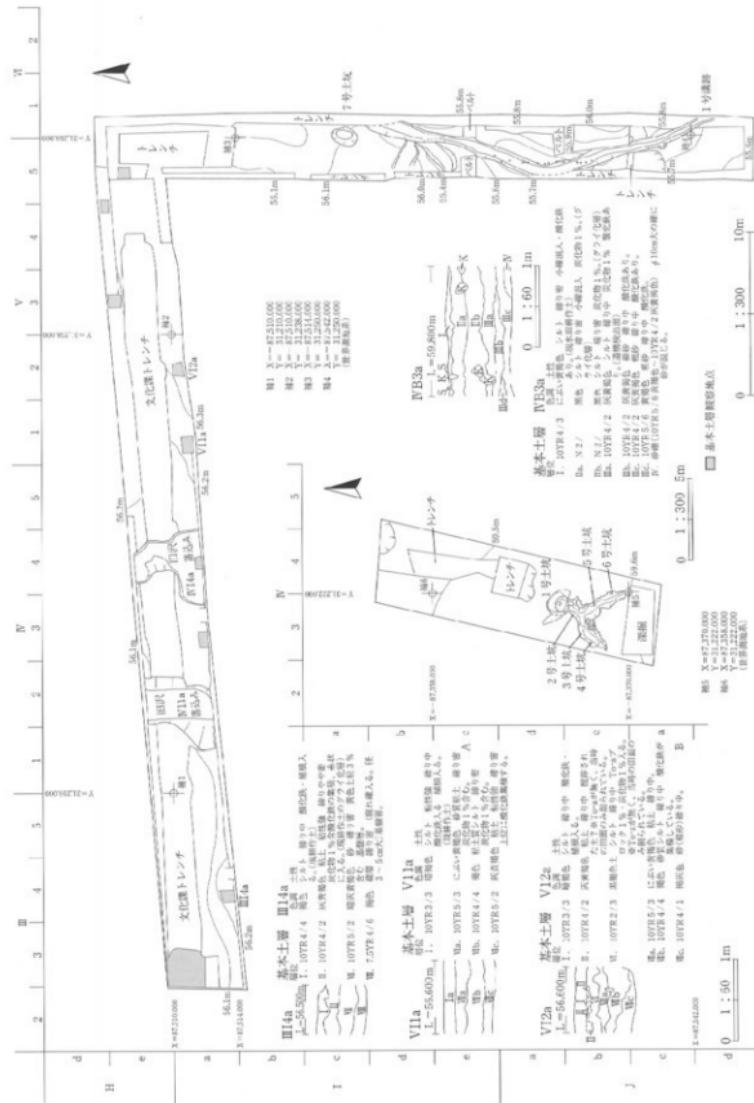


図1 検出された植物珪酸体の顕微鏡写真

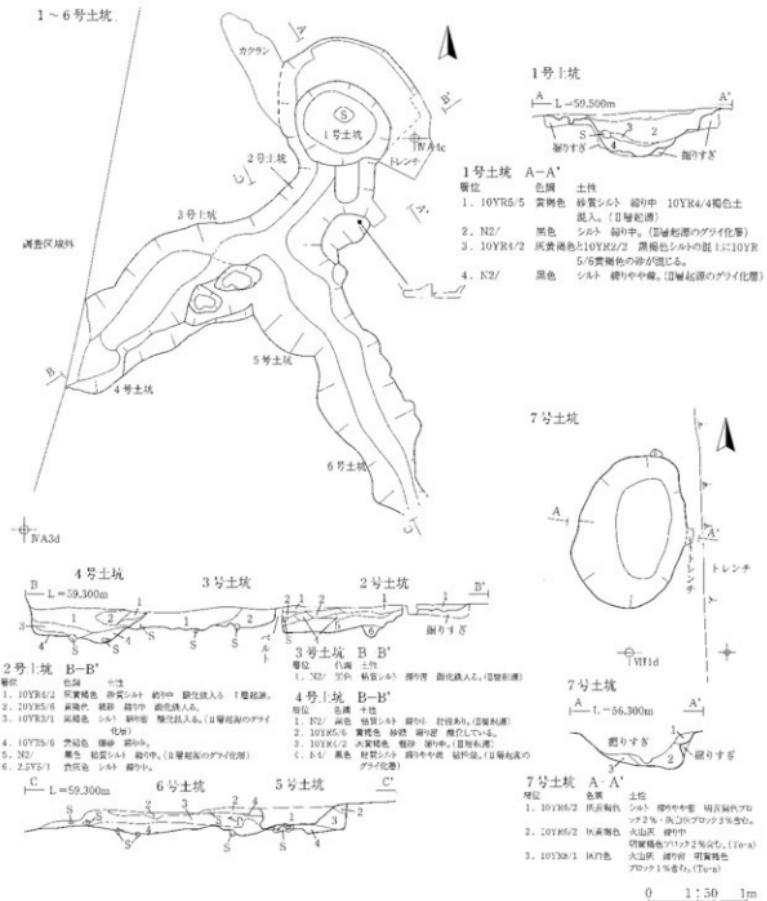
- 1-14：機動細胞起源珪酸体（ファン型） 1-3：イネタイプ、4-5：スキタイプ、
6-9：ササタイプ、10-11：メダケタイプ、12-13：ヨシタイプ、14：トダシバタイプ
- 15-17：刺細胞起源珪酸体（ボイント型） 15-16：短形（タケ亜科タイプ）、17：長形
18：長細胞起源珪酸体（棒状型突起タイプ）
- 19-33：短細胞起源珪酸体 19-25：タケ型 (Bambusoid) 19-23：ササ属タイプ、
24-25：メダケ属タイプ、26：ヒゲシバ型 (Chloridoid)、27-30：キビ型 (Panicoid)。
31：ウシノケグサ型 (Festucoid)、32-33：その他の短細胞起源珪酸体
- 34：カヤツリグサ起源珪酸体、35：導管細胞起源珪酸体、
36：広葉樹起源フレイド状珪酸体
- 試料B検出珪酸体：7, 14, 19-22, 24, 26, 27, 29-31, 34
- 試料G検出珪酸体：1-6, 8-13, 15-18, 23, 25, 28, 32, 33, 35, 36

(9) 岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡



第3図 遺構配置図

(9) 岩谷堂柳沢II遺跡

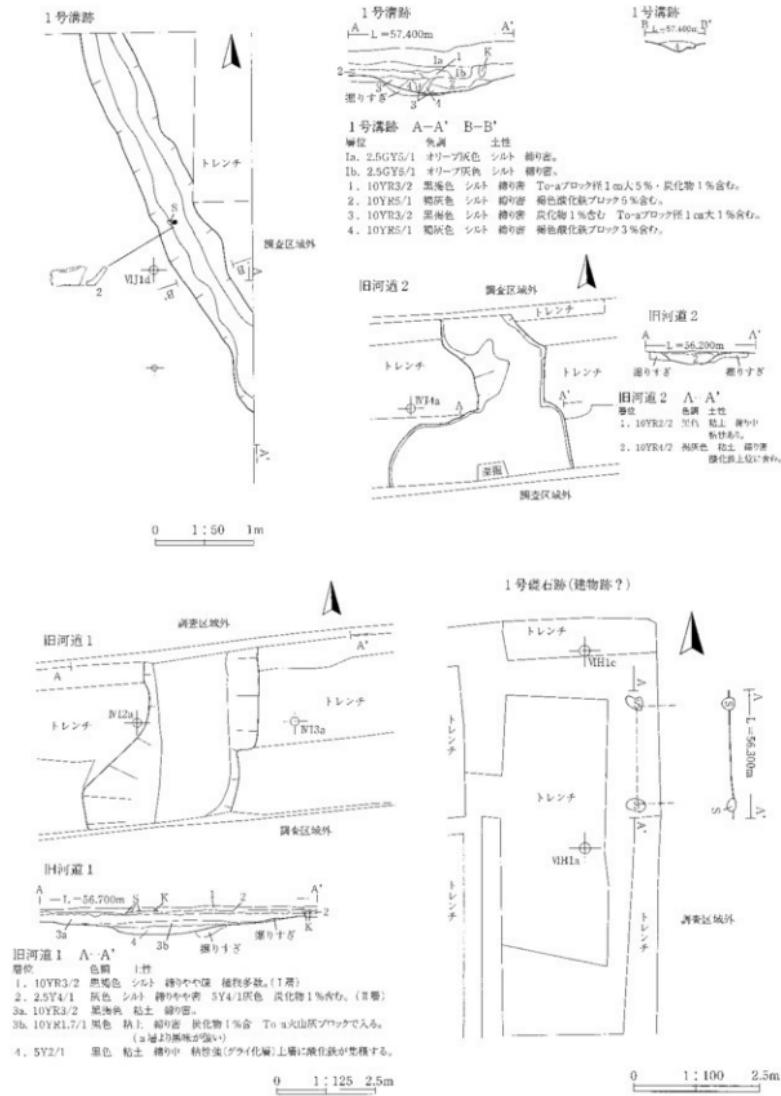


土坑観察表

番号	所在地	位置	剖面図	平面図	横幅 (m)		縦断面図		土	整備状況	地質	地圖	備考
					南北幅	東西幅	高さ	底面					
4	1号上坑	KA2.3.2. KA2.3.3.c	II トレンチ	(382) × (342) 360 × 360	52.5	58.730	表面	表面	褐色土、黒色、灰褐色に斑状の 土と、灰土。	コモ立木植樹。 2号上坑?	小石 立木?	北側壁 カクラン	
5	2号上坑	KA2.3.2.c	II 門形?	(32) × (6)	32.9	58.730	表面	表面	褐色土、黒褐色、灰褐色、 表面	1.3号土坑ノ東 不規則	立木?	北側?	
6	3号上坑	KA2.3.2.	II 門形?	(100) × (88)	55.3	58.306	表面	表面	褐色土、灰褐色	1.3号土坑ノ東 不規則	立木?	北側?	
7	4号上坑	KA2.3.c	II 門形?	(88) × (88)	54.8	58.032	表面	表面	褐色土、灰褐色、灰褐色土、 表面	4号上坑ノ東 不規則	立木?	北側?	
8	5号上坑	KA2.3.c	II 門形?	(100) × (62)	51.0	58.776	表面	表面	褐色土、灰褐色、 表面	2号上坑ノ北 不規則	立木?	北側?	
9	6号上坑	KA2.3.c	II 門形?	(84) × (26)	29.5	58.878	表面	表面	褐色土、灰褐色土、 表面	2.3号土坑ノ北 立木?	立木?	北側?	
10	7号上坑	KA2.3.c KA2.3.1.c KA2.3.2.c KA2.3.3.c	V 横P形?	(380) × (116) 352 × 96	57.8	58.624	表面	表面	褐色土、灰褐色土、 表面	立木?	立木?	北側?	

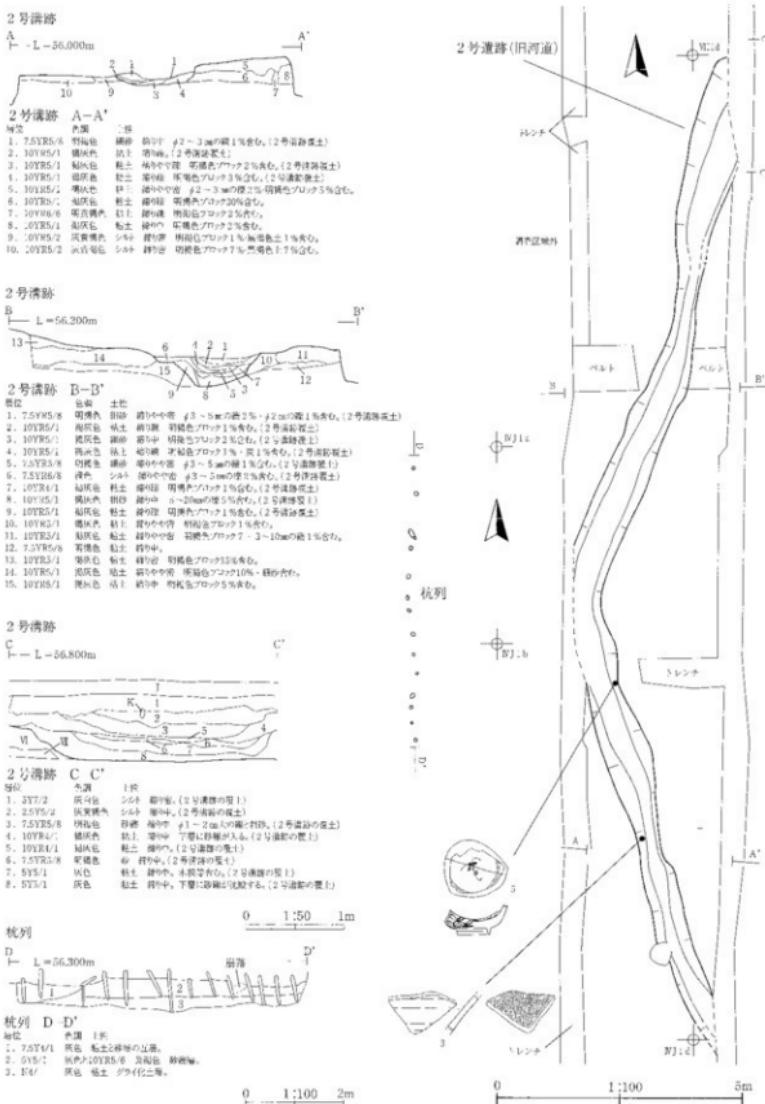
第4図 1~7号土坑

(9) 岩谷塙柳沢Ⅱ遺跡

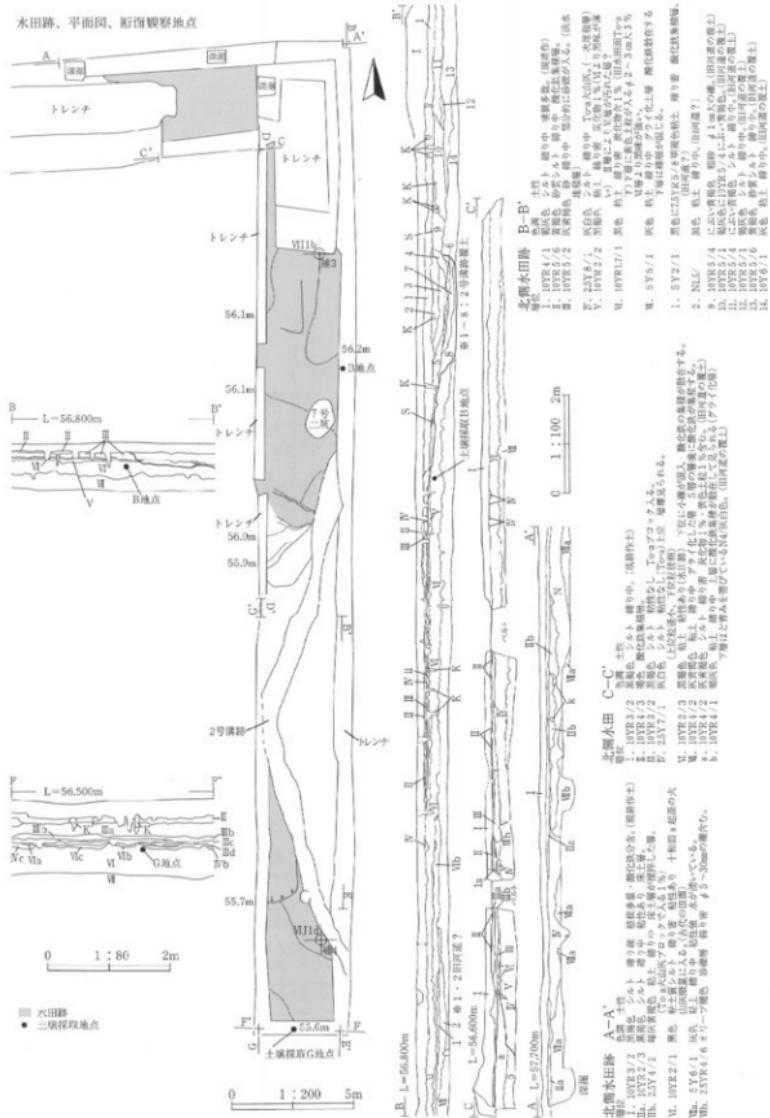


第5図 1号溝跡、旧河道2・3、礎石跡

(9) 岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡

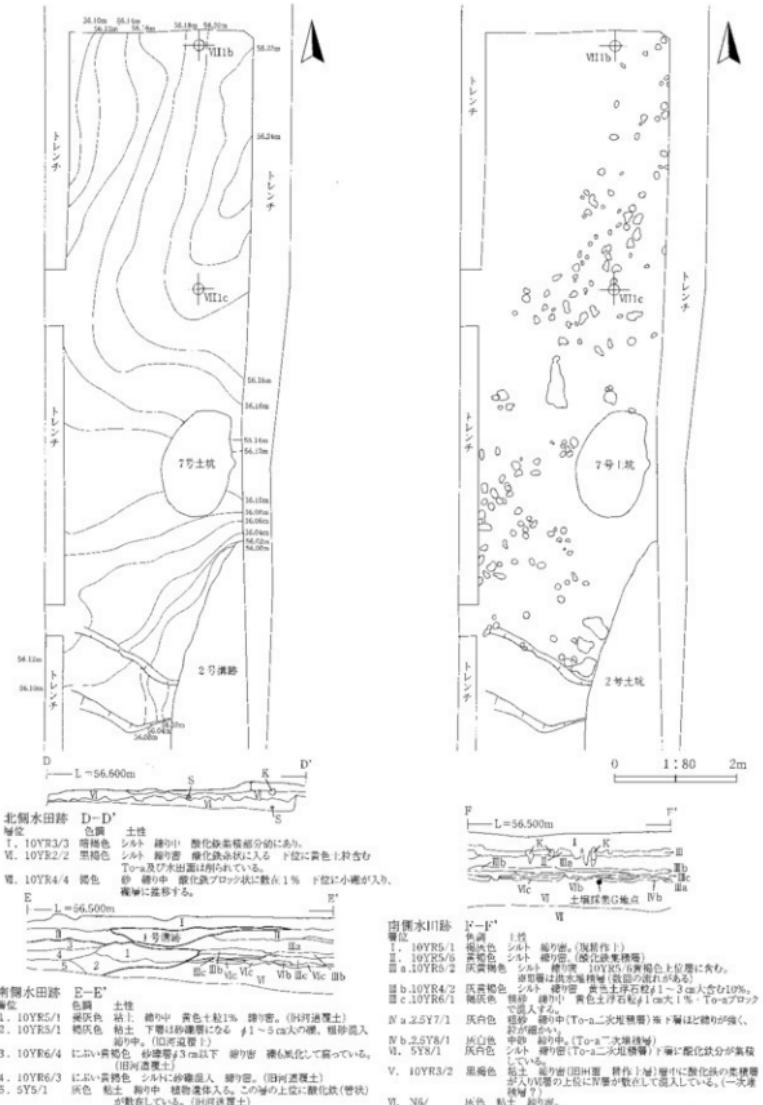


第6図 2号溝跡・杭列



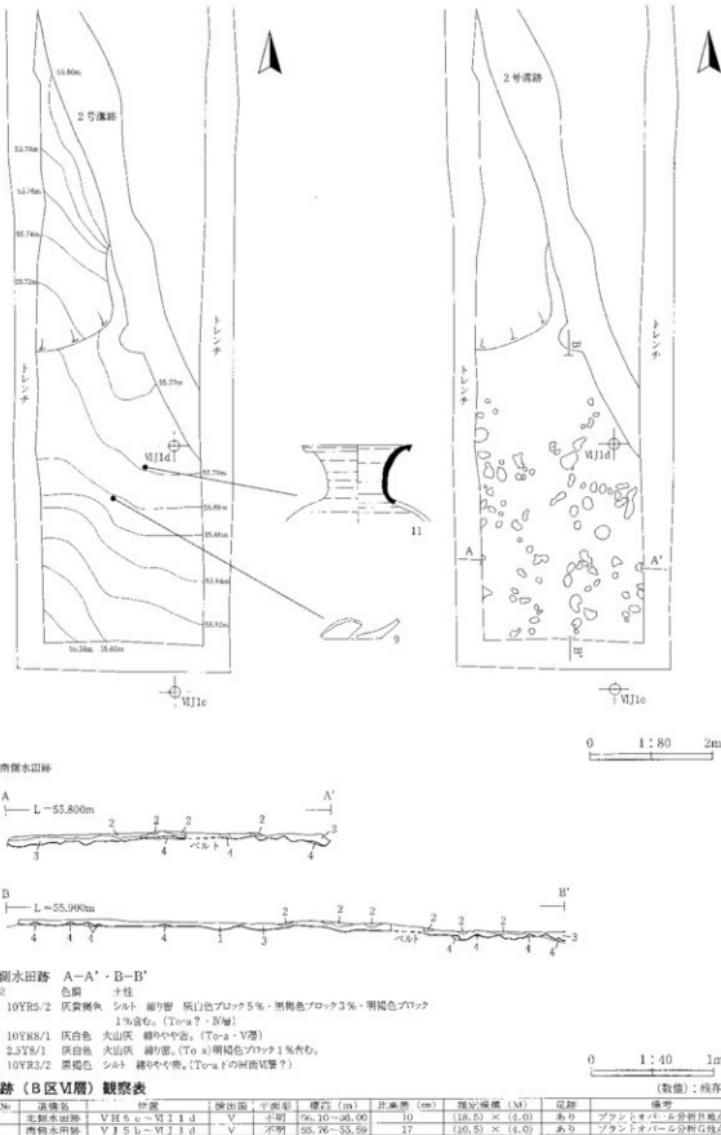
第7図 水田跡(1)

(9) 岩谷章柳沢Ⅱ遺跡



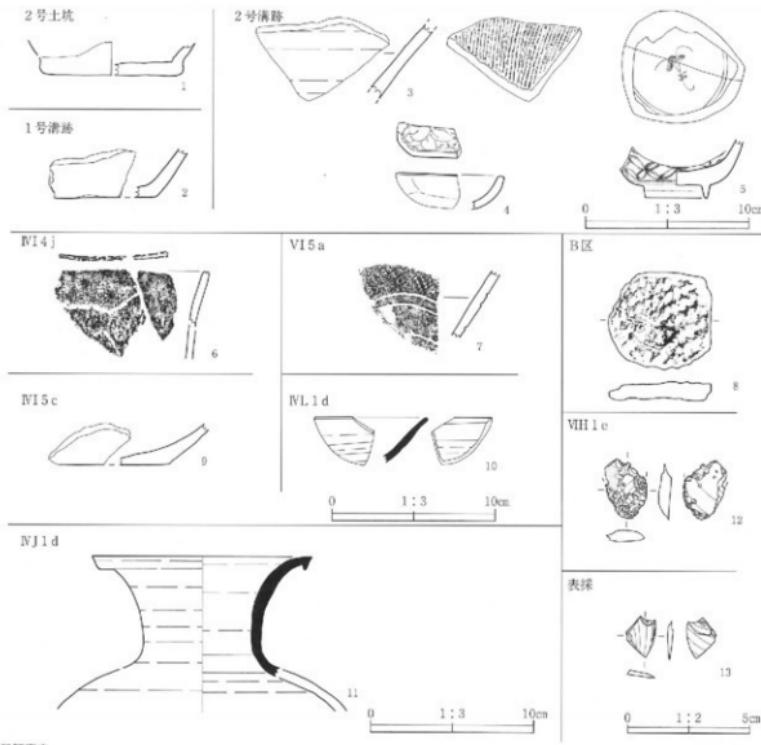
第8図 水田跡(2)

(9) 岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡



第9図 水田跡(3)

(9) 岩谷堂柳沢II遺跡



土器観察表

回数 No.	鉢底面 底面	形状 形態	場所 場所	計測値 (cm)			実寸 (底体の寸法)	底の 付着 内面 調査	船上 船頭 時間
				直径 Diameter	高さ Height	幅 Width			
12	1. 2号土坑 2号土坑	2脚	底付7	12.13	3.68	9.9	底出 磁器蓋い 破え?	—	— 4 昼間
13	2号溝跡 VII15a	1脚	底付7	—	3.63	—	底出 磁器蓋い 破え?	—	— 3 昼間
14	2号溝跡 VII15d	1脚	底付7	—	3.63	—	底出 磁器蓋い 破え?	—	— 3 昼間
15	2号溝跡 VII15d	1脚	底付7	—	3.63	—	底出 磁器蓋い 破え?	—	— 3 昼間
16	VII15d	1脚	底付7	—	3.63	—	底出 磁器蓋い 破え?	—	— 3 昼間

凡例 内面調査 形状 船頭等

土製品類別表

回数 No.	鉢底面 底面	部位 部位	計測値 (cm)	計測値 (cm)			実寸 (底体の寸法)	底の 付着 内面 調査	船上 船頭 時間
				直径 Diameter	高さ Height	幅 Width			
17	2号土坑 VII15a	底付7	—	—	—	—	—	—	—
18	2号溝跡 VII15d	底付7	—	—	—	—	—	—	—
19	VII15d	底付7	—	—	—	—	—	—	—

須恵器類別表

回数 No.	底面 底面	部位 部位	計測値 (cm)	計測値 (cm)			底出 磁器 底出 磁器 底出 磁器	内面調査 内面調査 内面調査	船上 船頭 時間
				直径 Diameter	高さ Height	幅 Width			
20	2号土坑 VII15a	底付7	—	—	—	—	—	—	—
21	2号溝跡 VII15d	底付7	—	—	—	—	—	—	—
22	VII15d	底付7	—	—	—	—	—	—	—

陶器類別表

回数 No.	底面 底面	部位 部位	計測値 (cm)	計測値 (cm)			底出 磁器 底出 磁器 底出 磁器	内面調査 内面調査 内面調査	船上 船頭 時間
				直径 Diameter	高さ Height	幅 Width			
23	2号土坑 VII15a	底付7	—	—	—	—	—	—	—
24	2号溝跡 VII15d	底付7	—	—	—	—	—	—	—
25	VII15d	底付7	—	—	—	—	—	—	—

石器類別表

回数 No.	底面 底面	部位 部位	計測値 (cm)	計測値 (cm)			底出 磁器 底出 磁器 底出 磁器	内面調査 内面調査 内面調査	船上 船頭 時間
				直径 Diameter	高さ Height	幅 Width			
26	P田上 c	底付7	—	—	—	—	—	—	—
27	2号溝跡	底付7	—	—	—	—	—	—	—

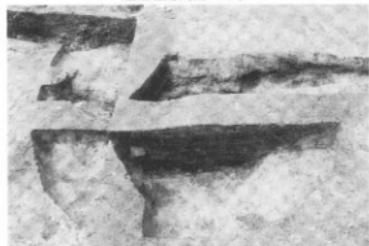
第10図 出土遺物



遺跡全景(南から)



A区 平面(南から)



1号土坑 断面(東から)



7号土坑 断面(南から)



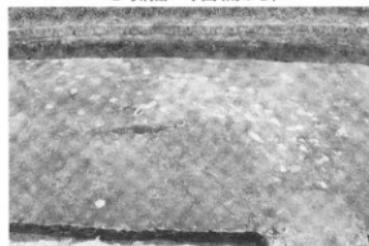
B区 調査区前状況(西から)



2号溝跡 平面(南から)



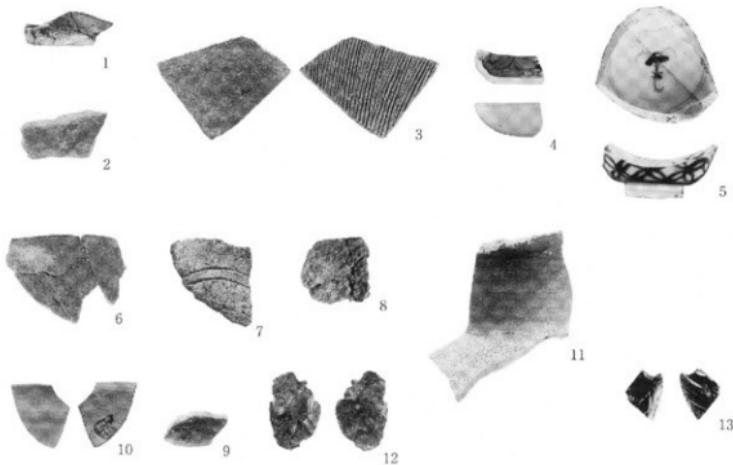
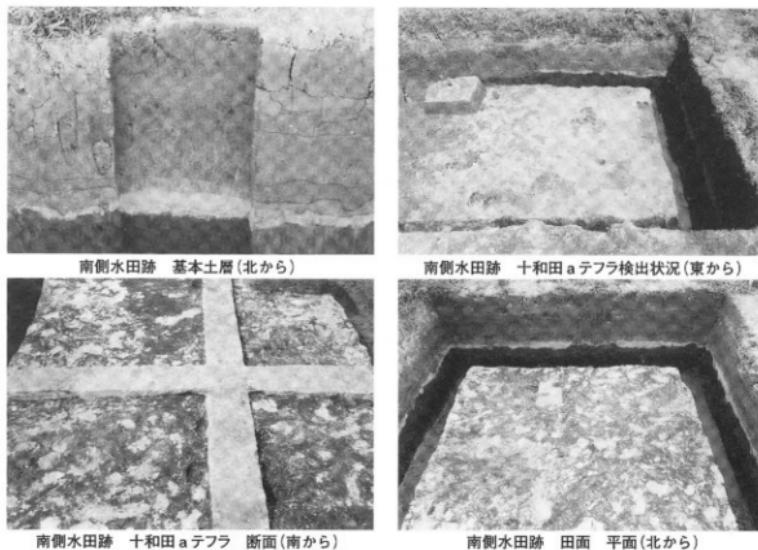
北側水田跡 十和田aテフラ検出状況(南から)



北側水田跡 田面 平面(東から)

写真図版1 遺構(1)

(9) 岩谷堂発掘II遺跡



S=1/3, S=2/3:12・13

写真図版2 遺構(2)、出土遺物

(10) 新地野道下遺跡

所 在 地 江刺市岩谷堂字金打162ほか
委 託 者 水沢地方振興局農政部農村整備室
事 業 名 経営体育成基盤事業増沢東部地区
発掘調査期間 平成16年4月8日～6月3日

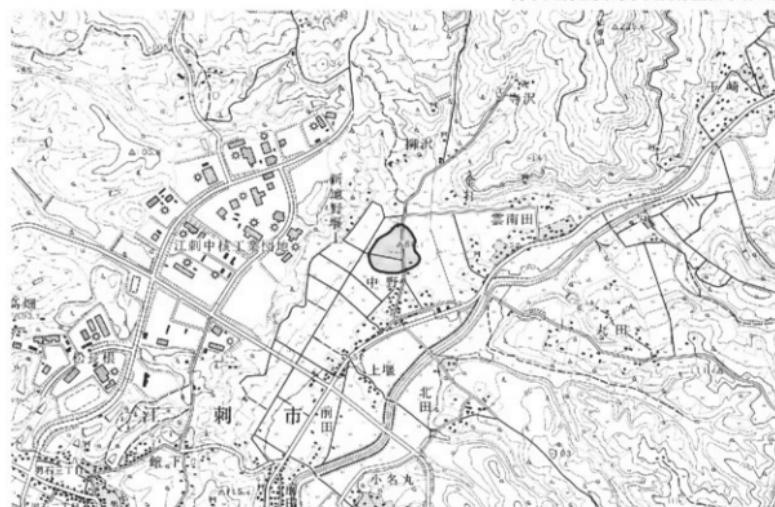
遺跡番号・略号 M E 97-0393・S NM-04
調査対象面積 初当: 521m² 実績: 521m²
調査担当者 阿部勝則 新井田えり子

1. 調査に至る経過

岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡、新地野道下遺跡は、「経営体育成基盤整備事業 増沢東部地区」の実施に伴い、発掘調査を実施することになった。当事業は、は場を大区画水田に基盤整備し営農と維持管理の省力化を図ることにより、三作業の受託及び農地の流動化を促進し、経営規模の拡大による担い手農家の育成を図ると共に農業の安定を目的として平成12年度から施行されている。

当事業地の一部は既に岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡、新地野道下遺跡として周知されていたため、事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについて、水沢地方振興局水沢農村整備室から岩手県教育委員会に試掘調査を依頼した。岩手県教育委員会は平成16年10月～12月にかけて試掘調査を実施し、遺跡範囲内での事業施行に伴って本調査が必要である旨の回答があった。その後、水沢地方振興局水沢農村整備室と岩手県教育委員会との間で協議が行われた結果、平成16年4月1日から平成17年3月31までの期間で、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業として発掘調査を行うこととなり、水沢地方振興局長と(財)岩手県文化振興事業団理事長の間で契約が結ばれた。発掘調査は平成16年4月8日に開始された。

(水沢地方振興局水沢農村整備事務所)



第1図 遺跡の位置

1:25,000 陸中江刺

(10) 新地野道下遺跡

2. 遺跡の位置と立地

新地野道下遺跡は、江刺市の市街地岩谷堂の東側にある増沢地区にあり、岩谷堂城跡の北東側約2kmに位置する。同地点は国土地理院発行1:25,000地形図「陸中江刺」(N J 54-14-13-2)の図幅に入る。北緯39度12分36秒、東經141度11分39秒である。増沢地区は、北上川の支流で西流する人首川流域にあり、北東側に万松寺山（標高225m）、南西方向には館山（標高115m）があり、周開を山々に囲まれた盆地である。遠く東側には物見山（種山、標高871m）を見ることができる。遺跡のある増沢地区は、人首川右岸に形成された低地で、北西から南東に緩く傾斜している。新地野道下遺跡は、標高54~62mである。推定される遺跡の範囲は、東西300m、南北250mで、面積約51,600m²である。今回の調査区は遺跡の東端部に当たる。

3. 基本土層

遺跡は、東側に広がる人首川の氾濫源より一段高い段丘（粘板岩基盤）に立地し、調査区はその東端に位置しており、調査区東側には旧地形の傾斜地が残っている。調査に際して、北側・中央・南側の三カ所で深掘りを行い、基本層序を確認した。調査区の調査前の土地利用は畑地で、著しい削平を受けて平坦になっている。調査区北端の旧地形に沿った落ち込みに遺物包含層（I b層）や漸移層（II層）が残っていたが、その他の区域はIII層まで削られており、黄褐色土のIII a~III b層は削平され、灰白色土のIII c層が露出している状態であった。遺構の検出面は概ねIII c層である。遺構確認面までの掘削は重機を使用しており、遺構検出と遺構精査は人力で行った。各土層の堆積は、概ね以下のとおりである。

I層は、暗褐色土（表土層）、褐色土（盛土）・黒褐色土（遺物包含層）などで構成される。遺物包含層は、調査区の北端部にのみ残っている。II層は、漸移層で、調査区の北端部でのみ確認できる。III層は、いわゆる地山で、上層の黄褐色土から下層の灰白色土層へと変化する。間層に砂層が入る箇所がある。



第2図 周辺の地形・調査区の位置図

4. 調査の概要

堅穴住居跡1棟、土坑4基、溝跡8条、柱穴状土坑19個が検出された。占地は、堅穴住居跡・土坑が調査区北側にまとまって検出されており、溝跡は、調査区全域から検出された。

(1) 遺構

＜堅穴住居跡＞調査区北側で検出された。通半は西側の調査区域外にかかり、一部を調査したものである。Ⅲ層で灰黄褐色土の広がりとして検出した。検出段階で4号土坑を切っていることを確認している。ただし、4号土坑の確認自体が容易でなかったため、トレンチを設定して断面でも遺構の新旧関係を確認している。検出した範囲は、径3.8m×1mほどで壁・床ともⅢc層を掘り込んでいる。調査範囲内では、柱穴・炉跡は確認できなかった。平坦な床面上で計9個の炭化材を確認している。材はクリ・ナラ・青ダモ・ホウの木である。出土遺物は、土器1点（掲載No1）、円石1点（掲載No2）、焼粘土塊1点（不掲載）などがある。時期決定の根拠になる遺物に乏しいが、覆土の様相は1・3号土坑に近似する。出土した炭化材について、放射性炭素年代測定を行った結果、 680 ± 40 (^{14}C 補正年代) であるとの結果を得ている。検出状況からも12世紀～13世紀に属するものと考えて大過ないものと思われる。

＜土坑＞4基確認している。時期別では、出土遺物と覆土の様子から12世紀に属するもの3基、縄文時代に属するもの1基に大別される。いずれも調査区北側でまとまって検出された。

1・3・4号土坑は、いずれも調査区北側で近接して検出された。規模・形状に相違が見られるが、灰黄褐色土を主体とする覆土の様子は近似する。出土遺物は無いが、覆土の堆積状況から1・3・4号土坑と1号堅穴住居跡は、ほぼ同時期で、5号土坑は時期がかけ離れていると判断した。1号土坑から、かわらけ片が出土している。時期は12世紀代と想定される。覆土が類似する他の土坑の時期もほぼ同時期と推察される。

5号土坑は、調査区北端に位置する。Ⅲ層で黄褐色土の広がりとして検出された。径118cm×52cmの不整な椭円形で、覆土は、黒褐色土で硬く締まる。覆土中から剥片9点（18.33g）が出土しているが、一ヵ所に集中して出土したのではなく、覆土中に散在して出土している。掲載した石器は5点である。剥片の形状や出土状態から収穫を目的としたものではなく、廃棄された剥片と判断した（註1）。この遺構の周辺で、Ⅱ層から剥片4点・R F 1点・石錐1点などの石器が比較的まとまって出土している。

＜溝跡＞8条確認している。大きさに規格性は見いだせない。ただ、北西～南東方向へと走る溝6条（1・4・5・3・7・8号）と、ほぼ南北に走る溝2条（2・6号）があり、それらの組み合わせで、長さ4～5mの区画を形成しているようにも見える。時期決定の根拠となる出土遺物はなく、詳細は不明である。覆土の様子は、1・3・4号土坑に近似する。溝跡の時期もこれらの土坑と同時期の可能性がある。

＜柱穴状土坑＞19個検出した。覆土の色調は灰黄褐色土の單層である。出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。Ⅱ N 3 c・3 dグリッド付近で柱穴が比較的まとめて検出されており、土師器・須恵器（掲載No10～16）の遺物がまとめて出土している。住居跡などの施設に付属する柱穴の可能性がある。

(2) 遺物

出土遺物の総量は中コンテナ（40×30×20cm）1箱である。掲載遺物は、縄文土器1点・土師器3点・須恵器6点・かわらけ1点・焼粘土塊1点（本文記載のみ）・石器5点・炭化材9点（表記載のみ）である。土器類は、すべて破片資料で、磨滅しているものが多い。かわらけ片は、磨滅が著しいが手づくねの坏の口縁部破片で2段ナデのようである。石器は、石錐1点・剥片15点・円石1点など計17点が出土している。凹石は蝶の片側の縁が被熱している。石材は、剥片石器は頁岩、凹石は花崗閃緑岩が用いられている。いずれも北上山地産のものである。

(10) 新地野道下遺跡

5.まとめ

増沢地区は、昭和16年（1941）に石田茂作氏により、国宝の「繪紙金銀字文書一切経」いわゆる藤原清衡経が写経された「奥州江刺郡益沢院」の擬定地とされたところである。昭和35年には、岩手大学・東北大学による歴史・考古学的な合同調査が行われている。また、万松寺經塚からは12世紀後半の渥美産の経巻が出土しており、増沢地区は、古くから平泉藤原氏との密接な係わりが想定されてきた（註2）。

今回の調査で、12世紀後半の遺構・遺物が確認できたことは従来の想定を考古学的に裏付けるもので、当社は12世紀に平泉藤原氏と密接な係わりをもっていたことは確実である。益沢院の跡地こそ確認できなかつたが周辺にあった可能性は高い。今回の調査区は、遺跡の東端で遺跡全体の100分の1ほどの面積を調査したにすぎないが、貴重な成果を得ることができた。遺跡の主体部は、調査区西側の高い面にあると想定される。

なお、新地野道下遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

註

- （1）阿部 2003 岩手県における剣片集中遺構の他の事例と比較して、本遺構が收藏されたものとは判断できない。
（2）この通りの事情は、相原 1997において的確に整理されている。

<引用・参考文献>

- 阿部勝則 2003 「岩手県における縄文時代小網の剣片集中遺構について」『紀要XXII』(財)岩手県文化振興事業団蔵文化財センター
森 麻衣子・板橋 浩・伊東信雄 1960 「江刺市割谷堂 益沢院・宝性寺 調査状況記録」
相原康二 1997 「江刺市増沢出土の経巻について」『岩手県立博物館研究報告 第15号』岩手県立博物館

報告書抄録

ふりがな 書名	へいせいじゅうろくねんほどはくつちょうさほうこくしょ 平成16年度発掘調査報告書							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第469集							
編著者名	阿部勝則・新井田えり子							
編集機関	財團法人岩手県文化振興事業団蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001・9002							
発行年月日	西暦2005年3月25日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
新地野道下遺跡	岩手県江刺市 岩谷堂字金打 162ほか	03212	ME97 -0393	39度 12分 36秒	141度 11分 39秒	2004.04.08 ~ 2004.06.03	521m ²	経営体育成基盤 整備事業「地沢東部地区」に伴う緊急発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
新地野道下遺跡	集落跡	縄文時代 古代~	土坑 竪穴住居跡 土坑 溝跡	1基 1棟 3基 8条	縄文土器 石器 土器・陶器	1点 17点 9点 1点	土坑から12世紀のかわらけ片が出土する。	
要約	遺跡は、江刺市増沢に所在し、北上山系にあって人吉川右岸の河岸段丘に立地する。遺跡の東端部を調査した結果、縄文時代の土坑・12世紀のかわらけ片が出土した土坑・12世紀以前の可能性をもつ竪穴住居跡などが検出された。増沢地区は、国宝「繪紙金銀字文書一切経」いわゆる藤原清衡経が写経された益沢院があったとされる擬定地である。発掘調査によって、12世紀の遺構・遺物が見つかったことは、当地が平泉藤原氏と密接な関わりをもっていたことを傍証するものである。							

※緯度・経度は世界測地系

岩手県、新地野道下遺跡出土試料の放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所

1. 試料と方法

試料名	遺構・資料名	種類	前処理・調整	測定法
No 1	1号竪穴住居跡No 9	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※ 1) AMSは加速器質量分析法: Accelerator Mass Spectrometry

2. 測定結果

試料名	測定No (Beta-)	^{14}C 年代 (年 B P)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 B P)	暦年代 (西暦)
No 1	195073	680 ± 40	-24.8	680 ± 40	交点: cal AD 1290 1 σ : cal AD 1280~1300 2 σ : cal AD 1270~1320 : cal AD 1340~1390

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（AD 1950年）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

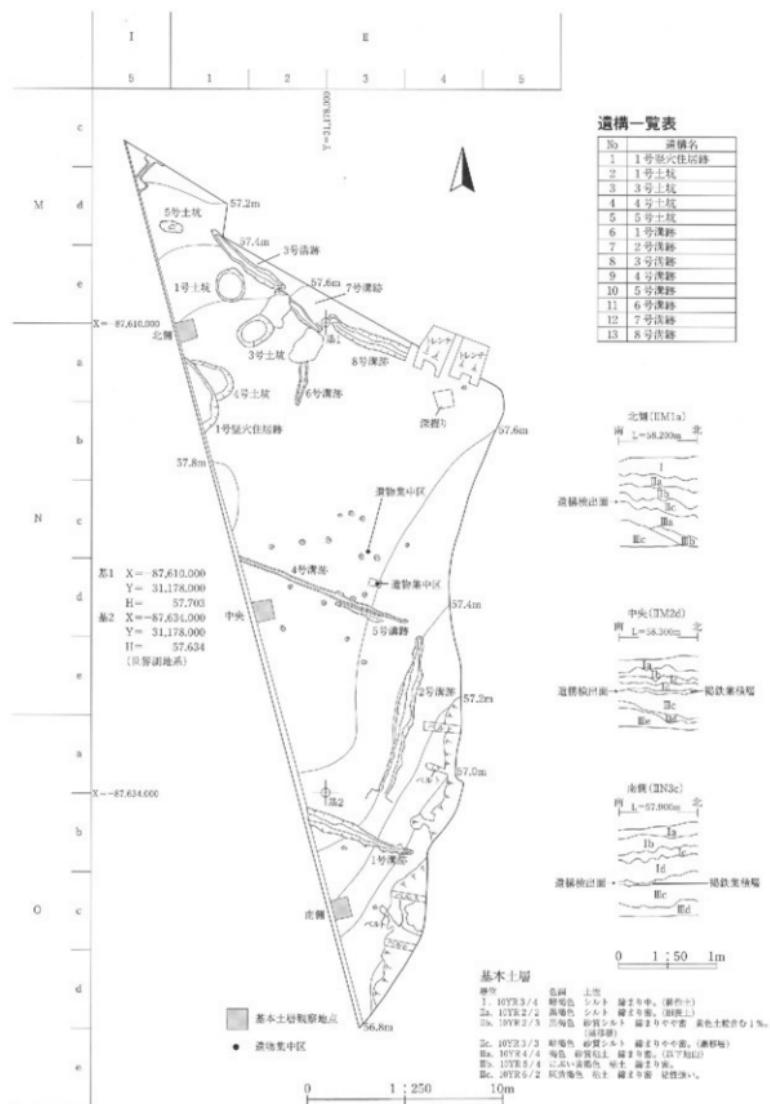
$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

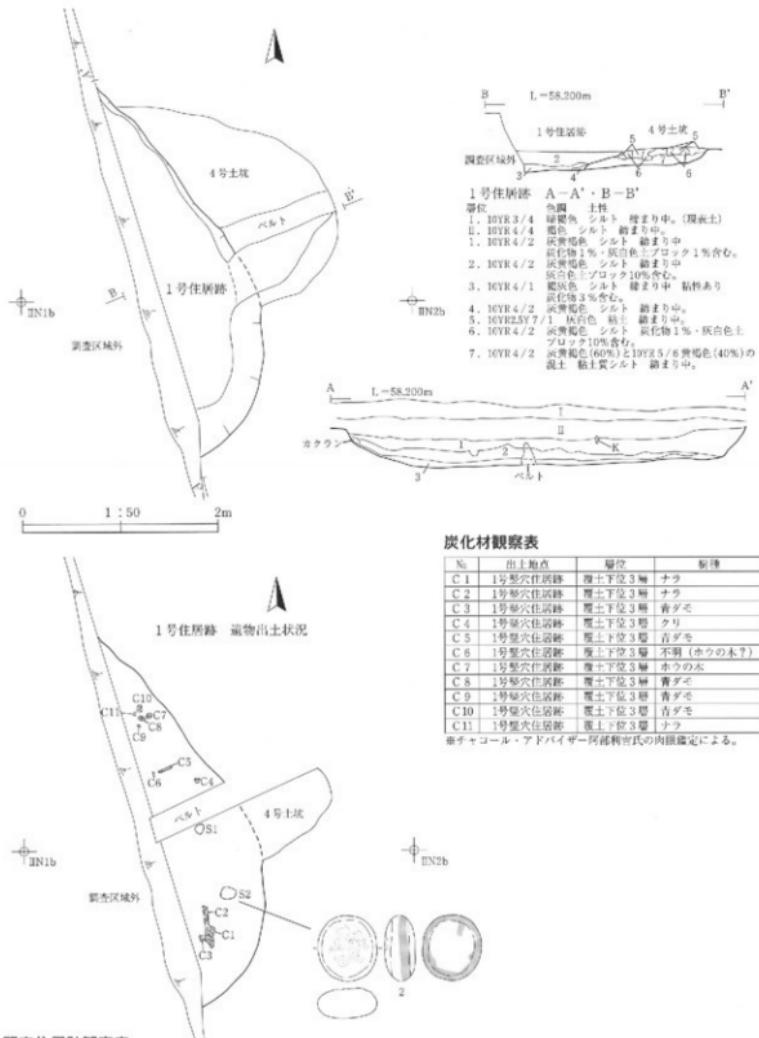
過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年B Pまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年B P以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68%確率) と2 σ (95%確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

(10) 新地野道下遺跡

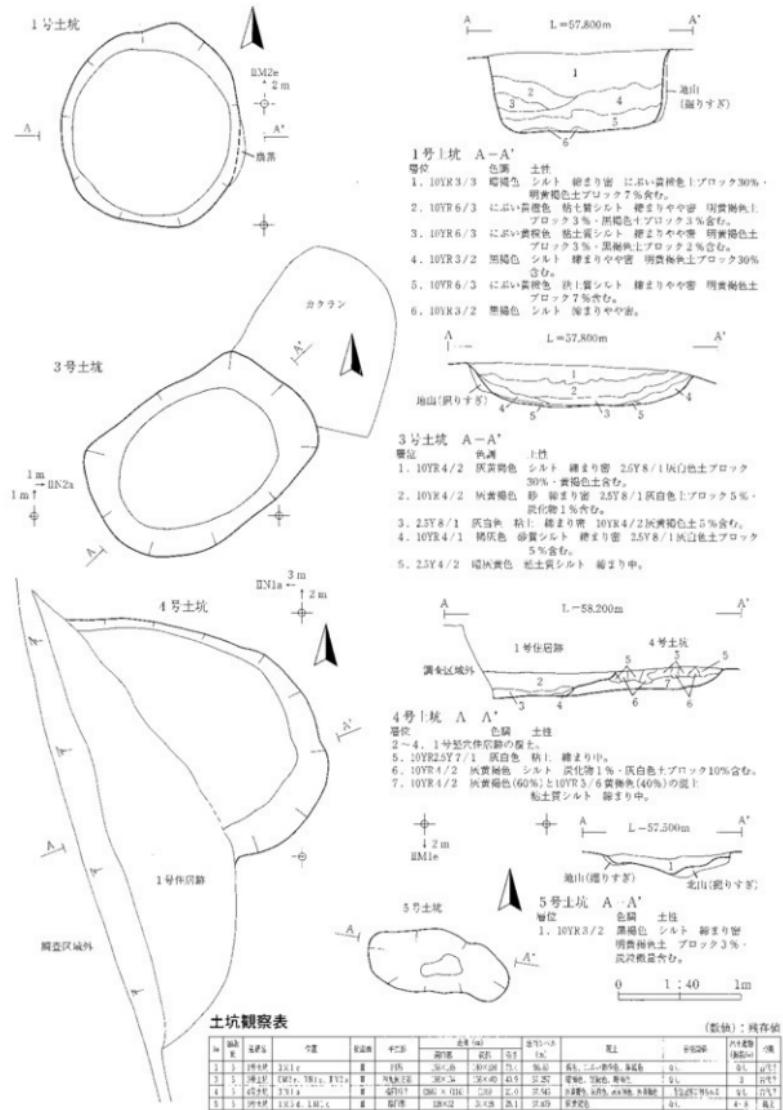


第3図 遺構配置図

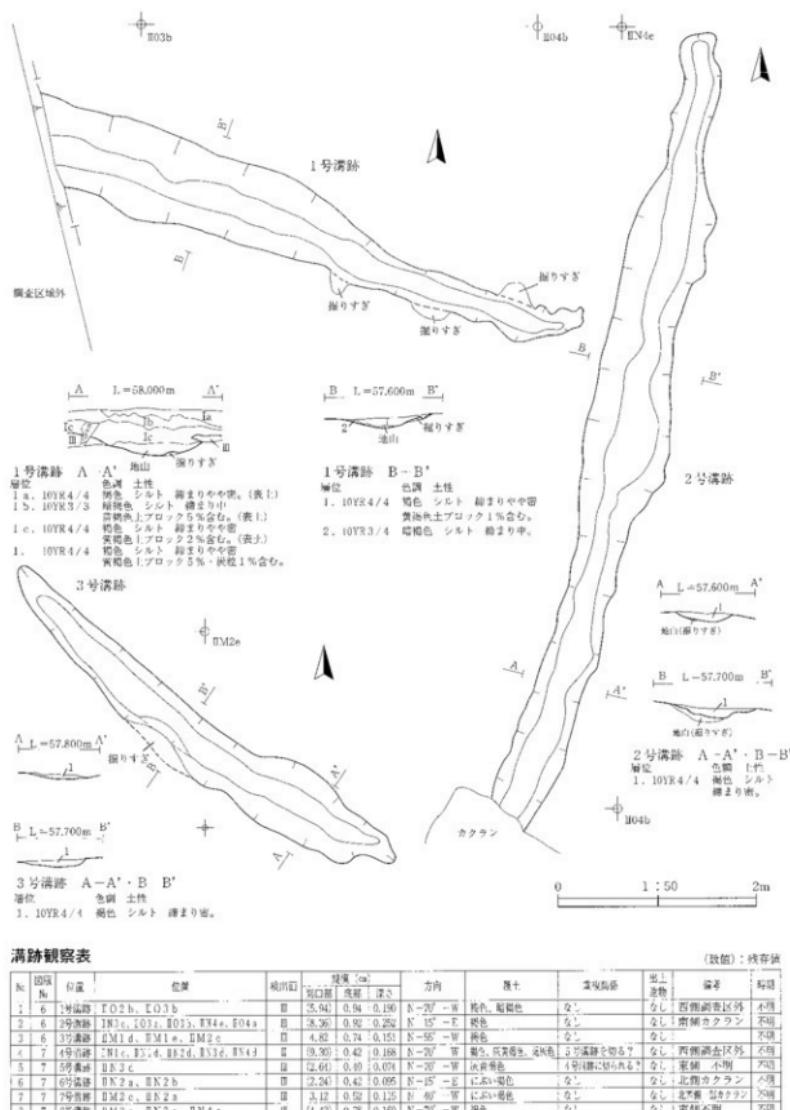


第4図 穴住居跡

(10) 新地野道下遺跡

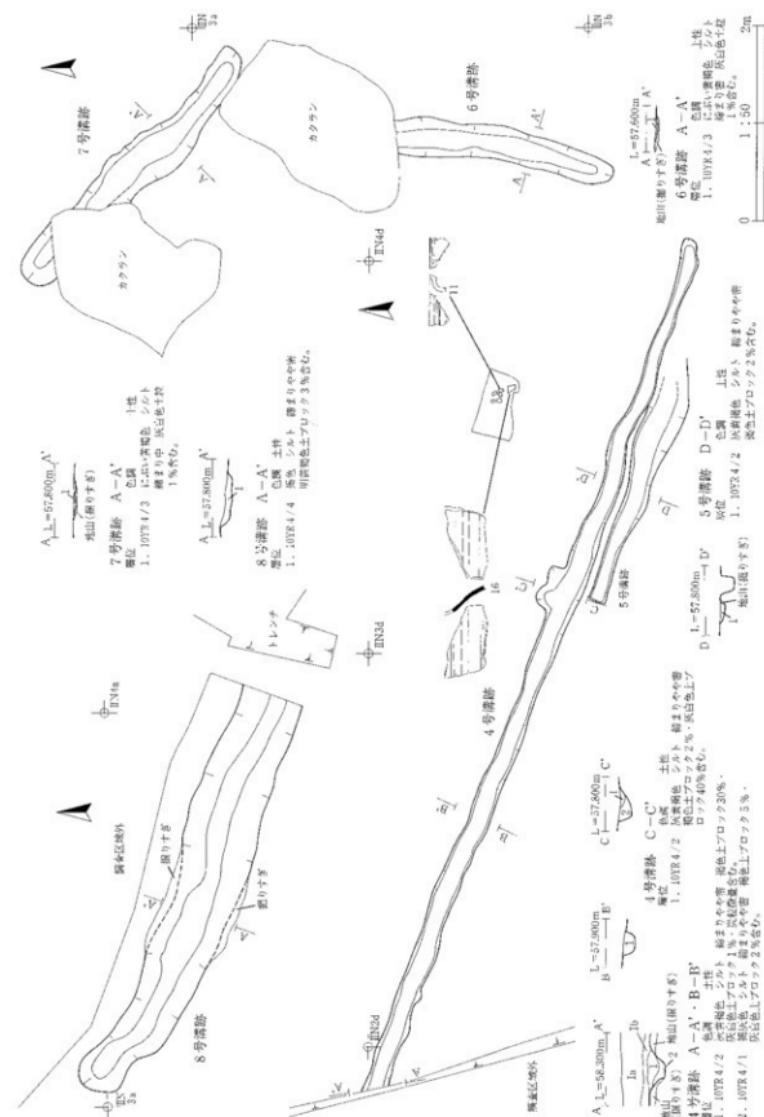


第5図 土坑

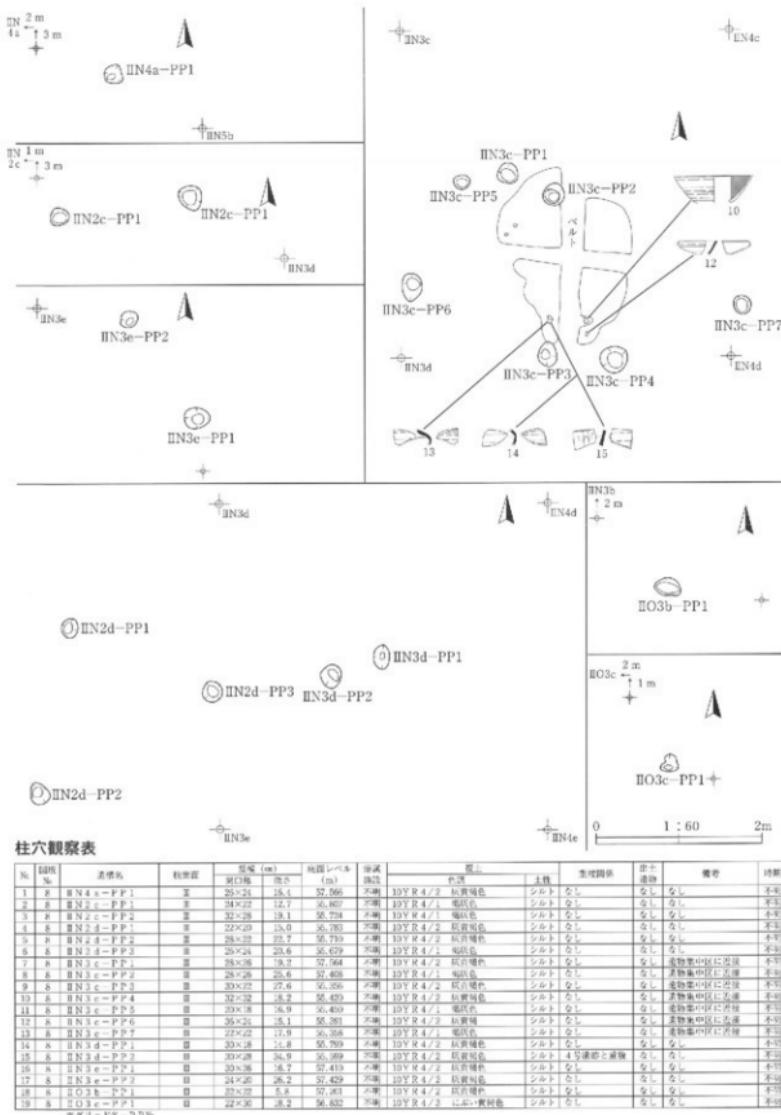


第6回 講跡(1)

(10) 新地野道下溝跡



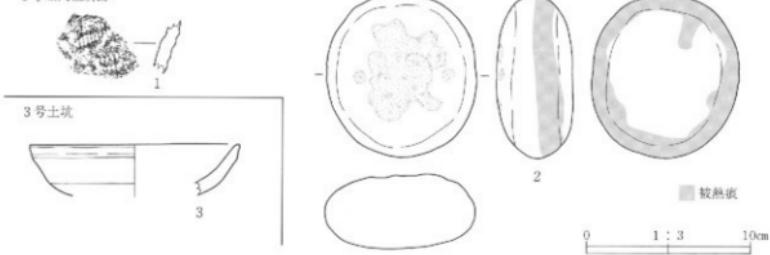
第7図 溝跡(2)



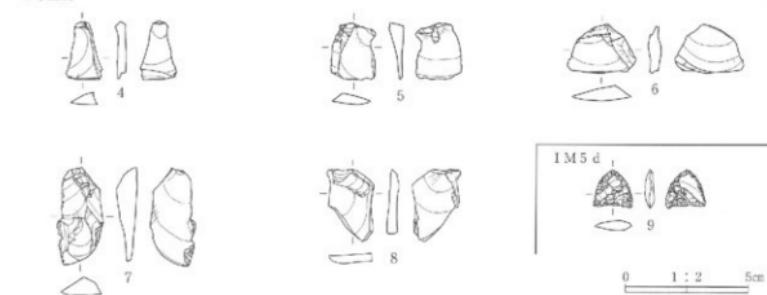
第8図 柱穴群

(10) 新地野道下遺跡

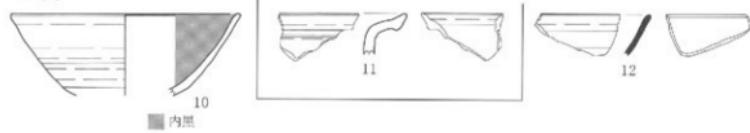
1号堅穴住居跡



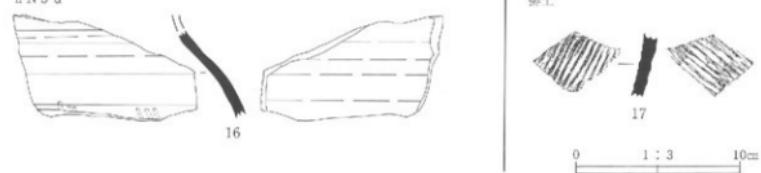
5号土坑



II N 3 c



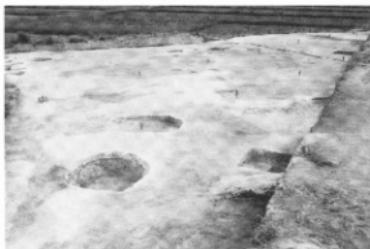
II N 3 d



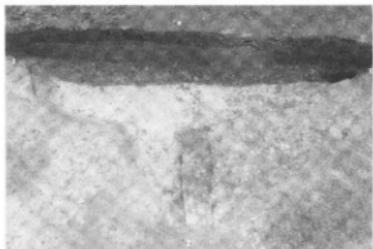
第9図 出土遺物



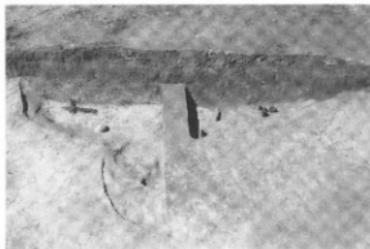
調査区近景(西から)奥に万松寺山が見える



調査区全景(北から)



1号竪穴住居跡 平面(東から)



1号竪穴住居跡 断面(東から)



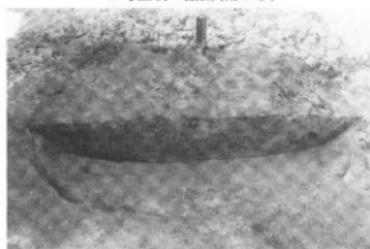
1号土坑 平面(南から)



1号土坑 断面(南から)



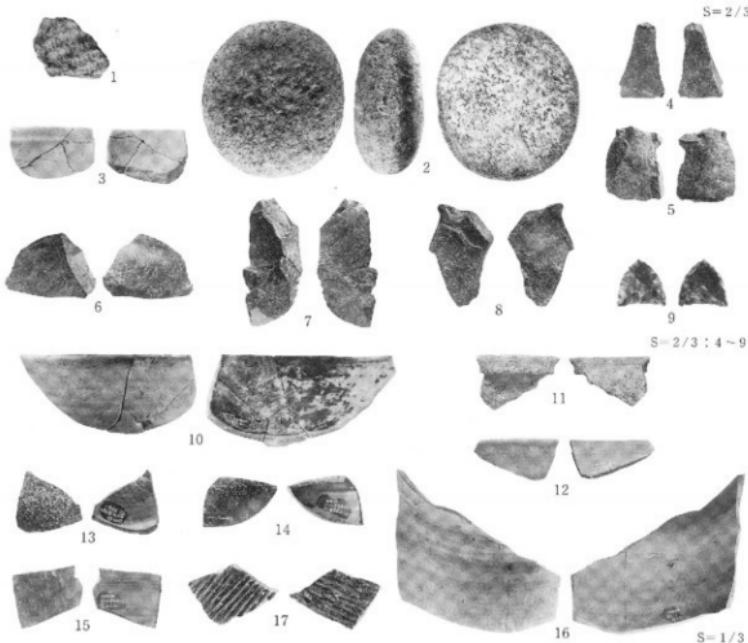
3号土坑 平面(南から)



3号土坑 断面(南から)

写真図版 1 遺構

(10) 新地野道下遺跡



写真図版2 遺物

縄文土器観察表

回数 No.	海抜 M.S.L.	出土地点 出土地点	層位 層位	断面 断面	部位 部位	文様 (参考の文様) 模様	底の状態 底: L底?	底面調整 底面調整	外底調節 外底調節	内底調節 内底調節	底底 底底	成形 成形	済の付帯 済の付帯	胎土 胎土	胎裏 胎裏
%	%														
9	1	1号窓文化層 窓半壁二工場	深谷?	断面	新規			—	—	—	—	—	—	3	前期?

土師器・かわらけ観察表

〔数値〕: 深度値、〔数値〕: 残存値															
回数 No.	海抜 M.S.L.	出土地点 出土地点	層位 層位	断面 断面	部位 部位	計高値 (cm)	外底調節 外底調節	内底調節 内底調節	底底 底底	成形 成形	済の付帯 済の付帯	胎土 胎土	胎裏 胎裏	時期 時期	
%	%														
9	2	3号窓北側原土 窓側面中段	上層 上層	かわらけ 断面	口縁部	<0.5~2.5~2.5	—	—	—	—	—	—	—	—	はなれ窓北側原土 窓側面中段
9	10	3号窓北側原土 窓側面中段	上層 上層	かわらけ 断面	口縁部	<0.5~2.5~2.5	—	—	—	—	—	—	—	—	はなれ窓北側原土 窓側面中段
9	11	3号窓北側原土 窓側面中段	上層 上層	土師器 土師器	L底	—	—	—	—	—	—	—	—	—	はなれ窓北側原土 窓側面中段

須恵器観察表

回数 No.	海抜 M.S.L.	出土地点 出土地点	層位 層位	断面 断面	部位 部位	計高値 (cm)	外底調節 外底調節	内底調節 内底調節	底底 底底	成形 成形	済の付帯 済の付帯	胎土 胎土	胎裏 胎裏	時期 時期		
%	%															
9	12	E13 2号窓側面中段	F3	茎部	口縁部	—	—	0.5	X	—	—	—	—	—	E13 2号窓側面中段	
9	13	E13 2号窓側面中段	F2	茎部	口縁部	—	—	0.4	—	—	—	—	—	—	E13 2号窓側面中段	
9	14	E13 2号窓側面中段	F3	茎部	口縁部	—	—	0.5	—	—	—	—	—	—	E13 2号窓側面中段	
9	15	E13 2号窓側面中段	F3	茎部	口縁部	—	—	0.5	—	—	—	—	—	—	E13 2号窓側面中段	
9	16	E13 2号窓側面中段	F3	茎部	口縁部	—	—	0.5	—	—	—	—	—	—	E13 2号窓側面中段	
9	17	砂土	砂土	砂土	砂土	—	—	0.8	—	A	—	—	—	—	—	砂土

凡例

X: フラット

—: ラウンド

1. 蒜頭である。

2. 陶器を含まず、砂土を含む。

石器観察表

回数 No.	海抜 M.S.L.	出土地点 出土地点	層位 層位	断面 断面	部位 部位	計高値 (cm)	底底 (cm)	重さ (g)	圖考	石材 石材	産地 産地	
%	%											
9	2	1号窓北側 窓半壁二工場	S 2	断面	石片	10.0	9.00	4.60	600.22	丸肩に側面打削面、側面削留	丸肩側面削	北上山地(中央部白石山)
9	4	5号半上	断面	石片	2.40	1.50	0.40	1.40	切子打削	切子	北上山地(古生代)	
9	5	5号半上	断面	石片	2.35	1.80	0.60	1.84	切子打削	切子	北上山地(古生代)	
9	6	5号半上	断面	石片	2.00	2.80	0.60	2.90	刃面不規則	切子	北上山地(古生代)	
9	7	5号半上	断面	石片	1.00	1.90	0.90	1.75	点打削	切子	北上山地(古生代)	
9	8	5号半上	断面	石片	2.00	1.95	0.30	3.14	点打削	切子	北上山地(古生代)	
9	9	IM 0.4 (佐久穂)の落込み	三箇所	石片	1.05	1.60	0.60	0.82	円筒表面	切子	北上山地(古生代)	

みやざわはらした
(11~13) 宮沢原下遺跡ほか2遺跡

委託者 農林水産省東北農政局
いさわ南部農地整備事業所

事業名 国営農地再編整備事業
いさわ南部地区

調査対象面積 192,774m²
試掘面積 10,198m²

調査担当者 窓岩伸吾 阿部徳幸 村上 拓
丸山直美 川又 晋 立花 裕

発掘調査期間 平成16年10月1日~11月17日



遺跡の位置

宮沢原下遺跡ほか2遺跡の試掘調査に至る経過

国営いさわ南部農地再編整備事業実施地区は、岩手県の南西部に位置し、胆沢川から北上川にかけての扇状地の右辺部にあり、標高110～210mの段丘地形を呈している。この地形の中に位置する「上中沢Ⅰ遺跡」ほか29遺跡は、「国営いさわ南部農地再編整備事業」の施行に伴って、その事業地区内に存することから試掘調査を実施することとなったものである。

この地区的農業は、水田を主体とした經營により発展してきたものの、所有耕地が分散し区画形状は未整備もしくは昭和30年代に整備された10a区画がほとんどで、かんがい用水不足に加え用排水路も未整備などから農業の近代化が困難なまま生産性の低い農業經營を余儀なくされている。

このため、農用地の効率的利用と労働生産性の高い農業經營の展開が可能な生産基盤を形成するため、国営かんがい排水事業により基幹的な用排水施設を整備し、本事業では概耕地を再編整備する区画整理875haと地目変換による農地造成8haの地域を一体的に施行し、併せて扱い手への農地利用の集積による經營規模の拡大と經營の合理化を図るとともに、土地利用の整序化を通じ農業の振興を基幹として本地域の活性化に資することを目的に、現在事業を進めている。

この地区的埋蔵文化財包含地については、岩手県教育委員会が平成8年度に分布調査を実施し、「上中沢Ⅰ遺跡」ほか29遺跡が確認されている。その結果に基づいて岩手県教育委員会は東北農政局胆沢旗ヶ石土地改良建設事業所に対し事業について照会した。回答を受けた岩手県教育委員会は東北農政局胆沢旗ヶ石土地改良建設事業所いさわ南部農地整備事業所と協議を行い、試掘調査を財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることにした。

これにより、岩手県教育委員会は平成16年度事業について、平成16年1月16日付け教文第1667号により財團法人岩手県文化振興事業団へ通知した。

これを受けて財團法人岩手県文化振興事業団は、「上中沢Ⅰ遺跡」ほか29遺跡のうち平成16年度施行地区内に存する「宮沢原下遺跡」、「上大畑平Ⅰ遺跡」、「上大畑平Ⅱ遺跡」、「上大畑平Ⅲ遺跡」の4遺跡について、同年9月30日付けをもって東北農政局いさわ南部農地整備事業所と委託契約を締結したが、諸般の事情により「上大畑平Ⅲ遺跡」を除外し、残る3遺跡について同年10月1日から試掘調査事業に着手した。

(農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所)

みやざわはらした
(11) 宮沢原下遺跡

所 在 地	胆沢郡胆沢町若柳字宮沢原地割	遺跡番号・路号	N E 23-2347・M H S -04
委 託 者	農林水産省東北農政局	調査対象面積	113,259m ²
	いさわ南部農地整備事業所	試 挖 面 積	7,826m ³
事 業 名	国営農地再編整備事業	調査担当者	窓岩伸吾 阿部徳幸 村上 拓
	いさわ南部地区		丸山直美 川又 晋 立花 裕
発掘調査期間	平成16年10月1日～11月17日		

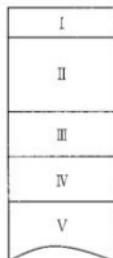
1. 遺跡の位置と立地

宮沢原下遺跡は、JR東北本線陸中折居駅の西方約10kmに位置し、胆沢扇状地の北西～南東方向に広がる上野原段丘上に立地する。調査区の標高は約176mで、現況は水田、畑及び一部牧草地である。

2. 基本層序

本遺跡の基本層序は以下のとおりである。

I層 10Y R3/4暗褐色シルトと10Y R4/3にぶい黄褐色シルトの混合土	<耕作土>
層厚15～30cm	
II層 7.5Y R5/8明褐色シルトと10Y R4/6褐色シルトの混合土	<盛土>
層厚7～55cm	
III層 10Y R1.7/1黒色シルト 層厚5～45cm	<旧表土>
IV層 7.5Y R3/2黒褐色シルト 層厚5～45cm	<漸移層>
V層 10Y R4/6褐色シルト	<地山>



第1図 基本土層柱状図

今回は遺跡内とその西側隣接地に幅約2m、長さ10～90mのトレンチを120箇所設定し、遺構・遺物の有無を確認した。

(1) 遺構

検出された遺構は、縄文時代と思われる土坑31基、陥し穴状遺構34基、時期不明の溝跡5条、柱穴3個である。(第1表参照)

(2) 遺物

T20表土から縄文土器片1点が出土した。また、T15付近民家敷地内で剝片1点、T2付近で剝片2点を表採した。

4. まとめ

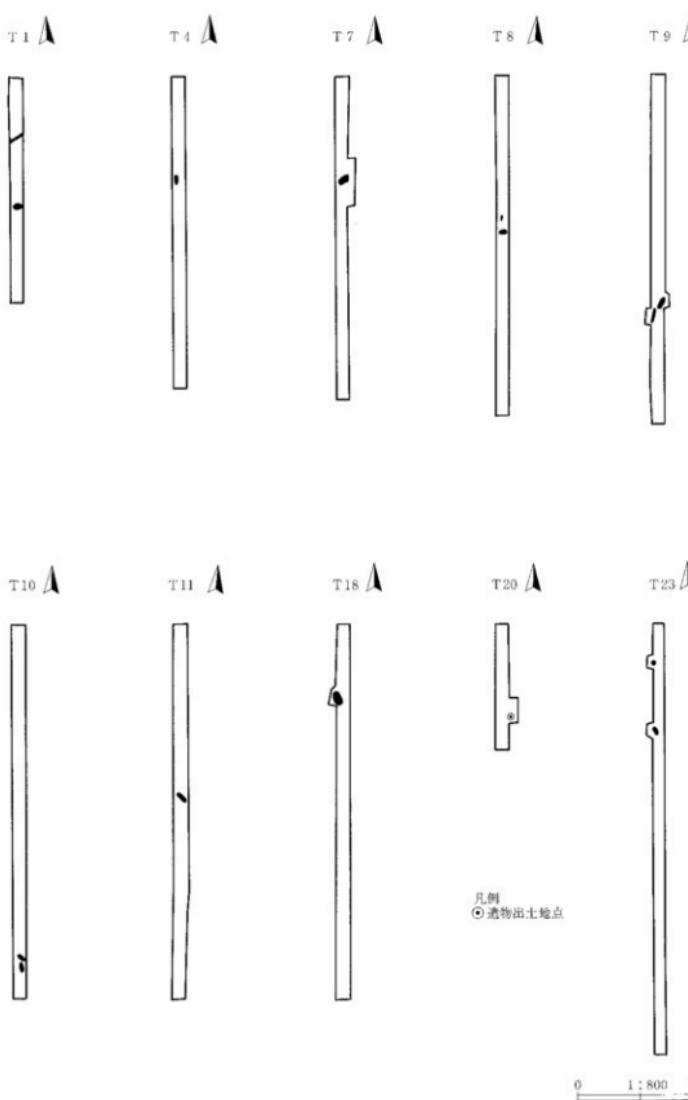
遺構はいずれもI層からIV層までを除去した段階で確認された。全体の検出状況としては、過去に水田造成による削平が下部まで及んでいない調査区西寄りで、陥し穴状遺構の密度は高くなる傾向が窺えた。また、遺跡の隣地から遺物が表採でき、かつT1付近まで遺構が確認されることから、本遺跡はさらに西側に範囲が拡大されるべきものと判断された。なお、調査区北端部(T53～59・T85～91)周辺および南端部(T105～109)では沢地形のため湧水が著しく、遺構・遺物は確認されなかった。

なお、宮沢原下遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

(11) 宮沢原下遺跡

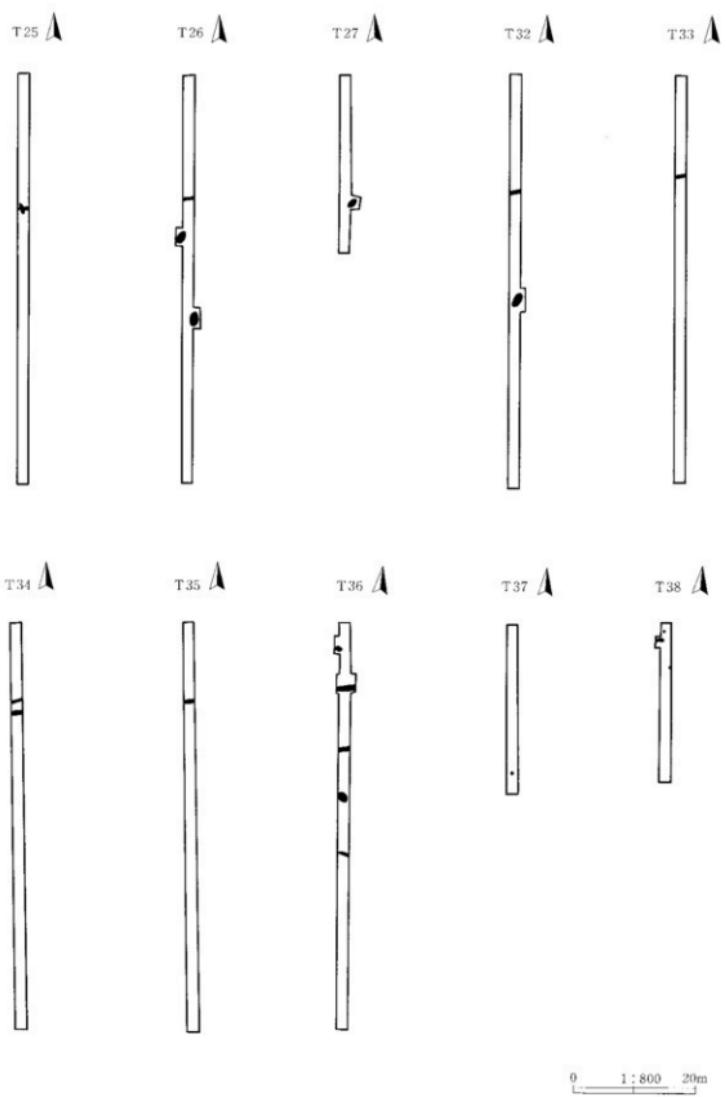


第2図 トレンチ位置図



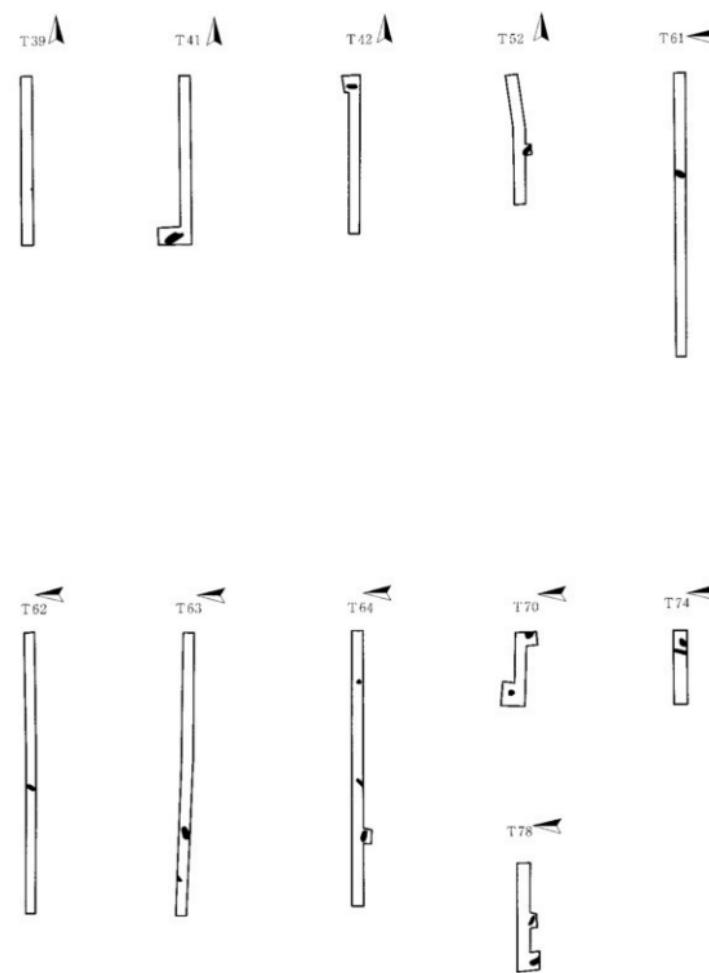
第3図 検出遺構(1)

(11) 宮沢原下遺跡



第4図 検出遺構(2)

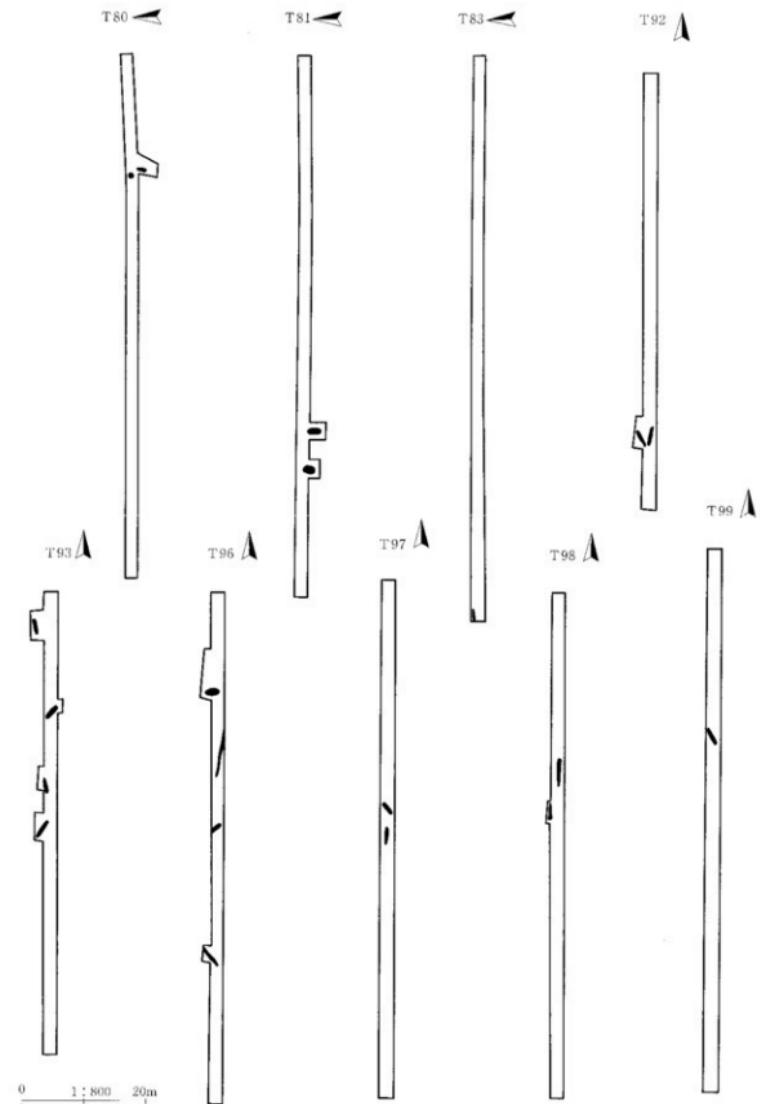
(11) 宮沢原下遺跡



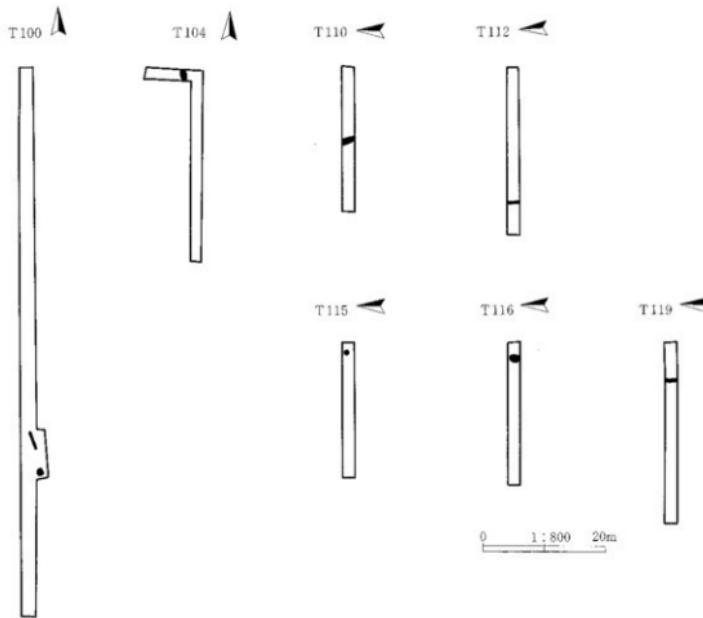
0 1 : 800 20m

第5図 検出遺構(3)

(11) 宮沢原下遺跡



第6図 検出遺構(4)

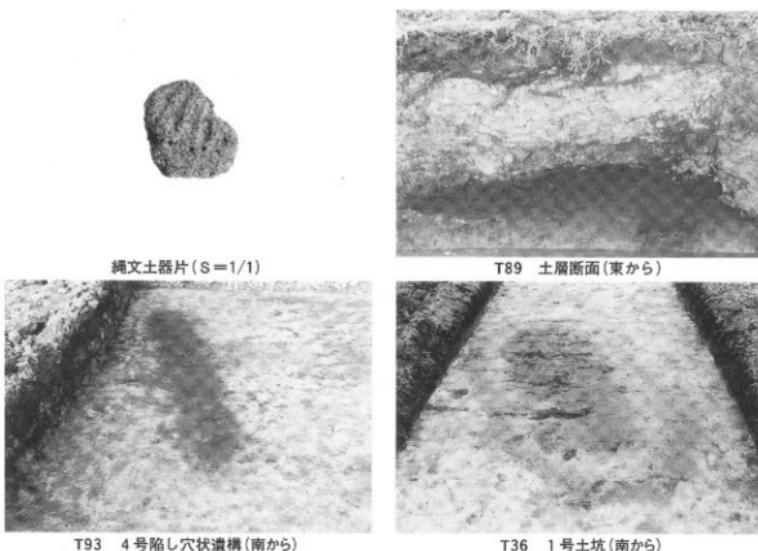


第7図 検出遺構(5)

第1表 宮沢原下遺跡遺構状規模表

トンネル番号	種類	規模 (長軸×短軸)	2号土坑	200×110	T81	1号落し穴状	230×100
T 1	土坑	150×70	3号土坑	100×60		2号落し穴状	210×140
	1号溝	250以上×100	4号溝	300以上×75	T83	落し穴状	210以上×50
T 4	落し穴状	70×60	桂穴	30×30	T92	1号落し穴状	300×50
T 7	土坑	210×90	土坑	160以上×50	T93	2号落し穴状	300×45
T 8	落し穴状	150以上×40	桂穴	20×20		1号落し穴状	330×40
	土坑	180×90	土坑	20×30		2号落し穴状	280×40
T 9	落し穴状	250×40	T41	330×140	T93	3号落し穴状	280以上×70
	土坑	200×80	T42	1号坑		4号落し穴状	260×50
T 10	1号落し穴状	160×60	T32	落し穴状		1号落し穴状	370×40
	2号落し穴状	165×70	T61	土坑	T96	2号落し穴状	210以上×40
T 11	土坑	210×85	T62	落し穴状		4号坑	200×120
T 18	土坑	240×140	T63	1号土坑		6号坑	370以上×49
	落し穴状	150×70	T63	2号土坑	T97	1号落し穴状	280×40
T 23	土坑	90×70		落し穴状		2号落し穴状	210×50
T 25	落し穴状	200×90	T64	1号土坑	T98	1号落し穴状	290×40
	2号溝	180以上×40		2号土坑		2号落し穴状	470×50
T 26	1号落し穴状	230×100	T70	1号土坑	T99	3号落し穴状	300×50
	2号落し穴状	210×120		1号土坑		落し穴状	310×30
T 27	落し穴状	180×100	T74	土坑	T100	土坑	135×110
T 32	落し穴状	260×90		150×100	T101	土坑	200×110
T 33	2号溝	180以上×50	T78	5号溝	T110	土坑	210以上×100
T 34	3号溝	170以上×30		210×50	T112	落し穴状	220以上×40
T 35	2号溝	170以上×30	T80	1号土坑	T115	土坑	90×80
T 36	1号土坑	180×50		2号土坑	T116	土坑	210×120
				100×90	T119	落し穴状	210以上×40

(11) 宮沢原下遺跡



写真図版 1 試掘状況・出土遺物

報告書抄録

ふりがな 書名	へいせいじゅうろくねんどはくつちょうさほうこくしょ 平成16年度発掘調査報告書						
シリーズ名 シリーズ番号	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第469集						
編著者名 編集機関	恵岩伴吾 財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地 所 在 地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001・9002						
発行年月日 発 行 年 月 日	西暦2005年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
みやざわらした いせき 宮沢原下遺跡	岩手県胆沢郡 胆沢町若柳字 宮沢原	市町村 03383	北緯 N E 23 -2347	東經 39度 07分 58秒	調査期間 141度 00分 44秒 2004.10.01 ~ 2004.11.17	調査面積 7,826m ²	「国営農地再整備 事業いさわ南部 地区」に伴う緊急 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
宮沢原下遺跡	散布地 狩獵場	縄文時代	陥し穴状遺構34基 土坑31基 柱穴3個 溝跡5条	縄文土器1点 石器剝片3点			

※緯度・経度は世界測地系

かみおおばたひら
(12) 上大畠平 I 遺跡

所 在 地	胆沢郡胆沢町小山字上大畠平	遺跡番号・略号	NE 34-0082・K O B I - 04
委 託 者	農林水産省東北農政局	調査対象面積	27,963m ²
	いさわ南部農地整備事業所	試掘面積	338m ²
事 業 名	国営農地再編整備事業	調査担当者	窓岩伸吾 阿部徳幸 村上 拓
	いさわ南部地区		丸山直美 川又 晋 立花 裕
発掘調査期間	平成16年10月1日～11月8日		

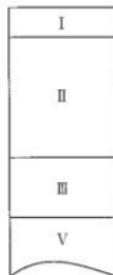
1. 遺跡の位置と立地

上大畠平 I 遺跡は、JR東北本線陸中折居駅の西方約10kmに位置し、胆沢扇状地の北西～南東方向に広がる上野原段丘上に立地する。調査区の標高は約176m、現況は牧草地である。

2. 基本層序

上大畠平 I 遺跡と II 遺跡の上層は、地山上に漸移層、旧表土、盛土、(水田) 耕作上の順に堆積していると考えられるが、本遺跡には漸移層である IV 層が見られなかった。基本層序は以下のとおりである。

I 层	10YR 3/3 暗褐色シルト	粘性中	しまり中	<耕作土>
	植物根多量 (表土)		層厚10～15cm	
II 层	10YR 2/2 黒褐色シルト	粘性中	しまり強	<盛土>
	黄褐色粘土ブロック大量に混入		層厚30～90cm	
III 层	10YR 2/1 黒色シルト	粘性やや強	しまりやや強	<旧表土>
			層厚10～60cm	
IV 层	なし			
V 层	7.5YR 6/1 灰色粘土	粘性やや強	しまり強	<地山>



第1図 基本土層柱状図

3. 調査の概要

(1) 造構

幅約2m、長さ5～50mのトレンチを5箇所設定したが、造構は検出されなかった。

(2) 遺物

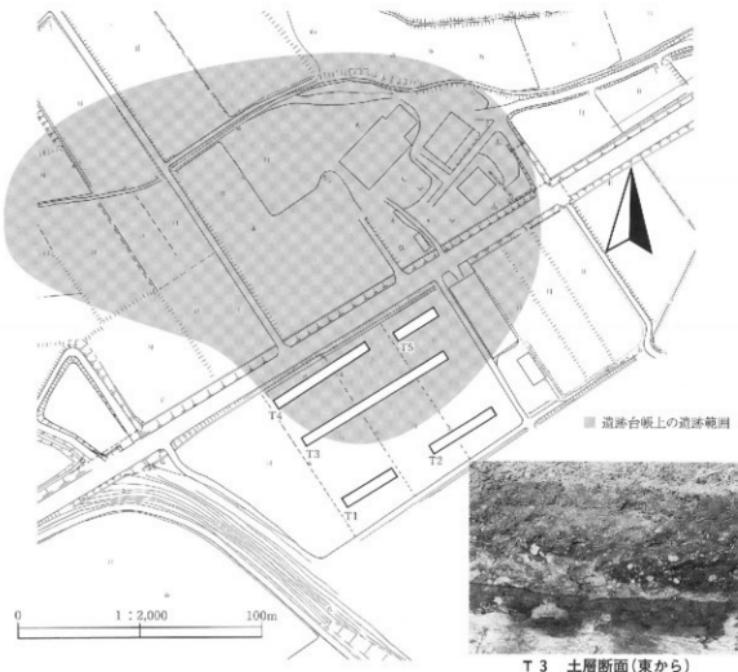
いずれのトレンチからも遺物は出土しなかった。

4. まとめ

現地形は北向きの緩やかな斜面であるが、開拓の結果、旧地形は最大1mほど削平を受け、その後厚く盛土された様子が観察された。遺跡台帳上では散布地で縄文土器が出土しているが、今回の試掘調査では遺跡の一部しか対象としなかったため、遺跡の性格を明らかにするまでには至らなかった。

なお、上大畠平 I 遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

(12) 上大畠平I道路



第2図 トレンチ位置図

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうろくねんどはくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成16年度発掘調査報告書							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第469集							
著者名	忍岩伸吾							
叢書機関	財団法人岩手県文化振興事業団蔵文化財センター							
所在地	〒020-0653 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001・9002							
発行年月日	西暦2005年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 度	調査期間	調査面積	調査原因	
上大畠平I 道跡	岩手県胆沢郡 胆沢町小山字 上大畠平	63383	NE34 -0082	39度 06分 07秒	141度 01分 05秒	2004.10.01 ~ 2004.11.08	338m ²	「国営農地再編整備 事業いさわ南部地区」に伴う緊急発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	記述事項			
上大畠平I 道跡	散布地	縄文時代			今回の調査区内からは、造橋、遺物は 確認されなかった。			

※緯度・経度は世界測地系

(13) 上大畠平II遺跡
かみおおばたひら

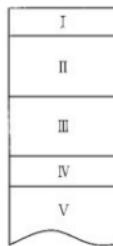
所 在 地	胆沢郡胆沢町小山字上大畠平	遺跡番号・路号	N E 34-0088・K O B II-04
委 託 者	農林水産省東北農政局	調査対象面積	51,552m ²
	いさわ南部農地整備事業所	試 挖 面 積	2,034m ²
事 業 名	国営農地再編整備事業	調査担当者	窓岩伸吾 阿部徳辛 村上 拓
	いさわ南部地区		丸山直美 川又 晴 立花 裕
発掘調査期間	平成16年10月1日～11月15日		

1. 遺跡の位置と立地

上大畠平II遺跡は、JR東北本線陸中折居駅の西方約10kmに位置し、胆沢扇状地の北西～南東方向に広がる上野原段丘上に立地する。調査区の標高は約164～172mで、現況は水田と一部牧草地である。

2. 基本層序

本遺跡の基本層序は以下のとおりである。

I層	10YR 3/4暗褐色シルト	粘性中	しまり弱	<水田耕作土>	
(表上)				層厚12～19cm	
II層	10YR 3/4暗褐色シルト	粘性強			
	10YR 5/8黄褐色粘土ブロック	が大量に混入	層厚10～40cm	<盛土>	
III層	10YR 2/3暗褐色シルト	粘性中	しまり中	層厚9～35cm	<旧表土>
IV層	10YR 3/3暗褐色シルト	粘性中	しまり中	層厚8～18cm	<漸移層>
V層	10YR 5/8黄褐色粘土	粘性強	しまり強		<地山>

第1図 基本土層柱状図

3. 調査の概要

(1) 遺構

幅約2m、長さ5～30mのトレンチを71箇所設定したが、遺構は検出されなかった。

(2) 遺物

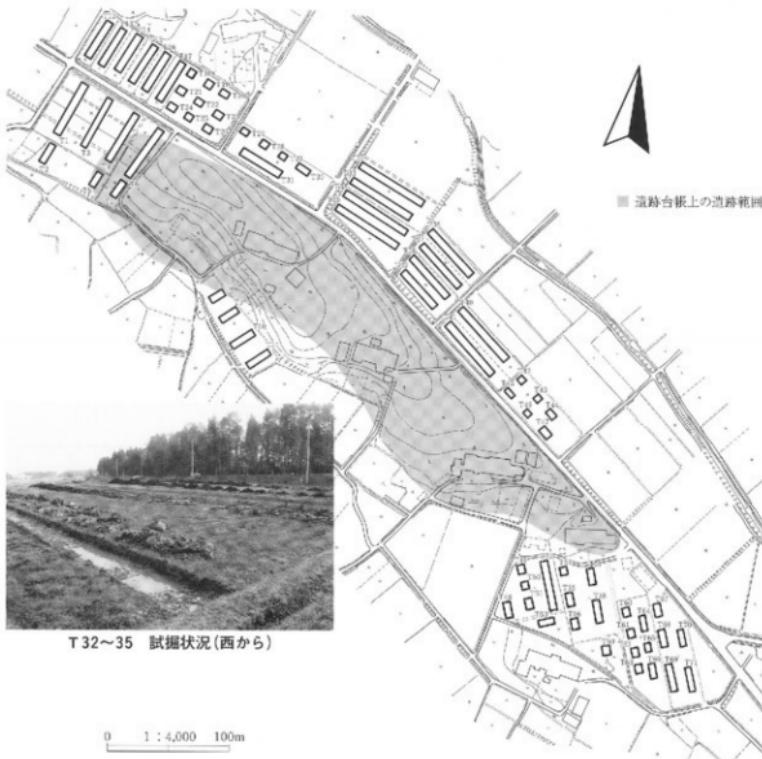
遺物は北側民家前の畑より、剥片1点を表採した。トレンチ内からは出土しなかった。

4. まとめ

今回の調査は、上大畠平II遺跡の隣接地にトレンチを設定し、遺跡の広がりを確認するものであった。調査区北西側(T1～6)は、町道上大畠平線付近の土を削って南側に盛上し、現水田を造成したとみられる。また、調査区東側(T48～71)は、表土下約20cmが地山となっており、T8付近の民家前畑から剥片を1点表採したことからも、過去の造成工事に伴う地形変更を受け、その時点で遺構の一部は失ってしまったものと思われる。T12～47にかけては遺構・遺物とも確認されておらず、遺跡は町道上大畠平線の北側には広がらないものと考えられる。

なお、上大畠平II遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

(13) 上大畠平Ⅱ遺跡



第2図 トレンチ位置図

報告書抄録

品 目 が な	heiiseijouyourokunondohikkuchousakusho						
書 名	平成16年度発掘調査報告書						
シリーズ 名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第469集						
著者名	窪田伸吾						
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯洞11-185 TEL (019) 638-9001・9002						
発行年月日	西暦2005年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
上大畠平Ⅱ 遺跡	岩手県奥州市 上大畠字 上大畠	NE34 -0088	39度 06分 07秒	141度 01分 30秒	2004.10.01～ 2004.11.15	2,034m ²	「国営岩手山森林整備事業 さいわいさわ南部地区」に 伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
上大畠平Ⅱ 遺跡	散布地	周文時代		石器剥片1			

※緯度・経度は世界測地系

かわまえ
(14) 川前遺跡

所 在 地 胆沢郡前沢町白山字川前地内
 委 託 者 水沢地方振興局農政部農村整備室
 事 業 名 経営体育成基盤整備事業白山地区
 発掘調査期間 平成16年8月19日～9月30日

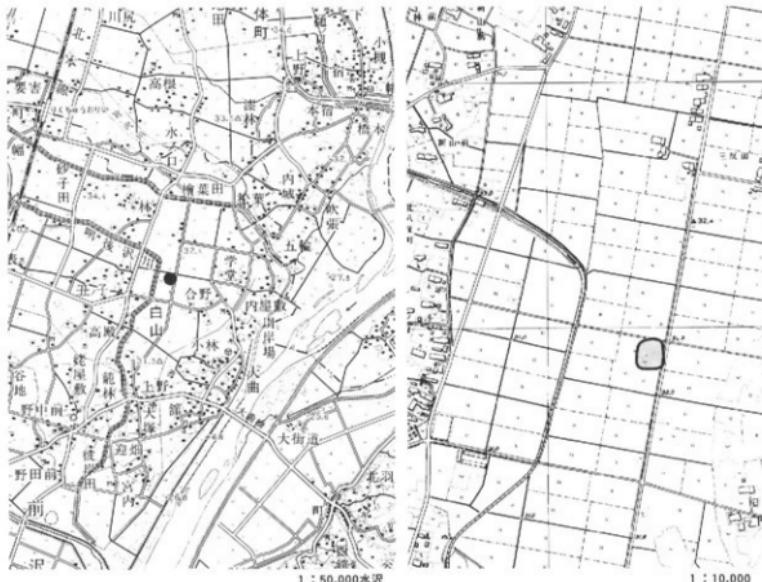
遺跡番号・略号 N E 47-0042・KM-04
 発掘調査面積 当初：237m² 実績：237m²
 調査担当者 村上 拓 阿部徳幸

1. 調査に至る経過

川前遺跡は、県営經營体育成基盤整備事業「白山地区」の事業区域内に位置していることから、事業実施に伴い発掘調査を実施することとなったものである。本事業は、高生産性農業の確立を図り、地域の活性化並びに農村環境の改善と農業経営の安定を図ることを目的に、胆沢郡前沢町白山地区内の271.7haにおいて大区画は場整備を実施するものであり、平成13年度から工事に着手している。

本事業の施工主体である水沢地方振興局農政部農村整備室から依頼を受けた岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課（以下、生文課）は、平成15年度に試掘調査を実施し埋蔵文化財を確認した。当初、調査対象面積が狭小であり遺構密度も低いと予想されたことから、発掘調査は生文課が実施することとなり、平成16年5月17日より着手した（～同月25日）。しかし、想定した密度を超える遺構が検出されたため一旦調査を休止、その後を引き継ぐ形で財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが受託し、調査を再開した。

（水沢地方振興局農政部農村整備室）



第1図 遺跡の位置

2. 遺跡の位置と立地（第1図）

川前遺跡は、JR 東北本線陸中折居駅の南東2.3kmに位置し、北上川右岸の沖積平野に形成された微高地土に立地する。北緯39度4分42秒、東経141度9分21秒付近に相当し、標高は31.5m前後を測る。本来、概ね北西—南東方向にのびる微高地の一部であったと思われるが、調査区の四方は削平され水田となっていた。この造成の際に生じた残土が盛り上げられ、結果として削平を免れた範囲が今回の調査区である。現況は畠地として利用されていた。

3. 遺跡の基本層序（第2図）

基盤（地山）となるのは黄褐色シルト〔V層〕で下部は砂質を帯びる。さらに下位は礫層〔VI層〕となっており、一方、上部は漸移層〔IV層〕へと連続する。

IV層の上位には遺構埋土の主体となっている黒褐色～暗褐色シルト〔III層〕が堆積していたものと考えられるが、調査区全体は旧表土（耕作土）層であるII層下面によってV層上面前後までは水平に削平されており、一部、風倒木痕に観察されることを除けば、III層の純粋な堆積が残存する箇所は認められなかった。

先述のとおり、II層の上位は厚さ80cm前後に及ぶ厚い盛土〔Ib層〕によって覆われ、この上部約20cmは現耕作土〔Ia層〕となっていた。周辺から盛り上げられたI層にも土師器片等の遺物が含まれており、本来の遺跡範囲が調査区周辺に広がっていたことを示唆している。

4. 調査の概要

（1）遺構（第3図、写真図版1）

調査区は、牛文課の調査によりすでに表土が除去され、遺構検出面が表れた状態で保存されていた。今回の調査では、まず生涯学習文化課作成の遺構配置図を参照しながら再検出を行い、順次遺構検査に着手した。検出されたのは、平安時代の堅穴住居跡2棟、住居状遺構1棟、土坑15基、鍛冶炉状遺構1基、平安時代～中世と思われる方形周溝3基、柱穴状ピット118基である。

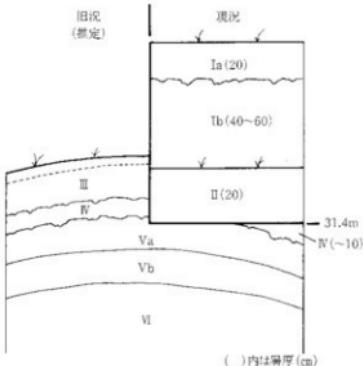
グリッド配置と調査区全体の遺構配置を第3図に示し、さらに調査区を南北に分割して北半部平面図を第4図、南北部平面図を第5図にそれぞれ示した。調査で設定したセクションポイントには英大文字A-A'～V-V'をあて、断面図は第6・7図にまとめて掲載している。

以下、各遺構種別ごとに記載する。

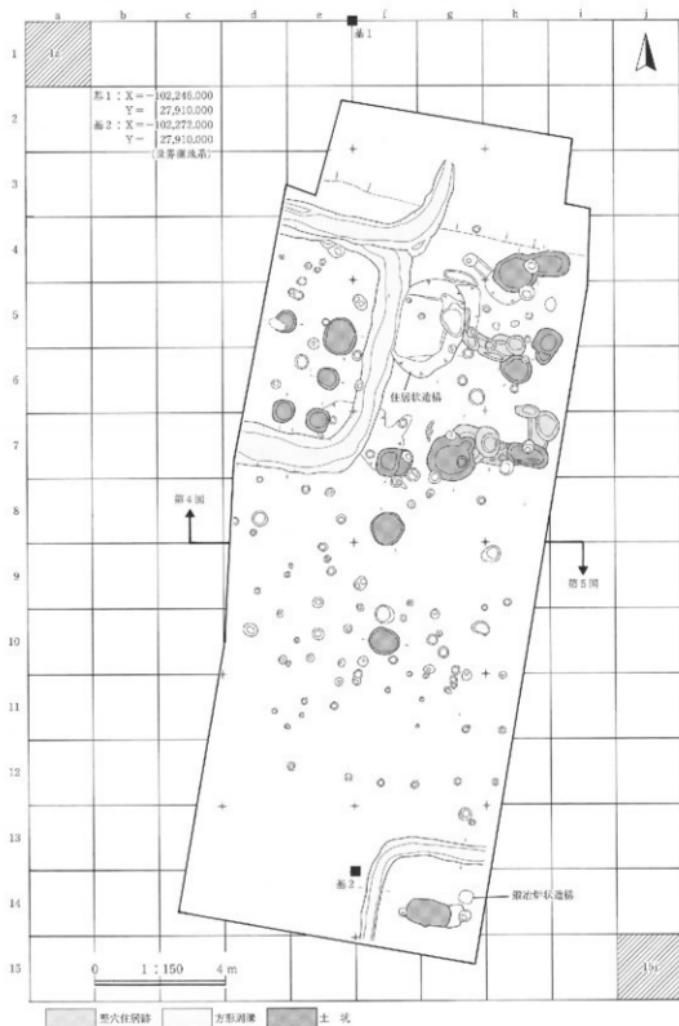
堅穴住居跡（表1、第4図、写真図版2）

調査区北東部に2棟が近接して位置する。この区域は、土師器片等の遺物や焼土ブロック、及び十和田aテフラに類似する灰白色ブロックの広がりが黒色土中で認められたことから、牛文課調査時にすでに住居跡等の遺構の存在が想定されていた。精査の結果、壁溝の一部と思われるL字状の掘り込みが2箇所で確認され、これらを堅穴住居跡と認定した（住居跡1・住居跡2）。いずれも床面の直上またはそれ以下まで削平を受けていたため、全体形状や規模は把握できなかった。

住居跡1では床面と思しき硬化面が残存しており、面上には3箇所の焼上がりが形成されていた。このうち最



第2図 基本層序模式図



第3図 遺構配置図

も東側の焼土は明瞭な赤褐色を呈し、周囲にはカマドの崩壊に伴うものと解釈できる焼上ブロックの広がりが認められた。一方、他の2箇所は不整形の弱い被熱痕跡であることから住居に常設の施設とは思われない。

壁溝上には円～楕円形または不整形の上坑状の広がりが認められる。この部分の埋土は、上部が壁溝のそれと連続するが、下部は人為的に埋め戻された様相を呈することから、住居構築時の掘り方と考えられる。このほか、下に個別の遺構として扱っている土坑の一部では、住居の内側から流入したような遺物の出土状況が観察されていることから、本米、住居に付属していた土坑が含まれている可能性が高い。

2棟とも、遺物や焼土ブロック・炭化物の分布は東側に多い傾向が認められ、住居跡1における東端焼土の位置も考慮に入れれば、カマドは東壁側に設置されていたものと推測される。柱穴は付近に複数検出されているが、住居に帰属するものを特定するには至らなかった。

出土遺物は、ロクロ整形の土師器壺・甕、須恵器片を主体とする（第8図：1～3）。これらの遺物や、住居跡1が十和田aテフラ類似の灰白色ブロックを壌土に含む住居状遺構に切られていることから、遺構の帰属時期は概ね9世紀後半に位置づけられよう。

表1 積穴住居跡

遺構名	位置 (グリッド)	平面形状	壁溝状痕跡の 残存規模	出土遺物〔第8図；掲載番号〕	重複関係
住居跡1	5g～6h	L字状	南辺：190cm 西辺：110cm	土師器壺〔1〕・甕片、須恵器大甕片 (土坑8出土破片と同一個体)。	住居状遺構に切られる。 土坑12を切る。 土坑2は同時か。
住居跡2	7g～7h	L字状	南辺：305cm 東片：190cm	土師器壺片・甕口縁部片〔3〕、須恵器部片〔2〕	土坑4を切る。 土坑15は同時か。

住居状遺構（第4図、写真図版3）

上の住居跡と同様、調査区北東部5gグリッド付近に位置する。東部で住居跡1を切り、西部は方形周溝2の東辺に切られる。平面形は南北方向に長径を持つ3.1×2.0mの不整楕円形を呈するが、奥面は内部に向かって緩やかに傾斜し、2.0×1.5mの長方形の底面へと連続する。底面は概ね平坦であるが、住居床面のような硬化範囲は認められず、地山下部の礫層が露出している。底面の外周には部分的に数cm程度のわずかな立ち上がりが残存する。壌土の主体は黒褐色シルトで、中位には十和田aテフラ類似の灰白色ブロックを含む層がレンズ状に堆積している。壁面の大規模な崩壊の痕跡は認められないことから、楕円形の開口部は原形から大きく変化していないと思われる。東側壁面では不整楕円形の掘り込みが検出されたが、壌土は本遺構のそれと連続しておらず、かつ人為的に埋められたものと判断されることから、本遺構の掘り方、あるいは住居跡1の掘り方が残存したものと思われる。

本遺構からは、わずかな土師器細片のほか、鉄滓1点（第8図：4）が出土した。住居跡1を切っている点、壌土に十和田aテフラ類似ブロックを含む点から、帰属時期は9世紀後半～10世紀初頭（十和田aテフラ降下以前）と考えられる。

土坑（表2、第4・5図、写真図版4ほか）

大半が調査区北半部に分布する。平面形は12基が円形、ほか3基（土坑11・14・15）が楕円形を呈する。検出面からの深さが25cmを超えるものは住居跡と同様に北東部に集中しているが、一方、北西部（方形周溝2の内部）の5基（土坑5～9）は20cmに満たない。このことは、調査区北西部が本来北東部に比べてやや高く、後世の削平の影響をより大きく受けた可能性を示唆している。壌土・遺物の流入状況が北東部土坑に

類似する点や、北東部において土坑と住居跡の分布域が重複する傾向を考慮すれば、削平前には北西部に住居跡が存在した可能性は高いと思われる。いいかえれば、北半部一帯の土坑の多くは本来住居に付属するものであった可能性が高い。

他と離れて調査区中央付近に位置する土坑10では、須恵器壺が底面に横倒しになった状態で出土した。口縁部は意図的に打ち欠かれており、さらに土坑上部の削平に伴い器体の縦半分を失っている。この個体には土坑4から出土した頭部片1片が接合している。また、同じく調査区中央部に位置する土坑13の底面上では、葉状の炭化物が繊維方向を明瞭に残した状態で出土している。

調査区南東隅の土坑14（第7図）は、後述する方形周溝1の内部に位置し、同じく後述の鍛冶炉状遺構の掘り込み部を切っている。長楕円形を呈する開口部の両端からは柱穴各1基が検出されているが、本遺構に付属するものとする確認は得られなかった。平而圓にみられる底面の不整形の落ち込みは、断面等の観察から掘り方の凹凸であることがわかつており、本来の底面は平坦に整っていたものと思われる。

以上、いずれの土坑も埋土は黒褐色～暗褐色シルトを主体としており、他の時期の遺物を伴うことなく土師器・須恵器等を主体としていることから、遺構の帰属時期は概ね9世紀後半～10世紀初頭と考えたい。

表2 土坑

遺構名	位置 (グリッド)	開口部径 (長×短: cm)	深さ (cm)	出土遺物 〔第8図: 拙載番号〕	特記事項 (重複: 旧<新)
土坑1	4 h ~ 5 h	144×116	29	土師器片・壺片.	
土坑2	5 h ~ 6 i	76×74	25	土師器片・壺片、刀子〔5〕.	
土坑3	7 f	108×88	25	土師器片・壺片、須恵器部片.	西側深い(重複?)
土坑4	7 g	146×135	25	土師器片・壺片〔7〕・塊?底部〔6〕、須恵器蓋・部片.	<住居跡2
土坑5	6 d ~ 7 e	70×68	9		
土坑6	6 e	70×65	13	土師器片〔8〕・壺片.	
土坑7	5 d ~ 5 e	74×66	7		
土坑8	5 e ~ 6 e	114×102	14	土師器片・須恵器大壺部片〔9〕・口縁部片.	
土坑9	7 e	68×68	19	土師器片〔10・11〕、須恵器附部片.	
土坑10	10 f	94×80	14	土師器片・須恵器壺〔12〕.	須恵器〔12〕には土坑4から分離.
土坑11	4 h ~ 4 i	130×76	32	土師器片〔13〕・壺片.	
土坑12	6 h	95×85	12		<住居跡1
土坑13	8 f	104×100	30	土師器片・壺片.	
土坑14	14 f ~ 14 g	140×78	25	土師器片・壺片.	>鍛冶炉状遺構掘り込み部
土坑15	7 h	136×72		土師器片〔14〕・壺部片・須恵器部片.	

鍛冶炉状遺構（第7図、写真図版6）

調査区南東隅、後述する方形周溝1内部、14 g グリッドに位置する。燃焼部（略円形：径45cm）と南西部に隣接する土坑状の掘り込み部（楕円形：径62×50cm）からなる。焼土の周辺には土師器片等の遺物や焼土ブロック・炭化物が広がり、これらが掘り込み部の内部へ連続して流入している様子が観察されたことから、両者を一連の遺構と判断した。燃焼部の中央はやや窪み、強い被熱によって還元した径15cmほどの範囲が青灰色を呈してガリガリに硬化している。掘り込み部は西半上部を土坑14に、東端部を柱穴状ピットに切られている。掘り込み開口部の南側上面からは鉄砧石の可能性を持つ標が、また、北側（燃焼部側）の埋土最上部からはフイゴ洞門が、それぞれ内部側に滑り落ちたような状態で出土していることなどから、鍛冶炉の可能性をもつとのと判断した。ただし、鍛冶工程に関連する他の遺物は確認できなかった。

出土遺物は第9図に示した（15~21）。15~16は上述の羽口・鉄砧石、17~21は掘り込み部埋土から出土し

(14) 川前遺跡

た土師器である。17・18は坏で、いずれも底面に回転糸切痕を持ち内面に黒色処理が施されている。17は高台が剥落している。これらの遺物から、遺構の罹属時期は9世紀後半から10世紀初頭と考えられる。

方形周溝（第4・5図、写真図版5）

計3基のうち、1基（方形周溝1）が調査区南東隅14gグリッド付近、2基（方形周溝2及び3）が北西部3e～7fグリッド付近に位置する。いずれも部分的な残存であり全周検出されたものはないが、コーナーに丸みを帯びつつ方形に巡るものと思われる。なお、方形周溝1の埋土は生文課による精査すでに完掘されていた。

このうち、方形周溝2は東辺个体とこれに接する北辺及び南辺の一部が残存しており、北辺～南辺間（外端間）は8.2mを測る。溝の幅は0.8～1.4m、検出面からの深さは30～35cmで、断面逆台形状を呈し、ほぼ平坦な底面を有する。北辺部は方形周溝3の南辺と重複し、これを切っている（掘り直している）ことが確認された。また、東辺部は住居状遺構の西端部を切っている。埋土は、方形周溝1及び3が黒褐色シルトを主体としているのに対し、方形周溝2はこれよりやや明るく地山ブロック等の混入が少ない暗褐色シルトが主体となる。

遺物としては、いずれの埋土からも土師器小片が少量出土しているが、周囲の平安時代遺構から流入したものと思われる。第9～10図；22～27は方形周溝2の出土遺物である。土師器坏・壺の一部に加え、東辺北部の埋土上部から10枚の銭貨（第10図；27a～j）が、南辺西部埋土上部からは中国産白磁碗（第10図；11～12世紀初？）の口縁部破片が出土した。銭貨は当初全てが癒着した状態で出土し、その後、癒合の弱い面で6分割したものを採拓し掲載した。景德元寶（27a）をはじめ初請年代を11～12世紀初頭にもつ4枚の北宋銭が確認されている。

以上から、方形周溝2は概ね12世紀あるいはそれ以前に帰属し、方形周溝1・3は方形周溝2に比して構築年代が古いものと判断される。

柱穴群（表3、第4・5図、写真図版3）

調査区内からは118基の柱穴状ピットが検出された（pp 1～127／うち9基欠番）。分布は調査区全域に及ぶが、土坑10付近を中心とした調査区南半部の一群と、住居跡・土坑群を切って分布する北半部の一群に分かれる。南半部柱穴群では東西あるいは南北方向に列をなす柱穴配置が目につくが、検討の結果、建物跡を構成する配置を復元するには至らなかった。出土遺物は土師器・須恵器の細片に限られており、これらが直ちに柱穴の時期を示すものとは認めがたいが、壇上の土体七が他の古代遺構のそれに類似することからも、概ね平安時代（10世紀以降？）に属するものと考えたい。

（2）遺物（表4、第8～10図、写真図版7・8）

出土遺物の主体は土師器・須恵器で、総量は中コンテナ2箱である。土師器の内容としては、ロクロ成形／底部回転糸切／内面黒色処理の坏、ロクロ調整／体～底部外面ケズリ剥離の壺が大半を占めている。須恵器の出土量は少なく、復元できたのは土坑10から出土した壺（12）のみであり、他は全て胴部破片であった。これらは形態から9世紀後半～10世紀初頭に位置づけられよう。

羽口（15）・鉄砧石（16）・刀子（5）・鉄滓（4）は集落内における鍛冶作業を想起させるが、これらを有機的に結びつける事実は確認されなかった。また、住居跡1・2付近の黒色土からは七錘（32）が出土している。

このほか、風倒木痕から縄文時代前期初頭の土器破片1点（31）、方形周溝2の壇上から石匙1点（26）が出土している。付近における縄文時代遺跡の所在を示唆するものであろう。

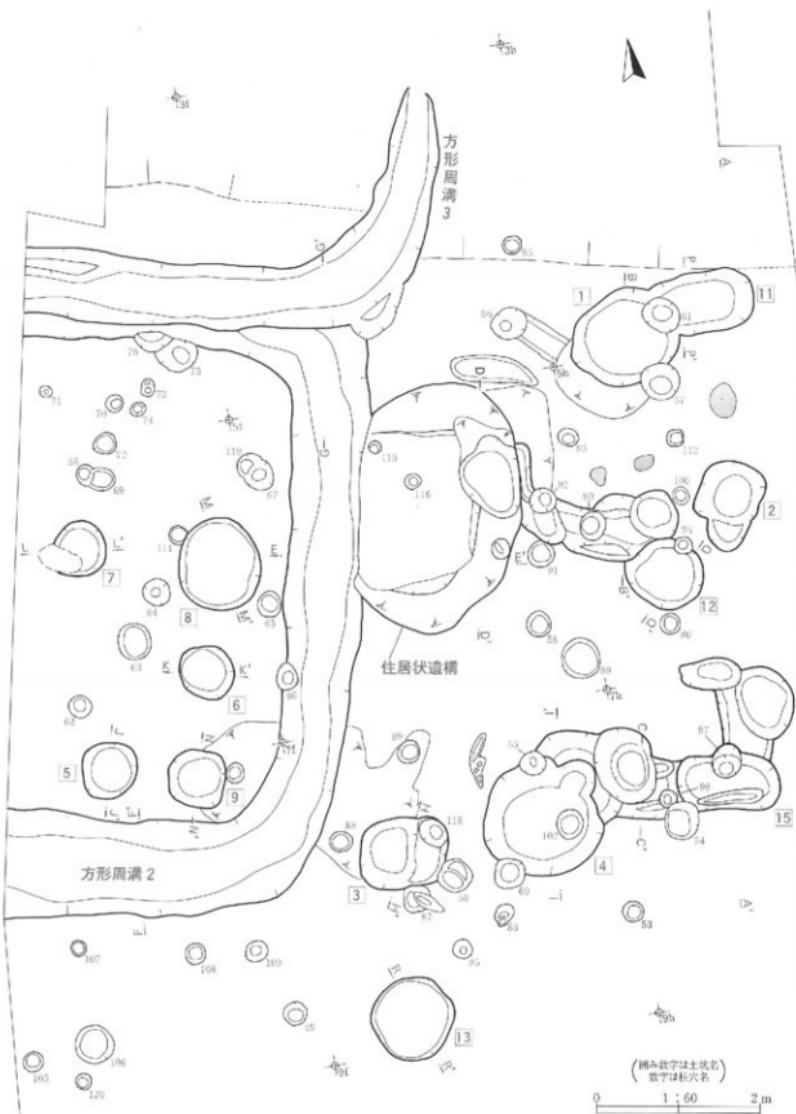
表3 川前遺跡柱穴一覧

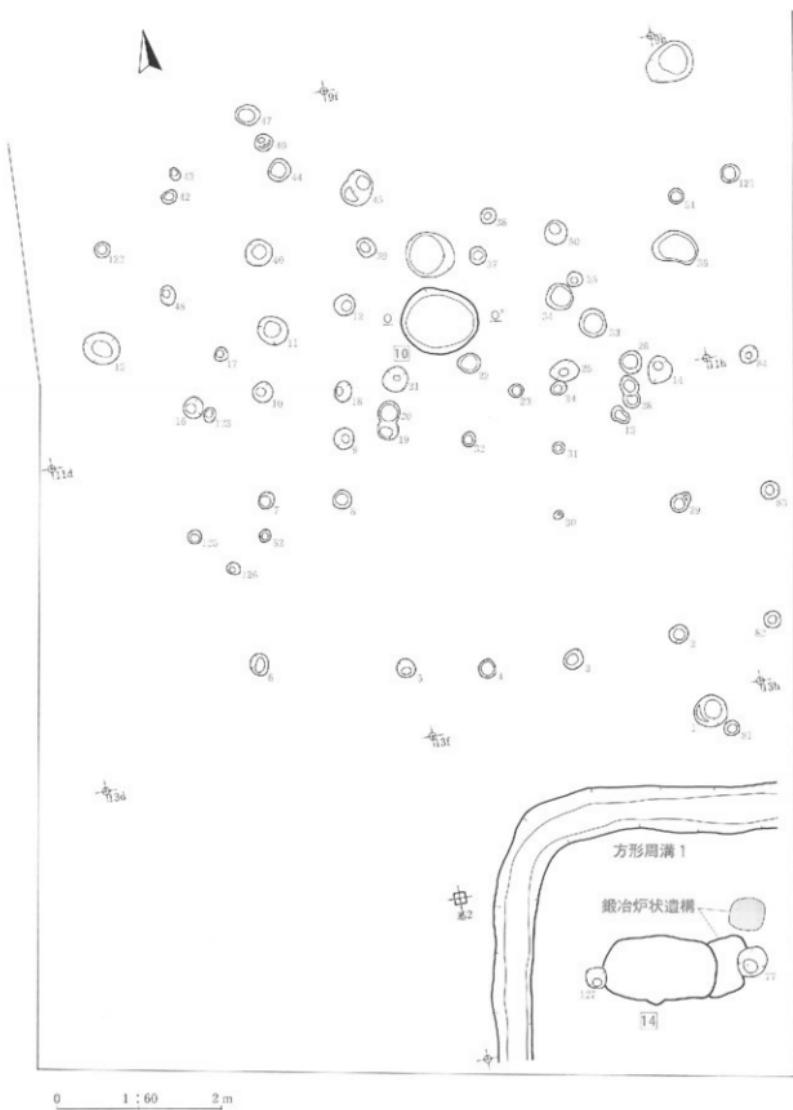
5. まとめ

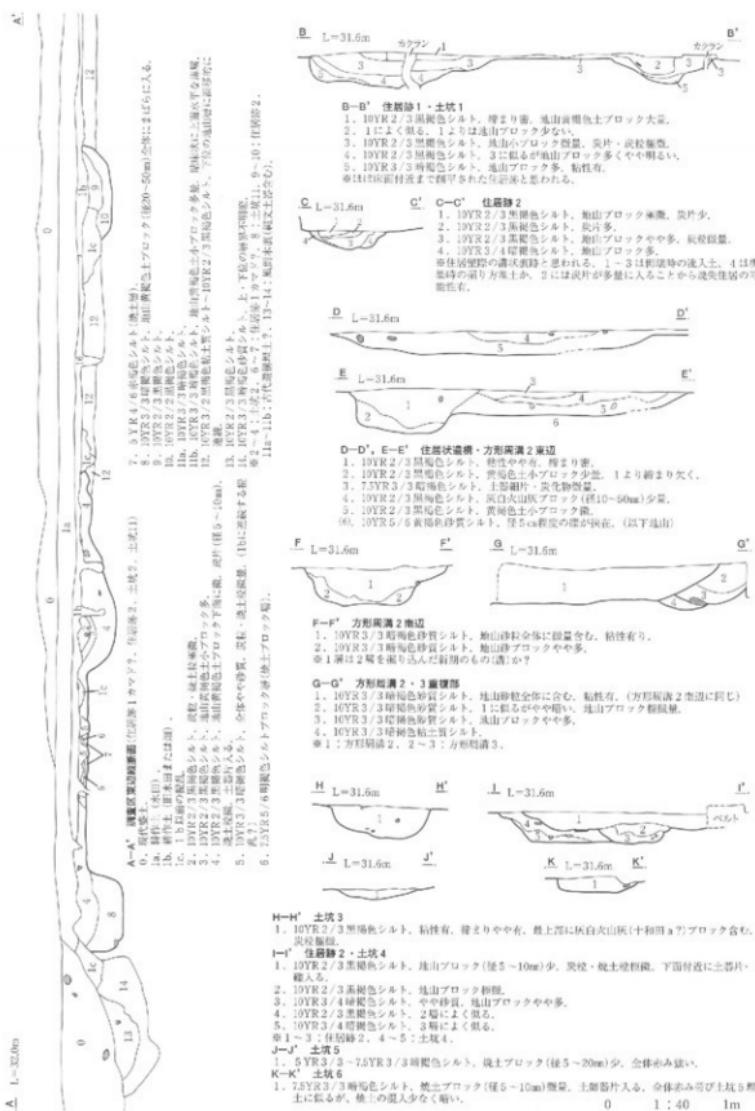
調査成績の概要を以下に列記し、まとめたい。

- ・調査区北半部では平安時代の堅穴住居跡と上坑が密に検出され、該期の集落跡であることが判明した。
 - ・調査区南東隅では羽口・鉄砧石を伴う鍛冶炉跡遺構が検出され、集落内における鍛冶作業を示唆する。
 - ・方形周溝3基が検出され、うち新期のものは北宋錢・中国産磁器を伴うことから、概ね12世紀以降に帰属するものと考えられる。平安時代集落の廃絶後、調査区付近は墓域へと性格を変えたことが理解される。
 - ・後世の削平により調査区全体の遺存状況は極めて悪いが、遺跡の立地する微高地は北上川と平行して南北に延びており、本来の造跡範囲がさらにもっと広がっていたことは明らかである。

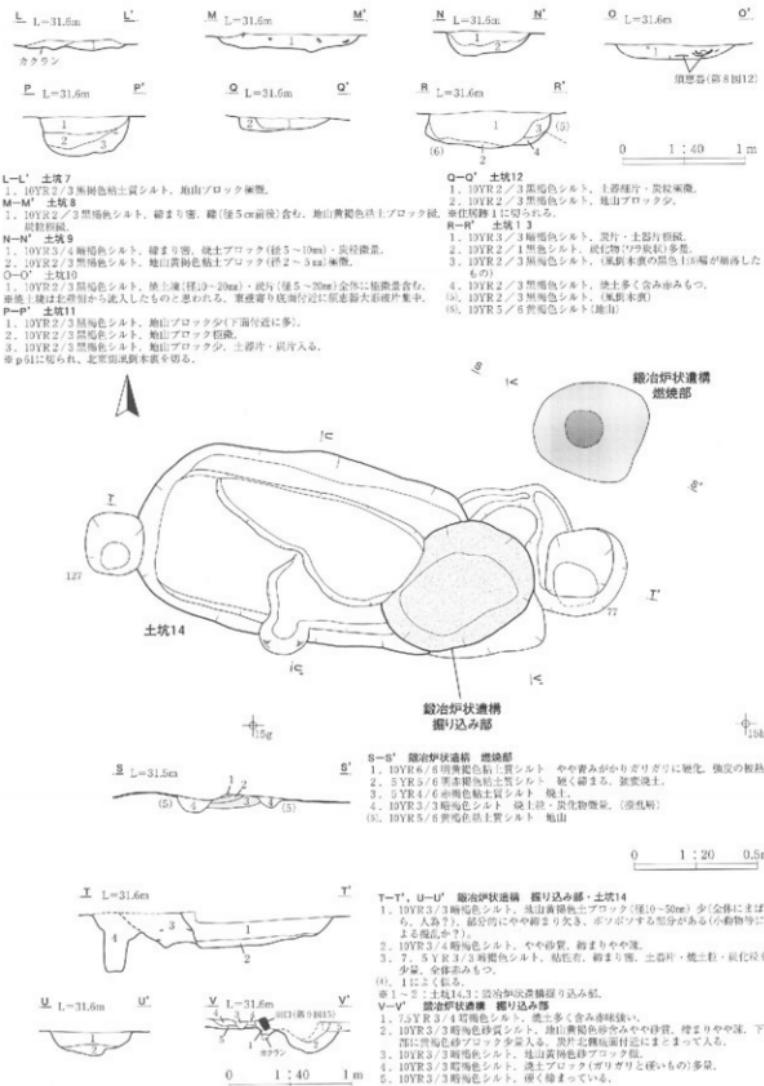
なお、以前遺跡に係る報告は、これをもって全てとする。





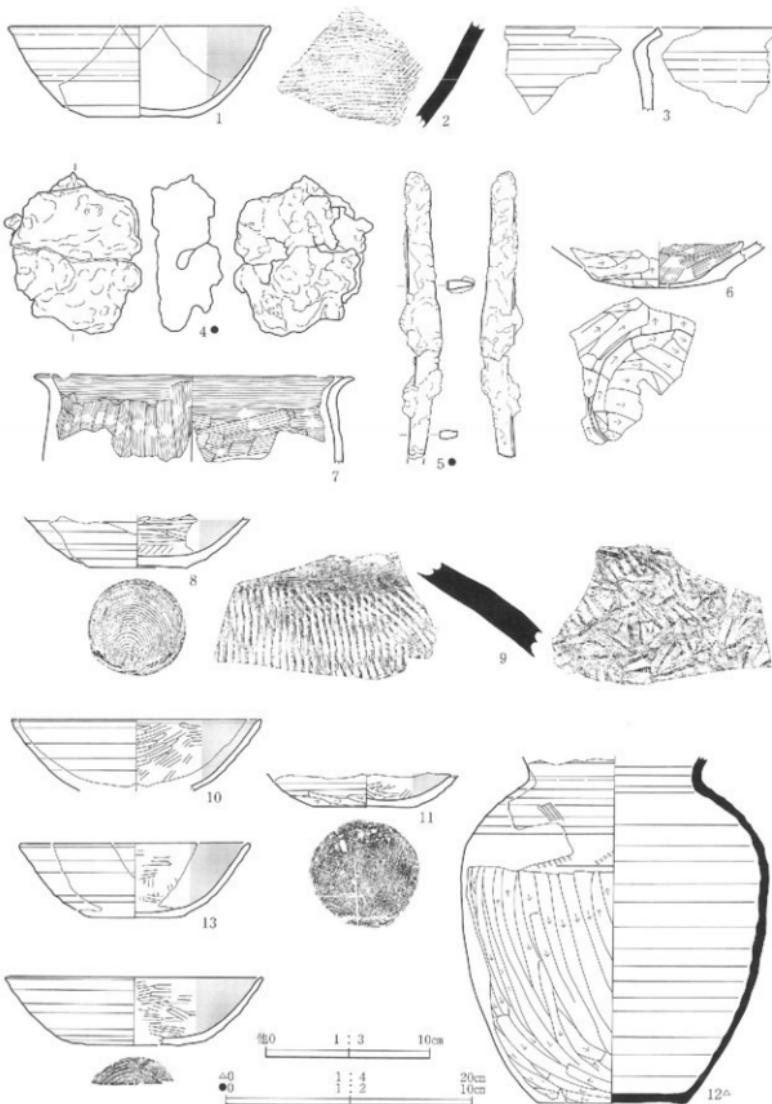


第6図 遺構(3)

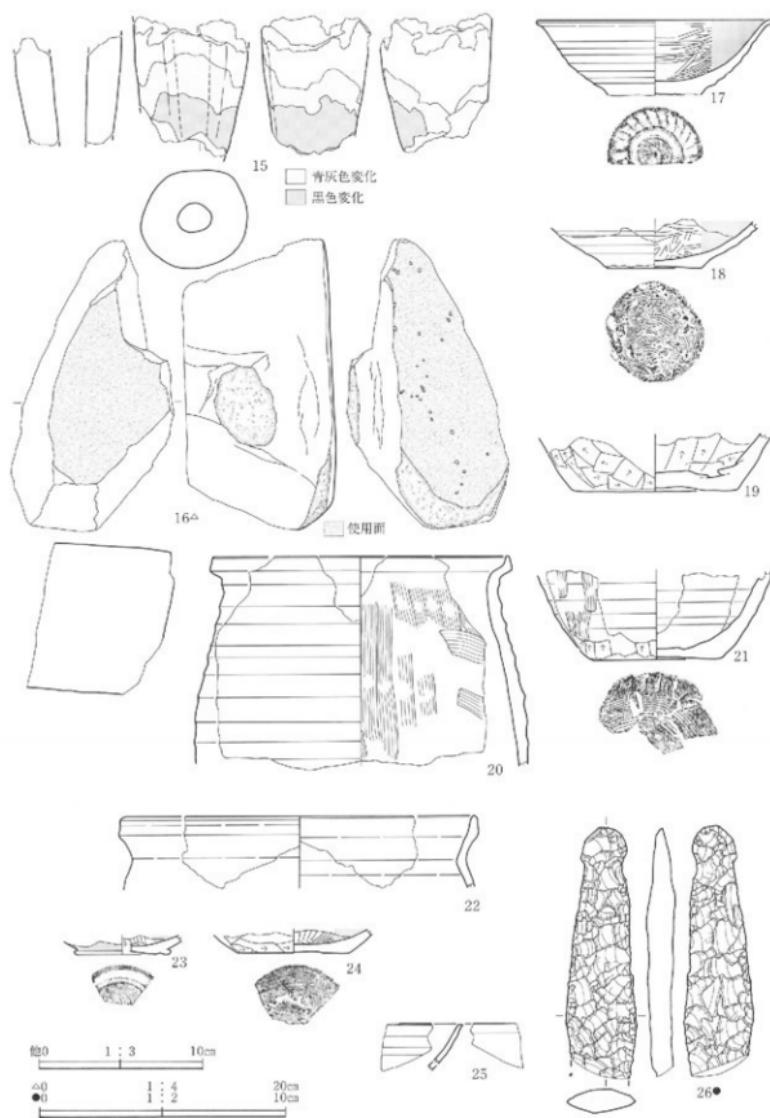


第7図 遺構(4)

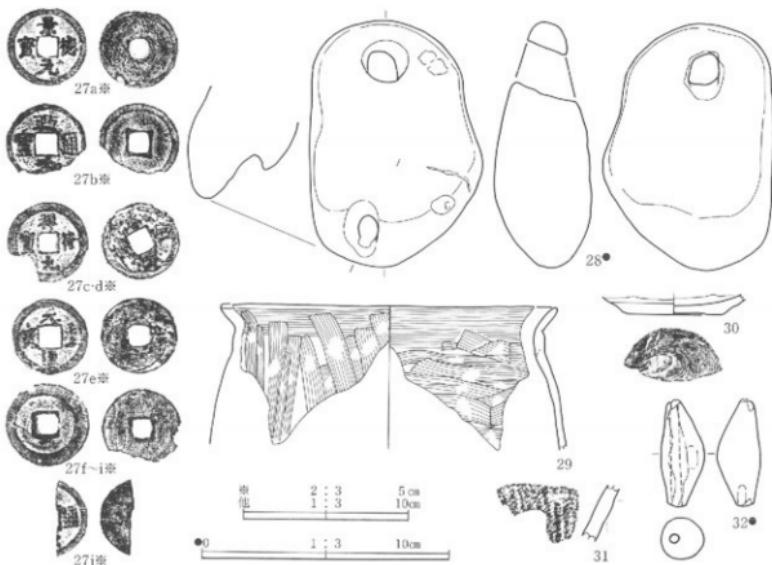
(14) 川前遺跡



第8図 出土遺物(1)



第9図 出土遺物(2)



第10図 出土遺物(3)

表 4 川前遺跡出土遺物一覽

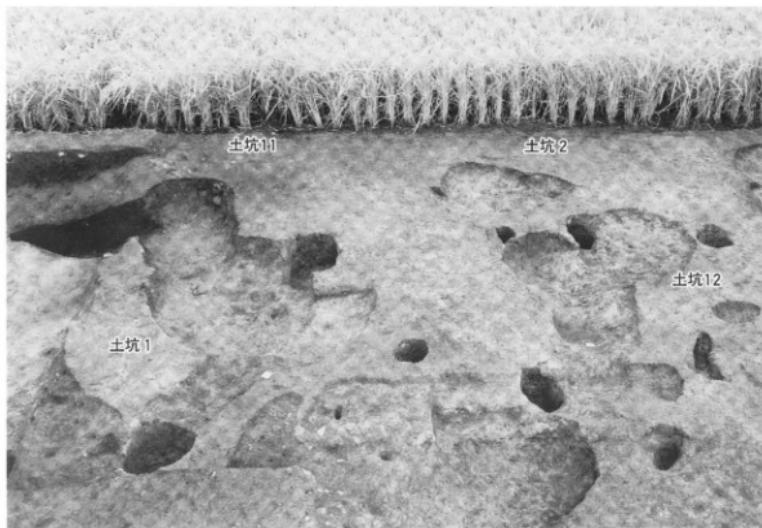
樹種 番号	生長地点・産地名	葉形等	花種	部位	觀察事項等
1	住居跡1	後山面	上部弱冠	葉～底	内黒、葉面滑感、武切不明。
2	住居跡2	埋土	隔壁弱冠	葉	外側最弱目、
3	住居跡3	埋土	下部弱冠	口	白口形態。
4	住居跡遺構1	埋土	弱冠		
5	土坑2	糞土中端	刀子		
6	土坑4	糞土	上部弱冠	底	底丸み帯が強烈より薄い。
7	土坑4	糞土	下部弱冠	口	
8	土坑6	糞土	下部弱冠	弱～底	内黒、圓輪形切、
9	土坑8	糞土	頂部弱冠	弱	外側微目、内側相当其直、
10	土坑9	埋土	上部弱冠	口～底	内黒。
11	土坑9	埋土	上部弱冠	葉～底	内黒、葉面再調節。
12	土坑10	埋土	須毛弱冠	口～底	内黒。4出上部片と合接。
13	土坑11	埋土	下部弱冠	口～底	内黒、葉面滑感、武切不明。
14	土坑15	埋土	下部弱冠	口～底	内黒、葉面滑感、回転余切。
15	前院軒廊柱根 欄干込み跡	欄干最上部	羽口		
16	前院軒廊柱根	埋山面	鉛石7		右材：ひら夷（奥山田川、新生代第三紀）
17	前院軒廊柱根	欄干込み跡	上部斜面付合	口～底	内黒、圓輪形切。
18	前院軒廊柱根	欄干込み跡	上部弱冠	底	内黒、圓輪余切、小形度。
19	前院軒廊柱根	欄干込み跡	下部弱冠	葉	
20	前院軒廊柱根	欄干込み跡	上部弱冠	口～弱	ロクロ形態、
21	前院軒廊柱根	欄干込み跡	上部弱冠	底	回転余切。
22	方井周縁2	埋土	土加弱冠	口	ロクロ形態、葉面滑感。
23	方井周縁2	埋土	上部弱冠	底	内外側黑色強調、底外側綠苔高台。
24	方井周縁2	埋土	下部弱冠	葉	内黒、葉面滑感和承筋部（側筋部）。
25	方形周溝2 南西西兩部	埋土上部	白弱冠	口	中国周溝（周溝）、大陸半島海岸段3期（11～12C前）
26	方形周溝2 南西部	埋土上部	石乳		右材：真向（奥山田川、新生代第三紀）
27	方形周溝2東北北部	埋土上部	枝状（計10枚）	a：葉丸み、b：枝状通質、c：神奈川型、d：（不明）、e：元立通質？、f：（1：（不明）、g：江戸周溝）、h：单（（2枚）、i及j：（4枚）：はね葉、	
28	籽穴27	埋土	有孔石製品		右材：貫岩（奥羽山脈、新生代第三紀）
29	籽穴27	埋土	下部弱冠	口～弱	
30	籽穴27	埋土	上部弱冠	底	底部余切。
31	深谷地区北東側風化木板	黒色土（黒層相当）	鶴文土器類	樹皮下部	地文：純R.L.、土基に纖維多く含む。前湖弱冠・葉面？
32	深谷地区北東側	黒褐色土・黒褐色土	上部		



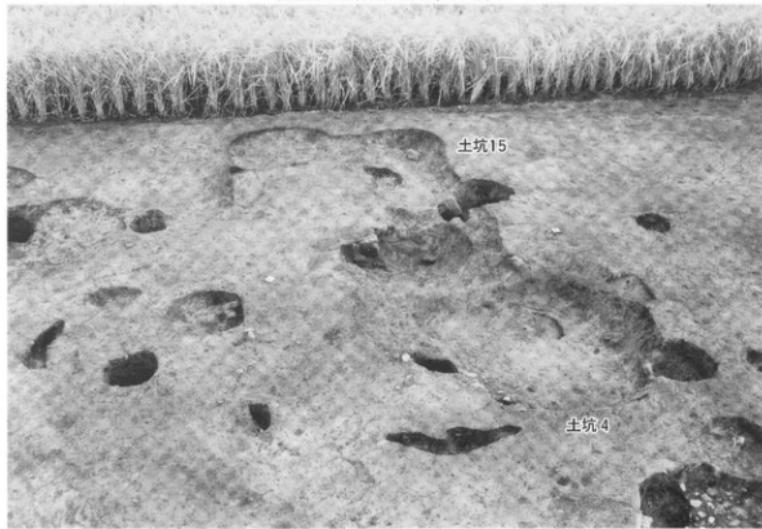
調査区全景 (北から。左奥は東稻山)

写真図版 1 検出遺構(1)

(14) 川前遺跡



住居跡1と付近の土坑(西から)

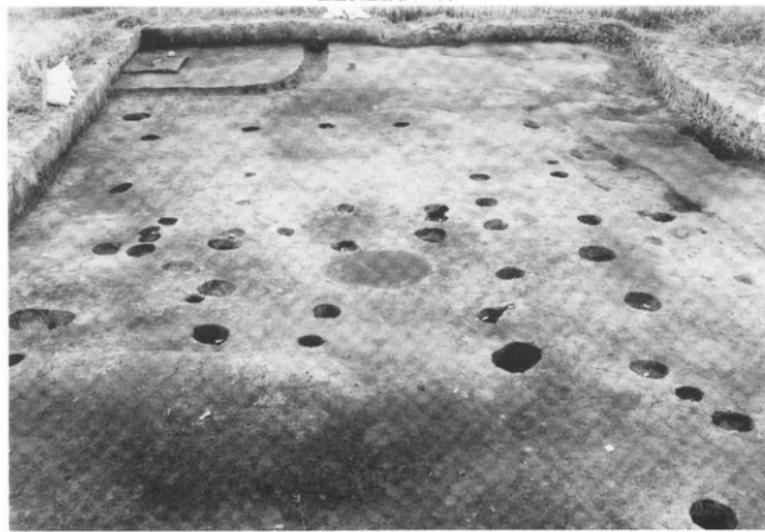


住居跡2と付近の土坑(西から)

写真図版2 検出遺構(2)



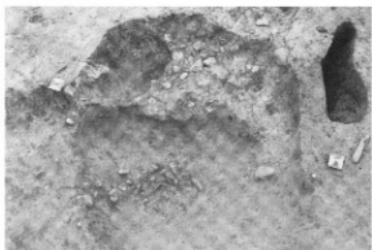
住居状遺構(西から)



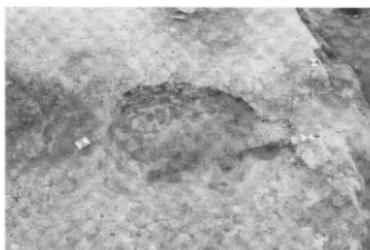
柱穴群(調査区南半部.北から)

写真図版 3 検出遺構(3)

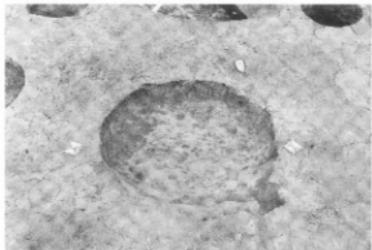
(14) 川前遺跡



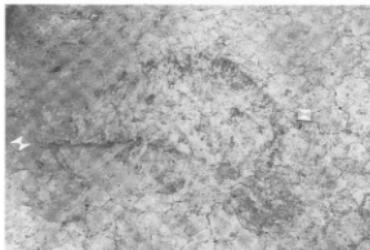
土坑3(西から)



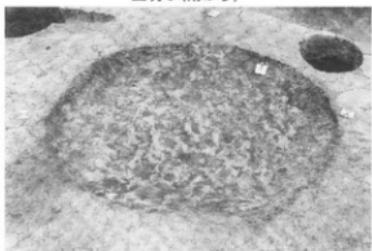
土坑5(西から)



土坑6(南から)



土坑7(南から)



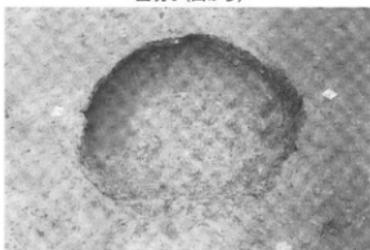
土坑8(西から)



土坑9(西から)

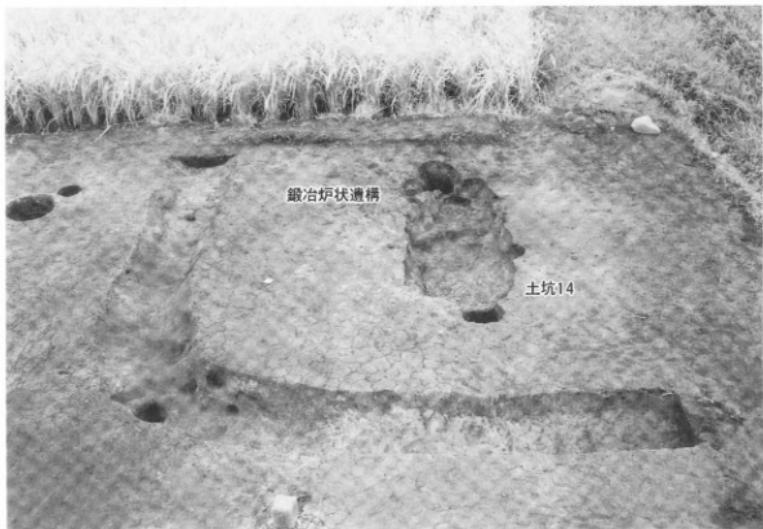


土坑10(須恵器出土状況.南から)



土坑13(南から)

写真図版4 検出遺構(4)



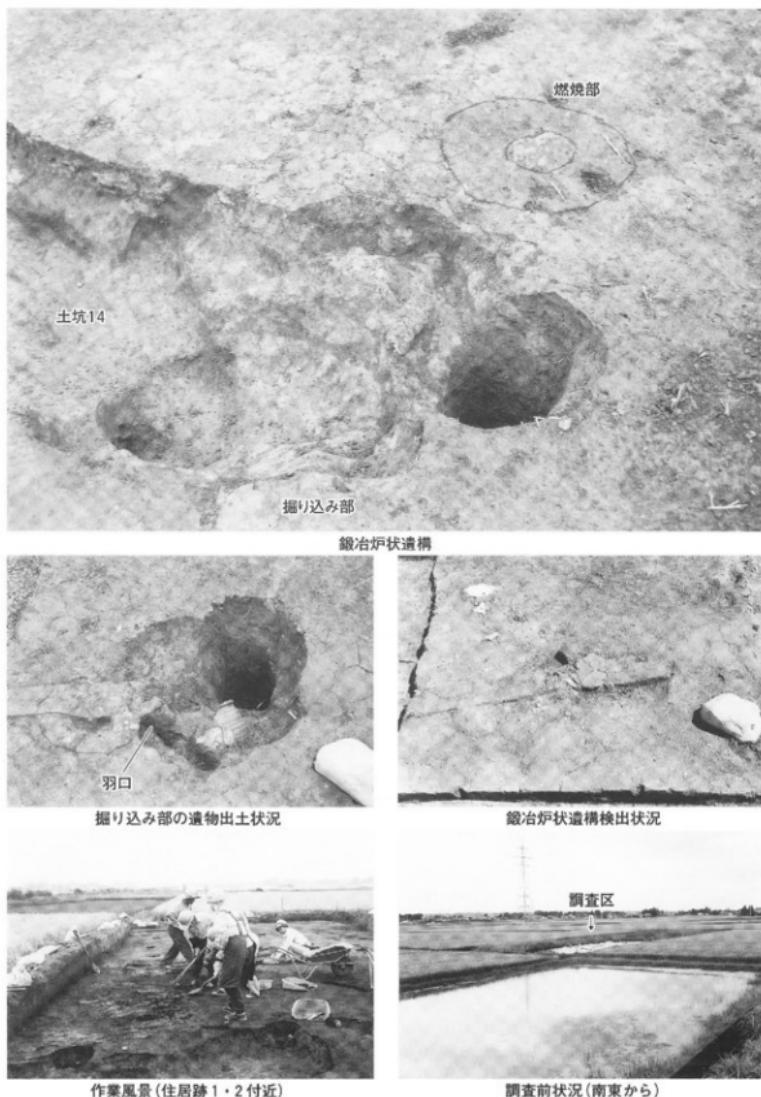
方形周溝1と付近の遺構(西から)



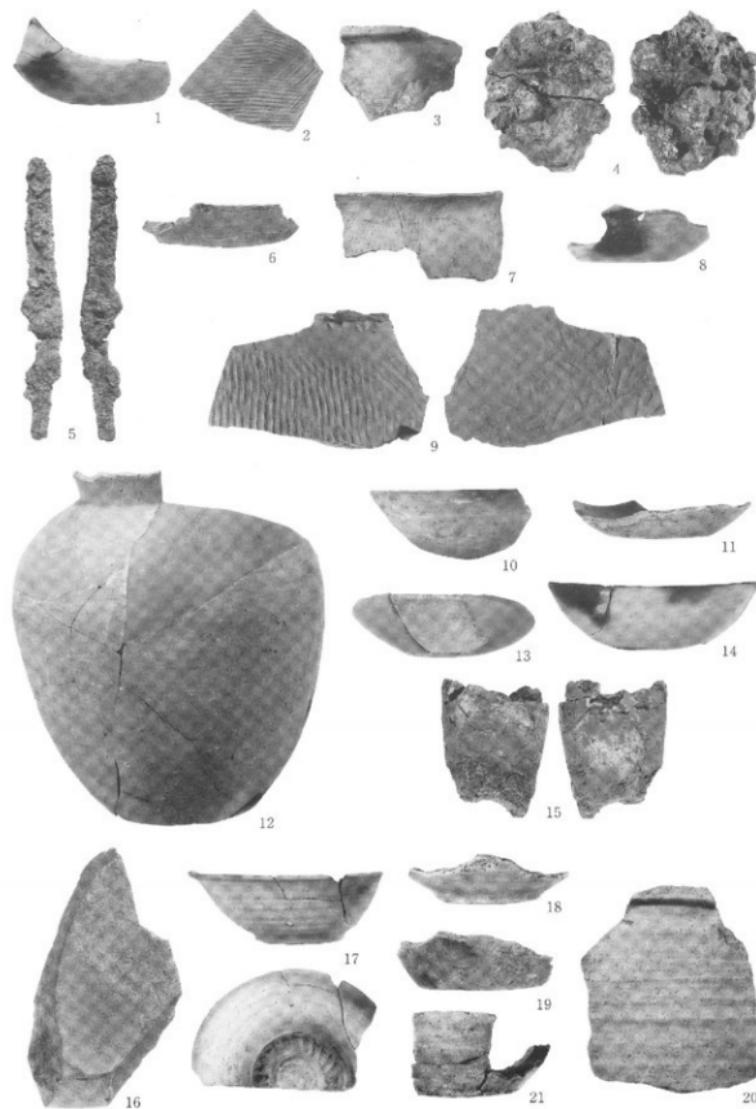
方形周溝2・3 (北から)

写真図版5 検出遺構(5)

(14) 川前遺跡

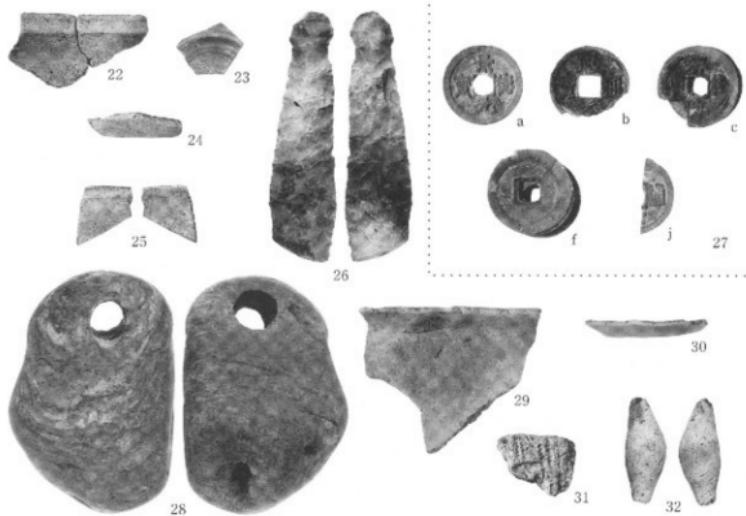


写真図版 6 検出遺構(6)



写真図版7 出土遺物(1)

(14) 川前遺跡



写真図版8 出土遺物(2)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
書名	へいせいじゅうろくねんどはっくつちょうさほうこくしょ							
シリーズ名	平成16年度発掘調査報告書							
シリーズ番号	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
編著者名	第469集							
編著者名	村上 托							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185	TEL (019) 638-9001・9002						
発行年月日	西暦2005年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 °°°	調査期間	調査面積	調査原因	
川前遺跡	岩手県胆沢郡 前浜町白山字 川前地内	03382	N E 47 -0042	39度 04分 42秒	141度 09分 21秒	2004.08.19 ~ 2004.09.30	237m ²	経営体育会墓盤整 築事業「白山風区」 に伴う緊急発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
川前遺跡	集落跡	平安時代	堅穴住居跡 住居状遺構 土坑 鍛冶炉状遺構 方形周溝 柱穴	2棟 1棟 15基 1基 3基 118基	土器器・須恵器・ 斐伊口羽口・土鍤・ 北宋鏡(景祐元寶・ 政和通寶・祥符元寶 ほか) 中国産白磁碗 (11~12C前)			

※緯度・経度は世界測地系

うちやしき
(15) 内屋敷遺跡

所 在 地 前沢町白山字内屋敷50番地 1 ほか
委 託 者 水沢地方振興局農政部農村整備室
事 業 名 経営体育成基盤整備事業白山地区
発掘調査期間 平成16年4月9日～5月20日

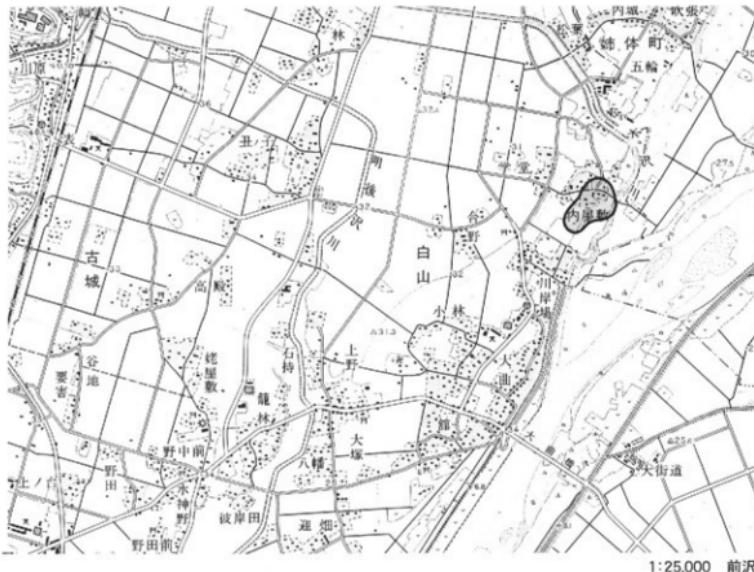
遺跡番号・略号 NE47-0163、UY S-04
発掘調査面積 当初：1,475m² 実績：1,650m²
調査担当者 米田 寛 立花 裕

1. 調査に至る経緯

内屋敷遺跡は県営経営体育成基盤整備事業「白山地区」の事業区域内に位置していることから、事業実施に伴い発掘調査を実施することとなった。本事業は高生産性農業の確立を図り地域の活性化並びに農村環境の改善と農家経営の安定を図ることを目的に、胆沢郡前沢町白山地区内の271.7haにおいて大区画は場整備を実施するものであり、平成12年から工事に着手している。

当該遺跡については、本事業の施行主体である水沢地方振興局農政部農村整備室からの依頼により岩手県教育委員会が平成15年度に試掘調査を実施した。その結果を踏まえ岩手県教育委員会と協議し、平成16年度に財団法人岩手県文化振興事業団と水沢地方振興局農政部農村整備室との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(水沢地方振興局農政部農村整備室)



第1図 遺跡の位置

2. 遺跡立地

内屋敷遺跡は前沢町役場から北西約4.8kmの北上川右岸に所在する。今回の調査区は標高30mのなだらかな沖積低地面に位置し、北上川との比高差は3m程度である。北上川の洪水でたびたび被害を受けた地域であり、南側は縄文晚期集落の川岸塙II遺跡に隣接する。遺構は遺跡内で最も標高の高いIVB・IVCグリッドに密集している。現況は水田、畑地であった。

3. 基本層序

IVD 1a グリッドの調査区壁に層序確認トレンチを設定した。

I層 10YR 3/4 暗褐色シルト層（盛り土）粘性弱 しまり強

白色砂粒5%

II層 10YR 2/3 黒褐色シルト層（上部～中部を遺構検出面とした）

粘性中 しまり強 褐色ブロック15% 白色砂粒5%

III層 10YR 4/6 褐色砂質シルト層 粘性弱 しまり強

暗褐色ブロック30%

IV層 10YR 4/4 褐色砂層 粘性なし しまり中

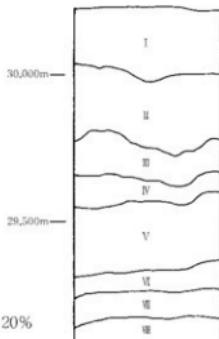
黄褐色ブロック10% 暗褐色ブロック10%

V層 10YR 5/6 黄褐色粘土層 粘性強 しまり強 黄褐色ブロック20%

VI層 10YR 4/4 褐色砂層 粘性なし しまり中 黄褐色ブロック5%

VII層 10YR 4/6 黄褐色砂質シルト層 粘性微 しまり中 褐色土粒10%

VIII層 10YR 3/4 暗褐色砂層 粘性なし しまり弱 黄褐色ブロック30%



第2図 基本層序

(S = 1/20)

4. 調査概要

今年度調査区は本調査区（水路、田面予定区）約750m²、確認調査区（農道予定区）約900m²に分けられる。調査遺構は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡、はたけ状遺構、墓塚、土坑、柱穴状土坑で、時期は平安時代、近世以降に大別される。また縄文時代については土器、石器が出土したもののが明確な遺構を確認できなかつた。現況が水田の地区は造成時に地形変化を受けており、確認調査区内で遺構の削平が多く認められた。なお、確認調査区は工事掘削深度の関係から検出作業までの調査で終了しているため明確な時期を決定し難い。よって登録遺構の中には現代遺構（いわゆる搅乱）の可能性が捨て切れないものも含む。

＜1号竪穴住居跡＞本調査区内II層で検出した。西側を水路によって削平されている。内部施設はカマドを東壁南側に設置するが、柱穴、壁溝などは認められず貼床も明確でない。カマドは煙道が掘り込み式で煙出し部分に柱穴状の掘り込みが見られる。ソデの構築材に砂質粘土を使用しているため崩れやすく残存状況が良くない。支脚には人形礫が使用されている。

遺物はカマド周辺から出土した。すべて破片資料で土師器壺（1～3）、須恵器壺（4・5）、土師器甕（6・7）、土錘（8）などが出土している。

時期は遺物の特徴から平安時代（10世紀前半）である。

＜2号竪穴住居跡＞II層で検出。確認調査区出土のため調査は検出作業までとしたが、削平が住居床面まで達しており遺物の出土は少量であった。小型の住居で東壁ほぼ中央にカマドを設置している。削平が激しくカマド以外の住居内施設やカマドの構築材などは確認できなかつた。

遺物は土師器甕（9・10）、鉄製刀子（11）などが出土している。

時期は遺物の特徴から平安時代（10世紀前半）。

＜1号掘立柱建物跡＞本調査区Ⅱ層で検出。9本柱で構成される2間×2間の縦柱建物である。柱穴の平面形はいずれも隅丸方形で、1号掘立柱建物跡を構成するPit33は2号はたけ状造構を切っている。

遺物は伴わなかったが造構の形態から平安時代の所産と考えられる。

＜はたけ状造構＞本調査区Ⅱ層で2基検出した。削平が進んでおり残存面積は1・2分合せて90m²である。遺物は出土しなかったが1号掘立柱建物跡を構成するPit33に切られている。

＜溝跡＞確認調査区で1～4号溝跡、本調査区で5～9号溝跡の計9条をⅡ層で検出した。確認調査区の溝は現代造構（推疊）の可能性がある。本調査区内の溝は切り合関係を有し、北上川と直行する7・8・9号溝跡は5・6号溝跡より新しい。8号溝跡は検出面からの深さ最大1.4mに達する薬研堀である。何らかの区画あるいは防御性を有するものと考えられる。埋土第3層下部から須恵器坏（12）が出土しており、遺物の年代は平安時代（9世紀後半）である。

＜1号墓塚＞確認調査区Ⅱ層で1基検出した。平面形はいずれも円形であることを根拠として墓塚と捉えた。

＜土坑＞確認調査区で3基検出した。平面形はいずれも円形である。

＜柱穴状土坑＞本調査区で26個、確認調査区で16個出土した。本調査区では大半が掘立柱建物跡付近に散在し、26個のうち9個が1号掘立柱建物跡を構成する。

＜出土遺物＞縄文土器95点、上師器17点、須恵器5点、土鍤1点、剥片5点、敲磨器1点、磁器2点、煙管1点、刀子1点が出土している。

縄文土器の時期は隣接する川岸場Ⅱ遺跡と同時期の晩期で粗製土器を主体とする。平安時代の堅穴住居跡からは須恵器坏・甕、土師器坏・壺、刀子、土鍤などまとまった資料を得た。土師器坏はロクロ調整が多い。1号堅穴住居跡から出土した土鍤は漁労具としての可能性が高い資料であり、平安時代における本遺跡内の集団が河川漁労活動を生業に取り込んでいることを示唆する。

4.まとめ

内屋敷遺跡は縄文時代晩期と平安時代を中心時期とする。今回の調査で縄文時代については明確な遺構は確認されず少量の土器・石器のみの出土であった。平安時代については堅穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡などを検出した。造構の配置と切り合関係から北上川に直行する7・8・9号溝跡の同時性が想定される。

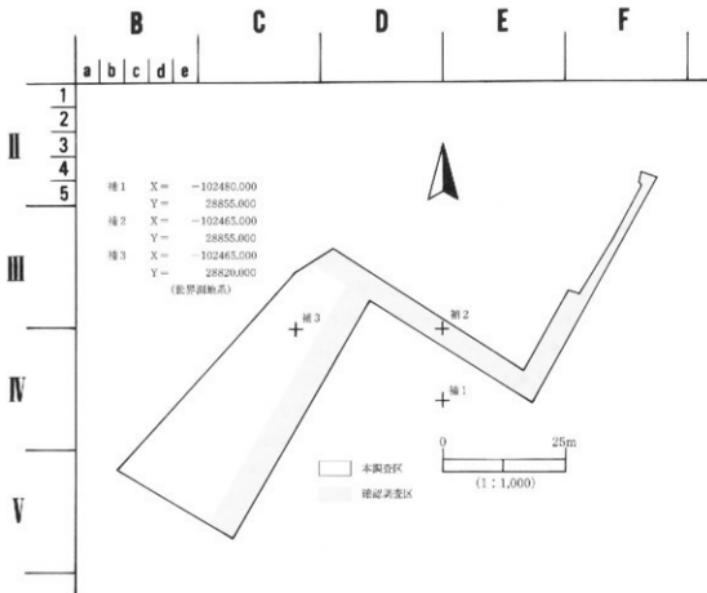
8号溝跡は埋土中位の第3層から9世紀後半に比定される須恵器坏が出土し、埋土上部の第2層には筋状に堆積した十和田aテフラを包含する。したがって10世紀にはほぼ廃没していたと考えられる。1号掘立柱建物跡については古代の倉庫と考えられる形態で、本遺跡と同一沖積低地面に位置する水沢市姫体町林前Ⅱ遺跡に類似が求められる。これら倉庫と考えられる掘立柱建物跡は集落に付随することが多く、本遺跡周辺にも平安時代集落の存在が想定される。近年、隣接する川岸場Ⅱ遺跡、川前遺跡で9世紀代の堅穴住居跡が確認されていることからこれらの遺跡との同時性を検討する必要性があろう。また、9世紀初頭頃までは律令国家体制を確立するための開拓拠点として前沢町内の古城地区に「古城方八丁」、白山地区に「埴置方八丁」が設置されている。そのため設置以降は周辺に開拓移民からなる拠点的集落の形成が予想される。今後、町内における古代集落の変遷や集落間の関係性を追及するうえで本遺跡は重要なところ。

なお、内屋敷遺跡2004年度調査に関する報告はこれをもって全てとする。

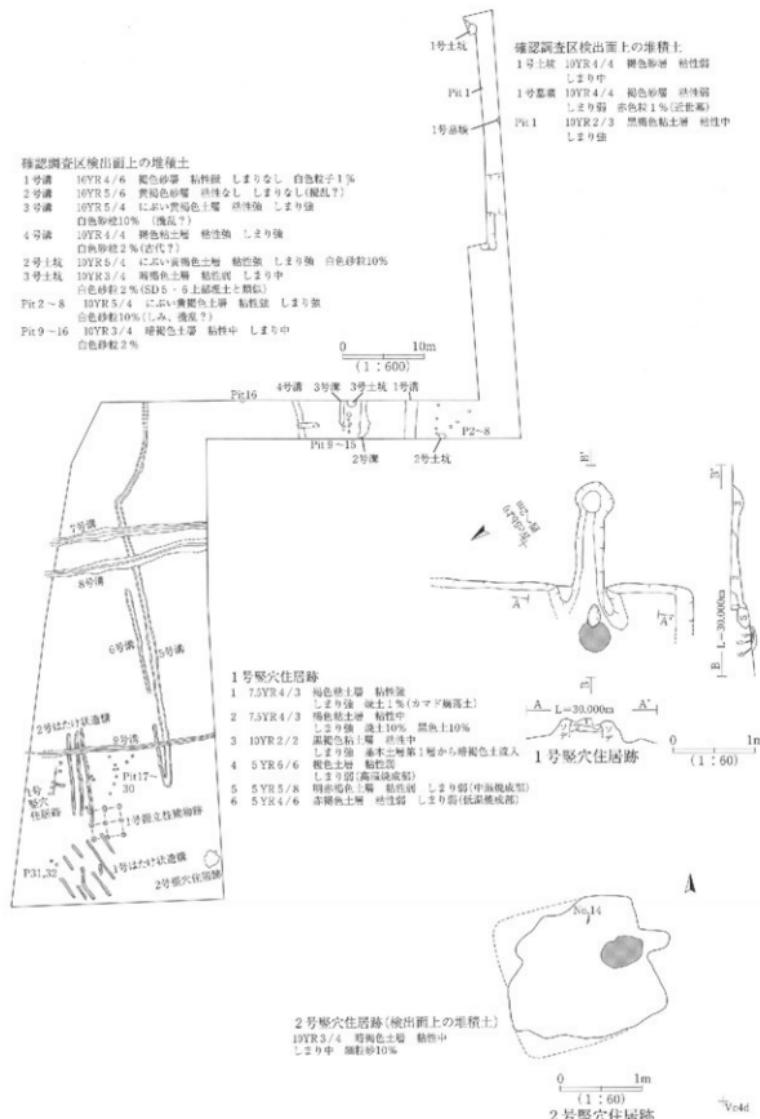
(15) 内屋敷遺跡

<引用・参考文献>

- 前沢町史編纂委員会 1974『前沢町史』前沢町教育委員会
 及川真紀・関口慶久 2002『川岸場Ⅱ遺跡・大室屋敷跡木家墓地調査報告書』前沢町文化財調査報告書】
 第13集 前沢町教育委員会
 小山内 透 2000『川岸場Ⅱ遺跡 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』第469集
 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
 佐藤良和・小野寺麻耶 2004「林前Ⅱ遺跡北区」『平成15年度 水沢市内遺跡発掘調査報告会資料集』
 水沢市埋蔵文化財調査センター
 村上 拓 2005『川前遺跡』『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』第469集
 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

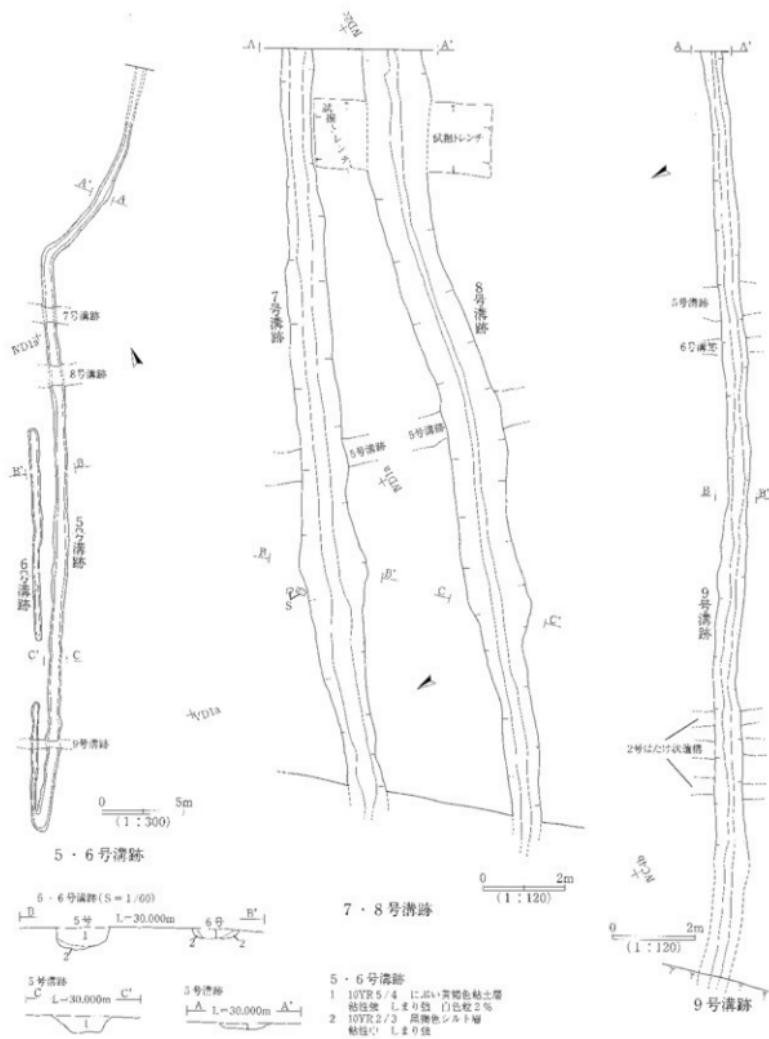


第3図 調査区位置図

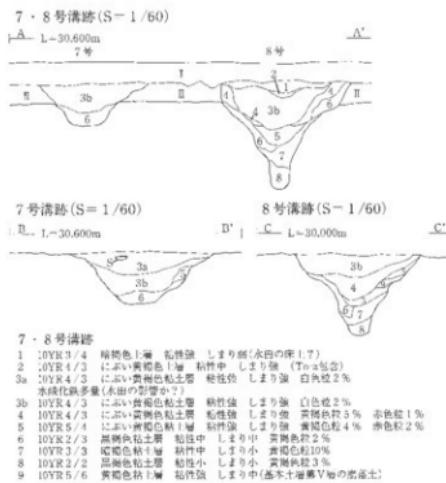


第4図 遺構配置図及び1・2号堅穴住居跡

(15) 内層敷道路



第5図 5～9号溝跡

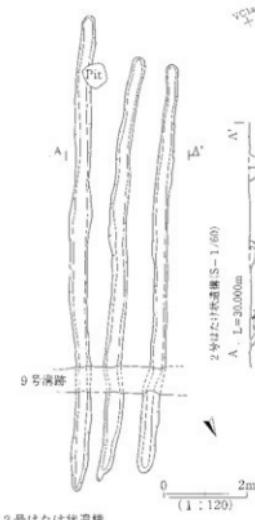
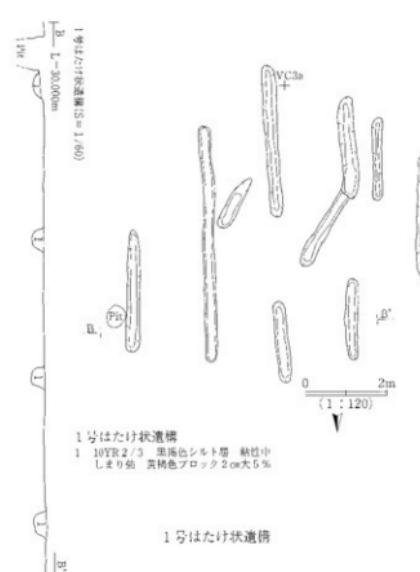


9号溝跡 (S=1/40)



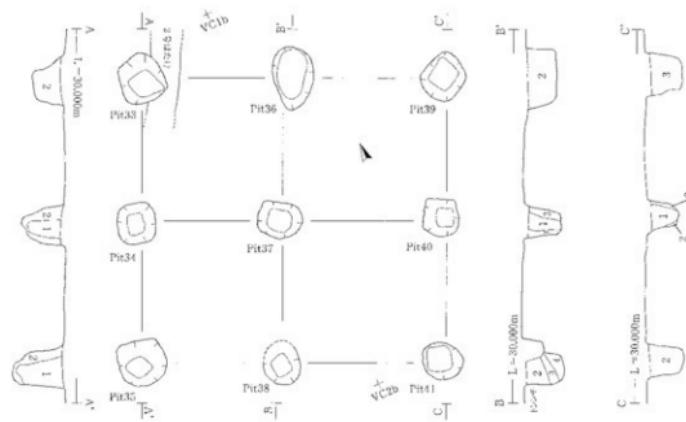
9号溝跡

- 1 10YR 4/3 にぶい黄褐色粘土層 粘性強 しまり強 白色斑2% (9号溝跡の3層に付合)
- 2 10YR 4/3 にぶい黄褐色粘土層 粘性中 しまり中 黄褐色20% (9号溝跡の6層に付合)
- 3 10YR 4/4 桐乳土層 粘性中 しまり中 細粒砂20%



第6図 7～9号溝跡、1・2号はたけ状遺構

(15) 内層敷設跡

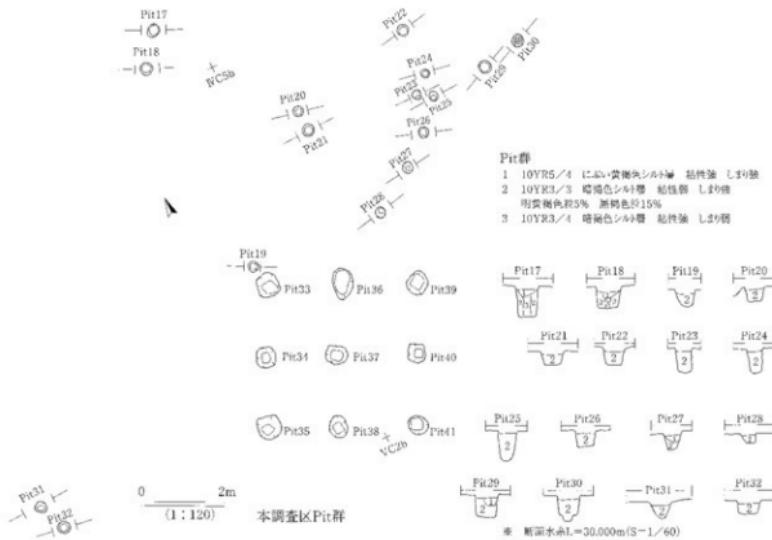


1号掘立柱建物跡

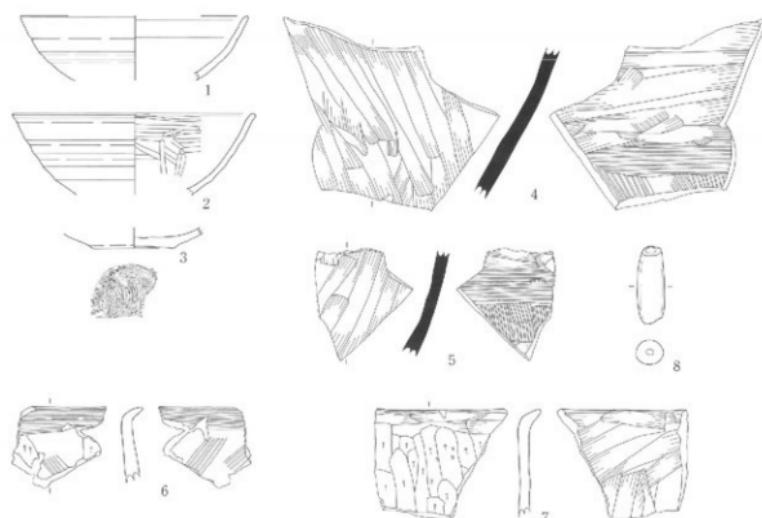
- 1 10YR3-/3 黄褐色粘土質 粘性強 しりや強 黄褐色土砂15% (柱设置土)
- 2 10YR2-/3 暗褐色粘土質 粘性中 しりや中 黄褐色1股(9分清透の2層)
- 3 10YR3-/3 暗褐色粘土質 粘性強 しりや強 黄褐色砂質10%ブロック30%
- 4 10YR5-/6 黄褐色砂シルト質 粘性弱 しりや強 黄褐色ブロック10%

0 1m
(1:60)

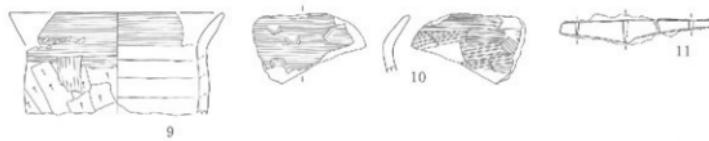
1号掘立柱建物跡



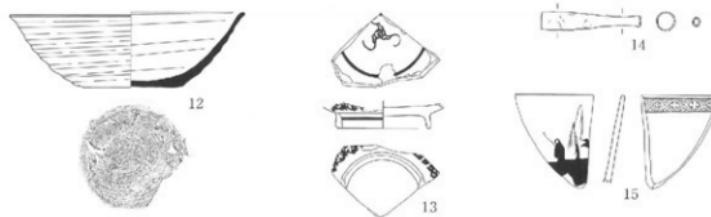
第7図 1号掘立柱建物跡、Pit群



1号堅穴住居跡



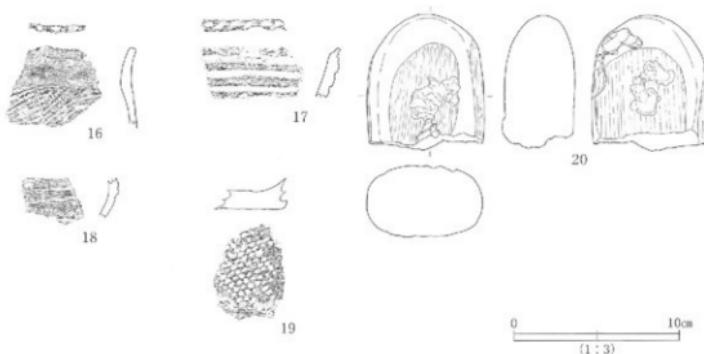
2号堅穴住居跡



0 10cm
(1:3)

第8図 出土遺物(1)

(15) 内屋敷遺跡



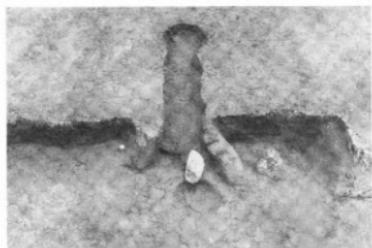
第9図 出土遺物(2)

遺物観察表
土器・磁器

No.	出土位置	器種	部位	特徴
1	1号堅穴住居跡カマド	土師器	口縁	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ
2	1号堅穴住居跡灰面	土師器	口縁	外面：ロクロナデ 内面：黒色処理、ミガキ
3	1号堅穴住居跡灰面	土師器	底部	外面：磨耗、内面：ロクロナデ 底部：圓錐余切り
4	1号堅穴住居跡埋土	須恵器	側部	外面：ナデ 内面：ナデ・ハクメ
5	1号堅穴住居跡埋土	須恵器	側部	外面：ナデ 内面：ナデ・ハケメ 附賀土器
6	1号堅穴住居跡灰面	土師器	口縁	外面：ヨコナデ、ケズリ、ハケメ 内面：ヨコナデ、ハケメ
7	1号堅穴住居跡埋土	土師器	口縁	外面：ナデ、ハラケズリ 内面：ナデ
9	2号堅穴住居跡	土師器	口縁	外面：ヨコナデ、ケズリ、内面：ヨコナデ、ナデ
10	2号堅穴住居跡	土師器	口縁	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ハクメ
12	8号窓跡	須恵器	略完形	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ 底部：圓錐余切り
13	本調査区Ⅱ層	磁器瓶	底部	外面：二重胴目内 底部：火輪宝珠文 時期：19C前葉 遺地：肥前
15	本調査区Ⅱ層	磁器瓶	口縁	内面：四方タスキ文 脚目文、剥離あり 時期：19C前葉 遺地：肥前
16	本調査区Ⅱ層	繩文土器	口縁	滑面厚底 口唇：脚目文、剥離；株文模様
17	本調査区Ⅱ層	繩文土器	口縁	滑面厚底 沈紋文
18	本調査区Ⅱ層	繩文土器	側部	滑面厚底 沈紋文 独脚支撑により不鮮明
19	本調査区Ⅱ層	繩文土器	底部	銅代板

石器・鉄製品・土製品

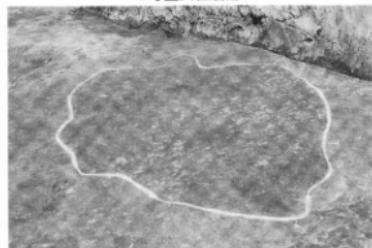
No.	出土位置	器種	部位	長・幅・厚(cm)	重量(g)	備考
8	1号堅穴住居跡灰面	土鍤		4.7×1.6×1.5	12.63	外面：黒頭吸着
11	2号堅穴住居跡	刀子		9.2×1.5×0.3	11.52	茎部露鋸痕
14	1号堅窓	縦管	喉口	6.1×1.2×1.1	7.14	喉口端わずかに湾曲
20	本調査区Ⅱ層	鐵岩石		8.2×7.1×4.4	410.05	安山岩



1号竪穴住居跡



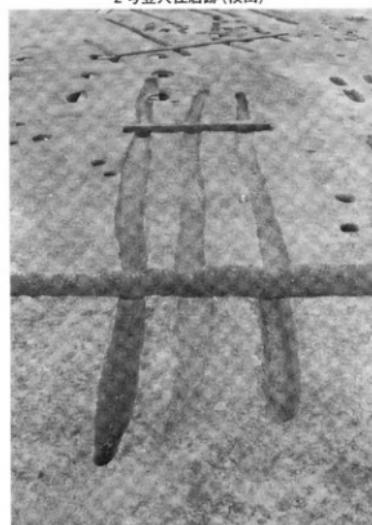
1号竪穴住居跡カマド断面



2号竪穴住居跡(検出)



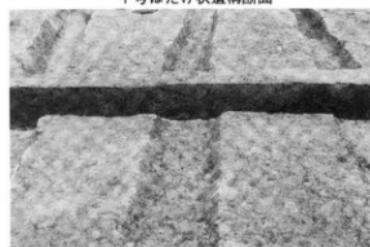
1号はたけ状遺構



2号はたけ状遺構



1号はたけ状遺構断面



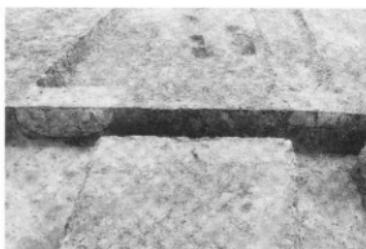
2号はたけ状遺構断面

写真図版 1 竪穴住居跡、はたけ状遺構

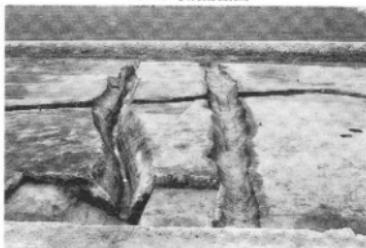
(15) 内层壁遺跡



5・6号溝跡



5・6号溝跡断面



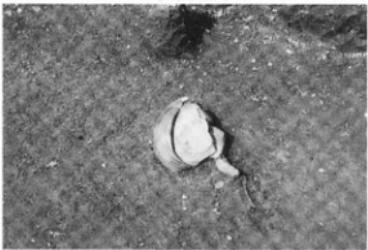
7・8号溝跡



7号溝跡断面



8号溝跡断面

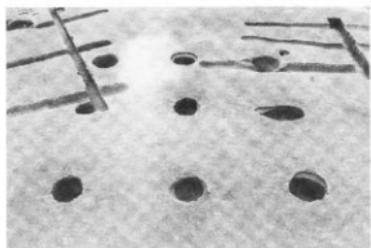


No.12出土状況(8号溝跡内)

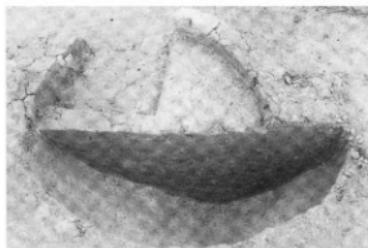


No.12

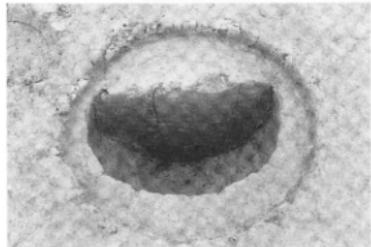
写真図版2 遺跡、8号遺構出土遺物



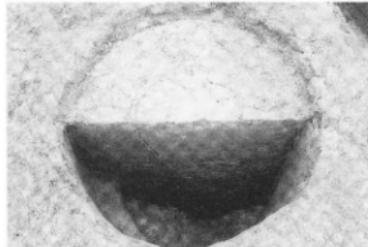
1号据立柱建物跡



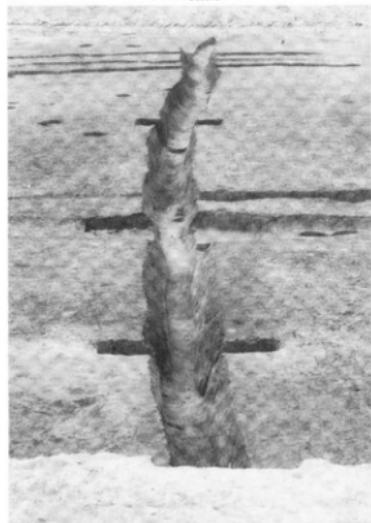
Pit33断面



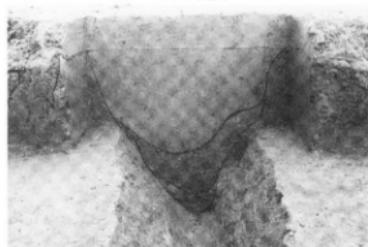
Pit34断面



Pit35断面



9号溝跡



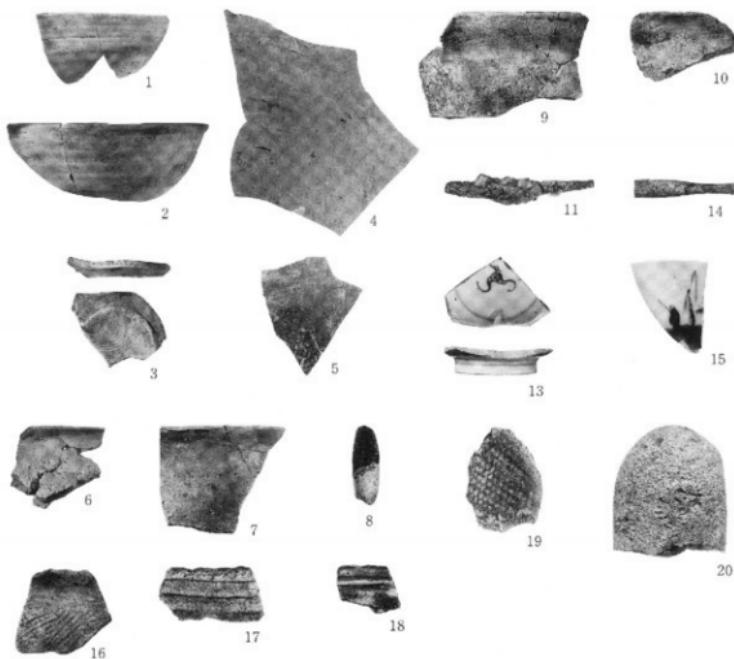
9号溝跡断面A—A'



9号溝跡断面B—B'

写真図版 3 据立柱建物跡、溝跡

(15) 内屋敷遺跡



写真図版4 出土遺物

報告書抄録

ふりがな 書名	へいせいじゅうろくねんどはくつちょうさほうこくしょ 平成16年度発掘調査報告書						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第469集						
権 勢 者 名	米田 寛						
権 勢 会 会員	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所 在 地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001・9002						
発 行 年 月 日	西暦2005年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
内屋敷遺跡	岩手県奥州市前沢町白山字内屋敷50番地1ほか	03382	NE47-0163	39度04分35秒	141度10分00秒	2004.04.08～2004.05.18	1,650m ² 経営体育施設整備事業「白山地区」に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
内屋敷遺跡	集落・散在地	周文・古代	要穴柱居跡 網状柱跡物跡 出土状遺構 溝跡 基壇	陶土器・石器 土師器、須恵器、刀子 2基 1根 2基 9余 1基	食糞と思われる古代の柱建物跡 葉研磨状の溝跡 磁器、钢管		

*緯度・経度は世界測地系

II. 発掘調査概報

1. 国関係

(16) 本宮熊堂A遺跡第24次調査
もとみやくまどう

所 在 地 盛岡市本宮字熊堂69-6 ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局
岩手河川国道事務所
事 業 名 国道46号盛岡西バイパス建設事業

発掘調査期間 平成16年9月1日～11月15日
遺跡番号・路号 L E 16-2107・OKD-04-24
調査対象面積 当初：357m² 実績：357m²
調査担当者 須原 拓林 熊

遺跡の立地

遺跡は盛岡市の南西部、零石川の南方約1.5kmに位置し、零石川によって形成された河岸段丘上に立地する。標高は約123mで、隣接する本宮熊堂B遺跡よりも低く、比高差は約2mある。

調査の概要

調査地は遺跡範囲の南端部にあたり、旧河道を検出した。それに伴い、縄文時代晩期と古代の遺物が見つかっており、おそらく縄文時代晩期以前から古代まで存続した河川であったと思われる。また、調査地が湿地化していたため、多量の自然遺物が出土した。旧河道は東西方向に延び、幅約10m、深さは検出面から1.5～1.7mを測る。底面付近より縄文晩期の遺物と堅果類ほかの動植物遺体が見つかっている。また、その直上層からは土師器や流木類が多量に見つかった。それらの流木類の樹種等は現在分析中である。今後、北側の第26次調査で見つかった縄文晩期の集落や隣接する本宮熊堂B遺跡の古代集落との関係について検討する必要がある。



旧河道全景(西から)



旧河道断面(西から)



流木類出土状態(西から)

もとみやくまどう
(17) 本宮熊堂B遺跡第25次調査

所 在 地	盛岡市本宮字熊堂44-2ほか	遺跡番号・略号	L E16-2118・OKO-04-25
委 託 者	国土交通省東北地方整備局	調査対象面積	当初: 6,716m ² 実績: 7,366m ²
	岩手河川国道事務所	調査 担 者	村木 敬 潤 浩二郎 戸根貴之
事 業 名	国道46号盛岡西バイパス建設事業		林 熊 石崎高臣 島原弘征
発掘調査期間	平成16年6月1日~11月22日		須原 拓 菅野 梢

遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線仙北町駅より西へ約1.5kmに位置し、零石川右岸に形成された標高約125mの段丘に立地している。調査区は北に向かって張り出した段丘の縁辺部にあたり、調査区北側には段丘崖が形成されている。南西部部分が最も標高が高く、そこから微地形はあるものの段丘の縁に向かって緩やかに傾斜している。

調査概要

堅穴住居跡43棟・竪穴状造構2基・土坑44基・溝5条・陕窓穴状造構1基・柱穴83個を検出した。遺物は大コンテナで約23箱出土した。奈良から平安時代に属する堅穴住居跡から土師器等が大コンテナで約20箱、礫石器が約3箱、刀子や歎先などの鉄製品が30点、勾玉や鍛錬車などの土製品3点である。また、土坑からは縄文時代晩期に属する土器と石器が小コンテナ1箱出土している。

各時代により堅穴住居跡を中心とした造構が密集する範囲が認められ、それは奈良時代で3箇所、平安時代で1箇所であり、調査区の異なる場所で各集落跡を形成していたことが明らかになった。



航空写真(俯瞰・下が南)

(18) 高木古館遺跡

所 在 地 花巻市高木第20地割88-10ほか
 委 托 者 国土交通省東北地方整備局
 岩手河川国道事務所
 事 業 名 国道4号花巻東バイパス建設事業

発掘調査期間 平成16年4月13日～6月30日
 遺跡番号・路号 ME 26-2089・T G K D-04
 発掘調査面積 当初：4,072m² 実績：4,072m²
 調査担当者 西澤正晴 阿部徳幸

遺跡の立地

遺跡は、JR東日本東北新幹線新花巻駅の南西約3.7kmに位置し、西側を南流する北上川と東側を北流する猿ヶ石川に囲まれた丘陵地（標高約90m）に立地している。遺跡の現況は山林である。

調査の概要

今年度検出した遺構は、陥し穴状遺構6基、堀跡1条、土坑5基である。陥し穴状遺構は、併出遺物はないが、その形状から縄文時代のものと推定される。堀跡は昨年度確認された遺構に統くもので、上部が削平された空堀である。土坑は5基とも時期不明であるが、うち1基はフ拉斯コ状ピットである。

遺物は総数もあまり多くなく、縄文～弥生時代の土器片や石器の剥片が主に出土した。
 前回の調査結果と併せると、調査地は、縄文時代の狩猟の場所や一時的な集落跡、比較的規模の小さい中世の城館跡の一部であることが明らかになった。



航空写真(直上)

たかぎなかだて
(19) 高木中館遺跡

所 在 地	花巻市高木第22地割ほか	発掘調査期間	平成16年4月13日～7月30日
委 託 者	国土交通省東北地方整備局 岩手河川国道事務所	遺跡番号・路号	ME36-0218・T G N D -04
事 業 名	国道4号花巻東バイパス建設事業	発掘調査面積	当初：13,668m ² 実績：13,668m ²
		調査担当者	丸山直美 穂川伸吾 阿部篤幸 小針大志

遺跡の立地

遺跡は、JR東北新幹線新花巻駅の南西約4kmの地点に位置し、北上川左岸に形成された河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は約72mで、西側を南流する北上川との比高は約12mである。

調査の概要

調査は昨年に続く2次調査で、今回は未了分の南西側3,248m²を含む13,668m²が対象となった。検出された遺構は堅穴住居跡4棟、堅穴住居状遺構1棟、土坑2基（以上、古代）、掘立柱建物跡5棟、溝跡9条、墓坑2基、獸骨埋納土坑2基、カマド状遺構1基（以上、近世以降）、土坑42基（時期不明）である。

堅穴住居跡は調査区南西側を中心として検出された。平面形は方形～長方形を呈し、規模は一辻2.7～4mを測る。カマドの構築方向は南西壁1棟、東壁1棟、南東隅2棟と多様であるが、削平によりはっきりしないものが多い。これらは遺物の特徴から昨年度検出の住居跡と一連の集落を構成するものと考えられる。

堅穴住居状遺構はプラン内にカマドを持たないもので、中央部西側で確認された。平面形は方形基調を呈し、規模は一辻2.8mを測る。床面には土坑が6基構築されており、底面からロクロナデの土器壺3点が出土地している。時期は遺物の特徴から、住居跡とはほぼ同時と位置付けられる。なお、本土坑の堆積土（約半量分）を対象としてフローテーションを実施したところ、フィルムケースにして約2個分の炭化種子が抽出された。遺構の性格、当時の食料資料を推察するうえで良好な資料になるものと思われる。

土坑は全部で44基検出された。中央部西側で検出したSK02は、開口部2.4×3.7m・深さ75cmの長方形を呈する。堆積土は中位の焼土層を介して上中下に3大別され、この焼土層より鉄製武具（刀身2点、鐵錐3点）と白磁片1点が、更に下位の黒色土層より被熱したとみられる骨片と炭化種子が検出されている。これらの出土遺物、堆積土の状況などから判断すれば本遺構は何らかの埋葬施設である可能性が高い。

＜出土遺物＞大コンテナで約10箱分出土している。内訳は土器（底部ムシロ痕を有するものを含む）、須恵器、陶燃器、縄文土器、石器、石製品、土製品、鐵製品、炭化種子である。



調査区全景(東から)

(20) したどおり
下通遺跡

所 在 地 花巻市東十二丁目第27地割ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局
 　　岩手河川国道事務所
 事 業 名 国道4号花巻東バイパス建設事業

発掘調査期間 平成16年7月16日～10月1日
 遺跡番号・略号 ME36-0225・STD-04
 調査対象面積 当初：11,400m² 実績：11,400m²
 調査担当者 窓岩伸吾 丸山直美 阿部徳幸

遺跡の立地

遺跡はJR東北新幹線新花巻駅の南西約4kmの地点に位置し、北上川左岸に形成された沖積平野の微高地に立地する。遺跡の標高約68m、西側を南流する北上川との比高は約8mを測る。現況はほとんどが水田である。

調査の概要

溝跡2条と畑跡11区画が確認された。そのうち、畑跡6区画については、区画が大きいものは南北方向に約17m×約50m・東西方向に約28m×約38mの範囲に及ぶものがあった。これらは、畝と畝間溝が一定間隔をおいて平行し、南北方向に4区画、東西方向に2区画が3面にわたって検出され、その範囲は約1,858m²に渡る。伴出遺物は無く、放射性炭素年代測定をしたところ、時期は1659～1680年であるという結果が得られた。



畑跡



畑跡検出



溝跡

(21) 長根 I 遺跡

所 在 地 花巻市東十二丁目第1地割65-1ほか 発掘調査期間 平成16年8月19日～9月3日
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局 遺跡番号・路号 ME36-1213・NNI-04
 岩手河川国道事務所 発掘調査面積 当初：931m² 実績：931m²
 事 業 名 国道4号線花巻東バイパス建設事業 調査担当者 中村絵美

遺跡の立地

遺跡は花巻市の南東部、JR東北新幹線花巻駅の南西約5kmの地点に位置し、北上川左岸に形成された沖積平野の微高地に立地する。調査範囲はこの微高地の北西辺縁部にあたるため、調査区南側中央部が平場となる以外は扇状に広がる斜面地となり、斜面下部はより傾斜がきつくなる。

調査の概要

検出された遺構は柱穴列3列、墓塚18基である。

＜柱穴列＞調査区西側、急傾斜になる落ち際に柱穴状土坑が35個検出された。これらは、斜面の等高線に沿って南北方向に列をなし、ほぼ並行して3列確認された。しかし、各列とも直線状にはならばずやや角度をもつこと、東西方向には対応しないことから、おそらく柵の役割を果たしたものと思われる。出土遺物がなく時期は不明である。

＜墓塚＞調査区南側中央部の平場で18基検出された。人骨の残存状態は良好で頭蓋骨を17体確認した。埋葬姿勢が確認できるものは、臥屈葬が5体と座葬が6体、計11体である。人骨の周囲に釘と木片が一部付着した釘があることから、木棺に入れて埋葬されたものと思われる。掘方の形状は、臥屈葬が1.3×1.0m程度の長方形、座葬は一辺が0.7～1.0mのほぼ正方形となり、後者の方が深く掘りこむ。切り合い関係から座葬の方が比較的新しい傾向が見られる。これらの墓塚は互いに重なり合い、約6m四方の範囲内に集中していることから、狭い範囲に墓域が限定されていたものと推定される。出土遺物より、遺構の時期は近世後半～近代初頭に属する可能性が高い。

＜出土遺物＞陶磁器、土製人形、煙管、簪、鉄製品（毛抜き、釘等）、玉（数珠か？）、銭（銅銭・鉄銭）、人骨が出土した。陶磁器の一部をのぞき、上記の遺物はすべて墓塚より出土した。



調査区全景



墓塚(人骨出土状況)

(22) 大清水上遺跡
おおしみずかみ

所 在 地	胆沢町若柳字東前川山1—1ほか	発掘調査期間	平成16年9月15日～11月5日
委 託 者	国土交通省東北地方整備局 胆沢ダム工事事務所	遺跡番号・略号	NE22-2286・OSK-04
事 業 名	胆沢ダム建設事業	発掘調査面積	当初：3,000m ² 実績：3,000m ²
		調査担当者	中村絵美 吉田 光

遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線水沢駅から西へ約20km、胆沢川によって形成された段丘面に位置する。標高は約290m、調査前の状況は水源涵養保安林として植林された林地、並びに荒地であった。

調査の概要

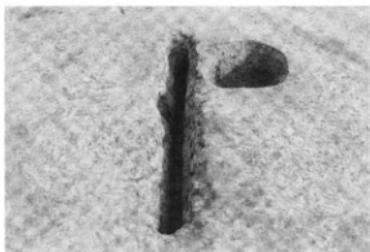
調査は平成12年度から行われており、調査対象面積は合計32,830m²に及ぶ。今年度はこのうちの3,000m²、遺跡内を東西に走る道路（平均幅6.4m・長さ約470m）を対象とした。遺跡中心部（集落）と比較すると遺構密度は薄く、土坑3基、陥し穴状遺構21基、焼土遺構1基、炭窯2基を検出した。

＜土坑＞調査区東側に2基、西側に1基確認した。東側の1基は、開口部から底部に向かって広がるフ拉斯コ状の形を持つ。この形状から貯蔵穴の可能性が高いが、集落域からはやや離れ、周囲に同一の形状を持つ遺構は確認されていない。これらのは直径1m程度の楕円形の土坑で用途は不明である。

＜陥し穴状遺構＞21基検出し、このうち7基は過年度の調査区から続くものである。数基程度のまとまりはみられるものの、調査区内に散在している。平面形状は溝状、上端が楕円形で下端が長方形（以下楕円形）、円形と3種類確認できる。楕円形のものが最も多く16基、次いで円形3基、溝状2基となる。楕円形及び円形のものは底面に1～複数個の小穴を持つ例が多い。また、調査区東部に位置する楕円形陥し穴の中には、埴土上部に十和田aテフラを含むものも確認されている。

＜炭窯＞2基検出したが、形状及び過年度調査時の同様の遺構より出土した遺物から、現代のものの可能性が高い。

＜出土遺物＞遺構に伴うものはほとんどなく、周囲よりも削平されている道路下であるため遺構外からの出土も少ない。土器は純文早期から晩期までのものがみられ、この他石器類も若干出土している。



溝状(左)・円形(右)陥し穴



楕円形陥し穴

(23) 杉の堂 (第30次)・跡呂井遺跡

所 在 地	水沢市東中通り二丁目123-2ほか	遺跡番号・路号	杉の堂 NE27-0100・SD-04
委 託 者	国土交通省東北地方整備局 岩手河川国道事務所	跡呂井	NE17-2087・ARI-04
事 業 名	国道4号線水沢東バイパス建設事業	発掘調査面積	杉の堂 当初: 5,318m ² 実績: 5,318m ²
発掘調査期間	平成16年8月19日~10月15日	跡呂井	当初: 185m ² 実績: 185m ²
		調査担当者	川又 晋 西澤正晴

遺跡の立地

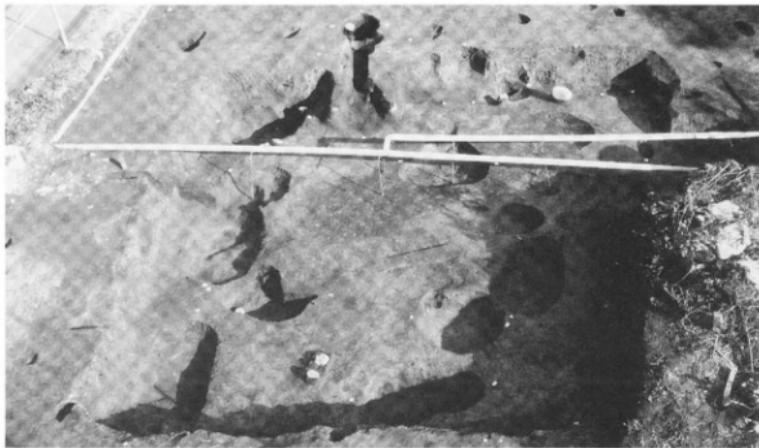
遺跡は、JR東北本線水沢駅から東約1.4kmの地点、胆沢扇状地の水沢高位段丘縁辺部に立地する。標高は約43mであり、概ね平坦な地形である。調査前は宅地・畠地であった。

調査の概要

両遺跡合わせて、平安時代の堅穴住居跡1棟、不明遺構1基、時期不明の土坑20基、柱穴状小土坑47個を検出した。堅穴住居跡は跡呂井遺跡で検出されたが、1辺が約7mの大型のものである。不明遺構は杉の堂遺跡で検出した。土師器壺を2つ合わせたもので、土器棺の可能性が考えられる。

出土した遺物は、縄文土器数点、土師器・須恵器中コンテナ(30×40×20cm)4箱、陶磁器数点、鉄器(鉄錆・鉄滓等)である。遺物は主に堅穴住居跡から出土した。

杉の堂遺跡では、遺構・遺物ともに少なく、集落の中心部からは外れている。大型住居跡を検出した跡呂井遺跡では、隣接地において過去に掘立柱建物跡・溝跡等も見つかっており、集落の中心地の一部と推定される。さらに、県内では希少な11世紀代と考えられる遺物が出土していることが注目される。



堅穴住居跡(跡呂井遺跡)

(24) に だいながね
二の台長根遺跡

所 在 地 胆沢郡胆沢町小山字二の台長根131-2ほか
 委 託 者 農林水産省東北農政局
 いさわ南部農地整備事業所
 事 業 名 国営農地再編整備事業いさわ南部地区
 発掘調査期間 平成16年4月14日～9月10日

遺跡番号・路号 NE 44-1312・N DN-04
 発掘調査面積 当初：16,450m² 実績：17,764m²
 調査担当者 吉田 充 中村絵美 村木 敬
 林 燕 西澤正晴

遺跡の立地

本遺跡は胆沢町南東部で、JR東北本線前沢駅の約7km西方の胆沢扇状地上に位置する。胆沢扇状地は高位・中位・低位段丘に区分され、7つの段丘面で構成される。本遺跡は中位の上野原段丘面にのり、その段丘面を浸食し南東に流れる白鳥川左岸に位置する。標高は148m前後で、遺跡中央の南北方向の道路を尾根状の微高地として両側の沢の凹部に緩く傾斜している。

調査の概要

胆沢扇状地は古くから田畠の耕作が行われ、昭和30年代の大規模なほ場整備では表土が厚く剥がされ、遺跡の保存状態は良くない。今回の調査では旧石器時代の遺物集中区1ヶ所、縄文時代の陥し穴状遺構24基、土坑4基、柱穴状土坑75個、溝跡7条が検出された。出土遺物は、旧石器時代の剥片約240点、台石1点、円形線刻縄1点、縄文時代の土器片15片、石器4点である。



航空写真(東から)

(25) せつたいかん
接待館遺跡

所 在 地	胆沢郡衣川村七日市場24-1ほか	発掘調査期間	平成16年10月1日～11月11日
委 託 者	国土交通省東北地方整備局 岩手河川国道事務所	遺跡番号・路号	N E 65-2343・S T K-04
事 業 名	一関遊水地事業	発掘調査面積	当初: 5,000m ² 実績: 0 m ² (検出のみ)
		調査担当者	鈴木裕明 羽柴直人 西澤正晴 川又 晋

遺跡の立地

遺跡は衣川村の南東部に所在し、衣川村役場から南東約5kmに位置する。立地は衣川北岸の河岸段丘であり、標高は約25mである。概ね平坦な地形で、遺跡の南限の衣川との境は急崖になっている。

調査の概要

今回は粗縫のみをおこなっており、遺構の掘り下げ、精査等は行っていない。よって検出遺構数は概数である。また所属時期については暫定的な時期しか示すことができない。

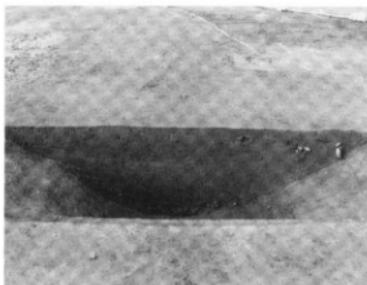
検出遺構は、陥し穴状遺構2基、堅穴住居跡3棟、柱穴300個、土坑8基、溝跡4条、堀跡3条である。陥し穴状遺構は繩文時代に、堅穴住居跡は9～10世紀に属すると推測される。他の遺構は12～16世紀に属する可能性が高い。

堀跡の中の1条は、上幅約8mの規模の大きいものである。深さ、時期を探るため一ヶ所にトレンチを設定し、掘り下げをおこなった。結果、深さは2.1mで、底面近くから12世紀の手づくねかわらけ片、長さ約30cmの小刀が出土した。出土遺物の年代から12世紀に構築された堀跡と推測される。

遺物は、まとまった量の12世紀のかわらけが出土しており、本遺跡が12世紀奥州藤原氏の時代に営まれていた施設と判断できる。他に14世紀、16世紀の陶磁器も出土しており、中世にも居館として機能していたと推測される。



堀跡検出状況



堀跡断面

(26) ^{おつきり}押切遺跡

所 在 地	胆沢郡衣川村大石ヶ沢1-4ほか	発掘調査期間	平成16年8月19日～9月30日
委 託 者	国土交通省東北地方整備局	遺跡番号・略号	NE 65-2359・OK-04
	岩手河川国道事務所	発掘調査面積	当初：3,920m ² 実績：3,920m ²
事 業 名	一関遊水地事業	調査担当者	鈴木裕明 羽柴直人

遺跡の立地

遺跡は衣川村の南東部に所在し、衣川村役場から南東約6kmに位置する。立地は衣川北岸の沖積低地であり、標高は約21.5mである。概ね平坦な地形で、調査前は水田、畑として使用されていた。

調査の概要

検出された遺構は鍛冶炉2基、排滓場2箇所、土坑1、溝1条、石列2条である。いずれも近代以降の遺構である。昭和22年のカスリン台風まで遺跡地内には2軒の民家があり、その内1軒は鍛冶屋を営んでいたという。検出遺構の多くはこの鍛冶屋に関するものと判断される。

この近代遺構に伴う遺物は陶磁器・ガラス瓶が大コンテナ7箱、石臼4個体分、他に錢貨、キセル、土人形など出土している。鍛冶に関連する遺物は羽口、鍛冶滓、鍛造剥片が多量にある。近代遺物以外に近世の陶磁器も少量出土しているが、遺構との関連は不明である。

また、近世以前の遺構の有無を確認するため調査区中央部分で深堀をおこなった。その結果、基本土層の第12層から12世紀後半の手づくねかわらけが6片出土した。第12層は現地表面から約4mの深さで、洪水堆積層である。かわらけ片は洪水時に砂礫とともに上流から運ばれてきたものと推測される。この第12層下位の第13層上面では遺構は検出されなかった。第13層上面で遺構検出をおこなった面積は約200m²である。これらのことから、12世紀から現代までに4m以上の土砂が堆積した事実が判明した。



排滓場



手づくねかわらけが出土した層位

かわさき さく ざ て い ち
(27) 河崎の柵擬定地

所 在 地	東磐井郡川崎村門崎字川崎83ほか	遺跡番号・略号	O E09-1173・K S G-04
委 託 者	国土交通省東北地方整備局	発掘調査面積	当初: 4,660m ² 実績: 3,205m ²
	岩手河川国道事務所	調査担当者	羽柴直人 川又 普 鈴木裕明
事 業 名	床上浸水対策特別緊急事業		西澤正晴 小針大志
発掘調査期間	平成16年4月8日～8月18日		

遺跡の立地

遺跡は川崎村役場の北西約1kmに所在し、北上川左岸の自然堤防上に立地している。標高は19～20m前後で、調査開始前は宅地、道路として使用されていた。

調査の概要

今年度は5カ年にわたった調査の最終年度である。今年度新たに検出した遺構は、堅穴住居跡1棟、溝跡1条、焼上遺構1基、掘立柱建物1棟、近世墓塚16基である。また、昨年度調査区から今年度調査区に連続する遺構が検出されている。これらは堀跡1条、溝跡1条、方形周溝1基、畠跡1基である。堅穴住居跡は埋土内に十和田a降下火山灰が自然堆積しており、床面近くからは土錐が約50個まとまって出土している。また、埋没沢跡からは11～14世紀の遺物がまとまって出土している。方形周溝からは12世紀の手づくねかわらけ、渥美産山茶碗片が出土し、12世紀に属すると思われる。

出土遺物には8～9世紀の土師器、須恵器、10世紀代の土師器、須恵器、土錐、11世紀のかわらけ、12世紀代のかわらけ、13～14世紀のかわらけ、中世陶器、近世陶磁器、11～14世紀頃の鉄製品、近世墓の副葬品、人骨がある。11世紀代のかわらけは、本年度調査で約40片が出土した。過去5カ年の出土点数は、合計約100片の出土量になる。



十和田aテフラが堆積する住居跡



埋没沢完掘

2. 独立行政法人関係

(28) のつこ
野古A遺跡第23次調査

所 在 地 盛岡市下鹿妻字北33-1ほか
 委 託 者 独立行政法人都市再生機構
 岩手都市開発事務所
 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業

発掘調査期間 平成16年10月1日～11月1日
 遺跡番号・路号 L E 16-2155・O N K-04-23
 発掘調査面積 当初：1,672m² 実績：2,056m²
 調査担当者 亀澤盛行 立花 裕

遺跡の立地

遺跡は盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から1.5km西、半石川右岸の河岸段丘上に立地している。標高約124m前後で、調査前は主に住宅や畑であった。遺跡周辺では北に稲荷遺跡、本宮熊堂B遺跡、東に飯岡沢田遺跡が隣接する。

調査の概要

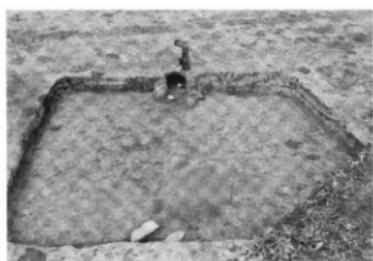
調査区の東と西には、並行しておこなわれた野古A遺跡第21次調査区が隣接する。調査区は、南北約150m、東西約20mの南北方向に長い形状である。表土層直下の面で、古代の竪穴住居跡9棟、土坑5基、溝跡1条を検出した。また、竪穴住居跡を中心とする遺構から古代の遺物が出土した。これら遺構や遺物より、この調査区が古代集落の一部であることが判明した。

＜竪穴住居跡＞調査区南側で奈良時代の竪穴住居跡を3棟、調査区中央から北側で平安時代の竪穴住居跡6棟を検出した。すべて平面は方形であり、それぞれカマドと焼道を持つ。同時代ともに竪穴住居跡は、調査区を南北に走るいくつかの旧河道状の微低地周辺に分布する。カマドの設置場所は、奈良時代の竪穴住居跡では西壁、平安時代の竪穴住居跡では東壁で、一定の規則性が窺える。

＜土坑＞奈良時代の土器が出土した1基を除いて、その他4基は平安時代であると考えられる。

＜溝跡＞調査区南端部で東西方向の溝跡を1条検出した。出土遺物はなく、時期は不明である。この溝跡は、昨年度調査区から続く遺構である。

＜出土遺物＞古代の土器類が大コンテナ3箱、古代の櫛石器が中コンテナ1箱、鉄製品では鋤先、鋸先などが出土した。平安時代に属する土器の中には、「吉」と墨書・刻書が施されているものが多くみられた。



竪穴住居跡(奈良時代)



竪穴住居跡(平安時代)

(29) 飯岡沢田遺跡第9次調査
いいおかさわだ

所 在 地 盛岡市飯岡新田1地割80-5ほか
委 託 者 独立行政法人都市再生機構
岩手都市開発事務所
事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業

発掘調査基間 平成16年6月1日～7月6日
遺跡番号・路号 LE16-2169・ISD-04-09
発掘調査面積 当初：1,099m² 実績：1,179m²
調査担当者 須原 拓 亀澤盛行

遺跡の立地

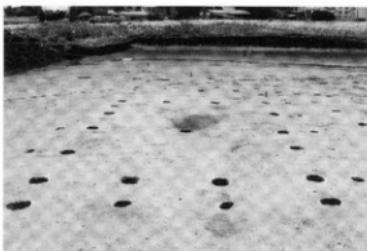
遺跡は、JR東北本線仙北町駅の西約1.5kmに位置し、零石川右岸の河岸段丘に立地する。標高は122～125mである。調査以前の状況は畑地、住宅であった。

調査の概要

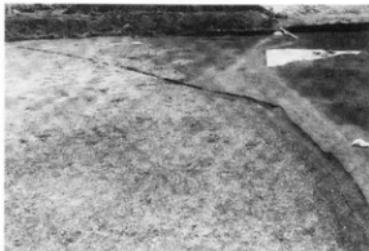
土坑5基、溝跡2条、掘立柱建物跡3棟、柱穴状土坑約20個が検出された。特に、掘立柱建物跡は、3棟とも同じ方向で並び、南北を長軸とする。東側と西側の掘立柱建物跡はどちらも3間6間（東側8.2×13.8m、西側5.6×11.8m）で、その間に2間3間（4×6m）の掘立柱建物跡が検出された。東側の掘立柱建物跡からは北側、東側、西側に下屋柱が確認された。柱穴は径36～48cm、深さは30～50cmである。時期は、柱穴から陶磁器片が出土しているため、近世と考えられる。溝跡は、第10次調査区から続く長い2条が確認された。十和田aテフラが検出されており古代と考えられる。出土遺物は、中コンテナ1箱出土している。遺物の内容は土師器や近世陶磁器である。



掘立柱建物跡



掘立柱建物跡



溝跡



溝跡断面

(30) 向中野館遺跡第5次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田2地割179-1ほか
 委 託 者 独立行政法人都市再生機構
 岩手都市開発事務所
 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業

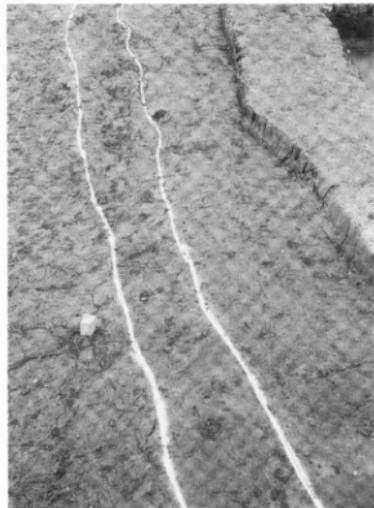
発掘調査期間 平成16年7月15日～10月8日
 遺跡番号・路号 L E 26-0205・OMN-04-5
 発掘調査面積 当初：467m² 実績：467m²
 調査担当者 早坂 淳

遺跡の立地

遺跡は盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南に約2.5kmに位置し、半石川によって形成された標高約120～125mの河岸段丘の縁辺部及び旧河道に立地する。

調査の概要

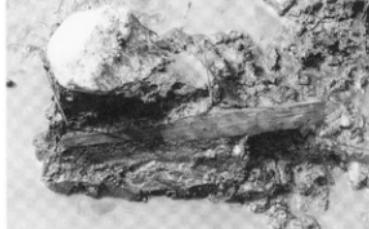
溝跡1条、包含層1箇所が検出された。溝跡は調査区の南西側を南北に走り、時期は不明である。包含層は調査区の南側に広がり、旧河道の埋没過程で形成されている。遺物は土師器、須恵器の他、漆器や曲げ物などの木製品や杭、ウメ・モモなどの種子、甲虫類などが出土した。土師器・須恵器には①墨書き器や刻書き器が多い、②壊が多い、などの特徴が挙げられる。



RG009 溝跡



遺物包含層の状況



木製品出土状況

3. 岩手県・市関係

(31) 上野場3遺跡

所 在 地	九戸郡軽米町大字晴山第16地割 宇上野場4-2ほか	発掘調査期間	平成16年7月1日~9月14日
委 託 者	二戸地方振興局農政部農村整備室	遺跡番号・略号	I F61-2348・KNB 3-04
事 業 名	農免農道整備事業観音林地区	発掘調査面積	当初: 597m ² 実績: 597m ²
		調査担当者	丸山浩治 水上明博

遺跡の立地

遺跡は軽米町の北西端、青森県（名川町、南郷村）との県境付近に位置し、名久井岳から続く丘陵縁辺の東向き緩斜面上に立地している。同面には東西方向の浅い沢跡が複数確認される。標高は210~215mである。基本層序内で4種のテフラを確認しており、これらは上位から十和田bテフラ、十和田中撰テフラ、十和田南部テフラ、十和田八戸テフラと推定される。大半の遺構検出面は十和田中撰テフラ層の上面である。

調査の概要

検出遺構は、竪穴住居跡1棟、土坑6基、陥し穴状遺構2基、捨て場1箇所である。

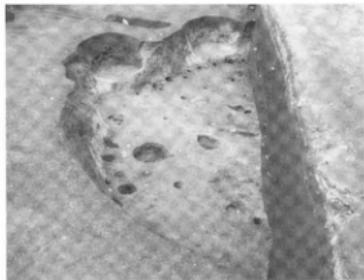
＜竪穴住居跡＞直径約8m、深さ80cmと大形であるが、東側半分が調査区外へ続くため未調査である。床面から縄文時代後期後葉の香炉形土器が出土している。

＜土坑＞調査区全域に散在する。平面形は円形で、規模は1m弱と1.2m程度のものに分けられる。断面形はすべてビーカー状である。2基が竪穴住居跡と重複しており、これより新しい。おそらく縄文時代晚期の構築と思われる。

＜陥し穴状遺構＞開口部は長軸約3m、短軸1m弱の溝状で、深さは約2mである。断面はY字状を呈する。長軸はほぼ南北を向き、等高線に並行する。構築時期は十和田中撰テフラ堆積以降である。

＜捨て場＞竪穴住居跡廃絶後の崖地を利用し、埋土最上位およびその周辺に形成されたものである。廃棄土内には遺物のはか十和田南部テフラ・十和田八戸テフラブロックや炭化物を多量に含み、炭化種子も確認されている。範囲は約50m²、層厚は20cm以下である。出土土器の時期は縄文時代晚期中葉が中心である。

＜出土遺物＞縄文土器（晚期中葉中心）大コンテナ約10箱、石器中コンテナ約4箱、土偶、耳栓、土鉢、異形土製品、粘土塊、石剣頭各数点などである。



1号竪穴住居跡



1号竪穴住居跡床面出土遺物

(32) 中田遺跡

所 在 地 久慈市大川目町第23地割25番地 1 ほか 遺跡番号・略号 J F 28-2299・NT-04
委 託 者 久慈地方振興局農政部農村整備室 発掘調査面積 当初：17,000m² 実績：17,000m²
事 業 名 経営体育施設整備事業大川目地区 調査担当者 深 浩二郎 石崎高臣
発掘調査期間 平成16年4月14日～7月30日

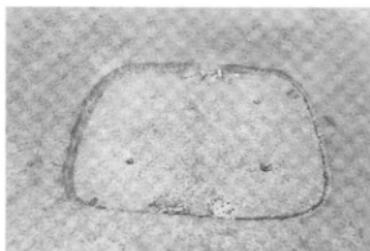
遺跡の立地

遺跡はJR八戸線久慈駅の西約5.5kmに位置し、久慈川によって開拓された沖積地に立地する。遺跡の標高は約24～25mではほぼ平坦だが、北西側がやや高くなっている。調査前の状況は水田・荒蕪地である。

調査の概要

掘立柱建物跡1軒、竪穴住居跡3棟、竪穴状遺構1基、土坑19基、陥し穴状遺構5基、溝跡4条、柱穴状土坑64個、焼土1基を検出した。3棟の竪穴住居跡は出土遺物から古代のものと考えられる。陥し穴状遺構や大半の土坑は遺物の出土がなく時期不明だが、同じ検出面から縄文時代早期の土器片が出土しており、おそらく同時期のものと判断される。掘立柱建物跡は、柱穴から近世の陶磁器の破片が出土することや検出面から近世以降のものと思われる。竪穴状遺構は遺構内から多くの鉄滓や角礫が出土しており、鍛冶に関わるものであろう。溝跡はいずれも調査区外へと延びているため、その全容はつかめていない。時期は遺物の出土がなく不明だが、古代の面から掘り込まれており、それ以後に位置づけられよう。

＜出土遺物＞大コンテナ(30×30×40cm)で10箱出土しているが、そのほとんどは竪穴状遺構から出土した鉄滓である。他に土器・石器・土製品・陶磁器・鉄製品・琥珀片が出土している。土器は大きく縄文土器と土師器とに分けられる。前者はほとんどが破片で、貝穀文・爪形文を特徴とする縄文時代早期の白浜式土器とされるものである。これらの土器片が出土したのは褐色火山灰を含む検出面だったが、この火山灰を分析したところ、十和田南部テフラであるとの同定結果を得た。土師器は竪穴住居跡から出土したものがほとんどである。いずれも非クロロ調整のもので、器種は壺・甕・瓶がある。このうち2号竪穴住居跡から出土した甕の体部外面に付着していた噴きこぼれと思われる炭化物を採取して炭素14年代測定をしたところ、実年代で西暦570±40年との結果を得ている。



2号住居跡全景(東から)



2号住居跡カマド(中央に見える甕の炭化物をサンプリングした)

(33) 沼袋遺跡

所 在 地 下関伊都田野畠村尾肝要118-3ほか 遺跡番号・略号 K G21-0127・N B-04
 委 託 者 宮古地方振興局岩泉土木事務所 発掘調査面積 当初：4,910m² 実績：4,910m²
 事 業 名 緊急地方道路整備事業 調査担当者 米田 寛 立花 裕
 発掘調査期間 平成16年5月21日～10月5日

遺跡立地

遺跡は田野畠村役場から北西約5kmの距離に所在し、普代川の蛇行・洪水などを成因とする河岸段丘上に位置する。今回の調査区は普代川との比高5～10mの低位段丘面を中心とした範囲で、現況は大半が畠地で一部宅地である。

調査概要

調査構造は、住居状遺構1基、掘立柱建物跡6棟、墓壙1基、土坑9基、柱穴状土坑193個、土器埋設遺構1基、捨て場2箇所である。時期は縄文時代後期と近世以降に大別される。

縄文時代については、住居状遺構、土坑、集落に付随すると考えられる捨て場などを確認したが、明確な堅穴住居跡は出土しなかった。したがって集落の主体領域は今回の調査区よりも一段高い河岸段丘面に想定される。普代川対岸では今回の調査区より標高の高い河岸段丘面で後期後葉の資料が多量に表採されていることから、今後これと対応する段丘面で縄文時代の生活痕跡を発見できるものと考えられる。

近世については縄柱の掘立柱建物跡から磁器、鉄製品、寛永通宝が出土し、その周辺で墓壙を検出した。遺跡周辺は鉄山で栄えた旧沼袋村の居住領域であり、これまで本格的な発掘調査を行わていなかった沼袋地区の歴史的環境を知る上で貴重な資料となろう。

＜出土遺物＞大コンテナ(30×30×40cm)で約18箱出土した。このうち縄文土器14箱、石器3箱、その他に陶器、磁器、腕輪形土製品、鏃形土製品、土錘・人骨・古錢・煙管などが約1箱分である。縄文時代後期前葉の十腰内I式の資料が主体を占める。普代川との比高の小さい調査区東側・西端では遺物分布密度が低い。また、調査区東側では十腰内I式の埋設土器や晩期の土器片が出土した。近世では掘立柱建物跡付近で遺物が出土している。永楽通宝を出土した6号掘立柱建物跡の範囲内で16世紀後半の唐津焼が出土している。



鏃形土製品出土状況



掘立柱建物跡

もとみやくまどう
(34) 本宮熊堂A遺跡第26次調査

所 在 地 盛岡市本宮字熊堂24-3ほか
委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間 平成16年7月5日～10月19日

遺跡番号・略号 L E16-2107・OKD-04-26
調査対象面積 当初：1,896m² 実績：2,636m²
調査担当者 須原 拓 亀澤盛行

遺跡の立地

遺跡は盛岡市の南西部、零石川から南方約1.5kmに位置し、零石川によって形成された河岸段丘上に立地する。標高は約123m前後であり、調査区内においては北から南へと緩やかに傾斜している。

調査の概要

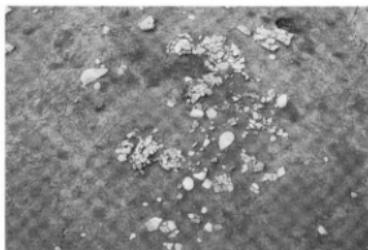
遺構は堅穴住居跡4棟、堅穴状遺構5棟、土坑8基、焼土跡2基、溝跡2条、柱穴状土坑30個、旧河道を検出し、遺物は大コンテナ41箱分が出土した。

堅穴住居跡はほぼ円形で、石圓炉や地床炉を伴う。堅穴状遺構は炉を伴わないが、遺物の出土量は住居跡よりも多く、中には、入れ子状に重なって出土した土器もみられた（写真右下）。調査区南側では旧河道を検出し、住居跡や堅穴状遺構はその北側で、旧河道に沿うように立地する。旧河道の底面からは同時期の土器などが出土しており、本遺跡が川辺に立地する集落であったことが伺える。

出土遺物から当遺跡は縄文晩期中葉～後葉の集落遺跡と考えられる。ただし、溝は土師器が検出しており、古代に比定される。



堅穴住居



遺物出土状態



石圓炉



入れ子状に出土した土器

もとみやくまどう
(35) 本宮熊堂B 遺跡第27次調査

所 在 地	盛岡市本宮字熊堂38-5ほか	遺跡番号・略号	L E 16-2118・OKO-04-27
委 託 者	盛岡市都市整備部盛岡南整備課	発掘調査面積	当初: 2,113m ² 実績: 3,661m ²
事 業 名	盛岡南新都市土地区画整理事業	調査担当者	小松則也 福島正和
発掘調査期間	平成16年8月6日～9月14日		

遺跡の立地

遺跡はJR盛岡駅の南約2km、零石川右岸の河岸段丘上に位置する。標高は124m前後、概ね平坦な地形であるが若干の高低差が見られる。

調査の概要

古代の堅穴住居跡7棟、住居状遺構1棟、土坑2基、墓壙1基、溝跡4条を検出した。

出土遺物等から、堅穴住居跡のうち3棟は奈良時代、4棟は平安時代に属することがわかった。RA084堅穴住居跡は焼失住居跡である。RG138・RG139溝跡は、十和田aテフラを含むことから平安時代の溝跡であることがわかった。遺物はRA084堅穴住居跡・RA087堅穴住居跡の奈良時代の堅穴住居跡からまとまって出土した。

RD190土坑は墓壙とみられ、近世の古銭が出土した。



RA084堅穴住居跡(焼失住居跡)遺物検出状況(東から)

(36) のっこ 野古A遺跡第24次調査

所 在 地 盛岡市下鹿裏字北38-3ほか
委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間 平成16年9月15日～11月1日

遺跡番号・略号 L E 16-2155・ONK-04-24
発掘調査面積 当初：1,770m² 実績：2,240m²
調査担当者 福島正和 米田 寛

遺跡の立地

遺跡は盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から1.5km西に位置し、零石川右岸の河岸段丘上に立地している。調査区は標高約124m前後で、調査前は主に住宅や畑であった。遺跡周辺では、北西に福島遺跡、本宮熊堂B遺跡、東には飯岡沢田遺跡が隣接する。

調査の概要

調査区は、並行して調査がおこなわれた野古A遺跡第23次調査区を間に挟んで東側と西側である。表土直下面で、古代の竪穴住居跡4棟、土坑1基、溝跡3条を検出した。また、竪穴住居跡を中心に古代の遺物が出土した。これらの遺構や遺物より調査地点が古代集落の一部であることが判明した。微高地に位置する西側の調査区では遺構がみられず、出土遺物も皆無であった。

＜竪穴住居跡＞調査区東側で奈良時代の竪穴住居跡を1棟、平安時代の竪穴住居跡3棟を検出した。すべて平面は方形であり、1棟を除きすべてカマドと煙道を持つ。両時代とともに竪穴住居跡は、調査区を南北に走るいくつかの旧河道状微低地周辺に分布する。カマドは、奈良時代の竪穴住居跡では西側、平安時代の竪穴住居跡では東側にみられる。

＜土坑＞埋土に十和田aテフラがわずかにみられることから古代のものであると考えられる。

＜溝跡＞調査区を北端部で東西を指向する溝跡を2条検出した。2条は近接、平行して存在する。また、それらに直交する1条の溝跡を検出した。いずれも出土遺物が少なく、時期は不明である。

＜出土遺物＞古代の土器類が大コンテナ2箱、古代の砾石器が中コンテナ1箱、不明鉄製品が2点出土した。また、奈良時代の竪穴住居跡から管玉が1点出土した。



竪穴住居跡(奈良時代)



竪穴住居跡(平安時代)

(37) 台太郎遺跡第54次調査

所 在 地	盛岡市向中野字向中野19ほか	遺跡番号・略号	L E 16-2269・O D T -04-54
委 託 者	盛岡市都市整備部盛岡南整備課	発掘調査面積	当初：4,845m ² 実績：5,052m ²
事 業 名	盛岡南新都市土地区画整理事業	調査担当者	福島正和 小松則也
発掘調査期間	平成16年4月12日～8月6日		

遺跡の立地

遺跡は盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から1km南西に位置し、零石川右岸の河岸段丘上に立地している。今回の調査区は標高約121～122mで、調査前は主に住宅や畑であった。遺跡周辺では、西に飯岡沢田遺跡、南西に飯岡才川遺跡が隣接する。

調査の概要

調査区は、大別すると3地区に分かれ、さらに細別すると8箇所に分かれる。表土直下面で、古代の堅穴住居跡12棟、堅穴住居状遺構4棟、土坑12基、溝跡18条、堀跡2条を検出した。これらの遺構からは古代～中世の遺物が出土した。遺構や遺物より調査地点が古代～中世集落の一部であることが判明した。

＜堅穴住居跡＞古代の堅穴住居跡は、奈良時代のものが4棟、平安時代のものが8棟である。すべて平面は方形であり、カマドと煙道を持つ。最西端の堅穴住居跡群はすべて平安時代のものである。

＜堅穴住居状遺構＞最西端の調査区で4棟検出した。いずれも方形で、カマド等の施設が認められない。

＜土坑・溝跡＞各調査区で様々な規模、形態の土坑や溝跡を多く検出した。いずれの土坑、溝跡も出土遺物が少なく、時期不明のものが多い。

＜堀跡＞2地点で各1条ずつ確認したが、一連の堀跡であると考えられる。幅約3m、深さ約1.5mの規模を有し、東西方向に直線的に延びる。これまでの調査でも確認されていたが、今回の調査では西端で北へ曲がり、東端で途切れることが新たに判明した。

＜出土遺物＞古代の土器類が大コンテナ9箱、礫石器、鉄製動火、不明鉄製品などが出土した。特筆すべき出土遺物として、古代では土坑出土の関東系土師器壺2点、中世では溝跡出土の中国産青磁碗破片1点、堀跡出土の中世陶器壺片1点が挙げられる。



堅穴住居跡(奈良時代)



遺物出土状況(堅穴住居跡内)

いいおかさわ だ
(38) 飯岡沢田遺跡第10次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田1地割81—1ほか
 委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業
 発掘調査期間 平成16年4月12日～7月6日

遺跡番号・略号 LE 16-2169・I S D-04-10
 発掘調査面積 当初：4,794m² 実績：4,626m²
 調査担当者 須原 拓 龜澤盛行

遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線仙北町駅の西約1.5kmに位置し、零石川右岸の河岸段丘に立地する。標高は122～125mである。調査以前の状況は畑地、住宅であった。

調査の概要

今回の調査では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡、古墳、周溝、土坑、柱穴状土坑が検出された。

＜竪穴住居跡＞今回の調査では10棟（奈良時代7棟、平安時代3棟）が検出された。規模は一辺3m程のほぼ正方形のものがほとんどである。大型では一辺6mの住居跡が確認された。カマドは、いずれも西壁に設置されている。奈良時代の竪穴住居跡は調査区西部に集中し、平安時代の竪穴住居跡は調査区東部に点在する。

＜古墳、周溝＞古墳は調査区北西部から1基検出された。平成13年の調査の際の統きの部分にあたり、ほぼ円形に溝がめぐるが、南東部分だけ溝がないことが確認された。周溝は古墳が検出された場所より東側の低い場所で1基検出された。

＜溝跡＞調査区を北から南東に継続する長い溝跡が2条、その他に3条検出された。住居との重複関係と、十和田aテフラの検出から、いずれも古代と比定される。用途の詳細は不明である。

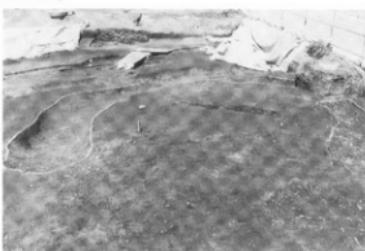
＜土坑、柱穴状土坑＞土坑は調査区全体から約60基検出した。円形や長梢円のものが多く、規模は径20cm～3mである。一部の土坑から縄文土器が出土した。また柱穴状土坑は、約20個が検出された。

＜掘立柱建物跡＞調査区北側中央から、2間4間(4.8×8.8m)の掘立柱建物跡が1棟検出された。また、調査区南側から、1間2間(4.1×4.2m、4.5×4.6m)の掘立柱建物跡が2棟検出されている。

＜出土遺物＞中コンテナで14箱出土している。土師器、須恵器が主体で、中でも竪穴住居跡、古墳、周溝から多量に出土している。縄文土器、弥生土器も出土した。他に紡錘車3点、勾玉1点、鉄製品1点が出土している。鉄製品は溝跡から出土したもので、刀子と考えられる。



奈良時代集落全景



周溝

(39) 向中野館遺跡第6次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田2地割171-3ほか
 委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業
 発掘調査期間 平成16年6月7日～10月8日

遺跡番号・路号 LE26-0205・OMN-04-6
 発掘調査面積 当初：2,955m² 実績：3,074m²
 調査担当者 北村忠昭 早坂淳

遺跡の立地

遺跡は盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南に約2.5kmに位置し、零石川によって形成された標高約120～125mの河岸段丘の縁辺部及び旧河道に立地する。

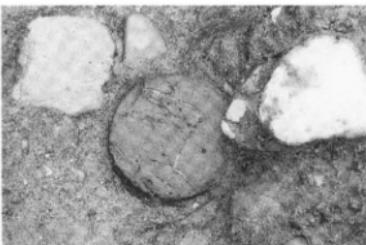
調査の概要

堀跡1条、土坑1基、柱穴状土坑4個、不明遺構3基、帶状疊密集部1箇所が検出され、遺構の所属時代は土坑、帯状疊密集部が平安時代、堀跡、柱穴状土坑4基が中世、他が不明である。

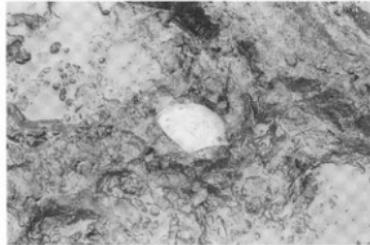
上記の他に調査区の北側中央、南東側、南側中央で包含層、遺物集中部が確認された。量的・質的に最も豊富なのは南側中央である。土師器、須恵器のほか、漆器、曲げ物の底、箸などの木製品や杭、小刀、刀子などの鉄製品、モモ、ウメ、クルミなどの種実、甲虫類などの昆蟲など多種多様な遺物が出土した。土師器、須恵器には墨書き器、刻畫土器が多く見られる。これらの遺物の多くは遺物の特徴から9世紀後半から10世紀初頭のものと考えられる。数点であるが、9世紀初頭と考えられる須恵器も出土した。



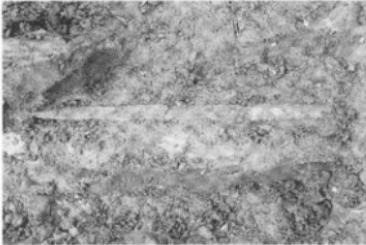
RG006堀跡



木製品出土状況



墨書き土器出土状況



小刀出土状況

や もり
(40) 矢盛遺跡第6次調査

所 在 地 岩手県盛岡市飯岡新田2地割17ほか 遺跡番号・略号 L E 26-0139・I YM-04-06
委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課 調査対象面積 当初: 3,386m² 実績: 3,288m²
事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業 調査担当者 早坂 淳 北村忠昭
発掘調査期間 平成16年4月12日～6月4日

遺跡の立地

遺跡はJR東北本線盛岡駅の南約3km、零石川南岸の河岸段丘縁辺及び旧河道に位置している。本調査区の西側3分の1は水田の休耕地であり、東側3分の2は旧都南村立住宅跡地から転用した公共用地である。

調査の概要

陥し穴状遺構26基、土坑31基、溝跡1条、堅穴状遺構1基、柱穴状小土坑62個、井戸跡1基が検出された。また、陶器・土師器・須恵器の破片が合わせて34点出土したが、半数近くが遺構外のものである。北に隣接する矢盛第3次・4次調査区では、中央を南下する旧河道に沿って縄文時代の陥し穴状遺構が多数確認され縄文時代の獵場の性格を持つ場所であったと推定されているが、本調査区の陥し穴状遺構も同じ旧河道沿いに分布しており、縄文時代におけるこの地域の姿がより明らかになった。土坑は主に西側調査区で検出されたが、時代及び性格は不明である。堅穴状遺構は西側調査区西端のやや標高の高い面で検出されたが、南側調査区外に延びているため、住居跡かどうか不明である。井戸跡は東側調査区のほぼ中央で1基検出された。柱穴状小土坑は3ヶ所ほど集中して検出されたが、配置には規則性がほとんど見受けられなかった。



航空写真(北から)

(41) 山口館跡
やまぐちだて

所 在 地 宮古市黒森町107番地2ほか

遺跡番号・路号 L G 23-2310・Y G D-04

委 託 者 宮古市都市整備部建設課

発掘調査面積 当初：4,470m² 実績：4,470m²

事 業 名 北部環状線道路改良事業

調査担当者 阿部勝則 新井田えり子

発掘調査期間 平成16年6月4日～11月19日

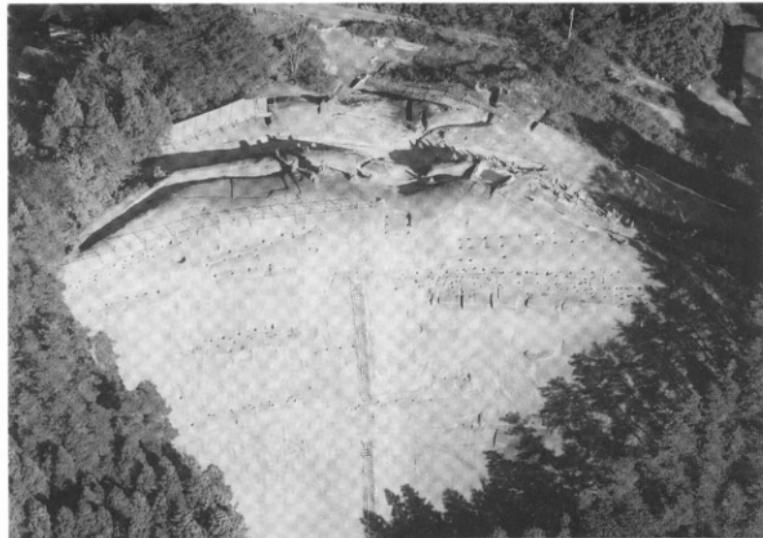
遺跡の立地

遺跡は、宮古市の中央部にあり、JR山田線宮古駅から北西約1.2kmに位置する。閉伊川支流の山口川左岸に延びる丘陵の南東部に立地し、標高59～81mで、調査区は東側斜面・尾根上・西側斜面に分けられる。

調査の概要

昨年からの継続調査である。今回は、尾根上と西側斜面を調査し、竪穴建物跡7棟、工房跡33棟、墓壙2基、土坑25基などが検出された。時期は、出土した遺物から中世後半期と考えられる。

竪穴建物跡は尾根上から検出された。平面形が方形または長方形で壁際に柱穴をもつ。工房跡は、西側斜面に連続と構築されており、同一地点での重複が多い。斜面に平行に横長の竪穴を掘り込み、壁際に柱穴をもつ。焼土の覆土から鍛造剥片や魚骨などの動物遺存体、床上と覆土から鉄製品が多数出土している。墓壙は尾根上から検出された。そのうち1基からは副葬品である縁銭2本が出土している。銭種は洪武通寶が主体である。



航空写真(西から)

おおにし
(42) 大西遺跡

所 在 地	神戸市石鳥谷町八重畠15地割21-1ほか	遺跡番号・略号	M E 06-2345・ON-04
委 託 者	花巻地方振興局農林部農村整備室	発掘調査面積	当初：3,800m ² 実績：5,300m ²
事 業 名	経営体育成基整備事業（八重畠地区）	調査担当者	村上 拓 戸根貴之
発掘調査期間	平成16年4月9日～8月18日		

遺跡の立地

遺跡は花巻市と境界を接する石鳥谷町南部、花巻空港の北東約2kmに位置する。北上川左岸の沖積地に形成された段丘状の微高地に立地し、標高は81m前後、現河道との比高は8～9mを測る。

調査の概要

調査区は3箇所に分かれており、北西から南東に向かってA・B・C区とした。遺跡の基本層序は5つに大別され、上から順に、黒褐色～暗褐色土、黄褐色土、黒褐色～暗褐色土、黄褐色土、砂礫層となっている。

A区では、上位黄褐色土上面で平安時代の堅穴住居跡6棟、方形周溝5基、溝跡1条などを検出した。堅穴住居跡からは、土師器に加え、灰釉陶器片・多量の鉄製品が出土した一方、須恵器は出土していない。このような遺物の出土状況は、該期の一般的な集落とは様相を異にするものである。交通や物流の主要なルートであった北上川に面するという立地、灰釉陶器片が出土した貝の淵I遺跡や官衙・駅家の可能性を指摘されている方八丁遺跡が付近に所在することなどを考え合わせると、本遺跡の集落跡は、他の一般的な集落とは違う特殊な性格を有していた可能性がある。

B区では、A区と同様に上位黄褐色土上面で平安時代のものと思われる住居状遺構1棟と溝跡を検出した。また、下位暗褐色土上面では弥生時代後期の遺物包含層を検出した。当区では、下位暗褐色土層の上を上位黄褐色土が約1mの厚さで被覆する状況が良好に観察されており、弥生時代後期から平安時代までの間に北上川で発生した洪水が大量の土砂を供給し、原地形を一変させたことがうかがえる。

C区では、上位の黒褐色土～暗褐色土、黄褐色土がすでに失われていたものの、下位暗褐色土上面～黄褐色土上面で陥し穴状遺構32基、土坑16基などを検出した。陥し穴状遺構は、溝状と円形の2種類を確認している。出土遺物等から、縄文時代前期～中期の狩り場跡と考えられる。また、縄文時代晚期の土坑からは土器や焼けた躰などがまとまって出土しており、調査区内において堅穴住居跡は検出されていないが、近辺に当時の集落が存在した可能性は高いと判断される。

以上のとおり、遺跡は縄文時代から平安時代まで時期・性格の複合する遺跡であることが明らかになった。



A・B区全景(左が北)



C区全景(上が北)

(43) かなぐり
金栗 I 遺跡

所 在 地 花巻市南笠間1地割45ほか
 委 託 者 花巻地方振興局土木部
 事 業 名 主要地方道盛岡和賀線
 花巻市笠間地区道路改築事業

発掘調査期間 平成16年9月15日～10月20日
 遺跡番号・略号 ME44-1350・KG I-04
 発掘調査面積 当初：1,176m² 実績：1,176m²
 調査担当者 烏原弘征 菅野 梓

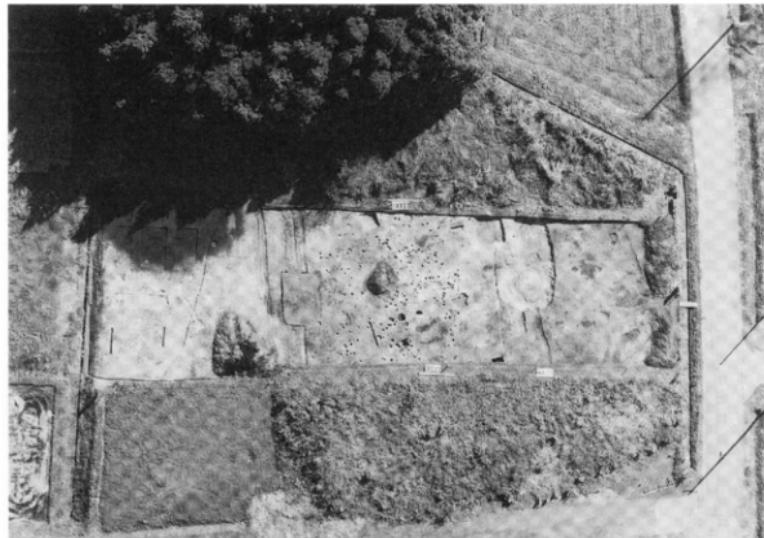
遺跡の立地

遺跡はJR東北本線花巻駅の南西約8kmに位置し、標高は103m前後を測る。調査前の現況は水田・宅地である。

調査の概要

縄文時代の陥し穴状遺構5基、平安時代の溝1条、時期不明の堅穴状遺構1棟・井戸跡1基・土坑4基・溝跡13条・柱穴状土坑212個等を検出した。

陥し穴状遺構5基のうち溝状のものは3基あり、長軸方向は概ね北西～南東方向である。一部の土坑から近世陶磁器が出土した。出土状況から近世のゴミ穴と思われる。調査区北端に位置する埋没沢の堆積土中位から灰白色火山灰の二次堆積を確認した。同一面より土師器・須恵器が出土しており、調査区外の南東側斜面上位に古代の遺構がある可能性が想定される。遺物は平安時代の土器が大コンテナ1箱、近世陶磁器が小コンテナ1箱、鉄製品が小コンテナ1箱、鉄滓4号1袋、錢貨？1枚が出土している。



航空写真(西から)

(44) 里古屋遺跡

所 在 地 気仙郡住田町世田米字里古屋11・12
委 託 者 岩手県大船渡地方振興局土木部
事 業 名 国道397号地域活性化支援事業
発掘調査期間 平成16年5月21日～11月19日

遺跡番号・略号 N F14-2005・S G Y-04
発掘調査面積 当初：1,531m² 実績：3,011m²
調査担当者 北田 燕 村田 淳

遺跡の立地

遺跡は気仙郡住田町の北西部、町役場から西に約8kmに位置する。気仙川の支流である大股川北岸の山体縁辺部、南向き緩斜面上に立地しており、標高は218～233mである。

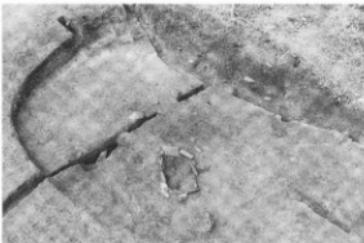
調査の概要

遺跡の調査は前年度も行っており、今回は第2次調査である。今回は、縄文時代前期末葉～後期前葉の堅穴住居跡26棟・堅穴住居状遺構6棟・土坑21基・焼土遺構8基・土器埋設遺構2基・配石遺構1基・平安時代の堅穴住居跡1棟、中世の堀跡3条・土塁状2箇所・平場状1箇所・炉跡1基、近世以降の井戸跡1基・石組1箇所、時期不明のピット42個が検出された。出土遺物は大コンテナで縄文土器約50箱・石器約15箱・土製品・石製品・陶磁器・鉄製品・錢貨各少量である。

縄文時代は前期末葉・中期初～中葉・後期初～前葉の3時期が想定され、各時期に集落が形成されていたと考えられる。また、中世の堀跡は前年度に続く横堀と新たに堅堀が検出されたことから、調査区北東側に位置する里古屋館（伝・神田城）との関連性が考えられる。



重複する堅穴住居跡



堅穴住居跡



堀跡(横堀)



土器出土状況

(45) 松山前遺跡

所 在 地 陸前高田市小友町字若荷128-2
～西ノ坊12-1ほか

委 託 者 大船渡地方振興局土木部

事 業 名 大船渡広田陸前高田線
緊急地方道路整備事業

発掘調査期間 平成16年4月13日～9月3日

遺跡番号・路号 N F 68-2270・M YM-04

発掘調査面積 当初：6,640m² 実績：6,640m²

調査担当者 烏原弘征 菅野 梢

遺跡の立地

遺跡はJR大船渡線小友駅の北西約2km、箱根山(446.8m)の南側山麓に広がる丘陵上に位置する。標高は60～71mを測る。調査前の現況は畑で、約20年前までは果樹園として土地利用されていた。

調査の概要

奈良時代の堅穴住居跡9棟・炉跡1基、近世の墓塚16基、時期不明の住居状遺構5棟・柱穴列3列・炭窯2基・土坑39基・溝跡13条・柱穴状土坑208個を検出した。堅穴住居跡は一辺2～5m程の隅丸方形状を呈し、カマドは北・北西壁に設置されている。時期は出土遺物からみて奈良時代である。墓塚は約15mの狭い範囲から検出され、重複が激しい。時期は出土遺物と墓標からみて19世紀代と思われる。遺物は縄文土器が小コンテナ1箱、奈良時代の土師器が大コンテナ2箱、石器類が小袋1袋分、鉄製品が小コンテナ1箱、錢貨(寛永通寶)が約300枚、陶磁器が小袋1袋分出土している。



航空写真(南から)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所長 相原 康二

副所長 平野 尤苗

〔管理課〕

課長	蘿澤 正吾
課長補佐	小田島 宏道
主査	中鳥 賢一
主任事務官	猿橋 幸子

嘱託	高橋 清助
タ	常伊藤 滋子
タ	橘泉 治美

〔調査第一課〕

課長	三浦 謙一
課長補佐	高橋 義介
文化財専門員	金子 昭彦
文化財調査員	水上 明博
タ	阿部 勝則
タ	杉沢 哲太郎 (御之御所支援派遣)
タ	溜 浩二郎
タ	村上 拓
タ	戸根 貴之
タ	八木 勝治
タ	丸山 浩治
タ	米田 寛
タ	北田 黙
タ	鳥原 弘征
タ	村田 淳
期限付調査員	石崎 高臣
タ	立花 裕
タ	首野 栄
タ	新井田 えり子

課長	佐々木 清文
主幹兼課長補佐	中川 重紀
文化財専門員	小山内 (県教委研修派遣)
文化財調査員	金子 佐知子
タ	濱田 直宏
タ	羽柴 吉田 充
タ	吉田 阿部 宏人
タ	坂本 伸也
タ	早瀬 岩澤 充
タ	小池 岩澤 行也
タ	窪田 勝也
タ	松澤 直也
タ	坂本 喜行
タ	松澤 直也
タ	木澤 勝也
タ	木澤 喜行
タ	新林 順也
タ	新林 順也
タ	呈西 雅
タ	澤山 正直
タ	山村 仁
タ	木村 正忠
タ	福島 忠
タ	北須原 普
タ	川又 美志
タ	中絵 美志
期限付調査員	小針 大志

(6月選抜)

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第469集

平成16年度発掘調査報告書

印刷 平成17年3月22日

発行 平成17年3月25日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019)638-9001

FAX (019)638-8563

印刷 小松総合印刷株式会社

〒 020-0827 岩手県盛岡市鈍屋町15-4

電話 (019)624-1374

FAX (019)623-6719

